夢判断 上

新関良三 訳

ARS

Freud

Die Traum-deutung

Erster Halbband

Freud

夢判斷

新關良三譯

上卷

フロイド
精神分析大系
2

アルス刊

序文

玆に私は夢判斷の叙述を試みるのであるが、それを以て、神經病理學的關心の分限を踏み越えることはしなかつた、と信ずる。と言ふのは、變則的な精神的構成體の中、ヒステリー恐怖症、强迫表象、及び妄想表象等は、實地上の理由から、醫師の研究せねばならぬものであるとして、夢は、心理學的に吟味をすると、それ等の構成體の連鎖の第一の環をなすことが證明されるからである。夢は――後に示される如く――左樣な實用的價値を主張し得るものではない。けれども理論的範例としてのその價値は、それだけ一層と大きいのである。夢影像の成立を會得することのできない人は、恐怖症や强迫表象や妄想表象を理解しようと骨を折つても無駄であり、延いてはそれ等を治療的に處理しようとするも功がない。

この關聯がある故に、吾々の研究題目は重要ともなるのである。そして私のこの研究に含まれてをる不十分な點に對しても、この關聯がその責に任ずべきものである。私の叙述には澤山の切斷面が見出されるであらう。それ等の切斷面は併し、夢形成の問題が精神病理學の一層包括的な

諸問題の中へ、其處から喰ひ込んで行く接觸點の、恰度それだけの數に該當するのであるが、それをここに取扱ふことはできなかつた。若し時間と力とが足り、より以上の材料が集るならば、將來その推敲をなすつもりである。

この著述の發表は、私が夢判斷を解説するために用ひた材料の特殊な性質のためにも、困難にされた。文獻の中に物語られてゐる夢、又は未知の人が集める夢は總べて、私の目的にとつては使用し難きものであつた。それが何故さうであらねばならなかつたかは、この研究それ自身から明らかとなるであらう。私はただ、私自身の夢と、私が精神分析的診療をなしつつあつた患者達の夢と、どつちかを選ぶべきであつた。後者を材料として使用する事は、患者の夢經過は神經病的特質が混入するため望ましからざる複雜を免れない、といふ事情によつて邪魔をされた。更に私自身の夢を報告することに對しては、私が自分の精神生活の祕事について、自分に好ましく思はれたより以上を、また、詩人ではない、自然科學者たる一著述家が普通に任務とするより以上を、他人の眼に見てせやらねばならぬ、といふ事が引き離し得がたく結びついてをるのがわかつた。これは苦しいことであつたが、併し避け得られなかつた。私はその避け得られぬ事情に從つた。そして私の心理的結果一般に對して證明を與へるのを躊躇しなかつた。とは言へ、省略や代

用によつて祕密漏洩の甚しきを緩和したい氣持に向つて、むげに抗ふことができなかつたのは、當然である。それをやる度に、私の使用した實例の價値が實に明白に損を蒙つた。私としては、この著述の讀者が私に代つてこの難かしい立場に立つてみ、そして寛大に見てくれる、更に、ここに報告された夢によつて、いかやうにか、當惑の思ひをする人々があつても、皆、せめてこの夢生活なるものに對しては、思想の自由を拒まないでくれてほしいものだ、といふ期待を述べ得るのみである。

はしがき

○今回この驚異すべき興味ある研究の飜譯を日本の讀書界へ送る機會を得たのは、私の大きな喜びである。この研究の中に試みられた假説と結論に對しては、賛成を與へ得ない人が、澤山居るかもしれない。併し、いかに多くの啓示と、眞摯なる體驗の報告と、警抜なる思想とが、ここに見出されることであらう！　就中、フロイド氏によつて展開された研究方法は、専門を異にする他の學問にとつても、精神現象の把握と解釋の方法の上へ、大きな影響を與ふるべきことは、私の最も期待するところである。

○原著は千九百年に發表され、千九百二十二年迄に、版を七回重ねてゐる。その間に意見の變更を加へられたるは實に少なく、新しき材料によつての增補と推敲は實に多い。千九百二十五年出版の「フロイド全集」第二卷は「夢判斷」第一版の飜刻であるが、それに對して第三卷の約半分、百八十五頁は初版以後の增補を收錄してゐる。私はこの全集版を底本に用ひた。そして增補の部分には括弧を附けて置いた。英語、露語、西班牙語、更に匈牙利語、佛語への飜譯もある筈

である。私はそのうち、英譯本、A. A. Brill, Interpretation of Dreams. London. 1916. を參考することができた。

〇原書にはいろいろの外國語が挿まつてゐて面倒であつたが、殊に佛蘭西文が澤山に引用されてをる。佛蘭西文は大部分、友人豐島與志雄君に譯して頂いた。同君に向つてここに厚く御禮を申し述べる次第である。

昭和五年六月　　　　譯者

目次

第一章　夢の問題に關する學問上の文獻……三
第一節　覺醒生活に對する夢の關係……一一
第二節　夢の材料。夢に於ける記憶……一八
第三節　夢の刺戟と夢の源泉……三九
第四節　何故吾々は覺醒後に夢を忘れるか？……七六
第五節　夢の心理學的特異性……八四
第六節　夢に於ける倫理的感情……一一四
第七節　夢の學說と夢の機能……一三〇
第八節　夢と精神病との關係……一五二
第二章　夢判斷の方法。或る範例的夢の分析……一六四
第三章　夢は願望實現なり……二一〇

第四章　夢の歪み……………………………………………………二三〇
第五章　夢材料と夢の源泉……………………………………………二八〇
第一節　夢に於ける最近的のものと無關心的のものと……………二八二
第二節　夢源泉となる幼時兒のもの…………………………………三三四
第三節　夢の身體的源泉………………………………………………三七八
第四節　類型的な夢……………………………………………………四一三
I　裸體に狼狽する夢……………………………………………………四一五
II　近親者の死の夢……………………………………………………四二六
III　試驗の夢……………………………………………………………四六九
第六章　夢の仕事……………………………………………………四七四
第一節　壓縮の仕事……………………………………………………四七六
第二節　轉移の仕事……………………………………………………五三二

夢判斷

上卷

第一章　夢の問題に關する學問上の文獻

以下に私が證明を與へようとするのは、或る心理學的技術があつて、この技術は夢の判斷を可能ならしめるものである事、そしてこの方法を應用してみると、どんな夢でも一つの意味ある精神的構成物であることがわかり、この構成物がそれはそれ、これはこれ〲の場所へといふぐあひにして、覺醒時に於ける精神の働きのなかへ組み入れられるものである事についてである。その次には、夢の不審と怪訝さとが因つて起る經過を明かにし、その經過を土臺として更にそこから溯つて、夢がそれの共同又は對抗的活動から現れて來るものであるところの、精神的力の性質について、結論を引き出してみるであらう。其處まで行つてしまつたら、私の叙述は中絕するかもしれない。なぜといふに、それは既に、或る一點に達してしまつたものであつて、その點から先では、夢みるといふ問題は、もう一層廣汎な問題、そしてそれの解決はもつと別な材料によつて着手されねばならないやうな。諸問題に合流するであらうからである。

議論の筆を進めて行く間に於いては、一々引返して、それに觸れ得る機會は滅多にあるまいか

ら、私は先づ初めに、旣往の著術家達の仕事と、學界に於ける夢の問題の現狀に關する概觀を、述べて置くことにする。と言ふのも、夢についての學問的理解は、數千年間の骨折にも拘らず、まことに少ししか進步してゐないのである。この事は、著述家達によつて一般に承認されてをるのであつて、彼等の意見を一つ一つ、引用するまでもないことだと思ふ。この書の卷末に附錄として表示して置いた諸論文の中には、吾々の題目に對する數多の示唆的な注意や、興味に富んだ材料やは見出されるが、併し夢の本性を穿ち當てたもの、または夢の謎の一つをでも究極的に解決したと思はれるものは、皆無であるか、或ひは僅少にしかない。教養ある素人の知識となつてしまつたやうなものが、更に一層と少いのは、當然である。

(人類の太古にあつて原始民族が夢をいかに解釋したであつたらうか、彼等が宇宙とか心靈とかについて見解を作りあげる上に、夢がいかなる影響を與へたであつたらうか、これは非常に興味ある題目であつて、それをこの問題關係の硏究から今は取り除いて置かねばならぬことを、私は遺憾に思ふのであるが、サア・ジェー・ラボック、エッチ・スペンサー、イー・ビー・タイロア其他の人人の有名な著述があることを指示し、且つ是等の問題と思索の達し得る範圍は、「夢の判斷」なる吾々の當面の課題を處理し了つた後に於いてこそ、初めて理解のできるものとなり得ることを、

言ひ添えるだけにして置く。)

(古典的古代の諸民族に於ける夢の評價の根柢には、明かに、太古時代の夢の解釋の名殘りが存してゐる。ビュクゼンシュッツ著「古代に於ける夢と夢判斷」に據ると、Büchsenschütz, Traum und Traumdeutung im Altertum. 1863. 彼等の間では、いろんな夢は、彼等が信仰する超人間的性質者の世界と關係を有し、神々や幽鬼のところから啓示をもたらしてくれるものである、といふのが前提であつた。次に、彼等の考へに必ず上つてくるのは、いろんな夢はそれを夢みる者にとつて或る意義ある目的を持つてゐる。一般にいふと、彼に未來を告げ知らせる目的を持つてゐるものである、といふ事であつた。夢の內容と印象には非常に相違があるから、さやうに何か一つの統一的解釋をつけてしまふことは、勿論困難であつて、從つて、夢の價値とその確實性に應じて、種々に區別を立て、種々の分類をせざるを得なかつた。古代の哲學者について見ても、その人の夢についての批判は、當然その人が卜筮術一般に對してどれだけの地位を與へてやるか、それに左右されてゐた。)

　夢が心理學の一對象として取扱はれた最初の文獻は、アリストテレスの著述(夢と夢判斷に就いて)であるらしい。アリストテレスが說明していふのには、夢はいかにも靈魂的性質のもので

はあるけれども、併し神的のものではない。（と言ふ意味はかうである。夢は何等超自然的な啓示から發生するのではなく、勿論神性と類似はしてゐるが、人間のものである精神の、いろんな法則から起るのである。夢とは、睡眠して居る間に限られた人間の精神的活動である、と定義してよい、と。）彼は夢生活の若干性質を知つてをる。例へば、夢は、睡眠中に生ずる小さな刺戟を大きく擴大して受取るといふ事――「四肢五體のうちのどれかがほんの少しばかり暖められることが起きただけでも、人は何か火の中を歩いてゐる、そして熱くなる、と思ふのである」――を知つて居て、この關係から推して、夢は恐らく、日中には氣づかれずにゐた、身體に起りつつある異變についての、最初の徵候を醫師に密告し得るものであるかもしれない、といふ結論を引き出してゐるのである。（疾病に對する夢の關係については希臘の醫師ヒッポクラテスが彼の有名な著作の或る章に述べて居る。）

アリストテレス以前の古人は、人も知るやうに、夢をば、夢みてゐる精神の生產物であるとは考へず、神的な方面からの靈感であると見做した。そして吾々が夢生活を評價してみると、いつでもそこに存在してをるのを見つけるであらうところの、兩つの正反對な流れは、旣に彼等古人の間に於いて、認められてゐる。卽ち、睡眠せる人間を警告し、又は彼に未來を告げ知らせるた

めに遣はされた誠實で價値ある夢と、彼を迷はせるか又は滅亡に陥れるのがその目的である淺墓な、虛僞的で無價値な夢との間に、區別が立てられてゐたのである。
（グルッペは「希臘の神話と宗教史」第三九〇頁に、マクロビウスとアルテミドロスに據つて、夢のかかる分類を紹介してゐる。「夢は二種に分類されてゐた。そのうちの一つは、ただ現在（又は過去）によつてのみ影響されてるもので、未來にとつては意味のないものだ、といふのである。これは、enypnia, insomnia 卽ち、例へば饑餓とか又はそれの滿足とかのやうな、與へられた表象又はそれの反對を直接に再現するものと、それから phantasmata 卽ち、例へば夢魔とか、夢魂（エフィアルテス）とかの如く、與へられた表象を空想的に擴大するものと、兩方を包含して居る。他の種類は之に反して未來にとつて規定的なものと考へられてゐた。これに屬してゐるのは、（一）夢の中で受け取る直接の豫言（chrematismos, oraculum）、（二）將に來らんとする出來事の豫告（orama, visio）、（三）解釋を必要とする象徴的夢（oneiros, somnium）である。この理論は數世紀の間維持されて來てゐる。」）
（夢の評價がかういふ工合に變遷するのと、「夢判斷」法の仕事とは聯絡があつた。一般には夢からして重大な啓示が期待されてはゐたものの、すべての夢がそのままでは判らなかつたし、そし

てその理解し得ない一定の夢が果して何か意義ある事柄を告示するものではないとも限られなかつたものだから、それが動機となつて、夢の理解し得ない內容をば或る明白で且つそのうへ意味を含んでる夢の內容を以て補つてくれることのできるやうな、一種の努力が生じたのであつた。かかる夢判斷に於いての最大權威者として後期古代にあつて見做されてゐた人は、ダルディス生れのアルテミドロスであつたが、この人のいくつかの夢問題の著述は失はれて傳はらない。その代り、この人の別の詳細な書物があり、それがこの損失を補つてくれるに相違ない。――その後中世期に於ける夢判斷法の歷史については、ディープゲンの著、及びエム・フェルステル、ゴットハルト其他の特殊研究を參照せられよ。ユダヤ人の間に於ける夢判斷に關しては、アルモリ、アムラム、レェヰンゲル竝びに最近には、精神分析學的立場を參考しながらラウエルが取扱つてゐる。アラビヤ人の夢判斷の知識は、ドレックスル、エフ・シュワルツ、布敎師トフィンクザが紹介して居り、日本人のは三浦、巖谷が、支那人のはセッケルが、印度人のはネゲラインが紹介して居る）

古人のかうした科學以前的の夢解釋は、確かに、彼等の全世界觀と完全に一致してをつたものである。彼等の世界觀は、心靈生活の以內にあつてだけ現實性を有して居るものをば、外部世界へ現實として投影するのが常であつた。その上、彼等の夢解釋は、覺醒生活が朝まで殘存してる

る記憶によつて夢から受ける主要印象をば、考へのなかに入れてゐたのである。何故ならば、この記憶のなかでは、夢は謂はば或る別な世界から發生してをる何か異質的のものとして、他の心靈的内容と對立してをるからである。ところで、夢がかく超自然的起源のものであるとする説を、今日では、誰も信奉しては居らんなどと思つたら、誤りであらう。篤信派や神祕主義の著作家は一切論外としても――この人達は、自然科學的説明によつて侵略されなかつたうちは廣汎であつた超自然界の領分の殘物を、今なほ占領してゐるのであつて、それは結構なことであるのだから――而も、凡ゆる荒唐無稽を厭ふところの理解力の鋭い人であつて、なほ且つ、超人間的精靈力の存在とその干渉に對する信仰を抱いて、そしてそれを正に、夢現象の説明し難い性質によつて支持しようと試みる者がある(ハッフネル)。哲學者仲間にあつて、例へばシェリンク一派の如く、夢生活を尊重する者あるは、古代に於いて夢を神的のものと議論なしに信じたことの、一種明かなる名殘りであつて、夢の神託的力、未來を告知する力に關しても、探求はまだ終結されてはゐない。それといふのも、科學的思考法を奉ずるに至つた人達ならば、その誰でもがかやうな主張を拒絶することに對して明白に同感を抱くであらうにも拘らず、集められた材料を十分にこなすのには、心理學的解説の試みが未だ足りないからなのである。

夢問題の科學的認識の歴史を書くことは、この認識は箇々の箇所ではいかにも價値あるものとなつてをりながら、或る方向に沿うての進歩が認められないものであるから、難かしいのである。基礎工事が出來たらば、次の研究者がそれを土臺として工事を進めて行けるのだが、保證された研究結果のさういふ基礎工事の作成にも、まだ立ち至つては居らず、却つて新しく著作する人はいづれもが、同一の問題を新しく、そして仰々の起源からやり出すといふ工合に、手を着けてゐるのである。若し私にしてさういふ著作家の年代順を逐うことを努め、各著作家一人一人についで、彼が夢の問題に關して述べた意見を抄述する氣でもあるとしたらば、私は夢認識の現代の狀態について一覽的の總說を書くことは斷念するよりほかないことになるであらう。それ故私は寧ろ、私の記述をその著述家には結びつけず、題目と結んですることにしたのであつて、夢問題の各々を述べつつ、それの解決のために文獻上いかなる材料が貯へられてをるか、それを引用するであらう。

この題材に關した、非常に散在的であり、そして他の領分の中へも潜ぐつてゐる文獻全體を掴きこなすことは、私にはできないことであつたから、私はせめて、若し私の記述において何等か根柢的な事實、及び何等か意義ある觀察點が無にされてさへゐなかつたなら、それで讀者に我慢

して頂きたいと願はねばならんのである。

少し前までは、大抵の著述家は睡眠と夢を同一關係に於いて論じ、また大抵はそれに、精神病理學に入るところの類似の狀態や、例へば錯覺、幻覺其他の如き夢に似た出來事についての考量をも、結びつけていいと考へてゐたのであつた。反之、ごく最近の研究では、題目を限定的に定めて、例へば、夢生活の範圍に屬する或る箇々的の問題を對象にしようとする努力が現れてゐる。かういふ變化が生じたのは、私の見るところでは、かやうに曖昧な事柄にあつては、細部研究をつづけることによつてのみ、解說と一致とが成し就げられるものである、といふ確信の現れでないかと思ふ。私がここに提供し得るものは、かかる細部研究、而も特に心理學的性質のものに外ならない。私は睡眠の問題を取りあげることは要らないと思ふ。何故ならば、たとひ睡眠狀態の特質の中には、精神的機官に對する機能的諸條件の變化が外のものと一緒に含められてゐるに相違ないのではあるとしても、睡眠は本質的には、生理學の一問題であるからである。從つてここでは睡眠の文獻も亦、考察の外にある。

夢現象それ自體に對する學問的興味は、以下に列擧するやうな、部分的には相互に交流してゐる論題へと導くことになる。

第一節　覺醒生活に對する夢の關係

目覺めた後の素撲な判斷では、夢は――假令或る別の世界から發するものではないにしても――眠つてゐる自分を、或る別な世界へ拉致したものであつた、と認定するのである。老生理學者ブルダッハは夢現象の周到で理解の精緻な記述を吾々に殘してくれた人であるが、以上のやうな確信を次の一文に言ひ現はした。この一文は甚だ人の注目を惹いたものである。（四七五頁）「……努力もあり享樂もあり、悅びもあり苦痛もある日中の生活が、決して繰返されるのではなくて、夢は寧ろ吾々をこの生活から解放せんと企てるのである。吾々の全精神が何か、或る一つの對象で一杯になつて居つた時、深い苦痛が吾々の內心を搔き裂いてゐた時、又は何か一つの任務が吾々の全精神力を要求して居つた時、さういふ時であつてさへも、夢は吾々に或る全く異質的のものを與へるか、でなければ、夢はその現實からはただ箇々の要素だけを取りあげて自分で結合を作るか、でなければ、夢は吾々の氣分の調子のなかへただ入り込んで來るだけで、現實を象徵するにすぎないかである。」（ヨット・ハア・フィヒテ（第一卷、五四一頁）もこれと同じ意味を以て直接に、補充夢（Ergänzungsträume）のことを述べ、それを精神が有する自己治療的性質の

匿れたる善行の一つなりと呼んで居る。）

これ等と似た意味を以て、なほエル・シトリュムペルも彼の夢の性質と成立に關する著書の中に述べてゐるが、この著書は當然凡ゆる方面から尊重されてゐる研究である。「夢みてる者は、覺醒意識の世界には背を向けてしまつた者である……」（第一六頁）。「夢の中では、覺醒意識の整然たる內容に對する記憶と、この意識の正規的な態度とは、全然と言つてもいいぐらゐに、失はれてしまふ……」（第一七頁）。「夢にあつては、精神は、覺醒生活の常規的な內容と經過から、殆ど記憶を留めぬまで分離されて居る……」（第一九頁）。

然るに著述家の大多數は、覺醒生活に對する夢の關係について、正反對の見解を主張してるのである。例へばハッフネル（第一九頁）は曰く、「先づ、夢は覺醒生活の續きである。吾々の夢はその少し前に意識の中にあつた表象とつねに聯絡してをる。精密な觀察は殆どつねに一本の絲を見出すであらう。この絲で夢はその前の日中の體驗と結びついてをる。」ワイガント（第九頁）は前に引用したブルダッハの意見に對し直接に抗辯して言ふのには、「何となれば、夢は吾々を日常生活から自由に解放するものではなく、寧ろ正反對に、吾々をその日常生活の中へ伴れもどすものである事は、屢々恐らく夢の大多數に於いて、觀察されるところである。」モーリ（「睡眠と夢」。

第五六頁）は簡潔な公式的な文句で、「吾々は吾々が見、言ひ、願ひ、又は行つた事柄を夢みるのである」と云つてゐる。イェッセンは一八五五年に出版された彼の心理學（第五六頁）の中にややもつと詳しく述べた。「夢の內容は、個人的な品性によつて、年齡、性、身分、教養程度、習慣的な生活法によつて、及び今までの生活全體の出來事と經驗によつて、多かれ少なかれ常に規定されるものである。」

（この問題に對して最も明白な態度を取つてるのは、哲學者イー・ゲー・エー・マアス「熱情について。」一八〇五年である。「吾々は吾々の最も暖かい熱情がこれに向けられてゐる事柄について一番頻々と夢をみるものである、といふ吾々の主張は、經驗が實證するところである。この事からして、吾々の夢の生成に對しては吾々の熱情が影響を有するに相違ない事がわかる。野心家は（恐らくはただ彼の空想の中に於いてだけ）獲得した、又はこれから獲得されんとする月桂冠の夢を見るし、戀する男はその夢の中で彼の樂しい希望の對象を相手とするに忙しい……。心胸に假睡ろんでゐる凡ゆる官能的な慾念や嫌惡やが、若し何等かの原因によつて刺戟されるならば、働き出して、それらと同座してゐたいろんな表象からして、一つの夢を成立するに至らしめるか、又は、これ等の表象が、一つの旣に出來てゐる夢の中へ混じり込むかするに至らしめるので

ある。」「精神分析學中央雜誌」上にキンテルシタインが報告せるに據る。)

夢の內容が實生活に依屬することについては、古代人もこれと異つた考へを持たなかつた。私はラーデシトック(第一三九頁)に據つて引用してみる。クセルクセスは希臘に向つて出征する前に、その彼の決心を捨てるやうによく忠告されたのであつたが、夢によつて繰返しその決心を煽られたことがあつた。その時に、ペルシア人の老いたる合理的な夢占師のアルタバノスが既に適切にも彼に對して言つたものである。夢の姿は大抵、人間が既に覺めてゐる間に考へてゐる事を含んでるものだ、と。

ルクレティウスの敎訓詩「自然界について」(第四、第九五九行)に、こんな一節がある。

熱心に執着せるもの、
昔屢々心を勞したること、
心を滿足せしめてくれたるもの、
夢の大かたはかかるものを見るが如し。
辯護士は訴訟を考案し法令を作り、
帝王は戰鬪を起さんとす……

16

等、々。

キケロ（「神託について」、第二）も全く同じやうなことを言つてるし、ずつと後になつてはモーリも言つてゐる。「吾々の精神の中では、覺醒時に考へ又はこれを行つた事柄の殘物が一番多く働いてをる。」

夢生活と覺醒生活との關係についての以上兩派の意見に存する衝突は、實際に於いて解決しがたいもののやうに思はれる。それ故ここにエフ・ウェー・ヒルデブラント（一八七五年）の叙述を持ち出して考へてみるのも、處を得たるものであらう。彼の意見に據ると、大體、夢の特色性を記述するには、「一見したところでは矛盾となるまでも尖銳化するところの連續的な反對事實を竝べる」（第八頁）よりはほかに方法はないやうである。「これ等の反對事實の第一をなすのは、一方に於いて夢は現實にして眞實な生活から嚴格に分離してゐる。若しくは閉鎖してゐるのに、他方にありては夢と實生活とはつねに相絡み合つてゐる。一方はつねに他方に依屬してゐる、といふことである。――夢は、覺醒時に體驗された現實からは、全然別にされてしまつてるもの、いや、かう言つてもいいかもしれん、己れ自身に於いて他とは全く絶緣的に閉鎖して出來た、實在である、そして現實生活からは一つの立ち超えることのできない間隙によつて區分されてゐる實

在である。夢は吾々を現實から引き離す、吾々の心にあるこの現實の正規的な記憶を拂拭し、そして吾々をば或る別な世界、或る全く別な、根柢に於いては現實のそれとは何ら關するところのない閲歷の中へ置くのである……。」 次にヒルデブラントは、睡眠に陷ると同時に吾々の全存在が、その生存形式もろともに、恰度「一つの眼に見えない落し扉の陰にかくれるやうに」、消失する有樣を詳述してをる。かかる時に例へば、夢の中でセント・ヘレナへ船旅をなし、其處に捕はれてゐるナポレオンにモーゼル葡萄酒の素的なところを獻上する。廢帝は極めて親切に接待してくれる。それでこの興味ある幻影が目が覺めたために壞されるとなると、殆ど殘念なくらゐである。ところで併し、この夢の境地を現實と比較してみる。この夢を見た人は決して葡萄酒商ではなかつたし、またそれにならうとしたこともなかつた。今まで船旅などをしたこともなければ、それをするとなれば、セント・ヘレナなどを少くともそれの目的地に擇ぶことはあるまいのである。ナポレオンに對しては、彼は全然何等同情の心持を抱いてはゐない。却つて愛國心から甚だしい憎惡を持つてゐる。そしてこれ等凡ての事情の上になほ、彼は勿論、ナポレオンがかの島で死んだ時に生きて居つた人のうちに、屬するのでもなかつた。ナポレオンと何等かの個人的關係を結びつけることは、とてもあり得ないところであつたのである。それであるからこの夢の體驗

は、二つの互ひに適合し、互ひに續き合つてをる實生活の區切りの間へ挿まつた、或る異質的のものと、思はれる。

ヒルデブラントは更に語を續けて言ふ。「それにも拘らず、この外見上の正反對は眞實でもあり、また正當でもあるのである。と言ふ私の意味は、蓋しかの閉鎖性と隔離性とは、また最も密接な關係と結合と相提携してをるからである。吾々は直截にかう言つてもいいかもしれない、夢がたとひ如何なるものを見せてくれるとしても、それに對する材料は現實界から、及びこの現實界によつて展開される精神生活の中から取られてるのである、と。……夢の中の工合がたとひ如何に奇怪であるにしても、それでも實は、決して現實の世界から離れることはあり得ないし、夢の實に莊嚴な、同時に實に道化じみた形成物は、必ずやそれの根本材料をば、嘗つて感覺世界に於いて吾々の眼前に現れたことがあつたものか、又は吾々の覺醒時の思想進行に於いて如何やうにか既に席を占めたことのあつたものか、言ひ換へれば、吾々が外的にか又は内的にか既に體驗してしまつたものから、借り出すのに相違ないのである。」

第二節　夢の材料。夢に於ける記憶。

夢の內容を組織する一切の材料は、いかなる方法かを以て、體驗したものから發生してをる、從つてそれは夢の中で再製される、思ひ出されるのである。少くともこの事だけは、吾々にとつて議論のない認識として通用して宜しい。けれども、夢內容と覺醒生活とのかかる聯絡は、比較をやつてさへみればその明白な結果として無造作に生じてくるに相違ない、などと考へるなら、それは一つの誤謬であらうと思ふ。寧ろ却つて、この聯絡は注意深く探索されねばならないものであつて、多くの事件を、次々にと、永くかかつて、調べねばわからないほど、匿くれおほせてゐるのである。これが理由は、記憶の能力が夢の中で示すところの多數の特色に存してゐる。そしてこれ等の特色は、一般的に注目はされて來たけれども、併し今までいかなる說明もつかずにゐたものであつた。この特質の眞相を詳しく見極めてみようとすることは、骨折甲斐あるものであらう。

先づ第一に、覺めた後にあつてはこれを自分の知り、また體驗したものに屬するとは承認しないやうな或る材料が、夢內容の中に現れて來ることがある。その題材の夢を見たことは記憶してゐる。併しそれを體驗したことがあつた事、それからいつそれを體驗したのであつたかは、記憶してゐない。この場合には、人はこの夢がいかなる源から汲み出したのであるかについては、不

明のままで居るから、ややもすると、夢の或る獨立的に生產する働きを信仰したいやうにもなるが、往々長い時日の經つた後になつてから、或る新しい體驗が生じ、そしてそれが以前の體驗に對する、失はれてしまつてゐた記憶を復活させ、それと共にかの時の夢の源を、今になつて發見することとなるのである。かうなると、覺めた時には記憶の能力から逸し去られてゐた或るものを、夢の中では知つて居り、且つ思ひ出してゐたのだつた、といふ事を承認せざるを得ない。（ヴァシドの主張するところに據つてみても、人は夢の中にあつての方が、外國語を覺醒時に於いてよりも一層流暢に且つ一層綺麗に話すことがある事實は、屢々注目されてゐる。）

この種の特別に印象深い一例をデルベフが、自分自身の夢の經驗から、物語つてゐる。彼は夢の中で、雪に蔽はれた自宅の內庭を見た。そして二匹の小さな蜥蜴が、半分麻痺して、雪の下に埋まつてるのを見つけた。彼は動物好きであつたから、これを拾ひあげて、曖めてやり、そしてまた彼等の場所と定めた壁の小さな窪みの中へ戻して置いた。その外に、彼は壁の上に生えてゐた小さな羊齒の葉二三枚を彼等にあてがつてやつたが、蜥蜴がこれを非常に好むことを彼は知つてゐたのである。その夢の中で彼はこの植物の名が Asplenius ruta muralis であることを覺えてゐた。――夢は更に續いて、何か別の事柄が一寸その間に挿まつた後、再びかの蜥蜴の夢となり、

デルベフの驚いたことには、羊齒の殘りを襲うて居つた二匹の新しい小動物を見せたのであつた。その後彼は眼を野原に向けると、第五の、また第六の蜥蜴がかの壁の窪みへ向つて進みつつあるのを見、そして終には街路全體が、凡て同一の方向を取つてやつて來る蜥蜴の一行列によつて、一杯になつてゐたのである、云々。

デルベフの知識は覺醒時にあつてはほんの僅少な拉典語の植物名を含むだけで、Asplenium なる名はその中には入つてゐなかつた。それでこの名の羊齒の一種が實際に存在することを確めた時には、大いに驚かざるを得なかつた。Asplenium ruta muraria といふのがその正しい名稱であつて、夢ではそれが少しばかりづれてゐたのである。これが偶然にも暗合したのであるとは考へることはできなかつたが、さて併し、夢の中で Asplenium なる名の知識が何處から得られたのであつたか、デルベフには依然として謎であつた。

この夢は一八六二年に起つたのである。その後十六年してから、この哲學者が或る友人を訪ねた折、其人の宅で一冊の小さなアルバムを見たが、それには瑞西の諸地方で思ひ出の贈物として外國の人々に賣つてゐるやうな、押し花が挿んであつた。或る記憶が彼に浮んで來た。彼はその押し花帳を開けてみた。そしてその中に彼の夢の Asplenium を見つけ出した上に、そこに添え書

きしてある拉典語の名が彼自身の筆蹟であることまでわかつた。これで聯絡は考へ出されたのであつた。この友人の姉妹の一人が一八六〇年に――かの蜥蜴の夢の二年前に――新婚旅行の途中デルベフを訪ねたことがあつた。その時彼女は兄にと定めてゐたこのアルバムを携帶してゐた。そしてデルベフは或る植物學者の口述の下に、押し花の一つ一つに對して、その拉典名を書き添える骨折をしてやつたのであつた。

偶然のお蔭でそれがわかつた事は、この實例をいかにも報告に價するものたらしめたわけであるが、その偶然のお蔭がデルベフをして、この夢の內容のもう一つ別な部分の、彼は忘れてしまつてゐた源へと、思ひ戻らしめてくれたのである。一八七七年の或日の事、或る繪入り雜誌の古い一卷が不圖彼の手に入つたが、その中には、彼が一八六二年に夢みた通りの蜥蜴の行列全部が描かれてゐたのである。その卷は一八六一年といふ年號であつた。そしてデルベフはこの雜誌の創刊以來講讀豫約者であつたことを思ひ出すことができた。

夢は覺醒時にとつては手の屆きかねるやうな記憶を意のままに使ふものである、といふ事は實に注目に價する、そして理論的にも意味深い事實であるから、私はなほもつと別の「超記憶的」夢の報告によつて、これに對する注意を强めたいと思ふのである。モーリの物語るところでは、

彼はある時日の間ミュッシダンといふ語を日中に思ひ浮べる習慣となつてゐたが、これはフランスの何處かの町の名である事を知るだけで、それ以上には彼は何も知つてゐなかつた。或る晩、彼は誰か或る人と談笑してる夢を見た。そしてその人は彼に向つて、自分はミュッシダンから來たと言つた。その町は何處にあるのかといふ彼の質問に對して、その人は、ミュッシダンはド・ラ・ドルドーニュ縣の縣廳所在地であると答へた。目を覺ました後、彼はこの夢の中で受けた解答に對して何等信用を置かなかつたが、併し地理の百科辭典を調べると、この解答が完全に正しいことを知つたのである。この事件に於いて、夢がより多く知つてる事は、實證された。けれどもこの知識の忘れられた源は探し出されなかつた。

イェッセン（第五五頁）は中古時代の或る全く類似の夢の出來事を物語つてゐる。「父スカリゲルの夢（ヘンニングス、第三〇〇頁、參照）は、この種に屬する。スカリゲルはヴェロナの名高い人達を讃美する一つの詩を作つたが、ブルニョルスと名乘る一人の男が夢に現れて、自分が忘れられてる事を嘆き訴へた。いつか、かゝる人について、何等かの話を聞いたことがあつた記憶はないのであつたけれども、その人に對する詩句を作つてやつたのであつた。ところが、後になつて、彼の息子がヴェロナで聞き知つたところでは、嘗つてこの地でかかるブルニョルスなる名

の者が批評家として有名であつたとのことである。」

（第一囘目には認識されなかつた記憶の認知が、その後の或る夢の中で行はれるといふ、特別なる特色によつて目立つところの、或るより多く知識的（ヒユペルムネステイシユ）の夢の話を、デルヴェー・ド・サン・ドニー侯爵が語つてゐる。ヴァーシド、第二三二頁に據る。「私は或る時金髪をした一人の若い貴婦人の夢を見た。この婦人は私の姉妹に刺繡の仕事を見せたりしながら、彼女と雜談をしてゐた。夢の中ではこの婦人は私のよく知つてる人に思はれたし、何度も見たことがあるとさへ考へたのであつたが、目を覺ました後では、この人の顏はなほありありと眼に浮んで居るのに、それが誰であつたが絕對にわからなかつた。ところで私はまた眠り込んだ。かの夢の光景が繰返された。今度の新しい夢の中で、私はその金髮の婦人に話しかけた。そして旣に何處かでお目にかかる悅びを持つたことがあつたのではなかつたでせうか、と訊いてみた。婦人は答へた。ありましたとも。まあ、ポルニクの海水浴場のことを思ひ出してご覽なさい、と。直ぐに私はまた目が覺めた。そして今や、この愛嬌ある夢の中の顏と結びついてゐた細かな、いろ／＼の事柄を、全く歷然と考へ出すことができたのである。」）

（同じ著述家は、ヴァーシド、第二三三頁に據ると、また報告してゐる。彼と知り合ひの或る音

樂家が或る時夢の中で、或るメロディーを聞いたが、これは音樂家には全く新しいものに思はれた。漸く數年後になつてから、彼はそれと同じメロディーがある古い樂曲集の中に載せてあるのを發見した。併しこの樂曲集を嘗つて以前に手にしたことがあつたとは、今なほ思ひ出せないのである。)

殘念ながら私の手に入らなかつた或る一節に於いて(Proceedings of the Society for Psychical Research)、マイヤーズはかかる超記憶的夢の大きな類例集を發表してをるとのことである。私の意見では、夢の研究に從事する人ならば誰でもが、夢は覺醒中の者がこれを所有してはゐないと思ひ違ひをしてゐる知識と、記憶に對する證據を與へものである事を以て、甚だ通常的な一個の現象なりと、承認せざるを得ないであらうと思ふのである。これについては後に報導するであらう。神經質患者相手の精神分析的仕事に於いて、私は每週度々、患者達に對して、彼等は引用句とか、猥褻な文句とか、其他を實は甚だよく知つて居り、覺醒時にはこれを忘れてしまつてをるが、彼等の夢の中ではそれを使用して居る事を、その夢によつて證明してやらねばならない立場になることがある。夢の優智性についての無邪氣な一事件をなほここに紹介したいと思ふのであるが、これに於いては、夢にだけ手の屆く知識の發生する源が、甚だ容易に見つけ出されたも

のであつたからである。

或る患者は何處かのカッフェーに居つて、「コントスツォフスカ」といふものを持つて來て貰つた夢を、かなり辻褄のあつた順序で見たことがあつた。その話をした後で彼は、こんな名前のものは嘗つて聞いたことがない、一體何でせうか、と訊いた。「コントスツォフスカ」はポーランド產の火酒の一種であつて、夢の中でいい加減に發明されたものではない。なぜならその名は廣告でとうの前から私は知つてゐるのだから、と私は答へてやることができた。その患者は最初は私の言つたことに信用を置かうと欲しなかつた。二三日後に彼はカッフェーへ行つて、その夢を實地にやつてみたあとで、或る廣告の上にその名があるのに氣がついたのである。而もその廣告は、彼が數ケ月以來、一日に少くとも二度は、通行してゐたに相違ない或る街角に貼つてあるのであつた。

(夢の箇々の內容の來歷を發見するのに、いかに偶然に據るものであるか、それを私は自分の夢によつて自ら經驗したことがある。この著書を纏める前の數年間、私は或る甚だ簡單に造られた敎會の塔の影像によつて惱まされてゐた。私はこんな塔を見たことがあるとは、思ひ出すことができなかつた。その後突然に、私はこの塔のことがわかつた。而も十分正確に、ザルツブルクと

ライヘンハルとの間の、或る小驛に於てであつた。それは一八九〇年代の後半のことであつたが、この區間を私は一八八六年に初めて乘車して通つたことがあつたのである。その後の年月の間、既に私が夢の研究に深く從事して居つた頃に、一種目に立つやうなビール店の再々繰返される夢の影像が、私には正に煩はしいものになつてゐた。私の身に對して一定の場所的關係を保つて、卽ち私の左手に於いて、私は一つのうす暗い場所を見るのであつた。其處から數多の奇異な砂岩の影像が光り出してゐた。或る記憶がちらと浮んだ。私はそんなものに本當には信用を置く氣はなかつたが、そのちらと閃いた記憶が、あれは或る地下室のビーヤホールへはひる入口だ、と私に言つたのである。併しこの夢の影像が何を意味するものか、また何から發してをるものか、自分で解說することはできなかつた。一九〇七年に圖らず私はパドアへ行くことになつたが、一八九五年以來この地を重ねて訪ねることができずに居たのを、私は遺憾に思うてゐたのであつた。この美しい大學町に於ける私の第一囘の見物は不滿足に終つて居た。マドンナ・デル・アレナにあるヂオットォの壁畫を見物することができないで、このお寺は今日は閉まつてるんだと人が告げてくれた時に、其處へ通ずる街路の眞中で、私は引返したのである。十二箇年後、二度目に訪問した際には、前囘の補ひをするつもりで、何よりも先づ、マドンナ・デル・アレナへ行く

道を探した。其處へ行く街路で、私の進む方向からすると左側に、恐らくは私が一八九五年の時にそこで踵を返したのであつたかもしれない場所のあたりに、私が夢の中であれほど屢々見たことのあるビール店が、その中に砂岩の彫像をも含んであるのを、發見したのである。それは實際に或る料理屋の庭へ行く入口であつた。)

夢が復製をするために取り出す材料、その一部分は覺醒時の思惟の働きの中にあつては思ひ出されもせず、用を足しても居らないやうな、さういふ材料の出所の一つは、小兒時代の生活である。これに氣がつき、そして力說してゐる著述家のうち、二三だけをこゝに引用しよう。

ヒルデブラント(第二五頁)。「夢が時として驚くべき再現力を以て、吾々には全く緣遠く且つ自分では忘れてしまつてゐるやうな、ごく遙かな以前の出來事をば、その通りに精神の前へ引き戻すことがある、といふ事實は既に明白に承認されてしまつて居る。」

シトリュムペル(第四〇頁)。「この問題は次の事に氣がついてみると、なほ益々興味が增して來る。ごく昔の少年期の體驗の上へその後の年月が振りかけて塞いでしまつてゐる、謂はゞ實に深いそして實に推高く積つてゐる載積物の中からして、往々、夢がいかに箇々の地方色や事物や人物やを、全くその儘に、害はないで、もと通りの新鮮さを以て、再び引き出してみせるかを。これ

は、その成立の際に潑溂たる意識を呼んだとか、又は何か強い心理的價値と結びついてをつて、今、後になつて夢の中に本當の記憶として繰返され、覺めた後の意識がこれを嬉しく思ふ、といつたやうな印象のものにのみ、限つてあることではない。寧ろ、夢の記憶の深さは、ごく昔の時代の人物や、事物や、地方色や、體驗のうちで、ほんの微少な意識しか有たなかつたか、それともまた、とうの昔にあれもこれも、失つてしまつて居り、そしてそれ故に、夢の中でも、及び目が覺めた後でも、その昔の起源が發見される迄は、全然に覺えのない、わからないものに思はれるやうな、さういふ影像をさへも、包含して居るのである。」

フォルケルト（第一一九頁）。「幼年及び少年時代の記憶がいかによく夢の中へ入り込むものであるかは、特別注目に價する。吾々がもはやとうの昔から思つてもみないやうな事、とうの昔に吾々にとつては凡ての重要さを失つてしまつてるやうな事、さういふ事を、夢は倦むことなく吾吾に思ひかへさしめるのである。」

幼年時代の材料は、人も知る通りに、大部分は意識的記憶能力の缺陷部にあたるものであるのに、その幼年時の材料をば夢が支配してる事は、かの優智的夢の興味あるものを成立せしめる動機となる。その二三の實例を更に報告したいと思ふ。

モーリ（「睡眠と夢」、第九二頁）の物語るところでは、彼は子供の時に故郷の町モォから近くにあるトリポールへ行つたことが屢々あつた。トリポールでは、彼の父が或る橋梁工事の監督をしてをつた。或る晩夢で彼はこのトリポールへ來て、その町の街路で昔のやうに遊び戯れて居る。一人の男が近づいてくる。この男は一種の制服を着てをる。モーリはその男に名前を訊ねる。男は自分で紹介して、名前はC某と言ひ、橋の番人であると告げる。目が覺めてから、この記憶の事實性を依然として疑つてをるモーリは、彼の小兒時代以來彼の家に居る一人の年老つた女中に、お前はこの名前の男を誰か思ひ出すことができるか、と訊いてみた。するとその返辭はかうであつた。「確かに。彼は、お父さまがその頃工事をしていらつしやつた橋の番人でした。」

夢の中に現れる小兒期の記憶が確實なものである事について、モーリはF某氏の、上述の夢と同じく美事に實證された實例を報告して居る。F某氏は小兒の頃、モンブリソンで成長したのであつた。故郷を出てから後二十五年目に、彼は其處へ行き、その後會つたことのない昔の馴染を訪問してみようと決心をした。その出發の前夜、彼は夢をみた。夢では彼はその目的地に來てしまつてゐて、モンブリソンの近くで、會つてみたことのない一人の紳士と出會つたが、この人は、自分はT某で、貴方のお父さんのお友達だと言つた。夢みてゐる時は、自分は子供の時にこの

名前の人を知つてをつた、とわかつてゐたが、然るに目を覺ましてみると、彼はもはやその人の外見を思ひ出さなかつた。さて二三日の後に、今度は本當にモンブリソンへ到着した。そして夢の中では覺えがないと思つた地方色を其處に再び見出し、その上、一人の紳士に出會つたが、その人が夢の中のT氏であるとすぐに見わけがついた。ただこの現實に會つた人は、夢の影像が示してたよりは、著しく年老つてゐただけであつた。

私はここに私自身の夢を一つ物語ることができる。この夢では、思ひ浮べられるべき印象の代りに、或る關係が置かれてあつた。私は或る夢で一人の人物を見たのであるが、夢みてる間は、この人は私の故鄕の地方の醫師である事がわかつてゐた。人物の顏ははつきりしなかつた。それは私が今日でも時とすると出會ふこともある、私の高等學校の先生達のうちの一人の顏の表象と混じり合つてゐたのである。その後目が覺めてから、この二人物がいかなる關係で結ばれるものか、私には目あてがつかなかつた。然るに私の母に、この私の昔の小兒時代の醫師について訊ねてみた時に、彼は片目であつたことがわかつた。そしてかの高等學校の先生もまた、片目であり、その人の人柄は夢の中の醫者のそれと合致してをつた。私は三十八年間もこの醫者とは再會したことがなくて居たのだし、私の知る限りでは、覺醒時に於いてこの醫者を思ひ浮べたことは

一回もなかつた。

大抵の夢にあつては極めて最近の時日の要素が現れるものである、と主張する數人の著述家がある。それを聞くと、夢生活に於ける小兒時代印象の優勢な役割の說に對して、何か對抗をなさんとするもののやうにも思はれる。ローベルト（第四六頁）は次のやうな意見さへ吐いてをる。勿論吾々は、一般に正規的な夢は、ただ最近に經過した日の印象だけを扱ふものである、と。ローベルトによつて樹てられた夢の理論は、ごく古い印象をかくも押しのけて、ごく最近の印象を前へ出すことを、斷乎として要求するものであるのは、讀んでみてわかるところであらうが、併しローベルトが言ひ現してをる事實は、私が自分の調査に基いて斷言し得る如く、確かに存してをる。アメリカの著述家ネルソンの意見では、夢の中には、その夢をみる日の前日か、又はその前々日の印象が、最も屢々使はれてをるのであつて、それは恰かも、その夢のすぐ前の日中の印象では、まだ十分には弱められてゐない――十分な距りにはなつてゐない、とでもいつた有樣である。

夢內容と覺醒時と密接な聯絡を疑ふ氣のない多くの著述家にとつても、覺醒時の思考を深刻に煩はした印象は、それが日中の思考の働きから、いくらか傍へ押しのけられてしまつた頃になつ

て始めて、夢の中に出て來るといふ事實が、注目を惹くものであつた。それで例へば、愛する死者については、その悲哀が生き殘つてる者の心を一杯に滿たしてをる限り、當座は、大抵その夢を見ないのが普通である（ドラーヂ）。併し乍ら、最近女流研究家の一人であるハラム孃は、これと反對の態度の實例をも蒐集してをつて、この點については、心理學的個人性の立場を代表してゐる。

夢の中の記憶力の第三の特色にして、最も注目に價し且つ最も理解しにくいのは、再現された材料の選擇にあたつて、それが覺醒時に於いてのやうにただ最も意義あるものばかりでなく、更にその反對に、實にどうでもいいやうなこと、實につまらないことが、記憶に價するものと見做されて、選びだされてゐることにある。私はこの事については、その奇異不思議の情を最も力强く言ひ現してをる著述家達をして述べて貰ふことにする。

ヒルデブラント（第一一頁。）「といふのは、次の事は注目に價することだからである。卽ち、夢は大抵はその要素を大きなそして深く心を摑んでる出來事からは取りあげず、過ぎ去つた日の著しい當面的な關心事からは取りあげず、却つてつけたりの附帶的な事柄から、最近に經驗したか、又はずつと遠くの過去の謂はば無價値な殘り屑の中から取りあげることである。吾々の家族

の悲痛な死の事件、その印象を抱いたまま夜更けてから吾々が眠りに入る、さういふやうな事件は、夢の中では吾々の記憶から拭き去られたままで居つて、次の日、目が覺める瞬間になつて始めて、復た再びその印象が生きかへり、無殘に心を曇らすのである。これに反して、吾々に出會つたが見も知らない人だし、その傍を通りすぎてしまつた後では、一寸たりとも、もう思ひ出したりしたことゝない人の、額の疣などが、吾々の夢の中では、或る役を演ずる。……」

シトリュムペル（第三九頁）。「……夢を分解してみると、その成分は、なるほど前日又は前々日の體驗に基いたものではあるが、併し覺醒意識にとつてはいかにも無意義で無價値であつたので、體驗後間もなく忘却の手に委ねられてしまつてゐたやうなものであるのを見出す場合が、いくらもある。さういふ體驗といふのは、例へば、偶然に耳に入つた誰か他人の意見とか、又はうはの空で目に留めてゐた動作とか、事物又は人物についての忽ちに過ぎ去つてしまつた知覺とか、何か本を讀んでゐて覺えた箇々の些細な部分とか、其他である。」

ハーヴェロック・エリス（第七二七頁）。「覺醒生活の深奥な感情や、吾々が吾々の自發的な主要精神力をこれに及ぼすやうな疑問や問題やは、夢意識に對して直ちに現れるのを常とするものではない。直接的な過去に關する限りでは、吾々の夢に再現するものは、大抵は日常生活の些細で、

偶然的で、忘れられてしまつた印象である。覺醒時に於いて最も深刻である心的活動は、睡眠時に於いて最も深く眠るところのものである。」

ビンツ（第四五頁）は今この話に出てをる夢に於ける記憶の特色をば、正に動機として、彼自身が支持して居る夢の解說に對する己れの不滿を言ひ現してゐる。「そして自然的の夢は、吾々に類似の問題を提出するのである。何故に吾々は最近に過ぎた時日の記憶印象を必ずしも常に夢には見ないで、却つて、何等か認識しうる動機もないのに、ずつと吾々が後にしてしまつてをり、殆ど記憶から消失したやうな過去が、何故屢々夢に浮び上がるのであるか？　腦細胞は、體驗したことの最も刺戟的な記錄を自己の中に包藏してる時には、覺醒時の間に若しも何か或る急性的な更新作用がこの腦細胞をその少し前に刺戟してゐない限りは、大抵は默々として凝然と動かずに居るのであるのに、何故に、夢の中では、意識がどうでもいいやうな記憶の影像の印象を受け入れることが、あのやうに屢々なのであらうか？」

たやすく見ぬき得る通り、夢の記憶が日常の體驗に於いて無關心的の事、從つて注意されて居なかつた事を特別に好む性質あることからして、多くの場合に、人は夢の日中生活一般に對する依屬性を誤認し、そしてその場合には、少なくともこの依屬性の證明を、箇々の凡ゆる場合に對

して立てることが困難とならざるを得なかつたのである。だから、ホワイトン・カルキンス孃が彼女の（それから彼女の友人）の夢を統計的に研究を立ててみる工夫の際に、全數の十二パーセントは、どうしても日中生活に對する何等かの關係を究め得ざるものとして、取りのけた、といふ事も可能なのであつた。ヒルデブラントがかう主張する、若し吾々がいかなる場合でも十分なる時間と蒐集を利用して、その來歴因緣を跡づけるならば、一切の夢の影像は、その發生に關して、明かに說明がつくやうになるであらう、と主張するが、これは確かに正しい。彼はこれを名づけて言ふには、勿論「極度に辛勞的なそしてその勞だけに酬いられない仕事である。何となれば、この仕事の歸するところは大抵は、記憶の部屋部屋の最も離れた隅々にある、心的には全然價値のない事柄をほじくり出し、とうの昔に過ぎた時代の全く無關心的な萬般の要素を、恐らくその要素が起きたすぐその次の時間に埋もれてしまつた、その埋沒の中から、再び明るみへ持ち出すことにあるのだからである。」併しながら私は、この烱眼なる著述家が、いかにも目立たないほどに開始されるこの方法を、もつと辿つて行くのを中止してしまつてゐるのを、殘念に思はざるを得ない。若しもつと辿つてみたならば、彼は直接に夢解說の中心點へ導かれたであつたらうのに。

夢の記憶の態度は、記憶一般の凡ゆる理論にとつて、確かに非常に意義あるものである。これは吾々に、「吾々が一旦精神的に所有したものならば、いかなるものでも、全然に失はれ去ることはあり得ぬ事」(ショルツ、第三四頁)を、教へてくれる。或ひは、デルベフが言ひ現した如く、「凡ゆる印象は、最も些細なものと雖も、まざ〳〵と再現する可能性を無限に有する不變的な痕跡を殘す事」を、教へてくれる。これ、多くの他の、精神生活の病理學的現象が、同じやうにそれに向つて押し寄せてくる結論である。さて、讀者よ、夢に於ける記憶のかやうなる非凡の能率を、眼前に留めて置いて戴きたい。そしてやがて、いろんな夢の荒唐無稽と支離滅裂をば、日中にありては吾々に知られてをる事柄が、いかやうにか部分的に忘却されるのである事によつて、解說せんと欲する夢の理論、それは後に掲げ示す筈である或る種の夢理論が出して見せるに相違ない矛盾を、それによつて生き生きと感じていただきたいのである。

人或ひは次のやうな思ひ付きを浮べるかもしれない。夢みるといふ現象一般をば追憶するといふそれに還元してみたらどうだ、夢を以て、それ自身にとつて自己目的であるところの再現の働き、夜といへども休むことない、一種の再現の働きの現れであると、考へてみたらどうだ、などといふ思ひ付きを浮べるかもしれない。ピルツのしたやうな報告は、これと一致するやうに思

ふ。これに從へば、夢みる時間と夢の內容との間には、深い睡眠中にあつては最も古い時代の印象が、併し朝の頃になると新しい印象が、夢によつて再現されるといふぐあひに、確固たる關係の存することを證據立て得る、といふのである。けれどもかかる解釋は、始めからして、夢が追憶さるるべき材料に對する關係のぐあひを考へることによつて、まことらしからぬものとなつてくる。シトリュムペルは道理にも、夢の中には體驗の繰返しは起らない事を、注意してくれた。或程、夢は左樣成りさうなけぶりをする。けれどもその後が續かない。その後のものは變更されて現れるか、又は、そのものの代りに、或る全く別のものが出て來るかするのである。夢はただ、再現物の斷片しか持ち出さない。この事は確かにかなり常規的であつて、それを一つの理論に用ゐてみてもいいくらゐである。とは言へ、例外も生じて來る。その例外では或る夢の如きは、覺醒時に於ける吾々の記憶がなし能ふのとまるで同じに、或る體驗を完全に繰返すことがある。デルベフは、彼の大學教授同僚の或る一人について物語つてるが、この人は、或る馬車の旅行に於いて、實にただ奇蹟によつてといふよりほかないほどにして、災難を免れたことがあつたが、その危險な旅行をその凡ての細かな點に至るまでも、夢でもう一度經驗したことがあつたのである。カルキンス孃は、前日の或る體驗の精確な再現を內容としてゐた、二つの夢を擧げてる

る。又、私は、或る小兒時代體驗の變更されてゐない夢の復活について、私に知らされてゐる一實例を、後に述べる機會を持つであらう。

「その後の私の經驗からここに附け加へて置くが、例へば、鞄の荷作りをするとか、臺所で食物を調理するとか、さういふ日中の無邪氣な、重要でない仕事が、夢によつて繰り返へされることは、珍らしいことではない。かゝる夢に際しては、併し乍ら、その夢み見た人自身は、記憶の性質に力を置かないで、「實際」のそれに力を入れる。「私はそんなこと凡てを、日中に實際にやつたんでしたよ」と言ふのである。」

第三節　夢の刺戟と夢の源泉

夢の刺戟、夢の源といふことをどう考へたらいいのかと言へば、世上でよくいふ「夢は胃の腑から來る」なる言葉を思ひ出して貰つたら、はつきりとするであらう。ここにこの二つの概念を並べるについては、その奥に、夢を以て一種の睡眠妨害の結果なりと解する理論が潜んでをるのである。若しも睡眠中に何等かの妨害的のものが動き出さなかつたならば、夢を見ることはないのであつて、夢はこの妨害に對する一種の反應である。

著作家達の記述に於いて、夢を惹起する原因に關する究明が最も廣い部分を占めてをる。こ

の問題は、夢が生物學的研究の一對象となつて以來、漸く起つてる事は、解りきつたことである。夢を神の遣しものと見做してゐた古代人は、その夢についての刺戟の源などを探つてみる必要はなかつた。夢は神若しくは幽鬼の力の意志から流れて來るものであつたし、夢の內容はその力の知識又は故意から生じたものであつた。間もなく學問にとつて、疑問が持ちあがつた。夢に對する刺戟はつねに同一のものであらうか、それともいろいろなものであらうか。そしてその疑問と共に、夢の原因的解說は心理學に委ねらるるものか、それとも寧ろ、生理學に委ねらるるものか、といふ考量が生じた。大部分の著述家達はかう認定してをるやうである。卽ち、睡眠妨害の原因、從つて夢作用の源は、種々的の性質のものであるかもしれない、身體の刺戟も、また同じやうに、精神の昂奮も、夢を惹起する役目をなすに至る、と。夢の成立に對するその價値に應じて、この兩つの夢の源のうち、いづれを重んずるか、兩つの間にいかなる差等をつけるかの點に於いては、諸家の見解に、廣いひらきがある。

夢の源を完全に數へあげてみると、結局、それには四種あることになる。これはまた、夢そのものの分類にも應用されてゐる。(一) 外部的(客觀的) 感覺昂奮。(二) 內部的(主觀的) 感覺昂奮。(三) 內部的(器官的) 身體刺戟。(四)純精神的刺戟の源。

その人の夢に歸する著述が既に度々夢問題への道案內として吾々に役立つて來た、かの哲學者の子の、シトリュムペルが、人も知るやうに、或る患者についての觀察を報告して居る。この患者は全身皮膚の一般的な局部無感覺と、高等感覺器官のうち數箇の痲痺症に犯されてゐた。この男に對してなほ自由な少數の感覺門を外界から塞いでやると、彼は眠りに陷るのであつた。吾々でも眠り込まうと欲する時には必ず、このシトリュムペル實驗に於ける狀況と相類似してをる、一種の狀況にならうと努力するのが常である。卽ち、吾々は最も重要な感覺の門である兩眼を閉ぢ、その他の感覺からも凡ゆる刺戟なり、又はこれら感官に働らきつつある刺戟の凡ゆる變化を遠ざけるやうに力める。かうしてるとたとひこの吾々の目論見の方は決して完全には成功することがないのであるにも拘らず、眠り込むのである。吾々は感覺器官から刺戟を全然に遠ざけてをくこともできなければ、また、吾々の感覺器官の昂奮性を完く中止せしめることもできない。かなり強い刺戟があればいつでも吾々は目を覺まされる、といふ事は、「精神は睡眠の中にあつても、身體外の世界と連續的に聯合を保つたままで居る」のである事を證明してくれる。睡眠中に吾々に與へられる感官刺戟は、十分に夢の源となることができる。

さてかかる刺戟には、睡眠狀態が自然にもたらすものか、又はただ時として止むを得ず許さねばならぬやうな、避けがたい刺戟から始まつて、睡眠に終りを與へるに適した、又はそれが目的であるところの、偶然的な呼び覺ましの刺戟に至るまで、ずらりと澤山ある。ちよつと強い光りが眼に射し込んでくることもあらう。何かの物音が聞えるほどになることもあらう。何か匂ひのする物質が鼻粘膜を刺戟することもあらう。眠りながらさうしようとも思はずに身動きをしたために、身體の部分部分を裸に露出して、それで冷やりと感ぜざるを得なくなることもある。又は、姿勢を變じたために、自分で壓迫感覺と接觸感覺を起すこともある。蠅が刺すこともあらうし、小さな夜間の事故が數箇の感官を同時に襲擊することもあらう。幾多の注意深い觀察者は、夥しい數の夢を蒐集してくれてをるが、それ等の夢では、覺めた際に確め得た刺戟とその夢內容の一部とは或る程度まで一致してをるので、その刺戟を以て夢の源なりと認めることもできたのである。

私はここにイェッセン（第五二七頁）に據つてかかる客觀的の——多かれ少なかれ偶然的の——感官刺戟に歸せしめられる夢の一群を引用してみる。不明瞭に認知された雜音は皆いづれも、それに相應な夢の影像を呼び起す。雷鳴は吾々を戰ひの眞中へ伴れ出すし、鷄の鳴き聲は誰か人間

の不安な叫びに變るし、どこかの扉の軋る音は盜賊闖入の夢を呼び起すことがある。夜中に掛布團を失くすと、恐らく吾々は、裸で歩き廻る夢か、又は水中へ陷ちた夢を見るであらう。寢床の中で斜めになつて、兩足が寢床の端から出たりすれば、恐らく、どこかの恐ろしい崖淵の端に立つてゐる夢か、或は嶮しい高所から墜落する夢を見るであらう。吾々の頭が偶然に枕の下へころげこんだりする時には、大きな岩石が吾々の頭上に下がつてゐて、將に吾々をその重みの下に埋め去らんとするかのやうである。精液が溜まつてると、悅樂の夢のもとになるし、局部的の苦痛がしてると、虐待を受けたとか、敵の攻擊とか、或は今身體に傷を蒙りつつあるとかの考へを生ずる……。

「マイエル（夢遊の解說の試み。ハッレ發行、一七五八年。第三三頁）は或る時、二三人に襲擊された、そして彼等は彼を棒仆しに地上に仰向かして、足の拇指とその次の指の間へ一本の棒杭を壓し挾んで、地面へ打ちこんでる夢を見た。夢の中でその有樣を描いてゐるうちに、彼は目が覺めた。そして足の兩指の間を觸つてみると、そこに一本の藁が挿まれてゐたのであつた。ヘンニンクス（夢と夢遊病患者に就いて。ワイマール發行、一七八四年第二五八頁）に據ると、この同じマイエルが別の時に、寢衣を頸のところに少しばかり固く結んで寢た晚に、首を斬られる夢

を見たさうである。ホッフバウエルは少年時代に或る高い塀から轉ろげ落ちる夢を見たが、目を覺ましてみると、寢臺が二つに割れてゐて、彼は實際に轉げ落ちてゐたのがわかつた……。グレゴリは報告してをるが、彼は或る時寢に就く際、熱い湯を入れた瓶を足のところにあてて置いたところ、夢の中でエトナ火山の頂上へ旅行をして、地面の熱が殆ど堪へられない思ひをしたとのことである。又、或る人は發泡膏を頭に貼つて寢たら、一群のアメリカ土人のため頭の皮を剝がれる夢を見た。もう一人の人は、濕つた寢衣を着て眠つたところが、河の流に引き込まれると思ふ夢を見た。睡眠中に現はれる脚部痛風の發作は、或る患者をして自分は宗教裁判の手にあつて、拷問の責苦を蒙つてるのであると、思はしめたのであつた。」(マクニッシュに據る)。

刺戟と夢內容の間に存する類似性に基くところの論證は、若しも誰か睡眠中の者に對して、計畫的に感官の刺戟を加へてることによつて、その刺戟に相應する夢を生ぜしめることができるならば、一段と强みを與へるわけである。マクニッシュに據ると、ジロン・ド・ビュザレングが既にかかる試みをなして居る。「彼は兩膝を蔽はずに置いた。すると、驛遞馬車に乘つて夜中に旅をしてゐる夢を見た。これについて彼の注意するところでは、馬車に乘つてゐると、夜中には膝がいかに冷えて來るか、旅する人のよく承知してることだらうといふのである。別の時に彼はまた、頭

ちに頭を蔽うてをるのが風俗であつたのでぁる。」

モーリは自分の實驗で作つてみた夢についての新しい觀察を報告して居る。（他の試みの或る數は成功には立ち至らなかつた。）

一、彼は唇と鼻端を一本の羽で操ぐらした。——すると、恐ろしい拷問の夢を見た。瀝青の假面を顔にかぶらせられ、それから引き剝がされたが、そのために顔の皮膚もいつしよに剝がれたのである。

二、鋏をピンセットにあてて研いでゐる。——すると、彼には鐘の鳴る音が聞えやがて警鐘となり、一八四八年の六月革命時代に居る氣になつた。

三、髮香水を嗅がして貰つた。——すると、彼は埃及のカイロで、ヨハンナ・マリア・ファリナ商店に居たのである。そしてその夢になほ馬鹿げたいろんな冒險が續いたが、それ等は彼の再現し得ざるやうなものであつた。

四、人が彼の頸筋を輕く抓つた。——すると、彼は誰かに發泡膏藥を貼られる夢を見、子供の

時に診て貰つたことのあつた或る醫者のことを思ひ浮べた。

五、人が彼の顏の近くへ熱した鐵片を持つて來た。すると、彼は盜賊の夢を見た。彼等はこつそりと家へ忍び込み、家族たちの足を火鉢の中へ押しつけながら、金を出せと彼等に迫つてるのである。その後でアルバンテ公夫人が現れ、夢の中では彼はこの夫人の祕書になつてゐた。

六、人が彼の額に一雫の水を滴らした。――すると、彼は伊太利に居て、烈しく汗をかいて、オルギエトの白葡萄酒を飮んでる夢を見た。

七、人が再三再四一枚の赤い紙を通して一本の蠟燭の光りを彼の上へ落してやつた。――すると、彼は荒模樣の夢、酷暑の夢を見、嘗つてラ・マンシュ海峽で經驗したことのある海上暴風雨の中に再び居る氣がした。

夢を實驗的に作るといふ、もつと他の試みは、デルヴェ・ワィガント其他の人々に基いてゐる。

數多の方面からして、「夢の著しい技能が認められてゐる。夢には、感官世界から來る突然の印象をば、己れの影像の中へ織り込んで、その印象がこの影像の中へ入ると、今まで旣に徐々とながら準備されてをり、そして緒口のついてゐた一つのキャタストローフを作りあげるやうにする、さういふ技能がある」(ヒルデブラント)。この著述家の語るところでは、「若い頃に時々私

は、規則正しく朝に一定の時刻に起きるため、有名な、大抵は時計の機械に取りつけてある目覺しを使用した。十分百回も、次のやうなことが起きた。この道具の音響が夢の中へはまりこんで、その夢は非常に長くて且つ聯絡あるものと假に想はれてゐても、その夢全體は恰もただこの音響のために作られてをる、その夢の本來の、內容的に缺くべからざる要點、その夢の當然なりと思はれる究極目標が、この音響ででもあるかのやうに、なつて行くのであつた。」

もつと別な目的のために、後に、なほ三つのかかる目覺しの夢を引用するであらう。

フォルケルトは語つてをるが（第六八頁）、「或る作曲家が或る時こんな夢を見た。彼は學校の授業をしてをる。そして今、その生徒たちに何事かをはつきりさせようとしてるところである。既に彼はその説明を終つた。そして兒童等の一人に向つて聞いた。わたしの言つたことがわかつたかい？　するとこの兒童は、何か物に憑かれた者のやうに、叫んだ、Oh ja（え、わかりましたとも）。それに腹を立てて、彼はその子供に、そんな叫び聲を出してはいけない、と叱つた。ところが級全體が叫び出したが、それがかう聞えた、Orya、やがて、Eiuryo、そしておしまひには、Feueryo!（火事だあ！）と聞えたが、その時彼は、街上で叫ぶ本當の、火事だあといふ聲のため、目が覺めたのであつた。」

ラーデシトックの本を見ると、ガルニェ（「精神能力の研究」、一八六五年）はこんな報導をしてゐる。ナポレオン一世は馬車に乘つてゐて眠つてる時、地雷火の爆發によつて夢を破られ、驚いて立ちあがり叫んだ。「おれたちは足の下を掘られて埋められちやつたぞ。」その時彼の見てゐた夢は、嘗つて彼が體驗したタルヤメント越えと墺太利兵の砲撃のそれであつたのである。

モーリが經驗した夢（「睡眠と夢」、第一六一頁）は有名になつてゐる。彼は病氣で、自分の部屋に床に就いてゐた。彼の母が傍に坐つてゐた。さて彼は革命時代の恐怖政治の夢を見たのである。凄慘な殺戮の場面にも關係し、その後で終に自分も法廷へ呼び出された。そこへ行くと、ロベスピエールや、マラーや、フーキエ・タンギルや、かのもの慘い時代の悲愴な勇士達すべてが居つた。彼は彼等に向つて答辯した。彼の記憶には留められなかつたやうないろいろな事件が、その間に起つた後で、判決を下され、そして目にあまるほど澤山な群集に追ひかけられつつ、刑場へ伴れて行かれた。彼は斷頭臺へのぼつた。刑吏は彼を板に結はひた。くるりとどでん返へしを打つた。斷頭臺の刀が落ちて來た。彼は自分の首が胴から離れる氣持ちがした、そして實に恐ろしい心配のうちに目が覺めた。——覺めてみると、寢臺の枕頭の飾りが落ちて來て、斷頭臺の刀と本當に同じやうなぐあひに、彼の頸椎に打ちあたつてゐたのである。

この夢に對しては、一つの興味ある議論が結びつけられてる。それは「哲學評論（レヴュ・フィロソフィク）」誌上ル・ロレーンとエッゲルが緒口をつけたもので、覺醒刺戟の知覺と覺醒そのものとの間に經過する短い時間の間に於いて、一見するところではかくも異常に豐富な充實した夢內容が寄り集まつてくることは、果して可能であるか、いかにして可能となるか、といふ論爭である。

この種の實例のお蔭で、睡眠中の客觀的な感官刺戟が、夢の源のうちで、一番よく確定された源であると思はれる。これがまた、素人の知識に於いては、唯一無二の働きをしてをるものでもある。教養はあるが、その外に夢の文献については門外漢である人に向つて、夢はいかにして成立するものであるか、と訊ねて見給へ。さうすると、その人は屹度、自分の知つてをるもののうちから、夢が醒めてみるとそれとわかるやうな、客觀的な感官刺戟によつて說明のついた場合を持ち出してきて、その返答をするであらう。專門的觀察はそんなところに停頓するわけにはいかない。睡眠中に感官に働きかける刺戟は、實にその現實通りの姿を以ては現れるものでなく、その刺戟に對して何等かの關係に立つてるやうな、或る別な表象によつて代理されるといふ觀察からして、もつと先への質疑を起すべき動機を與へられる。ところが、夢の刺戟と夢の結果を結合する關係は、モーリの言葉に據ると（「類似性」第七二頁）、何等か或る近親性である、併し

それは唯一無二のものではない。」例へば、ヒルデブラントの語る目覺しの三つの夢の話を聞いてみるがよい。さうすると、同一の刺戟が何故にかくも相異した結果を、何故に、ものもあらうに、正にかかる夢の結果を引き起したのであるか、といふ疑問をわが心に提出してみねばならぬであらう。

ヒルデブラント(第三七頁)。「卽ち、私は或る春の一日朝早く、散歩をしてをる。そして靑々と萠え出る野原をぶらりぶらり歩きつづけて、遂には近所の或る村まで來た。其處で、村人が晴衣を着て、讃美歌の本を小わきにかかへて多數が敎會の方へと歩いていくのを見た。さうだつた！今日は日曜日なんだ。そして早朝の勤行がぢきに始まる頃だ。私もそれに列席しようと決心したが、少しばかり暑くなつてゐたので、その前に敎會のまはりの墓地で涼んでいくことにした。ここで種々の墓の碑銘など讀んでゐると、鐘撞き男が塔へのぼつて行く音を聞いた。そして見あげると、塔の頂上に村の鐘樓があつて、禮拜開始の合圖を與へるだらう小さな鐘が見えた。なほかなりの時間の間といふもの、その鐘は動かずにさがつてゐる。やがて搖れ出した――そして突然に、はつきりしたよく傳はるその音が響いた――いかにもはつきりと、よく傳はるものだから、それで私の夢が切れてしまつた。併しその鐘の音は目覺しから來たのであつた。」

「第二の結合の例。明るい冬の或る日。街路は深い雪で蔽はれてゐる。私は橇の遠足に參加を承諾したのだが、久しく待つた後やつと、橇が門前に來てるとの知らせが來た。そこでそれへ乘り込む支度となるわけだが――毛皮の外套を着る、毛の足袋が取り出される――そして終に私は私の坐席に坐つてゐた。併しまだなかなか出發にはならずぐづついてゐたが、やがて待ち切つてる駿馬どもに、手綱が身に感ずるほどの合圖を與へた。馬が引き出す。元氣よく搖れた鈴が、あの誰も知つてる土耳古近衞騎兵隊の音樂のやうな響を立て始めたが、それがあんまり旺盛なため、忽ちにして、蜘蛛の糸のやうな夢の織物は引きちぎられた。またしてもこれは、目覺し鈴の鋭い音響にほかならなかつたのである。」

「なほ第三の例！　私は料理女が二三ダースの皿を積み重ねたのを持つて、廊下を食堂へ向つて歩いて行くのを見た。彼女が兩腕に抱いてるその瀨戶物の柱が、私には今にも平均を失ひさうで、危なかしく思はれた。私は忠告してやつた。「氣をおつけよ。そのお荷物がそつくり地面へおつこちるかもしれんぞ。」勿論、當然期待すべき抗辯が出ずにはゐなかつた。こんなことにはもう慣れつこなんですよ、云々といふやうな。その間も私はやはり氣がかりな眼を以て、その步いて行く女中を見送つてゐた。果して、食堂の扉口のところで、よろよろとやつたのである。――

脆いその道具は落ちた。床板の上に澤山のかけらとなつて、がぢあがぢあ、がらがら、音を立てた。併し——その切りもなく繼續する物音は、自分で氣がついたところでは、何か本當のただ、がらがらと、いふ音ではなくて、正しく鳴る鈴の音であつた——そしてさて目覺めた私にはわかつた。この鈴の音を以て、目覺しがその責務を果たしたものにすぎなかつた。」

精神が夢の中では何故客觀的の感官刺戟的性質を誤認するのであるか、この疑問はシトリュムペルによつて——及び彼と殆ど同じくヴントによつて——次のやうに解答されてゐる。卽ち、睡眠中にかく襲うてくる刺戟に對しては、精神は幻影形成といふ條件の下に置かれてをるのである、と。一つの感官印象は吾々によつて認識せられ、正しく判斷される。と言ふのは、これより先に生じてゐる一切の經驗から考へてみて、この印象はそれに屬すると思はれる記憶群の中へ、組み込まれるのであるが、それは印象が十分强く、明白で、持續的な場合、及びこれだけの熟考に必要な時間が吾々の自由になる場合に於いてである。若しこれ等の條件が充たされなかつたら、印象の原因となつてをる對象は、誤認されることになる。吾々はその印象を土臺として一つの幻影を形成する。「誰かが野原を散步してゐて、或る遠方の對象物を不明瞭に知覺する時には、その人はそれを初めには馬だと思ふやうなことも生ずるのである。」もつと近づいて見てみると

休息してゐる牝牛だといふ判斷が湧いてくるが、最後には確實にその表象が生しつつある人間の一群の表象に變ずる。さて、精神が睡眠中に外部の刺戟によつて受ける印象は、これと似た不定的な性質のものである。精神はその印象を土臺として幻影を形成するが、その時には、印象のために、記憶影像の多かれ少なかれ或る數が呼び覺まされ、それによつて印象はそれの心理的價値を持つことになる。然らば、そこに問題となる多くの記憶圈のうちのどれからして、その時の影像が呼び起されるか、そしてその際、考へ得られる聯想關係のうちどれが實際の働きをするものか、このことは、また、シトリュムペルに據れば、決定し得ぬものであり、そして謂はば精神生活の隨意に任かされてをるのである。

吾々はここで一つの撰擇の前に立つわけである。夢形成に於ける合法則性は事實これ以上辿ることができるものでない事を承認して、從つて感官印象によつて呼び起された幻影の判斷が、果してなほ他の條件にも從ふものではあるまいか、といふ質疑を出すことを斷念してもよろしい。それともまた、睡眠中に襲うてくる客觀的感官刺戟は、夢の出所としては、ただ或るささやかな役目を演ずるにすぎないのである事、及び呼び覺まさるべき記憶影像の撰拔を決定するのは他の要素である事、さういふ事を推測してもよろしい。實際に於いて、この目論見で私があのやうに

詳しく報告して置いた、モーリの實驗的に作り出された夢を吟味してみるならば、かうも言ひたい氣になる。卽ち、行はれたかの試みは、實はただ夢要素のうちの或る一つの來因を露はにしたのみであり、そして自餘の夢内容は却つて餘りにも獨立的なものに、餘りにも甚だしく箇々的に決定されてるものに見え、そのためにその夢内容は、かの實驗的に導き出された要素と一致しなければならないといふ、一つの主張によつては、說明がつき得ないのである。のみならず、この印象は、夢の中で時として最も特別にして、又最も緣遠い判斷を受けることを知るならば、かの幻影說をさへ、及び夢を形づくる客觀的印象の力をさへ、疑ひ出すのである。それで例へば、エム・シモンが物語つてゐる一つの夢では、彼は巨人のやうな一人の男が食卓に坐つてゐるのを見、その男が嚙む時に顎を打ち合せるので生じる、恐ろしくがたがたといふ音を聞いた。眼を覺ましてみると、彼は部屋の窓さきをかつぱかつぱと走りすぎる馬の蹄の音を聞いたのであつた。若しこの場合の馬蹄の騷音がちようど、ガリヴァー旅行記の中のブロッブディングナグの巨人達や、かの行儀のよい馬どもの傍になした、滯在についての記憶圈から出た表象を呼び起したのであるとすると——それも私はこの著者の例からは全く參考とする點を持たずに、謂はば自分でかう判斷してみたいのだが——その刺戟にとつてかくも普通でない記憶範圍の撰拔は、その他に、もつと

別な動機があるならば、容易に解說されない筈があるだらうか？（夢の中に巨人が出ることは、その夢をみてゐる者の小兒時代に屬する或る場景が中心となつてゐんだ、といふことを認定させる。併しとにかく、上述のやうにガリヴァー旅行記に對する或る斷想と判斷したのは、或る一つの判斷が存在すべきではないことに對する、よき一例ではある。夢を判斷する者は、己れ自身の機智を弄してはならないし、夢みた人の思ひ付きに依據することを輕じてはならない。）

第二　內部的（主觀的）感官昂奮

客觀的感官昂奮が、睡眠中に夢を喚起する者として、一役を演ずることは、爭ふことのできない事實である。これは、それに對する凡ゆる抗議にも拘らず、吾々の承認しなければならないことであらう。そして若しもこれ等の刺戟では、その性質上及びその度數の頻々たるために、一切の夢影像を解說するのに恐らく不十分であると思はれるならば、その時には、もつと別の、併しそれ等と類似的な作用をなす夢の源を探求したらいい、といふことになる。外部的感官刺戟の外に、感覺器官に於ける內部的主觀的昂奮をも、考慮に入れやうとするこの考へが、一番最初に浮んだのは誰の著書にであつたか、それを私は承知してゐないが、併しそれが、夢の病源學の凡ゆ

る近世的記述の中に於いては、多かれ少なかれ力を入れて行はれてるのは、事實である。ヴントはかう言つてる（第三六三頁）。「私の信ずるところでは、更に、夢幻影にありては、覺醒狀態の時に基いて吾々に暗い視界の混亂として、耳鳴り、耳騷音、其他として、知られてゐるところの、かの主觀的視覺及び聽覺が、そのうちでも殊に主觀的網膜昂奮が、或る重要な役割を演じてをる。類似の又は全く一致する對象を多數に眼前に出現せしめる夢の著しい傾向は、それで說明がつく。無數の鳥、胡蝶、魚、さまざまな色の眞珠、花其他が、吾々の眼前に細工されて現れる。暗い視界の光塵が、こゝでは空想的な形態を取ることになり、この光塵がそれによつて成立してをる多數の光點は、夢の中では、丁度それと同じ數だけの箇々の影像となつて形體を持つことになるが、その影像は光の混亂の可動性のために動的の對象物の如く眺められるのである。——ここにまた、夢の實に多種多樣なる動物形態を作る傾向も根ざしてをり、この形態の形の豐富なるは、主觀的映畫の特別な形に對して容易に馴致されるのである。」

主觀的感官昂奮は夢影像の源として、かの客觀的昂奮のやうに、外部の偶然には左右されてゐない、といふ特長を明かに有してをる。謂はばこれ等はこれを解說するのに必要である時には、いつなりとも、その解說の利用に役立ち得るのである。併し客觀的感官刺戟に對して劣る點は、

容觀的刺戟であるならば、觀察と實驗とによつて夢の刺戟者としてのその役割を實證することはできるのに、この主觀的刺戟の方は、その實證のために間に合ふことは實に難かしいか、又は全くない、といふ點である。ヨハン・ミュレルが「空想的視覺現象」として記述してゐる所謂催眠狀態的錯覺が、主觀的感官昂奮の夢を生起せしむる力に對する主要證明を提示する。それは、時として非常に潑溂としてをり變化に充ちた影像であつて、就眠の時刻に於いて、多くの人にあつては全く規則正しく發現するのが常であり、兩眼を開いてみた後にあつても、なほ暫くの間は持續することがある。モーリはこの影像を夥しく見る習慣の人であつたが、これに對して周到な批判を加へ、且つこれと夢影像との聯絡、否寧ろこれとそれとの同一性を（既に併しヨハン・ミュレルもやつてをるのであるが）主張してをる。モーリの言ふところでは（第五九頁以下）、この影像の成立には精神の一種被働的な狀態、注意力緊張の弛緩が必要である。通常の體質の場合であれば、催眠狀態的錯覺を見るのには、一秒間だけ精神弛緩の狀態に陷るので澤山であつて、恐らくその狀態の後で再び我に歸り、そして終にこの何度か繰り返へされる戲れも睡眠に入ると共に止んでしまふ。その後であまり長くない時間が經つてから目を覺ますと、その時には、モーリに據れば（第一三四頁）、眠り込む前に催眠狀態的錯覺として眼前に浮動してゐたと同一の影像が夢の

中にあつたことを證據立てることができる。それで或る時モーリは、眠り込む時間に於いて、歪んだ顔付をし奇妙な髪の形をした奇怪な姿が一つづき現れて、それ等のために信じ難いほどの無遠慮を以て惱まされた目に會つたが、目を覺ました後に、彼にはそれ等の夢を見たといふ記憶があつた。別の時には彼は丁度、自分で節食の制限を加へてゐたものだから、空腹感に苦んでるたのであつたが、その時に、催眠狀態的に、一枚の皿と、その皿へ何かご馳走を入れて受け取つてくる一本のフォークを握つた手とを見た。夢の中では、彼は豐かに整へられた食卓に坐つてをり、食事中の人々がフォークで立ててる雜音を聞いたのであつた。も一つの時には、彼はちくちくと痛む眼をしながら眠りこんだが、非常に努力して一つ一つ詮索しなければならない、顯微鏡で見るほどの小さな符號の催眠狀態的な錯覺を見た。一時間の後睡眠から目覺めると、一つの夢を記憶してゐた。その夢では、非常に小さな活字で印刷した一冊の開いてある本が現れ、彼はこれを骨折つて讀み通さねばならないのであつた。

これ等の影像と全く類似して、言葉や名前や其他の聽覺の錯覺も亦、催眠狀態的に現れ、そしてその後に夢の中でそれが、謂はばそれで開始される歌劇の主旨を知らせる序曲として、繰り返へされることがあり得るのである。

ヨハン・ミュレルやモーリと同じ道を歩いてる催眠狀態的錯覺のもつと新しい觀察者は、ジー・トラムブル・ラッドである。彼は練習によつて、徐々に眠りに入つた後二分乃至五分にしてほくりと、その眠りから眼を開かずに離れてしまへるまでに立ち至つたが、その時に、丁度今消えて行く網膜感覺をば、記憶の中にまだ殘存しつつある夢の影像と、比較してみる機會を持つたのであつた。彼はかう斷言してゐる。卽ち、この兩者の間には必ず或る親密な關係あることが認識されたが、それは、網膜の自家光線の輝いてる點と線とは、心理的に知覺された夢中の形態に對して、謂はば輪廓素描、雛形を生じてゐたといふてよい工合を以て、なされてるのである、と。例へば、彼が自分の前に明瞭に印刷された數行を見、それを讀み且研究した一つの夢に對しては、網膜にある光點の配列が平行線的に適應してゐたのである。これを彼の言葉で言つてみると、彼が夢の中で讀んだ明瞭に植字してある頁は、或る一つの對象物に變化し、その對象物は彼の覺醒時の知覺にとつては、餘りに遠く離れすぎてるから、そのうちの幾部分かを特に明瞭にするために、一紙片にあけた一つの小さな穴を通してこれを眺めてをる、本當に植字された書物の一枚の一部分であるやうに、思はれたのである。ラッドは併し、この現象の中樞的關係を價値以下に評價することはしてゐないのではあるが、彼の意見では、網膜の內面的昂奮狀態なる材料に相依ら

ざるやうな視覺的夢は、殆ど一つも吾々に起ることはない。特にこの事は、暗い部屋に於ける就眠後間もなく起る夢には當てはまるので、それに較べて、目覺め時に近い朝の夢にとつては、明るくなつた部屋の中で眼に傳はつてくる容觀的な光線が刺戟の源を與へる。網膜自家光線の更代に充ちてをり、無限に變化力ある性質は、吾々の夢に現はれてくる不安な影像のつながりと、精確に相應するものである。若しラッドの觀察に意義を許るし與へるならば、夢にとつてのこの主觀的刺戟源泉の豐かな結果を、低くは評價することができないであらう。なぜならば、人も知る通りに視覺影像は吾々の夢の主要成分をなしてるからである。聽覺のそれを除いた他の感官領分からの貢献は、些末であり且つ常態的ではない。

第三　內部的器官的肉體刺戟

今吾々は夢の源を器官組織の外部にでなく、その內部に探す途中にあるのであるとするならば、吾々は次の事を思ひ起してみなければならない。卽ち、健康の狀態にある時には已れの存在について吾々に殆ど知らしむることがないやうな、吾々の內部的器官の殆ど凡てが、刺戟の狀態に於いて――吾々はさう名づけて置かう――或は病氣にあつては、吾々にとつて大抵は苦痛的

な感覺の一源泉となり、この源泉は外部から及んでくる苦痛刺戟及び感官刺戟の源に對して同列に置かれねばならないものである、といふ事である。例へば、シトリュムペル（第一〇七頁）をして次のやうに言はしてるのも、非常に古い經驗なのである。「精神は自分が肉體と感官關係を有することを、覺醒時に較べると、睡眠中に於いて遙かに深く且つ擴く意識するに至るものであり、身體の部分と變更とから發生してるのではあるが、覺醒時に於いてはそれについて何も知らずに居つた或る種の刺戟印象を受け、そしてそれによつて働きかけられざるを得ないのである。」覺醒時にはまだ何もそんなことに氣がつかずにをる初期的病狀に對して、夢の中で注意させられることがあるものだ（それは、夢が印象に對して附與する擴大のお蔭によつてである、前記第六頁參照）、といふ事は、非常に可能的なことだと、既にアリストテレスが述べてをるし、夢の何か豫言的な恩惠といふやうなことを信ずるのは、その見解の中に確かに含まれてゐなかつた醫學方面の著述家達も、少なくとも病氣の知らせといふことに對してだけは、夢のさやうな意義ある點は承認して來てをる。（エム・シモン、第三一頁、及び多少古い時代の數多の著述家を參照してみよ）。

（夢のかやうな診斷學的利用の外に――例へばヒッポクラテスに見るやうに――古代には夢の治療學的意義も

認められてゐたことを想起する必要がある。希臘人の間には、病氣全快を求める病人が普通にこれを希ひれがう夢の神託があつた。病人はアポロ又はエスクラプの神殿へ行き、其處で種々の儀式を加へられる、沐浴し、摩擦を受け、薫香で燻される。そしてやがて恍惚境に入ると、神殿の中で、贄にされた牝羊の毛皮の上へ寢かされる。病人は眠り込む。そして治療のいろいろな手段の夢を見るが、それは自然的な形態を以てか、又は象徴や形象を以て示されるので、後に神官がその意味を判斷して聞かせたのである。―― 希臘人の治療的夢についてなほ詳しくは次の書を見よ。Lehmann, I, 74; Bouché-Leclerq, Hermann, Gottesd. Altert. d. Gr. § 41, Privataltert. § 38, 16; Böttinger in Sprengels Beitr. z. Gesch. d. Med. II, s. 163 ff. W. Lloyd, Magnetism and Mesmerism in antiquity. London, 1877; Döllinger, Heidentum *u.* Judentum. s. 130)

夢が上述の如き診斷學的能率を有することについての實證的實例は、近世となつても、無くはないやうである。例へば、アルティッグ（「夢の症候學的價値論」）に據ると、ティシエは四十三歳になる或る婦人の話を報告してをるが、この婦人は外見上完全な健康狀態にありながら、二三年の間恐怖夢に襲れてゐたところ、醫者が診斷をしてみると、初期的な心臟病であることがわかり、間もなく彼女はその病氣で仆れた。

内部器官の十分な障害は、多數の人にあつて、あきらかに、夢を生起する働きをなしてをる。心

臟病及び肺病患者にあつては恐怖夢が頻繁である事は、一般に指摘されてをり、のみならず夢生活のこの方面は多數の著述家によつて非常に重要視されてもをるから、私はここにはただ文獻(ラーデシトック、シピッタ、モーリ、エム・シモン、ティシエ)を擧げるに止めて置いてよい。ティシエの如きは、疾患に罹つてる器官は夢の內容に對して特色發揮的な印を刻みつけるものであるとまで、述べてをる。心臟病患者の夢は普通非常に短かくて、恐怖的な覺醒で終るものである。彼等の夢の內容では、悽慘な事情の下に於ける死の境遇が殆ど常に一つの役割を演じてをる。肺病患者は窒息や雜沓や逃走の夢を見、著しく多くかの有名な夢魔にうなされる。ところがこの夢魔を、ベエルネルはうつ伏せに寢て呼吸器官の口を蔽うてみる事によつて、實驗的に呼び起すことをなしてるのである。消化障害の場合には夢には享樂と嘔吐の範圍に屬する表現が含まれる。最後に、夢の內容に與へる性的昂奮の影響は、各箇人の經驗にとつて十分把握し得るところであり、器官的刺戟による夢昂奮に關する全學說に對し最も强き保證を與へるものである。

夢の文獻を限なく硏究してみると、著述家のうち或る人達(モーリ、ワイガントなど)は、自分等の病狀が夢の內容に與へてる影響に暗示されて、夢問題を硏究するに至つたのであることも亦、全く明らかである。

これ等疑ひもなく確立された事實によつて夢の源泉の數が增加を來すことは、併しながら吾々が考へたく思ふほどには、そんなに著しいものではない。夢は、勿論、健康な人々に――恐らく凡べての人々に、恐らく每夜――現れて、而かも器官的疾患をば、明らかにその缺くべからざる條件とはせざるところの現象である。ではあるが併し、吾々にとつて中心的問題となるのは、特別な夢が何から發生するかではなくて、尋常な人間の普通の夢にとつてはその刺戟の源はいかなるものであらうか、といふことである。

併し今やただ一歩先へ進めば、一つの源泉へ衝き當るのである。この夢の源泉は今まで述べたどれよりかも一層豐かに流れてをり、そして實は決して、いかなることあるとも、涸渇することのない見込みのものである。肉體の內部が病氣の狀態の時には夢刺戟の源となる事が若しも確證せられ、そして精神は睡眠狀態の時に、外界から離脫して、肉體の內部に一層大きな注目を向けることができるのである事を、若しも吾々が承認するとするならば、その時には、先づ器官が疾患に犯されるといふやうなことがなくとも、刺戟が睡眠中の心靈のところまで到達して、いかなる模樣かによつて、夢影像となるのである、と認定しても、ほぼよろしい。覺醒時には吾々が鈍く一般的感じとして知覺して居り、ただその質に應じて區別を立て得るに過ぎないやうなもの、

そして醫者達の意見に從ふと、凡べての器官系統は、そのもののために働きをなしてをるのであるといふもの、さういふ一般的感じが、夜になると、力强き影響を有するものとなり、そしてその箇々の成分と共に活動を起し、夢表象を喚起するのに最も强力で、且つ同時に最も普通的な源を作ることになるのではあるまいか。さうであるとすると、殘るところの吟味は、その器官刺戟が、いかなる規則に從つて、夢の表象に變化されるか、といふことではあるまいか。

ここまで來ると吾々は、凡ゆる醫學的著述家達の間に於いて特に重んぜられるものとなつてをる夢成立理論に觸れることになつた。ティシエの所謂「內臟的自我」(moi splanchnique)なる吾々の本質の中核をその中に蔽ひ包んで、吾々の知識を以つては探ぐり得なくしてゐる不可解と、それから夢成立の不可解とは、相互に非常に相應してをつて、兩者を互ひに關係せしめることができる。器官の植物性的感覺をば夢形成の基となすこの思考法は、この上に、醫學者にとつては、もつと別の興味を與へて、醫學者は夢と精神障害とは、その現れに於いては、いかにも一致する點多きを示すものであるから、この兩者をば病源學的に結合せしめるくらゐである。何となれば、かの一般的感じなるものと、それから內部的器官から發して來る刺戟との變化交替は、精神病の成立に對しても、廣い範圍に亙つて、意義ありと認められるからである。それ故に、若しも身體

とではない。

刺戟說が、その說を獨立的に提議する或る一つの原因以上に還元されるとしても、怪しむべきこ

一八五一年に、哲學者ショーペンハウエルが展開してみせた思考法は、一群の著述家にとつて標準的のものとなつた。世界形相が吾々の中に形成されるのは、吾々の智力が外部から到着する印象をば、時間、空間及び因果の諸形式に鑄直すことによる。器官組織の內部から來る刺戟は、感應的な神經系統を傳はつて、日中には吾々の氣分に對して、せいぜい、或る無意識的な影響を與へるのみだが、日中印象の痲痺的な作用が止んでしまつた夜になると、かの內部から湧きのぼつて來る印象には、注意力を己れの方へ向けて貰ふ力が出來てくる——それは恰度、日中の騷音が聞えなくしてをる泉のさらさらと滴る音をば、吾々は夜になると聞くのと、似てをる。吾々の知力は自分に特有な機能を實現するより以外には、いかにしてこれ等の刺戟に對して反應する筈があらうか？　であるから知力は刺戟をば、因果の絲を傳はつて動いてをる、空間に充ち且つ時間を充たしてをる、いろいろな形態に變形し、かくして夢が生ずる。身體刺戟と夢の影像との間の、もつと詳しい關係を究めようと試みたのは、その後にシェルネルがあり、また彼の後には、フォルケルトがある。この人達の批判は、夢の理論に關する章の時に、讓ることにしよう。

精神病學者クラウスは、特に徹底的にやり遂げてをる彼の或る研究に於いて、夢竝びに譫妄症と妄想症の成立を、同一の要素、卽ち器官的に制約された感覺から引き出して來てをる。彼に據ると、器官組織のいかなる一箇所でも、或る夢又は妄像の出發點となり得ないやうなものは、殆ど考へられない。ところで、器官的に制約された感覺は、「二つの群に分割される。（一）綜合的情調（一般的感じ）のそれと、（二）植物性的器官組織の主要系統に內在する特殊的な感じ方とに。後者を吾々は五つの群に區別してみた。（一）筋肉感覺、（二）氣壓の感覺、（三）消化器の感覺、（四）性的感覺、（五）外圍的感覺。」（論文第二部の第三三頁）。

肉體刺戟に基いて發生する夢の影像の經過を、クラウスは次のやうに認定してをる。喚び起された感覺は、何等か或る聯想法則に從つて、自分と密接關係ある、或る一つの表象を喚び起し、それに自分を結びつけて、一つの組織的な形象を作ると、その形象に對しては意識は通常時と異つた態度を取る。と言ふのは、この意識は感覺そのものに對しては、何等注意を拂はずして、全然注意をその隨伴的な表象に向けるのであつて、これが又同時に、この間の實情が何故こんなにいつまでも誤認されてゐたのか、その理由を說明するものである（第一一頁以下）。クラウスは又、この經過に對して、「夢影像に於ける感覺の變質」といふ特別な言葉をも見つけてをる（第二四頁）。

夢の影像が成立するに對して器官組織上の肉體刺戟が影響することは、今日では殆ど一般的に承認されてをるが、兩者の關係の法則についての問題は、非常に種々に解答せられ、時としては曖昧な説明を以てなされてることもある。ところで肉體刺戟説を地盤とすると、夢の判斷には、夢の內容をばそれを原因しつつある器官的刺戟に溯らしてみねばならないといふ、特殊な任務が生ずることとなり、それで若しシェルネルが發見してをる判斷規則を承認しない以上は、吾々は屢々、器官的刺戟なる源は、夢の內容によつてよりほかには、暴露されるものでないといふ厄介な事實に突き當ることになるのである。

併し種々の夢の形式を判斷するのに、かなりの一致が出來上がつてをる。人はこれを「類型的(テイピシユ)」の形式と呼んでをるが、それは澤山の人々に於いて、全く似通つた內容をもつて、何度も現れるからである。高い所から墜落するのや、齒が脫け落ちるのや、飛行や、それから裸でゐるか、又は粗末な着物を着てるため狼狽するとかの、世に知られた夢が、それである。最後の夢は、簡單に、布團が投げ出されてしまつて露き出しに寢てをるといふ睡眠中になされる知覺から、發生するものだと言はれてをる。齒の脫け落ちる夢は「齒の刺戟」に歸せられるが、然し必ずしもそれは齒の何等か病的な昂奮を意味する必要はないのである。飛行の夢は、シトリュムペルに據ると、

胸廓の皮膚の感じが既に無意識にまで低下してしまつてゐると同時に、精神が、上下に動いてゐる肺葉から發する刺戟の分量をば、それで判斷するために使用した、適當な比喩である。胸廓の皮膚の感じが無意識になるといふ状況のために、浮動の表象形式に結びついてゐる感覺が導き出される。高所から墜落する夢の原因は、皮膚の壓迫の感じが無意識となりだす時に、一本の腕が身體から離れて下がるとか、又は引きこめてゐた片方の膝が突然伸ばされるとかして、そのために皮膚の壓覺が再び意識されはするが、その意識への過渡が、墜落の夢となつて、心理的に形象化されることにあるといふ、(シトリュムペル、第一一八頁)。これ等の尤もらしい解説の試みは、併し弱點を持つてをる。それは明かに、これ等の試みはそれ以上の支持點を持つてゐないのに、器官的感覺のこれ又はあれの群を精神的知覺から消え去らしめてをるか、又はそれを無理に現れしめてをるかしてゐて、それで解説に都合のよい状況を作り出す、といふ點である。併し私は後に機會を得て、所謂類型夢とそれの成立を再び論ずるであらう。

エム・シモンは類似の夢の一群を比較して、器官的刺戟が原因となつて夢となるその決定に對し如何なる影響を有するかについて、若干の規則を引き出さうと試みてをる。彼はかう言つてゐる(第三四頁)。若し睡眠中に或る器官が常規的な工合を以て或る情緒の現れに力をかしてをつた

のが、いつもこの情緒の時には陷るやうな昂奮の狀態へ、何かほかの原因によつて陷つてるとすると、その時に成立する夢は、この情緒に適當した表象を含むことになるであらう、と。

もう一つの規則は(第三五頁)、若し或る器官が睡眠中に働らいてをり、昂奮してをり、又は妨害されてをる時には、その器官が司る器官的機能の實行に關係する表象が夢に出て來る、といふのである。

ムールリ・ヴォールは、身體刺戟說が想定した夢發生に對するかの影響を、箇々の分野に對して實驗的に證明しようと企てをる。彼は試みに睡眠者の手足の位置を變更してみて、この變更と夢の結果とを比較した。その成績として次の箇條を報告してをる。

(一)睡眠中に於ける手足の位置は、現實に於けるそれとほぼ一致する。卽ち、夢中に於ける手足の靜止的狀態は實際のそれと一致する。

(二)若し手足の運動の夢をみるとすると、その時にこの運動はいつも、その運動を實行する際に生ずる色々な姿勢のうちの一つが、實際のに一致する、といふぐあひである。

(三)夢の中では自分の手足の位置を誰か他人のものと思ふこともある。

(四)今やつてをる運動が邪魔されてしまつたのだと、夢みることもある。

(五)その時の位置にある手足は、夢の中では、動物か又は怪物のやうに思はれることもある。その際には兩者の間に或る類似性が生じてをる。

(六)手足の位置が夢の中で考へを湧き上がらせることはあるが、その考へはこの手足に何等かの關係を有してをる。例へば、指を動かしてゐると、數へる夢をみる。

私をして言はしむれば、これ等の成績からして結論し得るのは、この身體刺戟説も亦、喚起さるべき夢影像の決定に存する外見的な自由をば、全然には除き去ることができないといふ事である。

第四、心理的刺戟の源

覺醒生活に對する夢の關係、夢の材料の來歷を述べた時に、人間は日中に行つてゐる事、及び覺醒時にあつて興味を感ぜさせられる事の夢を見るものであるといふのが、夢の最も古い研究者もまた最も新しい研究者も、抱く見解である事を知つた。覺醒生活からして睡眠の中へまで繼續されるこの興味は、ただ單に夢を生活へ結びつける精神的絲であるばかりでなく、吾々に輕んずべからざる夢の一源泉を與へてくれるのである。この夢は睡眠中に關心的となつたもの――即ち、

睡眠中に働きかけてくる刺戟と相竝んで —— 凡ゆる夢影像の來歷を明かにするのに足りる筈だと思はれる。然るにこの主張に對して、また反對も聞える。といふのは、夢は睡眠者を日中の關心事から引き離す、そして吾々が日中に最も心を捕へられてゐた事柄の夢を見るのは、大抵は——その事柄が覺醒生活にとつて目前事實的の魅力を失つてしまつた時になつて、漸くあることだ、といふ反對意見をも聞いてをる。それ故吾々は、夢生活の分析に於いては、一歩毎に次のやうな印象を受ける。「屢々」とか、「一般には」とか、「大抵は」とかの語によつて、豫じめ制限をなし、且つ例外の妥當性に對して豫め備へることをせずしては、普遍的な規則を竝べることは許されないのだ、といふ印象を受ける。

若しも覺醒時の關心事が、睡眠中の內部的及び外部的刺戟と相竝んで、夢の病源學の立證に十分力を添へることが、假にあるとしたならば、その時には吾々は、夢の源の凡ゆる要素の來歷について、滿足のいく說明を與へることができるに相違ないであらう。夢の源泉の謎は解かれるであらうし、そして跡に殘るのは、箇々の夢に於ける精神的と身體的の夢刺戟の關與を區別する任務のみであらう。實際は或る夢のかかる完全なる解決は、まだ一回だも成功はしてゐない。そしてこれを試みたどの人にとつても、それの來歷についていかなることも言ひ得ない夢の成分が

――大抵は非常に澤山に――殘されてゐるのである。夢の心理的源泉としての日中の關心事などは、誰でもが夢の中で自分の仕事を更に續けて行くのであるといふ、かの確信的な主張に據つて期待される筈なほどに、そんな範圍に亙つては、明かに役には立つてゐるものでない。

其他の精神的夢源泉は知られてゐない。從つて文獻中にあつて、代表的なる夢の解說は凡て――後に揭げるシェルネルの解說を先づ例外とすれば――一つの大きな缺け目を露出してをるのであつて、その部分の中心となるは夢にとつて一番特色發揮的な表象影像の材料の問題である。この困却の狀態にあつて、著述家達の多數は、實に近より難い夢昂奮への精神的關與をば、できるだけ狹ばめようといふ傾向を現してをる。なるほど、彼等は大別として、神經刺戟の夢と聯想の夢とを區別し、そのうち後者では專ら再現がその源泉となつてをる、といふ（ヴント、第三六五頁）。併し彼等は、「夢は打ちかかつてくる身體刺戟がなくとも現れるであらうか」（フォルケルト、第一二七頁）といふ疑ひを脫離することはできないのである。純粹な聯想の特質といへども、その說明の力は持たない。「本來の聯想夢にあつては、もはやかやうな確固たる中心のことなどは言ふことができない。これでは、夢の中心點へ來るものでも、不安定な集合體である。さなきだに理性と悟性から脫してしまつてをる表象生活が、ここではその上に、かのもつと重みのあ

る身體及び精神の昂奮のために、もはや聯絡はつかなくなり、そして自分の勝手放題な動きに、自分がぐらぐらと不統一によろめくままに、打ち任されてをるのである」（フォルケルト、第一一八頁）。夢昂奮に對する精神的關與を狹ばめることを、次にはヴントも試みてをるが、彼の論述するところでは、「夢の幻を純粹な錯覺だ見做すのは、恐らく不當であらう。多分大抵の夢表象は實際は幻影であつて、それは睡眠中には決して消滅することのない、微かな感覺印象から出て來るのである」（第三五九頁以下）。ワイガントはこの見解を受け繼ぎ、そしてそれを一層一般化してをる。凡ゆる夢表象に對して彼は、「その最も近い原因は感覺刺戟であり、それがあつてこそ、それに再現的聯想が結びつくのである」と主張してる（第一七頁）。ティシエ（第一八頁）は、精神的刺戟源泉を排斥する點では、更に一歩を進めてをる。「全然精神的に起る夢は存在しない。」及び他のところ（第六頁）では、「吾々の夢思想は外界から取られるものである。」

勢力ある哲學者ヴントの如く中間的態度を取る著述家達は、競うて次の事を記錄してゐる。卽ち、大抵の夢では、身體的刺戟と、不明な又は日中の關心事として認識された、精神的なる夢の刺戟體とが、一緒に働いてるのである、と。

吾々は後に、夢形成の謎は、推測もしなかつた精神的刺戟源泉の發見によつて、解決され得る

ことを、知るであらう。先づ今のところは、夢形成に對し精神生活から發するのでない刺戟を重んじすぎるのを、怪しまないで置かうでないか。これが重んじすぎられてるのは、これだけが見つけ出すのに容易であり、且つ實驗によつてすらも實證されるからばかりではない。その上に、夢成立のかかる身體的解釋は、今日精神病學を支配してをる思想傾向に一致するからなのである。勿論、腦髓が器官組織を支配することは實に力をこめて說かれてはゐるものの、併し、精神生活が證明のつく器官的變更からは獨立であるとか、又は精神生活の現れのなかに自動性があるとか、さういふことを立證することのできるものがあつたら、それは今日の精神病學者の心膽を驚かしめて、こんなことを承認したらば、自然哲學と形而上學的心靈觀の時代へ逆戻りするよりほかはない、などとも思はせるかもしれんのである。精神病學者のこの不信頼が、精神を謂はば監視付きにしてをる。そして精神の動きのいかなるものも、自分に特有な或る能力を暴露してはならんと要求する。併しながら、かかる態度は、身體的方面と精神的方面との間に擴まつてをる因果の結びの確實性に對して、僅少の信頼をしか抱いてゐないことを、示すにほかならない。探求してみると、精神的のものは或る現象の根元的原因であることがわかるとしても、更にもう一層深く押し進むならば、その道の續きは、精神的なものゝ器官組織的說明へまでも通じてをること

を、いつか見出すことができるであらう。ところで吾々の只今の認識にとつては、その精神的なものが、最後の限界點を意味するよりほかはないのであるかもしれないが、それであるからというて、この事は否定される必要はない。

第四節　何故吾々は覺醒後に夢を忘れるか？

夢は朝になると「消えてしまふ」、といふのが諺のやうになつてをる。無論夢は記憶に堪へるものである。なぜならば夢を知つてをるのは、覺醒後に於けるそれの記憶に依るのみであるから。とは言へ、吾々は非常に屢々、夜中にはもつと澤山のことがあつたのだのに、それをほんの不完全にしか記憶してはゐない、と思ふことがある。まだ朝のうちは潑溂としてゐた夢の記憶が、晝の間に段々消えて行き、遂には僅少な滓しか殘らないことも、吾々は觀察することができる。自分で夢を見たことは知つてをるが、併し何の夢を見たのであつたかは、わからないことが、屢々ある。それで吾々は、夢は忘却に支配されてをるものだ、といふ經驗には、非常に慣れてしまつてをるから、夜中に夢を見たかもしれない人が、朝になつてその夢の內容についても、夢みたといふ事實についても、何事も知らないでをる、さういふ可能性を、不合理なこととして、排斥もせ

ずにゐるのである。その他面に於いては、かういふことも起る。卽ち、夢が記憶の中にあつて異常なる保持性を示すことが。私は私の患者について、二十五年以上も以前に起つた彼等の夢を分析してみたことがあるし、私自身も、今日から少くとも三十七年間も距つてゐて、而かも記憶の中に於ける新鮮さを少しも失つてはゐない、一つの夢を思ひ起すことができる。これ等凡ては非常に注目を惹くことであり、そして先づ合點のゆかぬことである。

夢の忘却については、シトリュムペルが最も詳しく取扱つてる。この忘却は明かに一種の複合的現象である。と言ふのは、シトリュムペルはこれを或る唯だ一つの原因には歸しないで、多くの原因の一群に歸してをるからである。

先づ夢の忘却にとつては、覺醒生活中に於いて忘却を惹起する原因が凡て、働きをなす。吾々は覺醒してをる時でも、無數の感覺や知覺を間もなく忘れるのを常とするが、それは、それ等があまりに弱すぎてゐたからであり、それ等に結びついた精神昂奮があまりに低い程度にしか持たなかつたからである。多くの夢影像を考へてみるに、それは同じことである。それ等はあまりに弱かつた故に忘れられるが、より強い夢は、鄰接であるために、記憶される。併し夢影像の保存にとつては、確かにかかる强度といふ點そのものばかりが決定的ではない。シトリュムペルや

他の著述家達（カルキンス）も、それが非常に潑溂としてをつたことを知つてゐる夢影像をすぐに忘れることは屢々であるが、他方、記憶に保存されてをる夢にも、ぼんやりとした意味のわかりにくい影像が甚だ多くあることを、認めてをる。次には、吾々が覺醒中に忘却し易いのは、たつた一度しか生じなかつた事柄であつて、繰返して知覺することのできたものは、それに較べると、もつとよく氣に留められるのが普通である。ところが大抵の夢影像は一囘の體驗である。（週期的に起る夢は何度も氣づかれてをる。シャバネエの蒐集を參照せよ。）この特色が、あらゆる夢の忘却を一樣に助長せしめることであらう。その次に、忘却の第三原因は、もつとずつと著しい。感覺や表象や思想や其他が、或る程度の記憶價値を得るためには、それ等が箇々に孤立のままでゐずに、適當な種類の結合と聯關を作ることが必要である。試みに或る小さな詩文を、その一語一語に解きほごし、そしてそれをごちやごちやに搖りまぜてみたまへ。その時にはもとの詩文を心に留めることは甚だ困難となる。「よく整頓せられ、そして要領に適した順序になつてをれば、一語は他の語の助けになり、かくてその全體が記憶の中に十分意味を有して、容易に且つ久しく確立してをる。一般に吾々は矛盾的のものを記憶に留めることが困難であり、且つ稀れであることは、紛糾したもの及び順序無きものがさうであるのと、全く同じである。」さて、大抵の場合、夢には

理解と順序が缺けてをる。夢の構成物は、それ自身に於いて、何も記憶の可能性などは無くともすむものであり、大抵は次の瞬間に於いて早くも分裂するから、忘れられるのである。――ラーデシトック(第一六八頁)が認めたと主張してる事、卽ち吾々は最も特殊な夢をこそ、一番よく記憶に留めるといふ事は、前の論述とは勿論全然には一致するものでない。

シトリュムペルの考へるところでは、夢と覺醒生活との關係から引き出される他の要素が、夢の忘却にとつてなほ一層と效果的なものである。覺醒してる意識にとつて夢が忘れられ易いのは明白にかの先に擧げた事實に對する對蹠にすぎない。卽ち、夢は(殆ど)決して覺醒生活からは順序だつた記憶を取りつぐものではなくして、それから取りつぐのはたた、箇々のもののみであり、この箇々のものが覺醒時に思ひ出される場合に、普通に有してるやうな習慣的な心理的結合からして、これ等を夢がちぎり取る、といふ事實のちようど對蹠である。從つて夢の構成は、精神を滿たしてをる心理的配列の團體の中には、席を有してゐない。夢の構成には一切の記憶の補助が缺けてをる。「かくして夢の形成體は、謂はば、吾々の精神生活の地盤からは離れて、新しく空氣が動くと吹き拂はれる空の雲のやうに、心理的空間のなかに浮動してるのである」(第八七頁)。目が覺ますや否や動き出す感官の世界が、直ちに注意力を取り押さへてしまふから、その勢力の

前には、極めて僅かの夢影像しか、已れを維持することはできない、といふ事情も、前述せると同樣な方向の效果をなしてをる。これ等の夢影像は、太陽の光りの前には星晨の輝きが力を失ふと同じに、新しい晝の印象に對しては、引きさがるのである。

最後に、夢の忘却を促がすものとしては、大抵の人間は、自分の夢に對しては、一般に殆ど興味を寄せてゐないといふ事實が思ひ出される。例へば、或る時期の間研究者として夢に興味を有した人は、その間は其他の時よりも一層多く夢を見るが、これは、その人は自分の夢を一層容易に且つ一層頻繁に思ひ出す、といふことを意味するものである。

ボナテルリが(ベニニの書に述べてあるところに據ると)(シトリュムペルの示した原因に附け加へた夢忘却の他の二つの原因は、既に十分シトリュムペルのそれに含まれてるものである。即ち、(一)睡眠と覺醒の間の一般的感じの變化は、相互の再現にとつて不都合である事、及び(二)夢の中に於いての表象材料の別な配列は、この夢をば覺醒意識にとつては謂はば飜譯し難いものにする事、の二つである。

忘却の原因をかうして凡べて擧げてみた後であつてこそ初めて、シトリュムペル自身指摘してをるやうに、夢のうちのいかにも多くが、それでも記憶の中に保留される事が、本當に注目の價

あるものとなつてくる。夢の記憶を規則に纏めようと著述家達のやり續けて來た骨折は、畢竟、そこにも或物が謎のやうに無解決に留まつてをると、承認するに等しい結果となつてる。近頃夢についての記憶の箇々的特色が、特に注目さるるに至つたのは、當然である。例へば、人は朝には忘れてしまつたと思つてゐる夢を、晝のうちに偶然その――忘れたことになつてる――夢の内容に觸れる何かの知覺が動機となつて、思ひ出すことがある、などいふ特色である(ラーデシトック、ティシエ)。併し夢の總體的記憶は、一つの抗議を免れない。この抗議は、この記憶の價値を批判的に眺める場合に、まことに著しく低下せしむるに適してをるもので、卽ち吾々はかう疑ふことができるのだ、夢からあれほど澤山のものを脫落させるやうな記憶であるならば、その記憶が受けたものを果して僞造することはないであらうか、と。

夢の再現の確實性に對するかやうな疑惑を、シトリュムペルも口外してをる。「さうなると、覺醒意識が夢の記憶の中へ、知らず識らずにではあるが、色々な事を附け足すことは、ほんたうにわけなく行はれるので、吾々は過去の夢が含んでゐない萬般の事柄をも、自分で夢みたことがあると想像するのである。」

イェッセン(第五四七頁)は特に判然と意見を述べてをる。

「その外には併し、聯絡的でそして一貫してをる夢の吟味と判斷に際しては、次のやうな、從來殆ど顧みられなかつたと思はれる事情を、大に考察のなかへ入れるべきである、卽ち、吾々は見た夢を記憶の中へ呼び戻す時に、自分では氣もつかず、又はしようとも欲せずに、夢影像の缺陷部を充實させ且つ補足するものだから、それで、それについての眞實の硏究が、いつも涉らないのであるといふ事情である。或る聯絡的な夢が、吾々の記憶のなかでさう思はれるやうに、それほど聯絡を保つてゐたものであることなどは、稀れであり、恐らくは決してない。いかに眞實を愛する人であつても、見た著しい夢を少しの附加もなく、又少しの裝飾もなく物語るなどは、殆どなし得ない。一切をその聯絡に於いて眺めようとする人間精神の努力は、非常に大きいのであるために、若干聯絡的でない夢の記憶の時には、この精神がその聯絡の缺點を、知らず識らず補足するのである。」

エジャーの下の如き申分は、このイェッセンの言葉のまるで飜譯のやうではあるが、併し確かに獨立的に彼に湧いた考へである。「――夢の觀察には特殊の困難があるもので、かかる事項について誤謬を避けんとするには、感じたこと、認めたことを、少しの遲延もなく、記載するよりほかない。さもなければ、或ひは全體的の、或は部分的の忘却がすぐに起つて來る。全部的忘却は重

要ではない。併し部分的忘却は人を誤るものである。なぜならば、忘れてゐないところを其後に述べようとすれば、記憶が提供する不統一で聯絡を缺いた澤山の斷片を、想像によつて補塡しなければならない……。話をする人は、知らず識らず、藝術家となり、週期的に繰返すその話を眞實なものと思ひこむやうになつて、それを、立派な方法に從つて正しく確定された眞正の事實として、眞面目に提出するのである……。」

シピッタ(第三三八頁)も全く似たことを考へてをる。彼はかう認定してゐるやうである。夢を再現してみようとする試みの時には、大抵先づ吾々は、聯想で結ばれてはゐても、その相互の關係が粗放である夢要素の中へ秩序をつけることをする——「竝存を轉じて繼續、分類を作り、從つて夢には缺けてをる論理的結合の手續きを附け足す。」

さて、吾々の記憶の忠實に對しては、或る客觀的目度以外のものを持つてをらず、そしてこの客觀的目度なるものは、吾々自身の體驗であり、且つそれに對する源泉としてはただ記憶しかわかつてゐない夢を考ふる揚合には、あり得ないのであるとすれば、夢についての吾々の記憶にはなほ如何なる價値がそのほかに殘つてゐるであらうか?

第五節　夢の心理學的特異性

夢の學問的觀察に於いて吾々は、夢は吾々自身の精神活動の成果であるといふ認定から出發するのであるが、その出來上つた夢は、吾々には或る無關係的のものに思はれ、それを作つた張本人が自分自身であると告白する氣は殆ど起らず、「私は夢を見た」と言ふのと同じに、「私の夢に出たのだ」と言ひたがるほどである。夢のかやうな「精神的疎遠性」は何から生ずるものであるか？　夢の源泉に關する吾々の究明に從つてよければ、吾々は當然かう考へねばならない。かの疎遠性は夢の內容へ入り込む材料によつて制約されてはゐない、と。この事は、實にその大部分まで、夢生活にも、覺醒生活にも、共通である。この印象を喚起するものは、果して夢中の精神的經過の變更ではなからうか、といふ疑問を出すことができるし、かくして夢の心理學的特質を調べてみることができる。

夢と覺醒生活との本質相異を、フェヒネルが彼の精神物理學各論（第五二〇頁）の中の二三の記事に於いてなしたよりも、もつと強く力說し、且つもつと廣汎に亙る推論にまで應用した人は、誰も居ない。彼の意見では、覺醒生活と對立さして夢生活の特色を明かにするには、「意識的精神

生活を主要識域の以下へただ押しこめるだけでも足りないし、」注意力を外界の影響から隔離するといふだけでも足りない。彼は寧ろ、夢の舞臺は覺醒時の表象活動のそれとは別箇のものであるとも推測してをる。「萬一睡眠中に於けるのと、覺醒時に於けるのと、その精神物理的活動の舞臺が同一であらねばならんとするならば、私の考ふるところでは、夢は單に、覺醒時の表象活動の、強度の低い或る程度に止められてゐる、一種の繼續であるかもしれないし、そしてとにかくそれと材料も形式も同じうするものに相違ないかもしれないのだが、併し事實の狀態は全くこれと異るのである。」

フェヒネルが精神活動の一種をかやうな轉移を以て考へてゐたものが、その後明瞭とはなつてゐない。その上私の知る限りでは、彼以外の誰一人も、彼があの記事のなかに足跡を示してくれたその道をそれ以上に辿つてみた人はゐない。生理學的腦髓分布の意味に於いて、又は腦髓外皮の組織學的分類と關係させるとしてすらも、ここに何か解剖學的判斷を持ち出すことなどは、勿論論外の沙汰とされるであらう。が併し恐らくこの考へは、若しもこれを、次々にと繼ぎ合はされた多くの階次から築きあげられてをるやうな、或る精神的器官へ關係させるならば、いつかは意義深く且つ結果多い考へであることが、證據立てられるであらう。

他の著述家達は、夢生活特異性のうち、摑みうるやうな心理學的のそれを、あれこれと取りあげて、それを更にもつと先へ進む解說の試みのための、謂はば出發點とするだけで、滿足してをる。

夢生活の主要特色の一つは、既に眠りこむ時の狀態に現れ、睡眠の發端的現象と名づけるべきだと言はれてるのは、尤もなことである。シュライエルマッヘル（第三五一頁）に據ると、覺醒狀態の特質は、思考活動が概念を以て行はれ、形象を以ては行はれないことである。ところで、夢は主として形象を以て思考する。そして睡眠に近づくに從ひ、欲せられた活動が難儀になると同じ割合で、欲せられもしなかつた表象が現れ出し、その表象は、凡て影像の部類に屬するものであることを、吾々は觀察し得る。吾々が故意に欲したものと感じる、さういふ表象の仕事はできない事と、そしてその放心狀態と定まりきつて結びついてをる形象の現出と、この二つが、夢に固着してをり、夢の心理學的分析に於いてこれを夢生活の本質的特質なりと認めざるを得ないところの特質である。その形象——催眠狀態的錯覺——については吾々は、それこそは、內容からすると、夢影像と同一なものであることを、既に前に知つてをる。（ジルベレルは面白い實例によつて、睡氣を催してをる狀態に於いては、抽象的な思想ですらがいかに直觀的で造型的な形象に變化し、そして

それが同一のものを表現するつもりのであるかを示してをる。ブロイレル・フロイド年報、第一卷。一九〇九年。私はこの事實の檢證を他の聯絡に於いて後に試みるであらう。）

さういふ次第で、夢は主として視覺的な影像を以て思考するのであるが、併し必ずさうばかりではない。夢は聽覺的影像を以ても仕事をなし、且つもつと低い程度に於いてゞはあるが、他の感官の印象を以ても仕事をする。その上また、夢の中で、多くのことが單獨に思考され乃至は表象されるのは（多分それは言語表象の殘りによつて代表されるのであらうが）、普通の覺醒時に於いてと、全く同じである。とは言ひ併し、夢にとつて特質的なのは、形象のやうな事情の要素、卽ち記憶表象によつてよりは知覺によつて類似してる內容要素のみである。精神病學者には熟知されてをる錯覺の本質に關する一切の論爭を無視するならば、專門に精通せる凡べての著述家達と共に、吾々はかう言ひ切ることができる。卽ち、夢は錯覺するのである、夢は思想の代りに錯覺を以てするのである、と。この點では、視覺的表象と聽覺的表象との間に、何の區別も存してをらない。眠り込む時に聞いた曲調についての記憶は、睡眠へ深く落込む際に同じ音律の錯覺に變形するが、やがて我に返る際に、これは屢々居睡りの狀態と交替することもあるが、その際に再び、前よりは音低い、そして質的にも別になつてしまつてをる、それの記憶表象に對して席を

譲るものである、といふ事が氣づかれてをる。

表象が錯覺に變化するといふことだけが、夢とそれから夢に稍ゝ相當する覺醒時思想との間の唯一の差異ではない。夢は錯覺影像からして或る境地を構成する。夢は或るものを現在的のものとして描き出すので、シピッタ(第一四五頁)の言ひ現すところでは、夢は或る理念を戲曲化するのである。併し、夢生活の此の方面の特質は、吾々が次の事を附け足してみる時、初めて完全となる。卽ち、吾々は夢を見る場合に――これは普通一般のことを言ふので、若しその例外があつたら、それは特別に解說をせねばならない――思考するとは考へず、實際にやつてゐるのだと思ひ込んでをり、從つて錯覺をば十分な信用を以て取りあげる、といふことを附け足して考へるのである。何も實際にやりはしなかつた、ただ特有的な形式で思考したのだ。――つまり、夢を見たのだ――といふやうな批判は、やつと覺醒した時になつて生ずる。この特質が純粹の睡眠夢と白日の夢想とを區別してをる。白日の夢は決して現實ととり違ひられることはない。

ブルダハ(第四七六頁)は、夢生活の從來注目された特質を、次の箇條に總括してをる。「夢の本質的な特徵に屬するものは、(一)吾々の精神の主觀的な活動は客觀的に見えるが、それは知覺能力が空想の產物を、恰かも感覺的感動ででもあるかのやうに、受けとるからである事、(二)睡眠

は自主獨力性の排棄である事、である。であるから眠り込むのには、或る種の受動性が必要である。……假睡的影像は自主獨力性の弛緩を條件とする。」

さて、ここで問題の中心となるのは、或る程度の自主獨力的活動が休止した後に、漸く現れることのできる夢錯覺に對して、精神が抱く信用の性質を、解說すべき試みである。この際に於ける精神の態度は正確であり、且つその機制に適應するものであると、シトリュムペルは論じてをる。夢の諸要素は決して單なる表象ではなく、覺醒時ならば感官の媒介によつて現れるやうな、眞實性がありそして現實的なる精神の體驗である（第三四頁）。覺醒時には精神は語の形象と言葉を以て表象もし、思考もするのに對して、夢の中にあつては現實的な感覺形象を以て表象もし、思考もする（第三五頁）。その上に、夢では空間意識が加はる。それは、覺醒時と同じに、感覺と形象は或る外部的空間へ移動されるためである（第三六頁）。從つて、精神は自分の持つ形象や知覺に對しては、夢の中でも、覺醒時に於けると同一の狀態にあるものである事を、吾々は承認せざるを得ない（第四三頁）。それにも拘らず、若しもこの際に精神が迷ひ惑ふことあるとせば、それは睡眠狀態にあつては、精神にとつて標準が缺けるから起るのであつて、この標準のみが、外部から與へられた感官知覺と內部からのそれとの間に、區別を立てることができる。精神はその

影像をば、それの客觀的現實性をこれひとりのみが證據立ててみせるやうな吟味にかけて、みることはできないことになる。その外に、精神は恣ままに取り換へうる影像と、さういふ放恣といふことのない影像との間の區別を、閑却することもある。精神は自分の夢の內容に對して因果の法則を使用することができないから、迷ふのである(第五八頁)。要するに、外部世界から隔絕するといふ點に、精神が主觀的な夢の世界を信用することの原因も亦、含まれてをる。

デルベフの心理學展開も、部分的には離反するところもあるが同じ結論に到達してをる。吾々は睡眠中には比較すべき何等の他の印象を持たないから、外界から切り離されてをるから、夢影像に對して現實の信用を置く。けれど吟味をやつてみる可能性が睡眠中の吾々からは奪はれてをる、といふやうなことのために、吾々の錯覺の眞實を信ずるのではない。夢はいかにもそんな吟味は凡べてやつてるぞ、と見せかけることができる。例へば、眼に見てる薔薇の花を手で觸つてみる、といふやうなことも見せ得るのであるが、而もその時でも、吾々は夢を見てるのである。デルベフに據ると、或る事が夢であるか、それとも覺醒時の現實であるか、それを定めるには、覺醒の事實――そしてこれもただ實際的な一般の意味で言ふのにすぎないが――より以外には、何等の不拔確固たる標準は存在しない。「若し眼を覺まして、自分が着物を脫いで、自分の寢床に

寢てるんだとわかるんならば、就眠と覺醒との間に體驗されたことは、凡べてこれ幻影なりと私は宣言する（第八四頁）。「覺醒してをる間は夢の影像を眞實だと考へてをつたが、それは、私が私の自我をこれと對立せしめる外界を知覺せんとする思考習慣までは眠り込ませられるべくもない結果なのである。」

（損傷されてない精神器官は普通正確な機能をなすものであるのに、それに對して變則的に或る條件を加へると、必ずその結果として變化が生ぜねばならない。この變化に基いて夢活動を解說しようとするデルベフと似た試みを、ハフネルも企ててみたが、併し彼はこの條件を、少しばかり別な言葉で、記述してをる。彼に據ると、夢の第一の特徵は場所性と時間性の缺如である、卽ち、表象が場所上及び時間上の順序に於いてその個人に歸屬する地位から解放されてをることである。夢の第二の根本的特質はこの第一のと結びついてをる。それは、錯覺や想像や空想的結合やを外部的知覺と取り違ひる點である。一方では比較的高級な精神の力、殊に概念の構成、判斷、及び推論等の精神力の全體が、そして他方では自由な自己決定が、各々、感官的空想影像へ結びついてをり、常にこれを基礎としてをるのであるから、これ等の力の働きも亦、夢表象の不規則性に對し關係を共にしてをるのである。それ等も關係に加はる、と吾々は言ふが、それは吾々の判斷力並びに吾々の意力は、それ自體としては、睡眠中にも決して變るところがないからである。吾々は働きの點から言へば、

覺醒狀態に於けると全く同じに、洞察力もあり又同じに自由である。人間は夢の中に於いても、思考法則そのものに牴觸することはできない。卽ち、自分と正反對なものとして現出するものを同一なりとする、等のことはできない。人間は夢の中に於いても、これは善いことであると、自分で表象することしか、欲することはできない(「善いことの批判の下に」sub ratione boni)。然るに、思考と意欲の法則をかく使用する時に夢の中の人間の精神が惑亂させられるのは、或る表象を他の表象と取り違へるためである。吾々が一面に於いては最も洞察的な判斷を作り、最も徹底的な推論を行ひ、最も德義的で且つ神聖な決心をなすこともできるのに夢の中で吾々は實に大きな矛盾撞着を敢て冒すことあるのは、そこから生ずる。吾々の空想は夢の中で實に飛翔する。あの飛翔の全祕密は、その方向決定を缺いてゐることである。そして批判的反省並びに他に對する理解の不足といふことは、夢中に於ける吾々の判斷、並びに吾々の期待や願望の節度無き沒常識性の、主要原因である。」第一八頁)。

かやうに外界からの離反といふ事を、夢生活の最も目につく特質表示に對する決定的な要點であると、强調することになれば、老ブルダハの精彩なる記事若干をば、ここに引用してみるのも甲斐のあるものである。これ等の記事は、睡眠中の精神と外界との關係を明かにし、そして上述の如き結論をあまりに重んじすぎることを引き留めんとするもののやうに思はれる。彼の言ふ

ところでは、「睡眠は、精神が感官の覺醒によつては昂奮せしめられない、といふ條件の下に於いてだけ、起る。併し感官の覺醒の缺乏といふよりは、寧ろそれに對する關心の缺乏の方が、睡眠の條件である。感官的印象でも、それが精神の落ちつきに役立つ限りに於いては、必要でさへあるものもある。例へば水車屋は水車のがたがたと動くのを聞いてをる時だけ眠るものであるし、用心のため寢室に燈火を點けて置く必要があると考へてる人があつたら、暗闇の中では寢込むことができない、といふぐあひである」(第四五七頁)。

「精神は睡眠中外界に對して孤立する、そして環境から……退いてをる、……併し聯絡が全然には中斷されてるのでない。假りに、睡眠そのものの中にあつて、聞いたり感じたりしてるのではなくて、漸く覺醒後に聞き、且つ感ずるのであるとしたならば、目を覺まされるといふことは、大體ありえないことだらう。感應のかういふ繼續を尙一層證據立てる事實は、吾々は必ずしも或る印象の純感官的强度によつては目覺めさせられず、却つてその印象の心理的關係のため目覺めさせられるのであることだ。無關心的な一語が睡眠者を目覺めさすことはない。併し若しその人の名を呼んだら、その人は目を覺ます。……これを以てみると、精神は睡眠中にも感應の間に區別を立ててをる。……であるからこそ、吾々は若し感官の覺醒が表象にとつて重要な事柄に關係

してゐるものだつたら、その感官覺醒が缺けてゐるがためにも、目覺めさせられることはあり得る。例へば、寢室の燈光が消えたために目を覺まし、水車屋は水車が停止すると目を覺ます、卽ち感官活動の休止のために、目を覺ますのである。この事實は、この感官活動が知覺されてをつた、併し無關心的なものとして、或ひは又寧ろ滿足を與へるものとして、精神を妨害はしてゐなかつた事實を前提としてをる」（第四六〇頁以下）。

假令これ等低くは評價すべからざる抗議を度外視しようとしたところで、それでも吾々は、今まで尊重せられ、そして外界からの離反を土臺として考へ出された夢生活の特色だけでは、この夢生活なるものの特異性をば、十分には說明しつくす力あるものでないことを、承認せざるを得ない。なぜならば、もつと別の場合には、夢の錯覺を變更してもとの表象へ、夢の心境を變更してもとの思想へ、還元して、そしてそれで夢判斷の問題を解決することが可能であるに相違ないだらうからである。ところで、吾々が覺醒後に於いて記憶から夢を再製する場合には、卽ちさういふ處置をやつてをるのであつて、この逆飜譯が全部成功するとしても、又は部分的にしか成功しないとしても、依然として夢はその謎的性質を、減ずることもなく、保有してるのである。

著述家達はまた、全部躊躇するところなく、次の事實を認定してをる。卽ち、夢の中では、覺

醒時の表象材料に對するもつと別な、そしてもつと一層深刻な變更が起つてるのである、と。そのうちの一人、シトリュムペル（第一七頁）は次の探求を以て、これを摑み出さうと力めた。「感官的に働いてる直觀と正規的な生活意識とが働きを停止するに從つて、精神は己れの感情や慾望や興味や動作やの根柢となつてるものを、失ふことになる。覺醒時には記憶形象に固着してをるかの精神的狀態、感情、興味、評價、といふやうなものが、それを模糊たらしめる或る壓迫に……調伏せられ、その結果それ等と形象との結合はほどける。覺醒生活の事柄や人物や場所や出來事や動作の知覺形象は、ばら／＼に、併し非常に多數に、再現はされるが、それ等のどれ一つでも、その心理的價値を携へては來ない。それ等の形象からはこの心理的價値が分離されてしまつてるので、精神の中にあつて自分自分の事情に從つて浮動してをる……。」形象がその心理的價値をかやうに脫離するのは、また外界からの離反に還元せらるるものですらもあるが、シトリュムペルに據ると、これは、夢が記憶の中で實生活に較べて與へてをる異質性の印象をなすのに、大に關係を有するものださうである。

既に、睡眠に入りかける時に精神活動のうちの一つ、卽ち表象推移の隨意的な指導に對しては、おのづと棄權が行はれてをるのであることは、吾々は前に聞いてしまつた。かうなると、さうで

なくとも考へ易いことなんだか、睡眠状態はいろ〳〵な精神作用の上へも擴まるではあるまいか、といふ推測が湧きのぼつてくる。これ等の作用のうち、どれどれかは殆ど全くといつてもいいほど、排棄される。それで今度は、後に殘りつつある作用は果してその後も亂されずに働らきつづけて行くことができるか、それ等はかかる環境にあつて果して正規的な仕事をなすことができるか、それが問題となる。夢の特色を說明するのには、睡眠狀態に於けるさういふ心理的仕事の低下を以てすることができるかもしれん、といふ見方が現れて來る。ところで、夢が吾々の覺醒時の判斷に對して與へる印象は、かういふ解釋には都合がよい。夢は聯絡を持たない。躊躇もせずに實にひどい矛盾をも併合し、不可能な事柄を默認し、日中に於いては、勢力ある吾々の知力を取りのけてしまひ、倫理的にも道德的にも鈍感なる吾々の姿を見せる。若し覺醒して居つて夢の境遇の中でのやうな、振舞をする人があつたら、吾々はその人を狂人と思ふであらう。夢の內容に出てくるやうな事柄を語らうとしたり、そんな話し方をする人があつたら、その人は精神錯亂者か白痴の印象を與へることだらう。それであるから、假りに吾々は夢の中の心理的活動を非常に低く評價し、そして殊に、高級な知的仕事は夢の中では排棄されてをる、或ひは少なくともひどく傷害されてをると解釋するとすれば、それはただこの事實を言ひ現すものであると考へる。

異常な一致を以て——そのうちの例外については別の箇所で論ずるであらう——著述家達は、それに從つて行くと直ちに夢生活の或る一定的な理論乃至は解説へと到達するやうな、さういふ判斷を、夢について下してゐる。今や、ちようど述べた概要を——哲學者や醫學者なる——種々の著述家達の夢の心理學的特質に關する言葉を一箇所に集めて、補充してよい時となつた。

ルモアンに據ると、夢影像の錯亂が夢の唯一に本質的な特質である。

モーリがこれに贊成してゐる。彼は言ふ（「睡眠と夢」、第一六三頁）。「全然合理的で、何等の不統一も、時代錯誤も、虛妄も含んでをらない夢などは、あるものではない。」

シピッタが引用してゐるヘーゲルの言葉に據ると、夢には凡ゆる客觀的悟性的聯絡が缺けてゐる。

デュガは言ふ。「夢は、心靈上の、感情上の、並びに知能上の無政府狀態である。自由に放任されて統制も目的もなく働く諸々の機能の作用である。夢の中では、精神は精神的自動人形である。」

「覺醒時には、中樞的自我の論理的な威力によつて綜合せられてゐる表象生活が、弛緩し、解ごれ、そして入れ混じることを、」フォルケルトすら承認してゐる（第一四頁）。この人の學說に從へば、睡眠中の心理的活動は決して無目的には考へられない。

夢の中に現れる表象結合の荒唐無稽さを鋭く非難したる點に於いて、昔のキケロに超ゆる者は、殆どあるまい。(「神託について。第二」)「夢に現るるものの如く不合理にして根柢なく奇怪なるものは、想起し能はざるところなり。」

フェヒネル(第五二二頁)は言ふ。その有樣は、心理學活動が恰かも分別ある人の腦髓を離れて愚人のそれの中へ移動してしまうかの如くである、と。

ラーデシトック(第一四五頁)。「この無法な動き方のうちに、確固たる法則を認識する如きは、實際不可能だと思はれる。覺醒的表象經過を指導してる理性的意志と、それから注意力の嚴格な警察の手を拔け出して、夢は無法無茶な戲れをしながら、一切をば、萬華鏡を見るやうに、ごちやごちやに掻きまぜる。」

ヒルデブラント(第四五頁)。「夢みてる者は、例へばその悟性的推論などに於いて、何といふ奇妙な一足飛びを敢てすることであらう! 最も有名な經驗的法則が正にその逆さ立ちをしてをつても、彼は何と平氣で眺めてることであらう! 世間でも言ふ通り、その有樣がとてもひどすぎて、我慢がならなくなり、その馬鹿さ加減の餘りには、遂ひに眼が覺めるその以前には、自然界及び社會の統制に於ける笑ふに堪へた矛盾撞着をも、彼はなんと我慢してることができること

だらう！　吾々は時として全く罪のない掛け算をすることがある。三かける三が二十になる。犬が何か詩の文句を述べたつて、死人が自分の足で墓場へ歩いて行つたつて、岩石が水上に浮んでゐたつて、それが寸毫も妖しくはないのである。吾々は大眞面目で、何か高等な委託を受けて、ベルンブルク公國へ出かけることもあり、その國の海軍を視察にリーヒテンシタイン公の領國へ出かけることもあるかと思へば、プルタワ戰役の少し前にカール第十二世の志願兵徵集に應募することもある。」

かかる印象の結果として生ずる夢の理論を指摘しながら、ビンツ（第三三頁）は言ふ。「十の夢のうち、少なくとも九つは、荒唐無稽な内容のものである。これ等の夢に於いて吾々は、互ひに寸毫の關係をも持つてゐない人物や事柄を結び合はせる。既にその次の瞬間には、ちようど萬華鏡の中のやうに、その結合體はもつと別になつてるが、若しかすると、それは、その以前のよりも、更に一層馬鹿らしく、無茶なものであることもある。かやうにして不完全な睡眠時腦髓の交替的な戲れが續いて行き、最後に吾々は眼を覺まし、額に手をやつて、そして一體吾々は實際にまだ理性的な理解力と思考力を所有してるんだらうか、どうかと、自分で自分に訊いてみるのである。」

モーリ(「睡眠と夢」、第五〇頁)は、覺醒時の思想に對する夢影像の關係について、醫師にとつて甚だ印象深い比較を見出してをる。「覺醒した人のうちに多くの場合意志によつて作り出されるそれ等の影像の、知力に對する關係は、舞踏病や諸種の痲痺性疾患から起る種々の運動の、運動能力に對する關係と、相應するものである……。」とにかく彼にとつては夢は、「思惟推理の能力の全系列の低下である。」

モーリのこの說を、高級な精神作業の個々の場合に對して反復する著述家達の意見を、ここに引用することは、殆どその必要があるまい。

シトリュムペル(第二六頁)に據ると、夢の中では——勿論かの不條理が目立たぬ場合であつても——精神の論理的な、そして比較や關係に基く作業は全部が、減退する。又、シピッタ(第一四八頁)に據れば、夢の中では表象は因果法則から脫離してをるやうである。ラーデシトックや其他の人々は、夢では判斷や推論が特に微弱であることを力說してをる。ヨドル(第一二三頁)の言ふところでは、夢には全意識の內容による知覺列の何等の批判も、何等の修正も存してゐない。彼は言ふ、「意識活動の凡ゆる種類が夢の中に現はれはするが、併し不完全に、妨害せられ、相互に孤立してである。」夢が吾々の覺醒時知力に對して示す矛盾を、シトリッケル(第九八頁)は(な

ほ他の多くの學者と共に)、夢の中では事實が忘れられてをるとか、又は表象間の論理的關係は失はれてをるとか、等々のことから、解說してをる。

夢に於ける精神的作業に關して一般にこれほど不利益な判斷を下してをる著述家達によつても、精神活動の或る程度の殘物が、なほ夢に保存されてることは、承認されて居る。ヴントの學說は夢問題の多くの他の硏究者達にとつて基本的となつてをるが、このヴントが明白にこれを認めてるのである。してみれば或ひは、常規的な精神活動のうち、夢の中に現れるその殘物の種類と性質を、問題にすることはできるかもしれない。ところで、かなり一般的に承認せられてるところでは、假令夢の荒唐無稽性の一部分は、正にこの夢生活の忘却性によつて說明されるべき筈であるにも拘らず、再現能力、記憶力は夢の中で害を受けてをることが一番少いと思はれる、のみならず、前にも既に說いたやうに、覺醒時の同じ働きに較べて、或る程度の優越性をさへ示すことができるのである。シピッタに據ると、睡眠によつて襲はれず、從つて、夢を支配するものは、精神の情緖生活である。「情緖とは人間の最も內心的な主觀的本質としての感情の恒久的包括である」と彼は定義して居る(第八四頁)。

ショルツ(第三七頁)は、夢の材料に加へられる「解釋の比喩的變更」を以て、夢に出てくる精神

活動の一つなりと見做した。ジーベック（第一一頁）は、夢の中にも精神の「補足的解釋の働き」あることを斷定してるが、この働きは精神が、一切の知覺と直觀に向つて、行ふところのものである。夢にとつての特別な難關をなすのは、これが最高の精神的な機能であると想定されてをるもの、卽ち意識の判斷を行ふことに關してをる。吾々が夢について何事かを知つてをるのは、ただ意識を通じてのみであるから、この意識の保存に對しては、何等の疑問もあり得ない。然るにシピッタの意見では、夢にはただ意識ならば保存されてるが、自我意識となれば、もはや存在しない。デルベフはこの區別は理解し得ないと、告白してをる。

聯想の法則によつて表象は互ひに結び合はさるものであるが、この聯想法則は夢影像に對しても亦、通用する。のみならず、この法則の支配は、夢の中で一層純粹に、且つ一層強く現れる。シトリュムペル（第七〇頁）、「夢の經過は無飾的表象の法則にのみ從ふやうに見えるか、又はその無飾的表象を伴ふ器官的刺戟の法則に從ふか、どつちかであり、言ひ換へると、この經過に於いては、反省と悟性、審美的趣味と道義的判斷は、何事をもなす力はない。」私がここにその見解を複製しつつある著述家達は、夢の形成をほほ次のやうに想像してをるのである。他の箇所で引用して置いたやうな種々雜多な源泉から來て、睡眠中に働きかける感應刺戟の總計が、精神に先

づ多数の表象を喚び起し、それが錯覺となつて見える（ヴントに據ると、それは外部及び内部の覺醒から起因するもの故、幻影といふ方がより正當である）。これが有名な聯想法則に從つて互ひの間で結合し、そして同じ規則に從つてそれ等がそれ等で新しい一列の表象（影像）を呼び起す。その時にこの全材料は、今なほ働く力ある整理的及び思考的精神能力の殘餘によつて、やれる限りは、加工されるのである（例へばヴント、ワィガントなど參考せよ）。それで今では、外部には基いてゐない影像の生起が聯想法則のうち、これか又はあれか、どれによつて、行はれるかに對して決定を與へる動機を洞察することが、まだ成功してゐないだけである。

然るに夢表象を互ひに結び合はせる聯想は、全然特別な種類のものであり、覺醒時の思考に於いて働いてるそれとは異つてをる事が、いく度も指摘されてをる。例へば、フォルケルト（第一五頁）の言ふところでは、「夢の中では、表象は互ひに偶然的な類似や、殆ど知覺し得られぬ關係によつて、互ひに追ひかけては、捕へ合つてる。一切の夢は、かういふ粗漏な、强制のない聯想を以て貫ぬかれてをる。」モーリは表象結合のかかる特質に最大の價値を置き、この特質によつて夢生活を或る種の精神錯亂に對し、かなり密接な類似あるものと、見做してをる。彼は精神錯亂の二つの主要特質を認める。（一）は、自發的にして、謂はば自動的なる精神活動。（二）は、不完

全且つ不規則なる觀念結合。(「睡眠と夢」、第一二六頁)。語が單に同じ音であるために、いくつかの夢表象が結合されるに至つた、次の素的な夢の二實例は、モーリ自身の見たものであつた。一度は彼はこんな夢を見た。彼はジェルサレムかメッカへ向つて、巡禮旅行(ペルリナージ)を企て、やがて數多の冒險の後に、化學者ペルティーの許に居つた。この人が話のあとで、一本の亞鉛製のショベル(pelle)を彼にくれた。このショベルがそのつづきの夢の斷片の一つの中で、彼の大きな軍刀となつた(第一三七頁)。もう一度はこんな夢であつた。彼は田舍の街道を歩きながら、哩程標に書いてあるキロメーターを讀んでみた。その後で彼は或る香料商人のところに居た。この商人は大きな衡器を持つてゐて、誰かがモーリの目方を量るために、その衡器の皿へキロ分銅を置いた。その後でこの商人は彼にかう言つた。「あなたはパリに居るんぢやない。ここはギロロ島ですよ。」それにつづいて、なほ五つ六つの影像があつたが、その中で、彼はロベリア花を見るかと思ふと、次にはロペ將軍を見たりした。この將軍の死去を彼は少し前に報導で讀んでをつた。最後にロットオ遊びを一番やつてをるところで、目が覺めた。初めの文字が同じだつたり、發音が似てゐたりする語に充ちてる夢の意味については、後節に於いて會得するところあるであらう。

吾々は併し次の事を覺悟してをる。卽ち、夢の精神的作業をかやうに低く評價するのに對して

は、別方面からして反對が來ずにはゐないといふことだ。なるほど、ここでは反對はむづかしいやうに見えることは見える。夢生活の輕蔑者の一人（シピッタ、第一一八頁）が覺醒時に支配すると同一の心理學的法則が、夢をも統御してゐると斷言するとしても、或ひは叉、もう一人（デュガ）が「夢は不合理ではなく、また全然沒理的でもない」と言ふにしても、この兩人ともがかかる評價をば、彼等が記述してしまつた夢に於ける一切の機能の精神的無政府及び解體と調和させようと骨を折らない限りは、それは大した意味ある主張ではない。併し他の人々には、次の可能性がぼんやりと現れ出してをるやうに思はれる。夢の亂心は恐らく方法の無いものではないのであるまいか、それは今ここに引用された洞察に充ちた判斷の引きあひにされてゐるデンマルクの王子ハムレットの亂心のやうに、單に外見の假裝にすぎないのではないか、といふ可能性である。これ等の人々は、外見によつて判斷することを避けたのに相違ないか、でなければ、夢が彼等に見せた外見は別のものであるからであつたのだ。

例へばハーヴェロック・エリスは、夢の荒唐無稽性にいつまでも引きかかることをせず、夢を以て、「空漠たる情と不完全なる思想の一個古代的な世界」であり、これが研究は吾々に精神生活の原始的發展階級を學び知らせてくれるかもしれないものである、と言つた。ジェー・スリー（第三

六二頁）は夢についてのこれと同一の解釋を、これよりなほ一層廣汎に亙り、一層深く立ち入りつつ、代表してをる。彼は、恐らくどの心理學者にも見ざるほどに、夢の蔽匿された有意味性を確信してをる人であることを、合せ考へるならば、彼の述べた意見はいよ〳〵注目に價するものである。「さて吾々の夢はこれ等の繼起的人格を保存する一手段である。睡眠してゐる時には、吾吾は物を眺めそれについて感ずる昔の方法へ歸るのである。久しい以前に吾々を支配してゐたことのあつた衝動と活動へ歸るのである。」デルベフの如き思想家がかう主張してをる――勿論それと牴觸する材料に對して反證を行ふことはしない。であるから本當を言へば不道理であるが――「睡眠中に於いても、知覺を除いて、知能、想像、記憶、意志、德性など、精神の凡ゆる能力は、本質的には完全なままでをる。併しただ想像的な遊動的な對象に適用されるだけである。夢みる者は、狂者や賢人、殺害者や被害者、侏儒や巨人、惡魔や天使を、隨意に演ずる俳優に等しい。」（第二二二頁）。夢に於ける精神的作業を蔑視することに對して最も猛烈に異論を唱へたのは、デルヴェー侯爵であるらしい。モーリはこの人の說を盛んに辨駁してをるが、私は隨分骨を折つてみたに拘らず、デルヴェーの原著を手に入れることはできなかつた。モーリは彼についてかう言つてをる。（「睡眠と夢」、第一九頁）。「デルヴェー侯爵は、睡眠中にも知能はその活動及び注意

の自由を全然有するもののやうに考へ、感覺の閉塞、外界に對する感覺の遮斷の中にのみ、睡眠は存在するものとしてゐるらしい。斯くて、その見解に從へば、眠つてゐる者は、感覺を塞ぎながら思考をめぐらす者と、殆ど區別がない。そこで睡眠者の思考と平時の思考とを距てる差異はただ、睡眠者にあつてはその觀念が、可見的な客觀的な形を取つて、外部の對象によつて決定される感じに紛らはしいほど、よく似寄つてゐる、といふことだけである。回想は現存の外觀を裝ふのである。」併しモーリは附け加へて言ふ。「なほもう一つのそして重大な差異がある。卽ち、睡眠者の知的諸能力は、覺醒者に於いてそれ等が保つてゐるやうな均衡を示さない」と。

（ヴァシドはデルヴェーの著者について次のやうな意見を言つてることがわかる。「夢の中の影像は、觀念の模寫である。主體は觀念であつて、幻像は附隨物に過ぎない。このことを確認した上で、觀念の動きを跡づける術を知らなければいけないし夢の組織を分解する術も知らなければいけない。しかする時、その錯雜さも理解し得べきものとなり。最も奇異な想念も單純な、全く論理的な事柄となる。」（第一四六頁）。また、第一四七頁には、「最も奇怪な夢と雖も、それを分解し得さへすれば、極めて論理的な說明が見出される。」）

（シテルッケが第一三六頁に於いて注意を喚ぶところによると、夢錯亂のこれと似たやうな排斥は、ウォルフ・デギッドソンなる古い著述家によつて、一七九九年に、次のやうに辯護されてをるとのことだが、この人のことを私は知らない。「夢に於ける吾々の表象の奇妙な跳躍は、聯想の法則にその一切の根據を有するものだ。ただ、この結合は時として精神内に甚だ曖昧に起るので、なんにもそんなものが存してはゐないのに、表象の跳躍が觀察されるなどと、思ふことが屢々あるだけだ。」）

精神的產物としての夢の評價の度合ひは、文獻に於いて、大きな範圍に亙つてをる。下は、吾吾が既に學び知つた最も甚しい輕蔑の表現から始まり、まだ暴露されない或る價値の豫想をその中段として、夢を覺醒生活の作業の遙か以上に置く過當なる尊重にまで達してる。吾々が知る通り、夢生活の心理學的特質記述法を三つの對立に纏めてみたヒルデブラント（第一九頁）は、この對立の第三に、上述の評價の群の結着點を總括してをる。「それは、精神生活を一方には或る强調を與へる、屢々巧智とまでも高まることが稀れではないほど一種の力說を試みる、他方には斷乎たる、そして屢々人間性の水準以下へまで精神生活を引き下ろす、微弱視する、この二つの間の對立である。」

「前者について言へば、誰か自家の經驗からして次の事實を確めることをできないものがあらうか？　卽ち、夢の神の働きの中には、時々、情緒の奧深さと衷心的性質、感覺の微妙さ、直觀の明らかさ、觀察の細やかさ、機智の當意卽妙が現れるが、これ等一切は、覺醒生活の常住的な所有物として、自分が持ち合はしてをるところであるなどとは、つつましく否認するであらうやうな、ものばかりである。さういふものが現れることを、誰でも確め得るであらう。夢は驚くべき詩を持つてをり、優れたる比喩を、比類なき諧謔を、立派な皮肉を持つてをる。夢は或る特色的に理想化する光りの中で世界を眺めてる。そしてその世界の現象の效果を、それ等の根柢となつてをる本質の深遠な理解を以て、强調することも、屢々である。夢は吾々の眼前に、浮世の美を眞に神々しい輝やきのうちに現し、壯嚴を最高の權威のうちに見せ、經驗相應の恐しい物を實に戰慄すべき姿を以て現出し、可笑しい物を名狀しがたいほど猛烈なる滑稽を以て示すのである。そして時々覺醒後になほ、吾々はこれ等の印象の何等か一つで滿たされてをるから、現實の世の中では、嘗つて決してこんなものに出會つたことはなかつたやうにも、思はれざるを得ないのである。」

かやうに感激的なる讃美と、それからあの輕蔑的な記述とが、果して同一の對象物に對して通

用するのであらうかと、自ら問うてみたくなるであらう。一方は馬鹿げた夢を見のがしたのでないか？　そして他方は意味の深く細かい夢を見のがしたのでないか？　さうして若しも二通りが、即ち前者のやうな批判に價する夢と、後者のやうな批判に價する夢と、その二通りが現れるとすれば、夢の或る一つの心理學的特質記述を求むる如きは、用もなきことではおるまいか？　夢の中では一切が可能である、精神生活を最も低いところまで引き下ろすことから、それを覺醒生活には見慣れぬまでに强調することまで、一切が可能である、といふので足りるでないか？　かう解決して置けば、樂だ。いかにも便宜ではあるけれども、併しこの解決には、次のやうな反對がある。總べての夢研究者の努力の根柢には、夢にはその本質的な點に於いては、普遍妥當的な特質記述法があつて、それを用ゐれば、あれ等の矛盾を切り拔けることができるに相違ないのだ、といふ前提が存してるやうに思はれるので、この事は以上のやうな解決には反對する。

精密科學でなく、哲學が、思想家を支配してをつた時代、それは今ではもう吾々の背後に横はつてる知的傾向の時代であるが、あの時代には、夢の精神的作業がもつと熱心な、そしてもつと暖かい承認をうけた事は、爭へない。夢は外的自然の暴力から精神の開放である、官能の鎖から心靈の離脱であるといふ、シューベルトが言つたやうな意見や、子フィヒテや其他の人々のそれと

似た判斷、それは全部、夢を以て精神生活の、より一層高い階段への飛躍なりと、述べてをる判斷などは、今日の吾々には殆ど呑み込めないものである。そんなものは、現代では、ただ神祕論者や篤信家達によつて繰返されるのみだ。（この私の著書の古い版に於いて私はさういふ神祕論者などは閑却して置いた。そして今でもその閑却したことを濟まなく思ふやうな神祕論者は少數しか居ない。その少數のうちの一人、警拔なるドゥ・プレルが言ふには、形而上學が人間と關係する限りに於いて、その形而上學へ行く門戸は夢でゐつて、覺醒ではない、と。「神祕の哲學」第五九頁。）自然科學的思考法の進出に伴なつて、夢の尊重にも或る反動が生じて來た。醫學出身の著述家達が、夢に於ける精神的活動を些細なもの、無價値なものと評價する方に、一番傾いて居るが、これに反して哲學者や本職的でない觀察者は――素人心理學者――かういふ人達のこの方面に於ける寄與は、閑却せらるべきではない――普通人の豫感といふやうなものを、專門家よりも、一層よく了解して居つて、大抵は夢の精神的價値を信じつづけて來た。夢に於ける精神的の作業を輕んずる方に傾いてる人は、無論夢の病源學に於いて、身體的刺戟源泉に優先權を與へるが、夢中の精神に對して覺醒時に於ける精神能力の大半をそのまま持ち續けると認めた人ならば、當然いかにしても精神のために、夢みるに至る獨立的な昂奮をも、承認してやらないわけにはいかない。

着實に比較をする場合ですら、ややもすれば、夢生活に歸せられ勝ちな優越的作業のうちで、最も目に立つのは、記憶力のそれである。これを證明する、少しも珍らしくはない、いろいろな經驗を、吾々は既に詳しく取扱つてみた。昔の著述家達によつて再々賞讃されてをる、夢生活のもう一つの特徵、卽ち夢生活は自分勝手に時間や場所の距りを飛び越すことができる、といふ特徵は、一つの幻影であることが、容易に認識される。この特徵は、ヒルデブラントが指摘するやうに、正に幻影的のものである。夢みることが時間と空間を超越するのは、覺醒時の思考と同じことであり、そしてそれは夢みることも、思考することの一形式にすぎないからこそである。時間性に關係していふと、夢は當然なほもう一つの特徵を享有すべきものであり、なほもつと別の意味に於いて時間の推移から獨立であるべき筈である。前に報告したモーリの斷頭臺上の所刑の如き夢は、夢が非常に短かい時刻のなかへ、覺醒時に於ける吾々の精神活動が思考內容を自由自在になし得るよりかも、遙かにより多くの知覺內容を蓄集せしめる力あるものなる事を、證據立ててくれると思はれる。この推論は併しさまざまな議論を以て辯駁されてをる。「夢の外見的持續時間に關する」ル・ロレンとエジャーの諸論文以來、これについて興味ある一論戰が始められたが、その論戰も、この取り扱ひのむづかしくて及ぶところ深刻なる問題に於いては、多分また究

極の闡明にまでは到達してをらない。（この問題の文獻及び批判的討究については、トボウォルスカのパリ大學學位論文、一九〇〇年、參照。）

夢が日中の知的仕事を再び取りあげて、而かも日中の時には到達されなかつた結着のところまで、持つて行く力があること、夢は疑惑や問題を解決し、詩人や作曲家の場合には新しい靈感の源となることもあること、これはいろいろな報告や、ジャバネエがなした蒐集によつてみると、議論のないことに見える。併しその事實は議論のないことだとしても、その事實の解釋は、數多の、原理的な點へも觸れてをる疑惑の下にあるのである。（エッチ・エリス、「夢の世界」、第二六八頁の批評參照。）

最後に、今主張された夢の天啓的力なるものが論爭點となり、そして打ち克ちがたい疑惑が頑强にも斷言を繰り返へしつつ、この論爭點に集合してをる。人々はこの主題に含まれてる一切の事實的事柄を否定するのを避けてをる――そして避けるのが誠に尤もである――なぜならば、多くの場合にとつては、何か自然的心理學的解說の可能性が、恐らくは近く期待し得られるかもしれないからである。

第六節　夢に於ける倫理的感情

覺醒時の道德的素質と感受とが夢生活の中へまで傳播するものであらうか、するとすれば、どれくらゐの範圍に於いてであらうか、といふ部分的問題を、私は夢の心理學の論題のうちから特に別にして置いたが、それにはいくつもの動機がある。併しこれ等の動機は、夢に關する私一流の研究を知つて貰つた後にでなければ、人には理解されがたいものである。さて、この道德的問題に於いてもやはり、他の一切の精神的作業に關してその存在するを認めて奇異の念を抱かざるを得なかつたところの、あの矛盾衝突と同一の矛盾衝突が、著述家達の記述の中に存在して居つて、吾々をばはたと當惑させる。一方の人々は、夢は道義上の要求などについては毫もあづかり知らずと、斷乎として斷言すれば、それに劣らず斷乎たる言葉を以て他方の人々は、人間の道德的天性は夢生活にとつても、依然として維持されてをると言ふ。

日常の夢經驗を參考してみたら、前者の正しいことは、少しも疑ふべきではないやうに思はれるであらう。イェッセン（第五五三頁）はかう言うてをる。「睡眠中に吾々は、別段いつもよりもつと善良に、もつと有德な者になることはない。却つて夢の中では、吾々の良心は沈默してるやう

だ。だつて、吾々は何等の同情を感ぜず、そして最も重い犯罪や盗みや殺人や撲殺を、全然的な無關心を以て、且つ後に後悔を起すこともなくして、行ふこともあるからである。」

ラーデシトック(第一四六頁)。「夢の中で聯想が推移し、表象が結び合はさつても、その際に反省と悟性、審美的趣味と道義的判斷とが、何事かをなす力あることはない。判斷は極度に微弱で、倫理的無頓着が主となつてをる。」

フォルケルト(第二三頁)。「誰でもが知る通り、夢の中では性的關係方面が特に放恣である。夢みてる本人が極端に無恥厚顏となり、凡ゆる道義的感情や判斷を失つてをると同じに、他人もすべて、最も尊敬されてる人物までが、覺醒時だつたらばこれ等の人々とそんな仕事を結びつけて想像することをだに恥ぢるであらうやうな、さういふ仕業の最中にあるを見るのである。」

これ等に對して最も鋭い對立を形づくるものは、各人は夢の中で己れの性格に全く適應して動作し說話するといふ、ショペンハウエルの意見の如きものである。フィッシェルの主張によると、主觀的な感情や努力、又は情念や情慾は、夢生活の放恣の狀態に於いて顯現してくる、人々の道德的特性はその人々の夢の中に反映してをる。

ハッフネル(第二五頁)。「稀れな例外は別として……有德の士は夢にありても有德であるであら

う。彼は誘惑に抗ふであらうし、憎惡や嫉みや憤怒や、凡べての惡業に對して、わが心を閉ぢてをるであらう。然るに罪の男は、その夢の中にあつても、亦覺醒時に於いて心に抱いてをつた影像を見出すのが常であらう。」

ショルツ(第三六頁)。「夢には眞實がある。高貴に又は微賤に假裝をいろいろとするにも拘らず、吾々にはすぐ吾々の自己が識別される。……着實な男は、夢の中でも、決して名譽を傷けるやうな犯罪をなすことはできない。或ひは、どうしても罪を犯さねばならぬ場合があつたりすれば、彼はそれと知つて、恰かも自分の性質にとつては無關係なことを知つた時のやうに、驚愕するのである。臣下の一人が皇帝の首を叩き切らした夢を見たことがあつたといふので、その男を刑に處したローマ皇帝は、その辯解として、こんな夢を見る奴は、目覺めてる時でも、同じやうな考へを抱いてるに相違ないと言つたが、それは不道理なことでなかつた。だから吾々の內心に何等の場所を持つことのできないやうな事柄については、吾々が、そんなことは夢にも思はんことだと言ふのは、穿つた言ひ方でもあるのだ。」

これとは反對にプラトンの意見に據れば、他人ならば覺醒しつつ爲すことが、ただ夢にだけ現れるやうな人が、最も善き人である。

パッフは或る著名な諺を言ひ換へて、直裁にかう言つてをる。「しばらくあなたの夢をお話してみなさい。さうすると、私はあなたの内心がどんな狀態なのか、言つてあげる。」

私が既に澤山そのなかから引用して來た、そして私が文獻のうちに見出したなかで、一番形式の完成した、一番思想の豐富な夢問題研究參考書であるヒルデブラントの小册子は、正に夢に於ける道義性の問題をこそ、その興味の中心點に置いてゐる。ヒルデブラントにとつても、次の事實は確立的な規定である。實生活が純潔であればあるほど、夢はいよいよ純潔である。前者が不純であればあるほど、後者は不純である。

人間の道義的性質は夢の中にも依然として存してる。「なるほど夢の中では、いかにもわかりきつた計算の間違ひをしたり、知識をいかにも奇怪に曲げかへてみたり、いかにも滑稽じみた時代錯誤をやつたりしても、すこしも心持ちが害されず、又は自分が怪しく思はれることさへもないのではあるが、それでも善惡、正不正、德と罪との間の區別は、決して失はれることはない。まどろんでる時間には、日中に抱いてをるもののうちの、いかにも多くが後退するかもしれない——が、カントの無上命令は、離るることなき隨伴者として、吾々の踵に固着してをつて睡眠中たりとも、吾々はこれを脫却することはない……。ところで、この事實は、ただ次のことによつ

てのみ、説明がつくのである。卽ち、人性の基本、かの道義的本質は、非常に堅固な仕組みであるために、これのみは萬華鏡的な攪亂の作用に對してあづかり關係しない。空想や悟性や記憶や其他それと同じ階級の能力は、夢の中でこの作用の自由となるのに反して」(第四五頁以下)。さて、この論題を更に議論して行くうちに、兩群の著述家達の間に、著しい狂ひと不徹底が現れてゐる。嚴密に解すれば、夢の中では人間の道義的人格は崩壞すると考へる一派にとつては、その解釋と共に不道德的な夢に對する興味は終りとなるべきであらう。夢に對してその夢みる人に責任を取らせる、夢が惡いからその人の天性にも惡い心の動きがあるのだと推論する、さういふ試みを安んじて否定することができると共に、夢の荒唐無稽性からして、その人の覺醒時に於ける知的作業の無價値を證據立てようとする、一見するところでは、今の試みと同等價値に思はれる試みをも、同じく安んじて否定することができるであらう。又、「無上命令」が夢中にも及んでゐるとする別派の人々だつたら、不道德な夢に對する責任を無條件に承認すべきであらう。さうなると、彼等に望ましいことは、そんな非難すべき夢を彼等自身が見たために、彼等自身の道義性をいままで固く信じ貴んでゐたのが、ぐらつき出して來ざるを得なくなることなんかなければいい、といふことばかりである。

ところで、誰だつて自分がどれほど善良であるか、どれほど邪悪であるか、それをほんたうに的確に、自分で知つてをることはないやうだし、又、誰だつて自分が不道德な夢をみた記憶を否定することはできないやうだ。そこで、兩群の著述家達の間にも、夢道德の批判に於ける上述の如き衝突を超越して、不德義な夢の來因を明らかにしようとする骨折が現れ、かくて又、その起源を精神生活の機能のなかに求めるか、それとも精神生活に對する身體的條件の影響のなかに求めるかするに從つて、別の新しい對立が展開される。かうなると、事實といふものの力に餘儀なくされて、夢生活責任論者も無責任論者も、夢の無道德性に對する或る特殊なる源泉を承認する點に於いては、遂に一致することになる。

德義を夢の中にも持續せしめる一派の人々でも皆、自分の夢に對して完全な責任を取ることはしないやうに用心する。ハッフネル（第二四頁）は言ふ。「吾々は夢に對しては責任がない。何故ならば、吾々の思考と意欲からその基礎が取りはづされてをり、そしてこの基礎あつてこそ、吾々の生活は眞實であり、現實であるのだからである……。であるからこそ又、いかなる夢中意欲もいかなる夢中行動も、德又は罪ではあり得ない。」とは言へ、人間は間接にそれの原因を作つたといふ限りに於いては、罪惡的夢に對して責任がある。人間には覺醒時に於いてと同じく、就眠前

には全然特別に己れの精神を德義的に淨めるべき義務が生じる。
夢の德義的內容に對する責任の拒否及び承認の、かうした混合の分析が、ヒルデブラントに於いては、ずつと深いところまで行つてをる。夢の戲曲的な現れ方、最も複雜した熟考經過が、僅に微少な時間のうちへ凝集されること、及び彼も承認してをるやうな、夢の中では表象要素が價値を失ひ且つ混合し合ふこと、これ等の點が、夢の不德義な外見を考へる場合に、割引の中へ入れられねばならぬことを詳述した後で、彼が告白するところでは、夢の罪惡と罪過に對して一切の責任を、そのまま否定するは、大いに躊躇すべきことである。
「吾々が何か或る不當な非難、殊にそれが吾々の意圖や思慮に關係するやうな非難であると、それをきつぱりと擊退せんとする時には、恐らくかの或句を用ゐるであらう。そんなことは吾々の夢にも思ひつかないことだつた、と。これを以て勿論吾々は、一面には次のことを言ひ現すのである。吾々は、夢の領分を、吾々の思想に對して、自分で保證をしなければならん領分中の、最もはづれで且つ最後の領分である、と考へてをる。何故ならば、其處では、吾々の思想は吾々の實際の本質に對して、いかにも疎遠な聯絡をしか有しないために、そんな思想は殆ど吾々のものとは見做されないでもいい、といふことを言ひ現すのである。更に、正にかういふ領分に於いて

のことであるから、そんな思想の存在をも、明白に否定すべき理由があると感じながらも、それでもこれと同時に、吾々は間接には、吾々のその辯明は、若しそこのところまでも達しないものだつたら、不完全なものだらうといふことをも、承認するのである。それで私は、この場合の吾吾の言ひ方は、假令無意識のものではあつても、眞理の言葉だ、と信ずる。」（第四九頁）。
「その最初の動機が、いかやうにか、願望として、慾情として、感動として、前以て、覺醒時の精神を通過してゐなかつたやうな、さういふ夢中行爲は考へられない」（第五二頁）。この最初の感動については、吾々はかう言はざるを得ない、夢がそれを工風したのではない――夢はそれを模造して、そしてそれを敷衍したにすぎない。吾々の心に既にあり合はしてゐた歴史的材料の小部分を、戯曲的形式で、加工したにすぎない。夢は、その兄弟を憎む者は殺人者なり、といふ使徒の文句を舞臺にかけたのである。そして目覺めた後に、自分の德義的强みを意識して、罪惡的な夢の大規模に作られた全形を考へ、微笑することがあるにしても、仰々のもとの形成材料そのものからは、さやうな笑ふべき點は、取り出さうとしても、少しも取り出されないのである。吾吾は、その夢を見た人の迷ひに對して、責任がある氣がする。勿論その全部に對してではないが、併し或る比率程度に對しては責任がある氣がする。「要するに、若し吾々がこの辯駁しがたい意味

のなかに、基督が言へる、邪しまなる考へは心より來る、といふ語を理解するとするならば――その時には、夢の中で犯された凡ゆる罪は、罪過の、少なくとも或る不明瞭なる最小限度を、自ら含有してをるといふ確信を、拒むことは殆どできないのである。」

これを以てみると、ヒルデブラントは、夢の無道德性に對する源泉を、日中に吾々の精神を誘惑的考へとして通過する惡しき感動の萠芽と暗示の中に、見出してゐるのである。そして彼は人格の德義的評價に際して、これ等の無道德的要素を計算の中に入れることを憚らない。これは、吾が知る通り、凡ゆる時代の篤信者と聖者をして、われ等は邪しまなる罪人なり、と嘆ぜしめたると同じ考へであり、又その考への同じ評價である。(かの神聖な宗教裁判が吾々の問題に對していかなる態度を取つてをつたかを知るのも、興味ないことではない。一六五九年、リヨン出版、トマス・カレニァの「神聖宗教裁判所の刑罰について、Tractatus de Officio sanctissimae Inquisitionis」に次の一節がある。「若し誰かが夢の中で背教的言辭を弄することあれば、宗教裁判官はこれを理由として、その人の生活態度を吟味せねばならぬ。それは、日中に心を勞したることは、睡眠中に再び現ろるを常とするが故にである。」)

以上のやうな對照的表象が一般に現れることについては――大多數の人間に於いて、又倫理的方面以外にも――確かに何等の疑ひが存しない。併しその表象の批判には、時として眞面目さの

少ないことがあつた。シピッタ(第一四四頁)の本を見ると、ア・ツェッレルの次のやうなこの部類に屬する言說(エルシュ及びグルーベル共編、學術一般百科辭典の「迷妄」の節)が引用されてをる。「或る精神がいつ いかなる時でも十分な力を有し、啻に本質的でないばかりでなく、全く歪んでそして不合理な表象が、この精神の思想の不變的で明晰な步みを、必ずしも中絕することはないやうな、そんな結構な工合に、組織されてゐることは、稀れである。實に、偉大なる思想家でも、かういふ夢に似た、愚弄的なそして厄介な無賴漢的表象が、彼等の深奧な觀察と最も神聖にして最も眞面目な思考作業を亂すことがあるので、それを痛嘆してをる。」

ヒルデブラント(第五五頁)は更にかう言うてをる。夢は吾々をして、吾々の本質の深い奧底を覗かしてくれるもので、この奧底は覺醒の狀態にあつては、吾々にとつて、大抵は閉鎖されたままでゐる、と。この指摘からして、上述の對照的思想の心理學的地位に對し更に一層明るい光りが落ちてくる。カントがその著「人類學」の一節に於いて、夢は恐らく吾々に匿れた素質を發見させ、そして吾々が現在あるところのものでなく、若し吾々がもつと別な敎育を受けたのであつたならば、さういふものとなつたでもあらうかもしれないものを、吾々に啓示するために存在するものであらう、といふ意見を述べてゐるのは、彼もヒルデブラントと同じ認識を持つてゐた事を暴

露するものである。ラーデシトック（第八四頁）が次の如く言へるも亦同じ。夢は屢々吾々が自分で承認したくないことだけを啓示する、それ故に吾々は夢を嘘吐き、欺僞師などと非難するが、それは不當である、と。エルドマンはかう言つた。「誰か或る人間について、どう考へたらよいか、その事を夢が啓示したことは、嘗つて一度もなかつた。併し自分がその人間についてどう考へてるか、及びその人間に關してはどんな心持ちでゐるか、その事なら、私は或る夢によつて既に二三度も學び知つて、自分で非常に吃驚してゐるのである。」それからフィヒテも似たやうな意見である。「吾々の夢の性質は吾々の氣持ち全體にとつて、吾々が覺醒時の自己觀察によつてこれを知るよりも、常に遙かに忠實なる鏡である。」覺醒時には缺けてをるか、或ひは些細な役目を演じてるやうな他の表象材料を、夢が自由に驅使することは、既に前述して承知してをるところであるが、吾々の德義的意識とは無關係な上述の衝動の出現は、その自由なる材料驅使と類似のものである事について、ベニニやフォルケルトの指摘を通じて吾々は注意を喚起される。ベニニ（第一四九頁）。「自ら窒息して死んでしまつた、こなごなに消費されてしまつたと考へられてをる、さういふ吾々の性僻が、復活してくる。古い、そして埋沒されてしまつてをつた情熱が生き返つてくる。吾々が決して考へても居らぬ事物や人物が、吾々の眼前へ出てへる。」

フォルケルト(第一〇五頁)。「覺醒意識の中へ入りこんでしまつたが殆ど注目されてをらず、恐らく決して二度と覺醒意識によつてその忘却から拾ひ出されることはあるまいやうな表象でも、夢に對しては、己れが精神の中に存在することを知らせるのが、普通に甚だ屡々である。」最後にここに思ひ起さるるのは、シュライエルマッヘルに據ると、既に眠り込む時が、欲せられもしなかつた表象(影像)の出現を伴ふといふ事である。

さてこの「欲せられなかつた表象」としては、不道徳的な夢、並びに荒唐無稽な夢に現れて、吾々に怪訝の念を起さしむる表象材料全部を總括することができる。一つの重大な相異はただ、德義的方面の欲せられなかつた表象は、吾々の其他の感じに對して、正反對を認識せしめるのに他の表象は吾々には單に異種的に思はれるのみであるといふ點に存する。この相異性を、もつと深いところまで行く認識によつて、無くなしてしまふことを可能ならしめるため、一歩を進めることは、從來まだ行はれてゐない。

ところで、夢にかかる欲せられなかつた表象の出現するのは、いかなる意味を有するであらうか? 對照的な倫理的感動がかく夜中に浮び出ることからして、覺醒時及び夢みてる時の精神の心理學にとつて、いかなる推論が導き出されるであらうか? ここにまたもや、意見の新しい相

異、著述家達の更にまた相異的な分類が記録されるのである。ヒルデブラントや、彼の根本見解を代表する他の人達の思考の歩みを續けるには、恐らく次のやうな方向に於いてするよりほかはあり得まい。不道德的感動に對しては、覺醒時にあつても、或る種の力が內在してをり、而もその力は、行爲となるまでに進出することを妨げられてをる。そして睡眠中になると、一箇の障害として働いて、これ等の感動の存在を氣づかしめるのを邪魔してゐた、或物がなくなる。從つて夢は、人間の假令全部的ではないが、現實的な本質を示し、蔽匿されてをる精神內部をば、吾々の知識の手に入らしめ得る手段の一つである。かういふ前提があればこそ、ヒルデブラントは夢を以て一箇の警告者の役目をなすものとなした。この警告者は、吾々の精神の蔽匿された德義的被害に注目せしめると共に、醫師達の承認するところに據ると、その時まで氣づかれずに居た身體の疾患をも意識せしめることができるのである。又、シピッタの如きも、正にこの解釋によつて導かれて、例へば思春期に心裏へ流れ込んで來るいろいろな感動の源泉を指示し、そして惡夢を見る人を慰めて言ふには、若し君が覺醒時に嚴格に道德的な品行を保ち、罪惡的な考へが出てくる度にそれを抑壓し、それをして成熟せしめず、行爲とならしめないやうに骨折るならば、君はそれで君の力で及ぶだけの萬事をやつてしまつたので、それ以上は、もう君の力の及ばぬとこ

ろだ、と。この解釋に從ふと、吾々は「欲せられなかつた」表象を、晝の間は「抑壓されてゐた」表象と呼ぶこともできるであらうし、又これの出現を以て、一箇の純心理的現象と見做さなければならないであらう。

他の著述家達に從ふと、吾々はかかる結論をなすべき謂はれがない。イェッセンにとつては、夢並びに覺醒時に於ける、及び熱病や其他の病氣の譫語に於ける、欲せられなかつた表象は、「休息せしめられてをる意志活動力と、內部的動搖のために生じた影像及び表象の、謂はば機械的な經過の性質を示すものである」（第三六〇頁）。或る不道德な夢は、それを見る人の精神生活にとつて、この人がその當面的な表象內容について、いかやうにかして、或る時、一度、知るところがあつた、といふことより以上、何事をも證しするものではない。その夢は乃ち、確かに、この人に特有な精神感動ではないのである。もう一人の著述家、モーリについてみるに、果してこの著述家は、夢の狀態に對して、精神的活動を無計畫的に破壞することをせずして、これをその成分によつて分解する能力を承認し與へてをるのか、ゐないのか、疑はしくなるかもしれない。彼は道德性の制限を飛び越える夢について次のやうに言つてをる。「吾々の性癖こそ、吾々をそそのかして行動させるのであつて、吾々は時として良心に勸告されることもあるが、それに引止められ

はしない。私も缺點を有し、不德な性癖を有してゐる。眼覺めてる狀態の時には、私は努めてそれ等と鬪ひ、打ち負かされないこともかなり屢々ある。併し夢の中では、私はいつも打ち負かされる、或ひはなほよく言へば、その衝動のままに懸念も悔恨もなく行動する……。明らかに、私の思考の前方に展開する幻像、そして夢を形成する幻像は、私が實際感じてゐて而かも意志が不在なために卻けらるることのない慫慂によつて、暗示されたものである。(「睡眠と夢」、第一一三頁)。

若し夢みる人の現實に存するけれども、併し若壓せられるか、又は押し匿くされるかしてをる不道德的氣質を露出せしむる夢の能力を信ずるならば、この意見をもつと强く言ひ現はすには、モーリ自身の言葉によるのがよいであらう。(第一一五頁)「夢の中で人は、生れながらの赤裸かな淺ましい自分の姿をそつくりと自分に見せつけられる。覺醒の狀態では、良心や名譽心や懸念などによつて、諸々の情慾を防ぐけれども、意志の働きを止めるや、それ等のものの玩具となつてしまふ。」(第一一五頁)。もつと別の節では彼は適切な文句を述べてをる(第四六二頁)。「夢の中では、殊に本能的な姿が現れてくる……。人は夢みる時、謂はば自然の狀態に戻る。そして習得した諸觀念が精神の中に浸入すること少なければ少ないほど、それ等の觀念と背馳する諸

性癖はなほ、夢の中に於いて、一層多くの勢力を振ひ續ける。」その次に彼は實例として、彼のいくつかの夢は、彼自身をば、彼が自分の著述の中で一番烈しく攻撃したかの迷信そのものの犧牲者として、現すことが稀れでない、と述べてをる。

ところがモーリに於いては、夢生活の心理學的認識にとつて有するこれ等凡べての烱眼なる觀察の價値は、次の事情によつて影響を蒙らされてをる。卽ち、彼は、彼がいかにも正しく觀察した諸現象を以て、心理的自動組織（オートマティスム・プシコロギク）に對する證據に外ならずと見做さんとし、そしてこの自動組織は、彼に從へば、夢生活を統御してるものである。彼はこの自動組織をば、心理的活動の正反對と、解釋してをる。

シトリッケルの「意識に關する研究」の一節に曰く、「夢は唯一無二に幻影からばかり成立するものではない。例へば、夢の中で盜賊に對して恐怖するとせば、なるほどその盜賊は空想的であるが、併し恐怖は現實である。」さうなると、吾々は次の事實に注意を與へられたわけであつて、卽ち夢の中の情緖の進展は、その夢以外の夢內容に對して、吾々が與へる批判を許さないのである。かくて吾々の眼前には、次の問題が持ち出される。夢の中の心理的經過のうち、いかなるものが現實であるだらうか、と言ふのは、いかなるものが、覺醒時の心理的經過へ編入されるやう

に、要求をなし得るのであらうか？

第七節　夢の學說と夢の機能

夢に就いて觀察された特質のできるだけ多くを或る一つの立脚點から解說せんと試みると同時に、一層包括的な現象範圍に對する夢の地位を決定する陳述を、吾々は夢の學說と呼んでいいであらう。さういふ個々の學說が互ひに相異を來すであらう點は、それが夢の特質のうち、これ若しくばあれを、特に本質的なるものとなして、解說と關係をそれに結びつけることに存する。夢の或る機能、といふのは、夢の或る功益、若しくば何かそれ以外の成果であるが、これは必ずしも學說から導き出し得るものでなければならんといふことはないのであらうけれども、それでも習慣的に目的論へ傾き勝ちである吾々の期待は、夢の或る機能への洞察を具備してをるやうな學說の方を、歡迎することであらう。

この意味に於いて、多かれ少なかれ夢の學說なる名稱を慣する數多の見解を、既に吾々は學び知つた。夢は神々が、人間の行動を導くために遣したお告げであるといふ古代人の信仰は、夢に關して承知してをく價値ある一切に就いて、敎示を垂れた一個の完全な說であつた。夢が生物學

的研究の對象となつて以來、かなり多數の夢學を見るが、そのなかにはまた、本當に不安全な學說も多くある。
剩すところなく數へあげることはできないと諦めるにしても、夢に於ける心理的活動の程度と性質に關して基礎づけをなしてる假定に應じ、それ等夢學說の、ほぼ次のやうな疎漏な分類を試みることはできる。
（一）覺醒時の十分な精神的活動は夢の中へも繼續される、とする學說であつて、例へば、デルベフの說の如きもの。夢の中で精神は眠らない。精神の器官は損傷されずに居る。併し覺醒時とは異つたところの、ある睡眠狀態の諸條件の下に置かれる故に、精神は正規的な機能をなしながらも、覺醒時に於けるとは別個の結果を出さざるを得ない。これ等の學說に對しては、次のことが問題となる。果してこの說は、夢と覺醒思考との相異を、全部睡眠狀態の條件から引き出すことができるであらうか、どうであらうか？　その上、これ等の學說には、夢の或る機能へ到達せしむべき道が、缺けてをる。何のために人は夢をみるか、何故に精神器官の複雜なる機制は、さういふ狀態のために出來てをるとは思はれないやうな狀態の中へ移された場合であつても、なほ働き續けるのであるか、それを洞察することができない。夢なしに眠るか、でなければ、妨害的

な刺戟が現れるや否や目覺めるか、この二つが唯一に合目的な反動であつて、第三の反動、卽ち夢を見る反動はないといふことになる。

(二)第一とは反對に、夢に對して精神的活動の低下、聯絡の弛緩、利用し得る材料の貧弱化を假定する學說がある。この學說に從ふと、睡眠の心理學的特質記述は、例へばデルベフなどに從ふのとは、全く別になされねばならないやうである。睡眠は精神の上に廣く行き渡り、精神を外界から隔離せしむるばかりでなく、寧ろ精神の機制の中へまで押し入り、この機制を一時の間用ふべからざるものたらしめる。若しここに精神病學的材料との比較を引き出してみてもいいならば、私はかう言ひたい。第一の學說は夢を精神錯亂（パラノイア）の如くに構成せしめるし、第二に擧げた學說は夢を白痴又は老耄（アメンティア）の模型たらしめるものである、と。

夢生活では、睡眠のために麻痺された精神活動の一斷片だけが現れる、といふ說は、醫學出身の著述家の間に、及び專門的社會一般にありて、遙かに優先權を與へられてるものである。夢の解說に對して、より一般的な興味が、前提される限りに於いては、この學說を以て夢の優勢な學說なりといふことができる。この學說こそは、凡ゆる夢學說の實に厭やな暗礁、卽ち夢によつて具體化された相對の何か一つのため坐礁することを、何と易々と囘避してをるか、といふ點が特

に擧げるべきである。この學說にとつては、夢は或る部分的覺醒の結果であるから（ヘルバルトの「心理學」には夢について、「徐々的にして、一部分的にしてそして同時に甚だ變則的なる覺醒の一種と言うてをる）、この學說は、益々擴がつて行く覺醒作業から、十分なる覺醒に至るまでの、一列の狀態を以て、荒唐無稽性によつて暴露される夢の劣等成績から、十分に集中された思考作業に至る、全系列を淸算することができるのである。

生理學的描寫を是非必要とするか、又はその方が一層學問的なりと思ふ人は、ビンツ（第四三頁）の敍述の中に夢のこの學說が明白に言ひ現されてるのを見出すであらう。「この（痲痺の）狀態は、併し早朝の時刻に徐々として、その終りに近づいて行く。腦蛋白質の中に集積された疲勞の材料は、益々減少し、その益々多くが分解せられるか、又は休みなく働いてをる血液の流れによつて洗ひ去られるかする。周圍は凡べてまだ無感覺のままで休んでるのに、そこここで、早くも個々の細胞群が目覺めて輝き出す。今や吾々の朦朧たる意識の前へ、個々のいいいいいいの孤立的な勞働が現れて來るが、聯想作用を司どる腦髓の他の部分の統制は、併しまだこの勞働には缺けてをる。そのために、大抵は近い過去の具體的印象に相應してる影像が作られても、それが亂雜に統制なしに互ひに組み合はさる。自由を得る腦細胞の數が益々大きくなると、夢の

不合理は益々少なくなる。」

夢みるのを或る不完全にして一部分的なる覺醒なりとする解釋、又は、それの影響の痕跡は、確かに凡ゆる近代生理學者及び哲學者の間に見出されるであらう。この解釋は、モーリに於いて最も詳細に記述されてをる。モーリの記述を讀むと、屢々かう思はれることもある。彼は覺醒狀態又は就眠狀態を、解剖學的區城に應じて、移動し得るものと想像してをるかのやうである。とにかく、彼には解剖學上の一區域と精神の一定機能とは、相互に結び合はされてをるものと、考へられてをる。併し私はここではただ、若しも萬一、部分的覺醒の學說が實證されるにしても、その說の精緻なる組織に關しては、なほ論議せらるべき甚だ多くのことがあるであらう、といふことを暗示するに止めて置きたい。

夢生活の如上の解釋では、夢の或る機能が明らかにされることは、もとよりあり得ない。夢の位地と意義についての判斷は、寧ろ次のやうなビンッの言葉によつて徹底的に示されてをる。「吾吾が觀察する一切の事實の歸するところは、夢の特質を以て、凡べての場合に無益にして、多くの場合に正に病的でさへある、一個の身體的經過である言はんとするにある……」(第三五七頁)。

夢に關聯して「身體的」といふ言葉を、この著者自身は特に强調してをるが、この言葉は、恐らく

一つ以上の方向に於いて、指示するところがあるものだ。先づこの言葉は、夢の起源學に關係する。ビンツが毒藥を施すことによつて夢を實驗的に作り出すことを研究した際には、勿論この起源學に特別の關心を持つてゐた。といふのも、夢を生ずる刺戟をば、できるならば、唯だ專ら身體的方面からだけ發生せしめんとするのは、この種の夢學說の仕組のうちに存してることなのである。最も極端な形式で書いてみたら、かうもなるであらう。刺戟を遠ざけることによつて睡眠の狀態に移つてしまつた後に於いては、夢を見るのに何の必要も、又、何の動機もなくして朝に至るが、その時に徐々たる覺醒が、新しく寄せてくる刺戟のために、夢みるといふ現象となつて、反映することもあるかもしれない、といふことになるのであらう。ところが、睡眠を刺戟なしに保つことは旨くいかない。メフィストフェレスが生命の萠芽について歎じたと同じやうに、凡ゆる方面から睡眠者のところへ刺戟がやつてくる。外からも、內からも、覺醒時には決してそのために考へを拂つたこともなかつたやうな身體の凡ゆる部分からさへ、やつてくる。かくて睡眠は亂される。精神は或る時はここの端、或る時にはそこの端を捉まれ、ゆすぶられては、呼び起される。そして暫くの間は、その呼び起された部分で働きをするが、また愉快に眠り込んでしまう。夢は刺戟によつて惹き起された睡眠妨害に對する反作用であるが、併し一個の全く餘計な反作用

である。

それにしても、夢はやはり、精神器官の一作業である。これをしも身體的經過と呼ぶのには、更にもう一つの意味がある。卽ちかく呼ぶことで、夢から精神的經過たる威嚴を剝奪しようとするのである。夢に對して甚だ古くから用ひられてをる比喩で「音樂には全く知識のない人間の十本の指が樂器の鍵盤の上を走るに似たり」といふのがあるが、恐らくこの比喩は、夢の仕事が精神科學の代表者達の間に於いて大抵の場合いかなる評價を得てをるかを、最もよく顯然たらしめるであらう。夢は、この解釋では、徹頭徹尾判斷しがたきものとなる。何故ならば、音樂を知らぬ演奏者の十本の指が、どうして何等かの音樂を生み出しうるわけがあらうか？

部分的覺醒說に對しては、既に早くから攻擊がなくはなかつた。千八百三十年にブルダハは次の意見を述べてをる。「若し夢を部分的覺醒なりと言ふならば、それを以ては第一に、覺醒の說明にも、睡眠の說明にもならない。第二にはこれは、精神の若干の力が、他の力が休息してをるのに、夢の中で働いてをるといふにほかならない。然るにかかる不均齊は生活全部に於いて起るところである。……」（第四八三頁）。

夢を以て一個の「身體的なる」經過と見做すところの、有力なる夢學說に追隨する。非常に興

味ある一解釋がある。これは一八六六年に初めてローベルトによつて言ひ出されて、夢みることに對して或る機能、或る有益なる效果を認めてやることのできるものであるから、人を惹きつけるところがある。ローベルトは、彼の理論の根柢として、二つの觀察的事實を用ひてゐる。この二つの事實は、既に吾々が夢材料の評價を論ずる時に、考へてみたことがあつた。卽ち、人は、日中の第二義的な印象の夢を見るのが屢々である事と、日中の大きな關心事を夢の中へも入れるのは稀れである事である。ローベルトが絕對に確かな事として主張するところでは、人が十分に考へつくした事柄は、決して夢の動因とはならないで、夢の動因となるのはただ、人の考への中に未決定で存してゐる事柄、又は人の精神にかりそめに觸れるやうな事柄のみである。——「過ぎ去つた日中の感官印象のうち、夢みる當人の十分なる認識にまで到達しなかつた印象こそ、夢の原因なのであるから、それで人は大抵の場合、夢の解說をすることができないのである。」してみると、或る印象が夢の中へ這入るための條件は、その印象が消化されるのを邪魔されてゐたか、又は餘りにも無意義的なものであつて、その消化を要求するほどのものではなかつたか、そのいづれかである。

ローベルトには、夢は「精神的反應現象となつて認識せられる一個の身體的排泄作業である」

と考へられてをる。夢は萠芽のうちに窒息してしまつた思想の排泄である。「夢みる能力を奪はれた人間があつたら、その人間は或る時間の間精神錯亂するに相違ない。何故ならば、彼の腦髓の中には未完成の、十分に吟味されてゐない思想と、皮相な印象の無數が蓄積せられ、その重壓の下に、完成的總體として記憶に合體せらるべきものが、窒息せざるを得ないからである。」過重の荷を背負うた腦髓に對して夢は一箇の安全辨の役を務める。夢は治療的輕減的力を有してをる。(第三二頁)。

若しローベルトに向つて、夢の中に表出するために精神の輕減が惹起され得るのは、一體いかなる次第であるか、などと質問を出すならば、それは誤解といふものであらう。この著者が、夢材料のかの二つの特色からして結論するのは、明らかにただ次の事である。睡眠中に無價値な印象がかく放出するのは、所詮身體的作業として行はれるのであつて、夢みるは何等特別な精神的經過ではない、唯だ單にかの排泄が行はれたことを示すところの知らせにすぎない。兎に角排泄が夜中に精神内に起る唯一の事柄ではない。ローベルト自身附け加へて言ふところでは、その上に、日中の刺戟が推敲せられ、そして「推敲しつくされないままで、精神の中に存する思想材料から分離されないものは、空想から借りて來た思考の糸によつて結合されて一箇の纏りあるもの

となり、かくして無害な空想的影像として記憶の列に加へられる」(第二三頁)。

ところが、ローベルトの學說は、夢の源の批判についてはかの優勢なる學說に對して、峻烈なる反對をなすものである。外部的及び內部的感應刺戟が精神を喚び起すことなき場合にあつては、大體夢は生じないと思はれさうだのに、ローベルトの說に從へば、夢みることに對する衝動は、精神そのものの中にある、輕減を求めてゐる精神の過重な負擔に存する。そしてローベルトは、實に徹底的に、次の判斷を下してゐるのである。身體的狀況に存してゐて、夢の條件となるやうな原因は、或る從屬的な場所を領するものであつて、夢形成のために覺醒意識から取り出した材料などが、一つもそこに存在しないと思はれる精神だつたらば、それを動かして夢みるに至らしめることは、決してできない。ただ次の事は承認してもいい、卽ち、夢中に精神の奧底から展開される空想影像は、神經刺戟によつて影響を受けることはある、と(第四八頁)。それでローベルトに據ると、夢は身體的方面によつて、さほど全然的に左右されてゐるものではない、夢はなるほど何等精神的な經過ではなく、覺醒時の精神的經過の間に何等の地位を持つものではないが、併し精神活動の器官に因る夜間の身體的經過であり、この器官を過度の緊張がないやうに保護する、別の比喩を以て言ふとすれば、精神の汚穢を掃除する、といふ機能を、實行せねばなら

んのである。

夢材料の選擇に際して明瞭となる夢の上述せると同一な特質を支柱として、もう一人の著述家、イヴ・ドラーヂュが自身の學説を立ててをるが、同一事柄の解釋に於いても、微かな轉向のために、全く別な範圍の結果が擧げられるのを、ここに觀察し得るのは、研究にとつて有益である。ドラーヂュは自分の大切な人を死によつて失つた後に、自分で經驗したのであるが、人は終日心を勞したことについては夢を見ない。見るとすれば、それが日中には他の關心事に道を讓りだした頃になつて、初めてその夢を見る。他の人々について調べてみても、この事情が一般的であることが確められた。ドラーヂュが若い夫婦の夢についてなしてゐる指摘は、若しこれが一般にも正しいこととわかるならば、面白いものである。「彼等は互ひにひどく愛着してゐたとはいへ、結婚前に、或は蜜月中に、互ひのことを夢みたことは殆どなかつた。また彼等が愛の夢をみたとしても、それは無關係な或ひは嫌ひな誰かに對して不實ならんがためにである。」さて併し何の夢を見るのだらうか？　ドラーヂュは、吾々の夢に現れる材料を、最近數日及びもつと古い時代の印象の斷片と殘物から成り立つものと、認めてをる。吾々の夢に現れるもの、吾々が最初には夢生活の創作物なりと見做したがるもの、その一切が、これを一層嚴密に吟味してみると、

悟られなかつた再現、「無意識の記憶（スーヴニール・アンコンシャン）」であることがわかるのである。然るにこの表象材料は或る共通的特質を示してゐる。それは吾々の精神よりかも、吾々の感官を、一層强く襲うたものであるらしいやうな印象から發してゐるか、乃至は、その出現後間もなくして吾々の注意から逸れてしまつたやうな印象から發生してゐる。或る印象が意識されること少なければ少ないほど、而もそれが强ければ强いほど、この印象は次の夢に於いて一役を演ずる見込みは益々多いのである。

ドラーヂュの指摘するのは、主要點に於いては、ローベルトが强調せるのと、同一なる二つの印象範疇であり、卽ち、第二義的印象と、片づけられてない印象との二つであるが、ドラーヂュはこれ等の印象が夢となる力を持つのは、それが無關心的なるが故にではなく、それが片づけられてゐないが故にであるといふ意見を述べて、別な聯絡を辿つてゐる。第二義的な印象も、謂はば、完全には片づけられてゐないものであり、新しい印象としてのその性質から言へば、「ばねが緊張してるだけそれだけ」多く睡眠中には弛むものであらう。この弱いそして殆ど注目されない印象に較べて、夢に於ける一役に對してなほ一層多くの要求權を有するのは、その消化中に偶然的に押へられてしまつたか、又は故意に排斥されてしまつたかしたところの、或る强い印象である。日中に妨害と抑壓のため蓄積された精神的精力が、夜中には夢の原動力となる。精神的に抑

壓されたものが夢の中で現れる。（詩人アナトール・フランス（「赤い百合」）も、全く同じやうな言葉を述べてゐる。「夜に吾々が見るものは、晝間吾々が閑却したものの憐れな殘骸である。夢は屢々、輕蔑された事實からの報復であり、見捨てられた人々からの非難である。」

遺憾なことには、ドラーヂュの思索は、ここで途切れてゐる。彼は夢に於ける獨立的精神活動に對しては、ただ極めて僅少な役割をあてがふことしかできない。かくて彼は彼の夢學說を持ちながらも、唐突にも、やはり、かの腦髓の部分的睡眠なる流行の說へ合流するのである。「要するに夢は、目的もなく方向もなく徘徊してる思想が、その途中に控へてそれを引止めるだけの强度を失はないでゐる諸々の記憶の上に、次から次へと定着して行き、その時の頭腦の活動力が睡眠のために多少とも減殺されてをる程度に從つて、或は弱い不確かな關聯を、或はより强い密接な關聯を、それらの記憶との間に打立てて行く、さうした思想の產物である。」

(三)第三の群としては、覺醒時の精神が全然にか、又は唯だ不完全な工合にしか、實行することのできないやうな、特別なる精神的作業に對する能力と傾向が、夢中の精神にはあることを認める學說を、包含することができる。これ等の能力の實行の結果として、大抵の場合に、夢の或る有益な機能が生ずる。比較的古い心理學者出身の著述家に見出さるる夢の評價は、大抵この部

類に入つてをる。併し私はこれ等の人々を引合ひに出す代りに、ブルダハの意見を引用するだけで、滿足しようと思ふ。この意見に從ふと、夢は「個性の力によつて制限されず、自己意識によつて亂されず、自己目的によつて方向づけられず、感官的中樞點が自由自在に働き、戲れる活氣、そのものであるところの精神の自然的行爲である」(第四八六頁)。

ブルダハ一派の人々は、自力を自由に使用してかく樂しむのを以て、明らかに次のやうな狀態なりと想像してをる。卽ち、その狀態に於いて、精神は元氣を新たにし、晝の勞働のため新しい精力を集める、例へば、それは休暇のやうなぐあひのものである、と。であるから、ブルダハはかの詩人ノヴリスが夢の攝理を頌めた愛すべき言葉をも引用し、且つ承認してをる。「夢は實生活の劃一的な平凡に對する一箇の防禦である。縛られた空想の自由な保養である。そこでは、空想が人生の凡ゆる形象を混ぜ合はし、成人した人間の常住的な固苦しさを、愉快な子供らしい戲れによつて中斷する。夢が無かつたら、きつと吾々はもつと早く年をとるだらう。であるから、吾吾は夢を以て、たとひ高きところから直接に與へられたものとは考へないにしても、併し大切な仕事、墓場へ行く巡禮の親しい道伴れだ、と見做すことはできる。」

ブルキンェ(第四五六頁)は、夢の更新的で治癒的な働きを、更に一層切實に描いてる。「創作

的な夢は特にこの機能を履行するであらう。それは想像の輕快な戲れであつて、日中の出來事とは何等の聯絡を有つてゐない。精神は覺醒生活の緊張を續けることを欲しない。却つてそれを解除しようとし、その疲勞を癒やさうとする。精神は先づ何よりも先に、覺醒時の狀態とは反對の狀態を作り出す。精神は悲哀を喜悅によつて癒やし、憂慮を希望と快活な氣散じの影像によつて、憎惡を愛と好意によつて、恐怖を勇氣と信頼によつて癒やすのである。疑惑を確信と固い信仰によつて靜め、空しい期待を實現によつて慰めてくれる。日中には當に明らさまになされてをつた情緖の數多くの傷ける箇所をば、睡眠はこれを蔽ひ塞ぎ、新しい昂奮の起らぬやうに保護しつつ治療するのである。時が經てば苦痛が癒るといふ作用も、一部分はこれに基いてをる。」睡眠は精神生活にとつては一つの慈善であると、吾々は誰でも凡べて感じてをる。だから民衆一般意識の漠然たる豫感から、夢は睡眠がその慈善を施す方法のうちの一つであるといふ、臆說を取りのぞくことは、明らかにできないことである。

睡眠狀態に於いて初めて自由に展開され得る或る特殊な精神活動によつて、夢を解說しようとする試みのうち、最も獨創的にして最も廣汎なるは、シェルネルが一八六一年に企てたものである。シェルネルの著書は重くるしい、そして誇張的な文體で書かれてをり、この題材に對する殆

ど惑溺に近い感激を帶びてはをるが、かかる感激は讀者を共に拉し去るほどの力が無い限りは、却つて氣障の感を抱かしめるに相違ない。それでこの著書をどうにか分析するのには、甚だ面倒な點に遭遇するので、吾々は寧ろ進んで、哲學者フォルケルトかシェルネルの學說を紹介してをる一層明晰で、且つ一層簡潔な敍述を利用したいくらゐである。「これ等の神祕的な結束からして、華麗と光輝の波浪からして、いかにも意義の暗示に富んだ光が閃き輝きはする。が併し、哲學者としての道がそのために明るくはなつてゐない。」シェルネルの敍述は、彼の弟子の一人においてさへ、かかる批評を受けてをるのである。

シェルネルは、精神がその種々の能力を減少することなくして、夢生活の中へも持續することを承認する、著述家達の中には入らない。彼自身が、夢の中では自我の中心性と自動的精力がいかに衰弱せしめられるか、この中心性失格の結果として、認識や感情や、意欲や表象などの働きが、いかに變化をうけるか、及びこの精神力の殘骸に對しては、何等眞實な精神特質が賦へられずして、却つて唯だ或る機械組織の性質が與へられるにすぎないことを論述してをる。その代りには、夢の中では、空想と名づけらるるべき精神の働きが、一切の悟性的支配をのがれ、從つて嚴格な尺度を脫却して、無制限なる支配へと飛躍する。空想は、なるほど土臺石を覺醒時の記憶

から採用するけれども、建物に用ひるその材料は併し、覺醒時の形成物とは天地雲泥の差あるものである。夢の中で、この空想力は啻に再現的なるのみならず、更に又創作的なる自己を現す。この空想力の特色が、夢生活に、その特殊な性質を與へてをる。空想は無際限のもの、誇張されたもの、途法もないものを、特に好む。同時に併し、邪魔になる思考範疇から脫離してをるお蔭で、柔靭性と迅速性と曲折性を增してくる。情緒の纖細な氣分的刺戟に對し、攪亂的な情念に對して、最も敏感である。內心的生活を直ちに外部的な彫塑的具體形に作りかへる。夢の空想には概念の言語が缺けてをる。言はうとするところのものは、これを具體的の形に描き出さねばならぬ。そして概念はこの空想界では弱くない効果を出すものであるから、空想は具體観照形式を一杯に、力强く、大きくして、描き出す。このために空想の言語はいかに明晰であつても冗漫で、難解で、無器用である。空想は或る對象を、それの本來の姿を以て言ひ現すことを忌み嫌つて、寧ろ、それを描くのが當面の目的となつてをるその對象のうちの、或る要點がこれによつて言ひ現され得る限りは、別の姿を選びたるがために、空想の言語の明晰さが特に妨害される。これが空想の象徵化する働きである。……更に、夢の空想は對象物を剩すところなくは再現しないで、ただその輪廓に於いてのみなし、而かもその輪廓をも、極めて自由勝手なぐあひに再現する、

といふ事は甚だ重大である。だからこの空想の繪畫は天才の息がかかつてゐるやうにも見える。ところが、夢の空想は對象物を唯だ出してみせるだけに留まつてはゐないで、夢中の自我を多かれ少なかれこの對象物と取り違へて、それで或る動作を作り出さんとせずにゐられない內的性質がある。例へば、視覺刺戟の夢は、街路の士へ金貨を描く、夢みる當人がそれを集め、悅んで、それを持ち去る。

夢空想がその藝術的働きを完行するための主なる材料は、シェルネルに據ると（第二二頁參照）、主として、日中にはいかにも朦朧としてゐる器官的身體刺戟のそれである。してみると、夢源泉と夢刺戟の假定に於いては、シェルネルの餘りにも空想的な理論と、ヴント及び他の生理學者達の恐らくは餘りにも實質的なる學說とは、その他の點では對蹠の如き關係でありながら、この點では全く一致することになる。併し一方生理學的理論に據る時には、內部的身體刺刺への精神的反應は、この刺戟に適應する何等かの表象を喚起することで終り、そしてこの表象はその次に、聯想の方法によつて若干の他の表象を自分の補助に招ぎ、かくてこの段階を以て、夢の精神的過程の追求は終局するものと考へられるのに對して、他方シェルネルに從ふ時には、身體刺戟は精神に對して、精神が自分の空想的な意圖のために役立たしめることのできるやうな材料を與へる

にすぎない。シェルネルにとつては、夢の構成が開始されるのは、それが他人の眼には見えなくなるところに於いてのみである。

夢空想が身體刺戟を用ひて企てることを以て、合目的的のものであるとは、勿論見做すことはできないであらう。夢空想はそれ等の刺戟を玩弄するのである。該の夢の中で、刺戟の發生地となつてをる器官を、何等か彫塑的な象徴を以て想像する。シェルネルの如きは次のやうな意見であるが、この點ではフォルケルトや他の人々は彼に從つて居らない。即ち、夢空想は器官組織全體にとつて好んで用ひる或る所定的な描出を持つてをり、それは家屋である、と。併しその描寫にとつて幸ひなことには、空想はこの材料に結び付きはしないやうである。却つてその逆に、或る一箇の器官を擧げ示すために、幾列もある家屋を利用することもある。例へば內臟刺戟に對するは、甚だ長い家並みの如きがそれである。また別の時には、家屋の箇々の部分が、實際に箇々の身體部分を描寫することもある。例へば、頭痛の夢では、或る部屋の天床（夢みてる當人に厭やな蟾蜍のやうな蜘蛛で一杯に蔽はれてると見える）が頭を現す。

かかる家屋象徵性を全く度外視してみても、任意の其他の材料が夢刺戟を派遣する身體局部の描寫に利用せられる。「例へば、呼吸してる肺臟の象徵は瓦斯狀のものが沸々としてをり火焰に充

ちてをるストーヴであるし、空虚な櫃や籠が心臟の象徴となり、膀胱のそれは圓い、財布の形をしてるか、又は何でもただ刳り拔いてある物であればよい。男子の性的刺戟夢はクラリオネットの上部、その外に煙管の同じく上部、又その外には一枚の毛皮といふやうなものを、夢みる當人をして街路上に發見せしめる。クラリオネットと煙管は男根のほゞ似た形を現し、毛皮は陰毛を現す。女子の性的夢にありては、くつつきあつてる兩股の狹さは、細長い、家屋でとりかこまれた內庭によつて、女子の膣は內庭の眞中を通じてる、滑りつこく軟かい、非常に細い小徑で象徵せられ、その夢を見てる人間は、誰か或る男の人に、例へば手紙のやうなものを屆けるためには、その小徑を步いて行かねばならんのである。」(フォルケルト、第三九頁)。或るかやうな身體的刺戟夢の結末にあたつて、夢空想はその刺戟しつつある器官又はそれの機能を蔽匿せずに出してみせて、謂はばここで假面を脫ぐ、といふことは、特に重要である。例へば、「齒の刺戟夢」の普通な結末では、その夢を見てる人が自分の口から齒を一本拔くのである。

夢空想は併しその注意をただその刺戟をなしつつある器官の形に向けるばかりでなく、それと同じぐらゐに、その器官の內容たる實質を象徵化の對象となすこともある。それで例へば、腸の刺戟夢は汚ない街路を步るかせ、尿道刺戟夢は、泡立つ水のところへ伴れて行く。或は又、刺戟

そのものの單なる刺戟、その昂奮の性質、その刺戟が欲求する對象、それ等が象徴的に現されるし、又、夢中の自我が自己の狀態の象徴化と具體的に結びつくこともある。例へば、苦痛刺戟に際しては、啀みついてくる犬か、暴れ狂ふ牡牛と絶望的な格闘をする如き、或は性的の夢を見てる婦人が、裸體の男子に追ひかけられるのを見る如きが、それである。詳しく調べれば實 豐富であると思ふが、それは論外に置くとしても、象徴化する空想活動が凡ゆる夢の中心力であることは動かぬことである。この空想の特質を一層深く究め、かほどに認識されてをる精神活動に對して、哲學的思想の一體系の中に於いてその地位を示し與へんと、フォルケルトはその美しく晙かく記述された著書のなかで試みてをるが、併しこの著書は、前以て哲學的概念基本形の感受的な理解のため豫備的の敎養が出來てゐない人にとつては、餘りにも難解である。

シェルネルの指摘した夢に於ける象徴化する空想の實行には、有益なる機能は結びついてゐなかつた。精神は自分のところへ與へられた刺戟を、夢みつつ、弄ぶのである。恐らくその戲れは腕白なものであらうと、推測してもいいかもしれない。ところで又吾々に向つて、こんな問ひがかけられるかもしれない。シェルネルの夢の學說は氣儘勝手で、凡ゆる研究の法則から離反してるのが、餘りにも目立つやうに思はれるから、そんな學說を立ち入つて調べてみたところで、何

か有益なことに達し得るであらうか、と。そんなことがあるとしたら、ここに少しの吟味をもしてみないで、シェルネル説を排斥するなどとは、それは餘りに高慢であらうと、否認してをきたいものだ。シェルネルの說が築きあげられてをる土臺は、自分で見た夢に對して大きな注意を拂ひ、そして漠然たる精神的の事柄の跡をでも逐うて探求する素質を十分に身に備へてると見える人が、自分自身の夢から受けた印象なのである。更にかの說が取扱ふものは、これほどの題材なのである。卽ちそれは、數千年の間を通じ人間にとつて謎のやうに思はれる一方には、內容にも富み、關係するところも多きものと思はれて來て、そしてこれが解明に對して、自ら稱する精密科學ですらが寄與してるところのものは、一般人の感じとは全く反對に、この對象から內容と意味とを拒定せんとする試み以外の大しいたことでもなく終つてをる、さういふ大きな題材なのである。最後に、夢の事を明らかにせんとする試みに於いては、吾々は容易には空想傾向を脫却することができないかもしれんのであることを、正直に吐露したいと思ふ。神經節細胞空想性といふものすらある。ビンツの如き生眞面で正確な研究家の前に引用した一節にも、目覺め際の曙光が腦髓外皮の眠り込んでる細胞群の上一面に棚びく、といつた描寫があり、これはその空想性に於いて及び——眞實らしからぬ性質に於いて、シェルネルの解說の試みに引けを取るものではな

い。私は、シェルネルの試みの背後には、或る實在的のものが潜んでをる事を示すことができるやうに期待してをる。勿論この實在的のものは、ただ朦朧と認識されたにすぎないし、苟も夢の一學說としてこれを要求し得るやうな一般性の性質を有してゐないのではある。先づ當分のうちは、このシェルネルの夢學說はその醫學的學說との對立を以て、夢生活の解說が、今日なほ何といふ極端の間を、不安定に動搖してをるかを、吾々の眼前に見せてくれるぐらゐのものである。

第八節　夢と精神病との關係

精神錯亂に對する夢の關係を云々するには、三通りのことが考へられ得る。(一)病源學的及び臨床學的關係。例へば、或る夢が或る精神病的狀態を代表するか、それの糸口をつけるか、乃至はその狀態の後に殘つてるかする場合。(二)精神病に際して夢生活が蒙る變化。(三)精神病、及びそれと本質的近親性を示す類似の病症と夢との間の內面的關係。この兩列の諸現象の間に存する種々の關係が醫學の初期時代に——そして現代になつて更めてまた——醫學出身の著述家達得意の好題目であつたことは、シピッタやラーデシトックやモーリやティシエの著書に集められた、この題目の文獻が示す如くである。最近には、サンテ・デ・サンクチスがこの關聯に注目を向けて

をつた。吾々の叙述の關心事としては、有意義的な題目にただ觸れてみるので足りるであらう。

夢と精神病との間の臨床學的及び病源學的關係については、範例として次の觀察を報告しようと思ふ。クラウスを見るとホーンバウムの報告がある。それに據れば、妄想狂の最初の爆發は、往々或る不安な恐しい夢から發してゐた。そして主要觀念はこの夢と結びついてゐた。サンテ・デ・サンクチスも精神錯亂症について似たやうな觀察を得、そしてこの病症の箇々の場合に於ける夢を「狂氣の決定的眞原因なり」と言つてをる。精神病は、精神錯亂の證據となるべきものを含んでをり影響力ある夢を見ると、一度で起るか、又はなほまだ疑惑に對して爭ふべきその後の幾つかの夢の間に徐々と發生するか、どつちかである。デ・サンクチスの擧げてをる或る一つの場合では、その攻撃的な夢に對して輕いヒステリーの發作がつながつてゐて、その後には引き續いて一種の不安で憂欝な狀態が來てゐた。フェレは(ティシエの本を見ると)、ヒステリー的麻痺を結果として生じた或る夢の報告をしてをる。この場合は、夢を精神障害の病源として吾々に紹介するものであるが、併し吾々はそれと同じく實狀をも考へに入れるならば、精神的障害が、夢生活を機會として、その最初の現れを見せたのである、精神的障害が先づ夢の中で爆發したのであるとも、言へるのである。別の實例では、夢生活が病的な徵候を含んでをる。又は精神病が夢

生活だけに限られてゐる。例へばトーマイエルは恐怖夢を指摘してゐるが、これは癲癇の發作と同等のものと解釋されねばならない。アリッソンは夜間精神病(ノクチユラル・インサニテイー)を記述してゐるが(ラーデシトックに據る)、この病症では、當人は日中は外から見かけたところ完全に健康體であるが、夜の間に定まりきつて、錯覺や躁狂發作や其他の症狀が現れるのである。類似の觀察は、デ・サンクチスにも(或るアルコール中毒患者に現れた、精神錯亂的夢と等しい症候、妻に不貞操の罪を被せんとする癖)、ティシエにもある。ティシエは近頃の事實に基いた多數の觀察を提供してゐるが、それ等にありては、病的性質の動作(妄想前提や、强迫衝動などに基いたの)が、夢から引き出されるものである。ギイスレーンは睡眠の代りに、間歇的な精神惑亂が生じた一例を、記述してゐる。

將來いつか夢の心理學の外に、夢の精神病學が醫師によつて研究されるだらうといふことは、確かに疑ひのないことである。

日中には健康な機能を有してゐるのに、夢生活はまだ精神病症に屬することもあるやうな場合は、屢々精神病後の回復狀態に於いて特別に明らかとなる。(クラウスに據ると)グレゴリーがこの現象を最初に指摘したとのことである。(ティシエを讀むと)マカリォは或る狂人の話をしてを

るが、この狂人は完全な囘復後一週間經つて、夢の中で、觀念の喪失と彼の病氣の烈しい衝撃を再び經驗したのであつた。

繼續的な精神病患者に於いて夢生活が受ける變化に關しては、現在までのところでは、甚だ僅少な調査しか行はれてゐない。反之、夢と精神障害との現象の間に於ける、いかにも廣い範圍に亙る一致に現れてをる、この兩者の内面的近親性は、以前から注目されてをる。モーリに據ると、カバニが「博物學と道徳の關係」に於いて最初にこれを指摘し、彼以後にはレリュー、モロー等があり、哲學者メエン・ド・ビランは全く特別に注意をこれに向けた。この兩者の比較は確かになほもつと古い。ラーデシトックはこの比較を論じた章の序言に、夢と狂氣を類同せしめる幾多の人々の言葉を集めてをる。カントは或る一節に、「狂人は覺醒の中に夢みる人なり」と言つた。クラウスは曰く、「狂氣は感官覺醒狀態内に於ける夢である。」ショペンハウエルは夢を以て短期の狂氣と呼び、狂氣を以て長期の夢と呼んだ。ハーゲンは譫妄を睡眠によつてゞなく、病氣によつて惹起せられた夢生活なりと名づけてをる。ヴントが「生理學的心理學」の中に述べるところでは、「實際に吾々は夢の中で、精神病院に於いて遭遇するやうな殆ど一切の現象を、自ら經驗することができる。」

兩者の比較をかやうに判定するに至らしめる、基礎となつてをる箇々的の一致を、シピッタ(モーリにも甚だこれと似た分類がなされてをる)は、次の分類を以て數へ上げてゐる。「一、自己意識の廢止、とまでは行かなければ、その停滯、その結果、狀態そのものについての無智、從つて驚愕の不可能、道德的意識の缺乏。二、感覺器官の修飾的知覺、而も夢では、この修飾的知覺は減ずるが狂氣では一般に甚だ强められる。三、專ら聯想と再現の法則に從つて行はれる表象相互間の結合、從つて自動的な系列の構成、それ故に又、表象間の關係の不均齊(誇大、妄想)。以上凡てからの結果として、四、人格の、時としては性格特色の變化乃至は逆轉(顚倒)。」

ラーデシトックはなほ若干の點を附け加へてをる。材料に於ける類似點である。「視覺及び聽覺、及び一般感情の領域では、最も多くの錯覺と幻影が見出される。夢に於いてと同じく、嗅覺と味覺が提供する要素は一番少ない。——熱病患者には、譫妄の狀態に於いて、久しい以前の記憶が浮び出して來る點、夢みる人の場合と同じ。覺醒時の健康狀態では、人が忘れてしまつてると思はれたものが、病氣で眠つてる時には思ひ出されるのである。」——夢と精神病の類似は、それがちようど一家族同志の類似のやうに、細かな身振り動作や更に顏面表情の箇々の特異に至るまでも、波及することになると、始めて完全な價値を持つわけである。

「身體と精神の苦惱にさいなまれてゐる人に、現實が拒絶してゐるもの、卽ち安寧と幸福とを、夢が與へてくれる。それで精神病患者にも幸福、偉大、崇高、富といふやうなものの明るい影像が、湧き上がつてくる。譫言の主要內容を成すものは、屢々、財產の假定的所有や願望の想像的實現であるが、これの拒絶又は蹂躙こそは、精神錯亂の心理的一原因となつてものである。大事な兒を失くした婦人は、懷胎の悅びを譫言に云ふ。財產の損失を蒙つた人は自分を、並外づれて富裕だと見做すし、欺された娘は優しく愛されてゐる自分を見る、といふぐあひである。」

（ラーデシトックのこの一節はグリージンゲル、第一一一頁の精緻なる論述を抄錄したものであるが、グリージンゲルの論述は、實に明晰に、願望實現を以て、夢と精神病に共通な表象作用の一特質たるを、明らかにしてゐる。私自身の調査によつて、數へられたところでも、夢と精神病の心理學的理論に對する鍵はここに見出されるのである。）

「思想の奇妙な結合と判斷の微弱とは、夢と狂氣の主要な特質を現すものである。」正氣の判斷にとつては愚なことと思はれるやうな、自分の精神的業績の誇張的評價は、兩者に見出される。夢の急速度的表象過程に相適應するのは、精神病の觀念逃走である。兩方に凡ゆる時間標準が、缺けてゐる。夢には人格の分裂がある。これは例へば自己の知識を二個の人物に分配し、そのう

ちの自己でない人物が本來の自己を夢の中で訂正するといふやうなものであつて、錯覺性精神病に於ける有名な人格分配と、完全に同價的のものである。夢みてる人も、自分の思想が他人の聲で持ち出されるを聞く。永續的妄想觀念に對してすらも、印で捺したやうに繰り返へされる病理的夢（人を惱ます夢）のうちに、或る類似が見出される。――譫妄症から全治した後に患者が、自分等にはその罹病の全時期が、時として不愉快ではない夢のやうに思はれる、といふことを語るのが稀れでない。のみならず、後等はまだ罹病の間にあつてすら、自分はただ何かの夢に捕まつてるのだといふ氣が、時としてしたことがあつた、それは往々普通の睡眠中の夢に於いて起る通りだ、といふことさへ、報告するのである。

以上凡べてによつて考へれば、ラーデシトックが彼竝びに數多の他の人々の意見を綜合して、次の如くに言つたのは、怪しむべきではない。「異常的病源現象たる狂氣は、週期的に繰り返へさるる通常的夢狀態の一種の增進なりと見做すべきだ」と（第二三一八頁）。

外に現れる現象のかうした類推によつて可能なるよりも、恐らくはなほ一層內心的に、クラウスは夢と狂氣の近親性を病源に（といふよりは寧ろ、昂奮原因のなかに）究めてみようとした。兩者に共通な根本要素は、彼に據ると、旣に前に紹介したやうに、器官的に制約されたかいかいかいかい感覺であ

る、身體刺戟感應である、凡ゆる器官の昂奮によつて成立した一般的感じである（モーリ、第五二頁引用のペイス說を參照せよ）。

夢と精神障害との間に在する辯駁すべからざる、特質的細部にまでも及んでをる一致は、夢生活についての醫學的學說を支持する支柱のうち、最も强きものである。この學說に從ふと、夢は有害無益なる經過であり、低下せる精神活動の現れだ、といふことになる。併しながら夢に關する究極的の闡明を、精神障害からして得んと期待することはできないであらう。この精神障害の過程に對する吾々の洞察が、いかに不滿足な狀態にあるかは、一般によく知られてる通りであるのだから。とは言ひ、併し、夢の解釋に何か變化を加へるならば、精神障害の內部的機械組織に關する吾々の意見にも、自づからその影響が來ねばならんことは、恐らくありさうである。それで吾々はかう言つてもいい。吾々が夢の祕密を明かにせんと骨折るのは、これ精神病の闡明のためにも、働くものである、と。

（夢問題の文獻調査を、私はこの著書の最初の出版（一九〇〇年）から第二版（一九〇九年）に至る年限に亙つても、繼續することはしなかつた。それについて一言の辯明が要る。かかる辯明は、讀者にとつて、殆ど滿足なものと見えないかもしれない。にも拘らず、私はこの辯明をしなけれ

ばならん氣になつたのである。私を動かして、文獻に現れた夢の論議を叙述せしめるに至つた一般的動機は、前述の序言で盡きてしまつてゐた。この仕事を繼續するとしたなら、並々ならぬ辛勞を拂はねばならんのだが――而かも利益乃至啓蒙を得ることは、甚だ少ないのである。何故ならば、今その問題となる九箇年の年月の間に、夢の解釋にとつて事實的材料の上でも、觀察の立場の上でも、新しいもの、又は十分價値あるものは、出て居らない。私の著作は、その後に發表された大多數の刊行物の中に、名も擧げられず、顧みられずに居つた。併しこの著作が最も注目されなかつたのは、當然所謂「夢研究者」の間に於いてであつた。彼等は、何事か新しいことを習得するを忌み嫌ふところの學問的人間に特有なる傾向の、美事な一例を、これを以て與へてるわけだ。「學者は好奇的でない。Les savants ne sont pas curieux」と、皮肉屋のアナトール・フランスが言つて居る。若し學問に於いても復讐の權利が存するならば、恐らく私の方でも、この著書出版以後の文獻を等閑に附する權利があるかもしれない。專門雜誌に現れた少數の報導は、實に無理解と誤解に滿ちてゐて、私はそれ等の批評家達に向つては、ただ、この書をもう一度讀んでくれと促すことを以てしか、外に何の返答もできないくらゐである。或は、これをともかくも讀んでみてくれと促す、のだといつてもいいかもしれない。）

（精神分析的治療法を利用する決心のついた醫師達や、其他の人々の研究に於いて、どつさりと色々な夢が發表せられ、そして私の指示に從つて判斷せられて居る。で、これ等の研究が、私の開陳した說の實證以上に出でてをる限りは、私はその成果を、私の叙述の組織中へ採用した。下卷卷末の參考書目錄のうち第二の方は、この書の第一版以後に於ける最も重要な發表を列記するものである。サンテ・デ・サンクチスの夢に關する內容豐富なる著書は、その出版後間もなく獨逸語に飜譯されたが、時間から言ふと、これは私の「夢判斷」と重なり合ふので、私の方でも、またこの伊太利の著述家の方でも、兩方でお互ひに氣づくことはできなかつた。後に讀んでみて、私は遺憾ながらかう判斷せざるを得なかつた。この勤勉な著述は、非常に說に乏しい。これだけの研究では、私の著書で取扱はれた諸問題の豫想すら起すことができないであらうほどに、說に乏しいのである。）

（私はただ二つの出版をここに想起するにすぎない。この二つは私の夢問題論と密接に觸れてゐる。若い哲學者スウォボダはキルヘルム・フリースが唱へ出した生物學的週期性（二十三日及び二十八日の系列を以てする）を、精神的出來事へも、擴張してみようと企てたのであるが、空想に富んだ一書に於いて（H. Swoboda, Die Perioden des menschlichen Organismus. 1904）、夢の謎を

も就中この鍵を以て解いてみようとした。その際に夢の意味判斷が失敗してをるやうである。夢の內容となつてる材料は、ちようどその晩に、かの生物學的週期のうちのどつちか一つが、第一囘目か、又は第何囘目かに完結する、さういふ記憶一切の集合によつて解說されるものであらうと思ふ。この著者が親しく私に知らしたところによつて私は最初は、彼自身はこの說をもはや眞面目に奉ずる氣はないのだと認定したのであつたが、この推論は思ひ違ひであるやうだ。私は別の箇所で、スウォボダの意見に對して若干の觀察を述べるであらうけれども、その觀察は或る確信的の結果を私に與へなかつたものである。これに較べると、私にとつてずつと遙かに悅ばしいことは、期待もしなかつた箇所に於いて、夢の或る解釋を偶然見つけたが、それが私の解釋の核心とぴつたり一致することであつた。年代の關係からすると、この意見發表が私の著書を繙讀して影響されたかもしれんといふ事は、考へられない。從つて私はこの意見を以て、文獻の中に證明し得る限りでは、唯一のもの、私の夢學說の本質と或る獨立的な思索家との唯一の一致なりとして、悅び迎へねばならない。夢作用に關して、私が今眼に留めた一節を含んでるその本といふのは一九〇〇年に第二版が公刊されたリンコイスの「或る現實論者の空想」Lynkeus, Phantasien eines Realisten)と題したものである。)

（上記の辯明は一九〇九年に書かれたものであつた。——譯者曰、この一節は第四版の一九一四年版に附記された。——その後、形勢は勿論變化した。「夢判斷」に對する私の寄與は、文獻に於いて、もはや看過されることはない。併しながらこの新しい境地は、愈々以て上記報告の續きを書くことを不可能ならしめるのである。「夢判斷」は多數の新しい主張や問題を提供したが、それ等は著述家達によつて實に種々雜多なぐあひに探求されてをる。それで私としては、著述家達が引合ひにしてをる私自身の見解を、先づ展開してみた後でなくては、それ等著述家達の研究を叙述することはできないのである。それであるから、これ等の最新の文獻中十分價値あると思はれたものは、私のこれから先の論述の聯關の中に於いて評價してみてをる。）

第二章　夢判斷の方法。或る範例的夢の分析。

私が夢の解釋に於いて如何なる傳統へ結びつかうと思つてをるか、それは私のこの著書に與へられた標題を見ればわかるであらう。夢は判斷され得るものである、その事を私は示さうとしたのであつて、今まで論じて來た夢の諸問題を明らかにするための貢獻などは、私から言はせれば、私の本來の任務を果たす傍の、臨時的な副產物として生ずるものにすぎないのであるかもしれない。ところで、夢は判斷し得るものだといふ前提を以て、私は立ちどころに、主要な夢學說、然りシェルネル說を除いた全部の夢學說に對して、衝突することになる。何故ならば、「或る夢を判斷する」とはその「意味」を規定することである。連鎖をなしてをる吾々の精神行爲の中へ、十分の重みがあり對等の價値ある一つの環として組み合はさる或る者を、その夢の代りに考へ出すことである。然るに吾々が見聞した通り、夢の專門的學說は夢判斷なる一問題に對しては何等の餘地を許してくれない。その理由は、夢は彼等の考へるところでは大體何等の精神的行爲ではなく、精神的器官に於ける徵候によつて、告示される身體的經過であるからだ。これと異つた態度を取

つて來たのは凡ゆる時代に於ける俗人の意見である。素人である故に不徹底な處置をしても許される、その結構な權利を彼等は利用してをる。そして一方、夢は理解しがたいもので荒唐無稽であると承認しながらも、他方彼等は、その夢に意味は少しもないと言ひ切る決心はできない。蓋し彼等は漠然たる豫感に導かれて次のことを認定してるらしいのである。夢は或る意味を持つてをる、假令蔽匿されたものではあるが或る意味を持つてをる。夢の目的は何か別の思考經過の代りとなるにある。それで、夢の蔽匿されてをる意味へ到達するためには、ただこの代りのものを正しい方法で發見することだけが、中心的問題である、と。

であるから素人の世界では昔からして夢を「判斷しよう」と骨を折り、その際に二つの本質を異にする方法を試みた。そのうちの一方法は、夢內容を總體として眼中に留め、そしてそれの代りに、或る別の、理解のいく、色々の點に於いて類推し得るやうな內容を置いてみようとするのである。これが象徵的夢判斷である。この夢判斷法は勿論始めからして、單に理解しにくいばかりでなく更に又紛糾もしてをると思はれる夢に當つてみると、躓いた。聖書のヨゼフが埃及王の夢に對して加へた解釋が、或はこの方法の一例になるかもしれない。七疋の肥えた牝牛が來る。その後から七疋の瘦せたのが來る。それが前のを喰つてしまふ。これが、埃及國の七年間が豐年

のために出來た過剩を一切次の七年間の饑饉が喰つてしまふといふ豫告に對する、一つの象徵的代用なのである。詩人達によつて創作された技巧的夢の大部分は、かういふ判斷を目的としてゐる。と言ふのは、それ等は詩人が纏めた思想を一種の變裝を以て再現するのであつて、そしてその變裝なるものは、經驗によつてよく知られてをる吾々の夢作用の特質に適當なものだと考へられたのであるからだ。（詩人ウェー・イェンセンの短篇小語「グラディヴァ」の中に私は偶然にも數多の技巧的夢を發見したが、それ等は全く正確に構成せられ且つ判斷もつくので、まるで詩人の工夫で出來たのではなくて、實在の人物がこれを見た夢であるかのやうであつた。私からの問ひ合せに對して詩人が確證したところでは、彼は私の夢學說を全然知らないのであつた。私は私の研究と詩人の創作との間のこの一致をば、私の夢分析の正しいことに對する證據として利用したことがある。――Der Wahn und die Träume in W. Jensens „Gradiva." 1906――）夢は未來の成行を豫め豫感してをるので、主として未來の事柄に關係するものだ、といふ意見が――これは昔夢に對して認められてゐた豫言的意義の殘物である――やがて動機となつて、夢の象徵的判斷によつて見出された意味を「さうなるだらう」といふ一語によつて未來の時稱へ置き換へることとなるのである。

さてかやうな象徵的判斷への道はいかにして見出さるるのか、これを知る手引きは勿論與へら

れない。その成功は機智的な思ひ付き、突發的な直覺のなすところで、從つて象徵を用ひる夢判斷は何か特別な天禀と結びついてるものと思はれた一種の藝の行ひとして崇められた。（アリストテレスの意見では、最も上手な夢判斷者は類似の事柄を最も上手に捕へあげる人である。何故ならば夢影像はちようど水中の影像のやうに運動のために歪められて居り、そしてその歪められた影像のなかに眞實のものを認める力ある人こそ、最も上手に肯綮を穿つのであるから。ビュクセンシュッツ、第六五頁）。夢判斷の通俗的方法のうち、もう一つのは、以上のやうな要求を全然抱いてをらない。吾々はこの方法を「暗號方法」（Chiffriermethode）とでも名づけたらいいかもしれん。と言ふのは、これは夢を、各記號が或る確定してをる方式によつて別の周知的な意味の記號へ飜譯される、一種の暗號文字の如く取扱ふのだからだ。例へば、私が一本の手紙の夢を見た、併しその上にまた或る葬式其他のことも夢みたとする。さて、私は一册の「夢の本」を參考書にして調べる。すると、「手紙」は「不平不滿」、「葬式」は「婚約」を以て飜譯すべきだといふことがわかる。さうなると後は、暗號を解いたその標語からして一箇の聯絡を纏めあげて、そしてそれを將來のこととして受け取ればいいのである。ダルディスのアルテミドロスの夢判斷に關する文書の中に、上述の暗號方法を面白く變更したものが示されてをるが、變更をしたために、この方法の純機械的飜譯たる性質が若干の

程度までは修正されてゐる。（多分西暦第二世紀の始め頃に生れたアルテミドロスは、希臘羅馬時代に於ける夢判斷の最も完全で且つ最も丁寧な考案を吾々に傳へてくれた。ゴムペルツが特に指摘する通り、彼は夢の判斷をば觀察と經驗に基かしめることに價値を置き、この術を其他の欺瞞的な技術から嚴格に區別した。彼の判斷術の原理は、ゴムペルツの叙述に據れば、魔術と同型で、聯想の原理である。夢中の或事物は追想せしめるものを暗示してゐる。ようくこれを考へてみたまへ、これは夢判斷者をして追想せしめるものなのである！と。してみると、その夢要素は夢判斷者をしては種々の事柄を追想せしめるが、外の誰かにであつたら、それとは何か別のことを追想せしめるかもしれんといふ事情があり、この事情からして勝手氣儘と不安定の統御しがたい一原因が生じてくる。私が以下に解説する技術は、次のやうな一箇の本質的な點で古代の技術とは相離れてゐる。卽ち、私の技術は夢みる當人自身に判斷の仕事を課するといふ點で。私の技術はその當面の夢要素に對して夢判斷者にいかなることが思ひ付くかを省みるものではなくして、夢みた當人にいかなることが思ひつくかを考慮するのである。――宣敎師トフィンクドジット (Tfinkdjit, Anthropos 1915) の新しい報告に據ると、東洋の近代の夢占師は夢みる當人との協同助力をも十分に要求するとのことである。この報告者はメソポタミアのアラビヤ人の夢占師のことを、次のやうに物語つてゐる。「夢を正確に判斷するために、最も巧みなる夢占師等は、立派な説明をするに必要だと思はれる凡ゆる事情を、相談の相手から聞き知るのである。……一言で言へば、これ等の夢占師はいかなる事情をも知らずにはおかないし、望ましい凡ゆる質問をすつかり

と引き出だし受け取つた後でなければ、求められた解釋を與へない。」これ等の質問のうちには定まりきつて一番近い家族の人々（兩親、妻、子供）に關する正確な陳述についてのもの、竝びに類型的な形式の次のやうなのがある。「あなたは、今晩眠る前か、後かに、同衾しませんでしたか？」――「夢判斷に於ける主要な觀念は、夢をその對蹠によつて説明することにある。」

この方法では夢の内容ばかりでなく、夢みる當人の身柄及び生活狀態に對しても考慮を拂ふのであるから、同一の夢要素でも、金持ちや旣婚者や雄辯家にとつては、貧乏人や獨身者やまた例へば商人などにとつてとは、別樣な意味を有するのである。ところでこの方法に存する本質的な點は、判斷の仕事が夢の全體には向けられないで、恰も夢は一個の混成的礫岩であり、その各石片は各自特別な目的を要求するとでもいつたやうに、夢内容の各部分それ自體へ向けられる事である。確かに、聯絡のないそして紛糾した夢が存在してゐる。さういふ夢からしてこの暗號方法を作り出す衝動が生れたのである。

（ドクトル・アルフレッド・ロビツェクは私にかういふ事を注意さしてくれた。東洋の夢の本は、――吾々西洋の夢の本はそれの貧弱な模寫である――夢要素の判斷を大抵は言語の同音及び類似性によつてやつてゐる。然るに吾々の言語に飜譯をすると、これ等の近親性的のものは失はれればならんものであるから、吾々西洋の

民間の「夢の本」にあるやうな代用語の不可解はそこから發生してゐるのかもしれない。——古代東洋文化民族間に於ける言葉合はせと言語遊戯のかやうに異常なる意義に關しては、フーゴー・キンクレルの著述からして學ぶがよからう。古代から傳はつてをる或る夢判斷の最も面白い實例はやはり一種の言語遊戯に基いてをる。アルテミドロスの物語るところでは、「アリスタンドロスがマセドニアのアレクサンデル大王に與へた解釋も、まことに結構なものであつたやうに私には思はれる。この王がティロスを包圍して陣を張つてをつたが、時を失ふこと大きかつたために不氣嫌で憂欝になり、或る時一人の半神半羊のサティロス(Satyros)が自分の盾の上で踊るのを見るやうな氣がした。偶々アリスタンドロスはシリア人を攻める王に隨行してティロスの近傍に居つた。さて彼はサティロスなる語をサとティロスとに分解してみせたので、その結果王を動かし、王は包圍攻擊を更に力を入れて開始し、遂にこの町をわが手に收めた。」(Sa-Tyros は、ティロスはお前のものだ、といふ意味になる。)——ともかく夢は言語上の表現といかにも密接に關係してをり、フェレンツィが凡ゆる言葉はそれの特有なる夢言葉を持つてると述べてるのは道理あることだ。概して夢は他の國語へは飜譯し得ないものだ。だからこの私の著書の如きも飜譯し得ないものだと思つてをつた。にも拘らず、ニユウ・ヨークのドクトル・エ・エ・ブリルは私の「夢判斷」の英譯をなすに成功した。(一九一三年、ロンドン、George Allen 社刊行。ロペス・バッレステロスは一九二五年に西班牙語の飜譯を出した。一九一三年にはモスコウで露西亞語譯が出版され、ホンガリア語と佛蘭西語の飜譯は今準備中である。)

夢の上記二つの通俗的判斷法などがこの題目の學問的取扱ひにとつて用ゆべからざるものであることは、寸刻たりとも問題とはなり得ない。象徴的方法はその應用が局限されてをり、何等一般的說明の力を持たない。暗號方法では問題の歸着するところは、その「祕鑰」たる夢の本が信用し得るものなりやであるが、それに對する保證は全く缺けてをる。さうなると、吾々は哲學者や精神病學者の理に服し、彼等に同じて夢判斷の問題を一箇想像的なる仕事として抹殺したくなるかもしれない。（私の原稿が完結した後にシテュムプフの一著述が私の手許へ屆いた。この著述は、夢は意味に充ち且つ判斷し得るものであることを證明せんとする意圖に於いては、私の研究と合致するものである。併し彼の判斷は、その方法の一般妥當性についての保證を有することなき、一種の比喩化的象徴法によつて行はれてゐる。）

併し私はその迷ひから救はれた。私は次の事を見拔かざるを得なかつた。卽ち、今私の目前にあるのは、今日通用してをる學問の判斷よりかも、頑固に確保されて來てる太古からの民俗信仰の方が、事柄の眞理に一層近接してをると思はれるやうな、珍らしからぬ場合のうちの一つであることを。夢は實際に或る意味を持つてをる、そして夢判斷の或る學問的な方法は可能である事を、私は主張せねばならぬ。私は次のやうにしてこの方法を知るに至つたのである。

数年以來私は或種の精神病理的構成物たるヒステリー性恐怖、强迫觀念其他を治療法的目的を以て分析することに從事してをつた。それはヨゼフ・ブロイエルの有意義な一報告によつて、病症徵候と感ぜられてをるこれ等の形成現象にとつては分析と解決は終に一に歸することを知つて以來のことであつた。(Breuer und Freud, Studien über Hysterie. Wien 1895)。かゝる病的表象はそれによつて患者の精神生活の中に發生してをるその要素へ還元されることができる時には、その時には、この病的表象は分散し、患者はその表象から救ひ出されるのである。その外の吾々の治療法的努力は無力であり、その上これ等の狀態がいかにも謎めいてをるために、私にはブロイエルによつて拓かれた道を、凡ゆる困難に抗らつても、十分なる闡明に達するまでは押し進むことが好ましく思はれた。その方法の技術が結局いかにして出來上がつたか、及びその辛苦の成果がいかなるものであつたか、それについては別の時に詳しく報告を致さねばならぬであらう。この精神分析的研究の途中で私は夢判斷に行きあたつたのである。私は患者達に對して所定の題目についての彼等の念頭に浮ぶ凡ての思ひ付や考へを私に報告する義務を負はしたが、彼等は私に彼等の夢を物語つた、そしてそれで私にかういふ事を敎へた。夢は精神的連鎖の中へ挿入されてをるのかもしれない、そしてその連鎖は、或る病的觀念を出發點として記憶を辿つて逆に溯行される

のである、と。かうなると今や次の一歩は、夢そのものを一箇の徵候として取扱ひ、これ等徵候のために考案された判斷の方法を夢にも應用することであつた。

さてさうするには患者の或る程度の精神的準備が必要である。患者に對して二通りの註文が出される。精神的知覺に對する注意力の增進と、自分に浮んでくる考へをいつもならば批判を以て吟味するのは普通であるが、その批判を遮斷すること、とである。注意力を集中して自己觀察をする目的のためには、患者が平安な狀態を取り兩眼を閉ぢることが有利である。知覺された思想形成の批判を斷念することは、特に力を入れて、患者に命ぜねばならない。であるから患者に向つてかう言ふ。精神分析の成行は懸つて次の事にある。君が君の心に起る一切に注目してそれを報告し、或る思ひ付は重要でない又は題目には屬さないものだと、君には思はれるからといふて、それを抑壓したり、又別の思ひ付は愚かなものと君には思はれるからというて、それを抑壓したりなど、誤つてしないやうにする、その一事に懸かつてるのだ。君は君のいろんな思ひ付に對して全く不偏不黨の態度を取らねばならん。と言ふのは、若し萬一にも、夢や强迫觀念や其他について思ひ通りの分析を見出すことが成功しなかつたらば、その原因は正に君のその批判にあるかもしれんのだから、と。

私は精神分析の仕事をしてをる際に氣づいたことであるが、瞑想する男の精神狀態は自分の心理的經過を觀察する男のそれとは全く別樣なものである。瞑想に際しては最も注意深い自己觀察に際してよりも、或る精神的行爲が一層多く動き出すものであつて、それはちようど瞑想者の緊張した表情と皺を刻んだ額とが自己觀察者の表情の落着とは、對照をなして示されるのと同じことである。兩者の場合に注意力の集中は存在してゐるに相違ない。併し瞑想する者はその上に一種の批判をも行ひ、その批判の結果、自分の念頭に湧いて來る思ひ付を折角知覺した後で、その一部を排斥し、他のものを簡單に破り捨てるので、それ等が開いて見せるでもあつたらうところの思想の道を辿ることにはならなくなる。且つその外の思想に對しても、瞑想する者は、それ等が大體に意識もされずに、卽ちそれ等が知覺される以前に、抑壓されてしまふやうなぐあひに、振舞ふこともあるのである。反之、自己觀察者にはただその批判を抑壓する骨折があるだけで、もしそれができれば、無數の思ひ付が彼の意識に上る。これ等は批判を行つたら摑まへられなかつたものだ。自己知覺にとつて新しく得られたこの材料の助けを借りて、病的觀念並に夢構成體の判斷が完行される。問題の中心となるのは、或る精神的狀態を作り出すのにあることがわかるだらう。その精神狀態は、睡眠に入る前の狀態と（及び確かに催眠術的狀態とも）、精神的精力

（可動的注意力）の配分の點で、或る類似點を共通に有してをる。睡眠に入る際にはかの「欲せられなかつた表象」が現出する。それは吾々が吾々の表象の過程に對して働きかけさせる或る種の隨意的な（そして確かにまた批判的な）行爲が弛緩するためである。この弛緩の原因として吾々は普通に「疲勞」を擧げる。浮び出てくる欲せられなかつた表象は、形を變じて、視覺的及び聽覺的影像となる（前出せるシュライエルマッヘル其他の人々の記述を參照せよ。第八六頁）。夢及び病的觀念の分析のために利用されるこの狀態にありては、故意に且つ隨意的に上述の能動性を斷念して、その節約された精神的精力（又はその一部）を今や浮び出てくる欲せられなかつた思想の注意深い追跡に流用する。この時の思想は表象としてのその特質を保留してるのであつて、その點が睡眠に入る際の狀態とは異なるところである。かくて「欲せられなかつた」表象を「欲せられたもの」となすのである。

（普通それに對して行はれてをる批判を斷念して、外見上は「自由に湧きのぼる」これ等の思ひ付に對面すべしといふこの要求は、人によつては容易でないことにも思れる。かの「欲せられなかつた思想」は、それが浮び出るのを妨止せんとする實に烈しい抵抗を醸し出すを常とするからである。併し若し吾々にして獨逸の偉大なる詩人哲學者たるフリードリヒ・シルレルに信用を置

くならば、あれと全く類似した一種の態度が詩人創作の條件ともなつてをるに相違ない。彼の友人ケェルネルに與へた音信の一節に——これを探ぐり出したのはオットオ・ランクの功である——シルレルはこの友人が、彼の不足勝ちな制作について歎じたのにかう答へてをる。「私の思ふところでは、君がかく歎ずる原因は、君の悟性が君の想像力に加へる强迫に存してをるやうだ。私はここに或る考へを浮べてそれを一つの比喩でわかり易くしてみねばならぬ。若し悟性が流れ出てくる觀念を、謂はば門口のところで旣に、餘りにも銳く吟味するならば、それはいいことぢやない、精神の創造的仕事にとつて不利益であると思はれるんだ。一つの觀念は、孤立的に眺めてみると、甚だ些細なもので且つ甚だ奇異なものであることもあるが、併しその後から來るもう一の觀念によつて恐らく重要となり、恐らくそれ等も同じやうに無趣味に思はれる他のいくつもの觀念と結びつくと、恐らくは或る甚だ合目的的な一員たる役をなすことができるに至るかもしれない。——若し悟性だつたら、これ等のものとの結合に於いてそれを眺めてみるに至るまでしつかりと引き留めて置かなければ、これら凡てを判斷することはできない。反之、創造的の頭腦にあつては、悟性は門口からその番兵を引きさがらしてしまつてをるから、いろんな考へがごつちやごつちやに雪崩れこんで來て、そしてその後でやつと悟性はこの大群を總攬し且つ吟味するので

ある。――批評家諸君、及びその名は何と呼んでゐてもいいが、諸君は、瞬間的にちらと通り過ぎる妄念を恥ぢるか、乃至は恐れてをる。この妄念こそは凡ゆる特色ある創作家に見出されるものであり、そしてそれの繼續が長いかそれとも短かいが、思索的藝術家と夢想家との區別をなすのである。諸君が人の制作不十分を歎くのも、諸君があまりにも早く非難し、あまりにも嚴格に區別するから起ることなんだ。」一七八八年、十二月一日附書簡）。

（而かもシルレルの所謂「悟性が門口から番兵をかくも引き退がらせる事」は、卽ちそれと同じやうに批判なき自己觀察の狀態へわれを置きかへる事は、決してむづかしくはない。）

私の患者の大部分は最初の指導の後それをやり遂げた。私自身も若し私の思ひ付を書きつけて手助けしてくれるならば、それを甚だ完全にやることはできる。かくして批判的活動がそれだけ低減せられ、そして自己觀察の强度がそれと共に高められ得るその精神的精力の總額は、それに注意力が固定されるべきその題目の如何に應じて、著しく增減する。

さてこの方法を使用するに際して先づ第一に敎へられるのは、總體としての夢をでなく、その內容の箇々的な部分だけを注意力の對象とするがよいといふことである。まだ練習されてゐない患者に向つて私が、この夢についてどんなことが思ひつくかね？　と訊くと、その時には大抵の

患者は自分の精神的視野の中に於いて何物をも摑んでみせることはできない。私はその夢を部分的に砕いて、患者の前へ出してやるよりほかはない。さうすると患者は、その部分のどれについても、一列の思ひ付を私に提供するが、かかる思ひ付を吾々は夢のその部分の「背景思想」と名づけてもいい。これでみると、既にこの第一の重要な條件に於いて、私の行つた夢判斷の方法は民間の歴史的に且つ傳說的に有名な象徵的判斷法とは相離れて、そして第二方法、卽ち「暗號方法」に接近する。私の方法はこの方法の如く、總體(アン・マス)にでない、部分的判斷(アン・デテーユ)である。この方法と同じく、夢を始めからして或る組み合せ物として、精神的形成物の混成體として考へるのである。

神經病患者に精神分析法を施してをる間に、私は既に千以上の夢を判斷してをるにはをるが、併しその材料をここに夢判斷の技術と學說への導きのため流用したくはない。それは神經病者の夢であつて、健康な人間の夢へ向つて何かの推論を導き得るものではない、といふ辯駁に自分を曝すことになるかもしれんことなどは、全く度外視するとしても、もつと別の一理由が、私をしてこの材料を排斥するを餘儀なくするのである。これ等の夢が目標とする題目は、當然いつも、その神經病の根柢となつてをる病歷である。そのためにどの夢に對しても皆、あまりに長すぎる前置きの報告と、精神神經病の本質及び病源學的諸條件への探入とが必要となるであらうが、そ

れ等はそれ自身としても新しく、且つ極度に怪訝なものであつて、從つて注意を夢問題から逸せしめることになるかもしれないのである。私の意圖の向ふところは寧ろ、夢の分解を以て神經病心理學の面倒な諸問題を解釋するための一箇の準備仕事たらしめんとするにある。然るに若し私が私の主要材料たる神經病患者の夢を斷念することになると、殘りの材料に對してはあまり選擇的な處置を取ることはできない。漸く後に殘るのは、私の友人關係の健康人から機會あつて物語られた夢か、又は夢生活に關する文獻中に實例として記載されてゐる夢かである。ところで殘念なことには、これ等凡ての夢には、私から言はせると、分析は施せない。そして分析がなくては、私は夢の意味を見出すことができない。私の方法は、かの與へられた夢內容を或る一つの固定せる方式に據つて飜譯する民間の暗號方法のやうに、勿論そんなに樂なものではない。却つて私の覺悟してをるところでは、同一の夢內容が人を異にし又聯絡を異にする時には、異なれる意味を藏するかもしれんのである。さういふ譯で私は、ほゞ常規的な人物から出てをり、日常生活の多樣な機緣にも關係する豐富にして便宜な材料として、私自身の夢を使ふことにした。人は屹度かやうな「自己分析」の確實性に對する疑惑を私に加へ、この場合には勝手氣儘といふものが決して除かれてゐないだらうと言ふかもしれない。併し私の判斷によれば、自己觀察に於ける方が他

人の觀察に於けるよりも、もつと好都合な事情がある。それはとにかくとしても、夢判斷に於いて自己分析を以てどれほどのところまで達し得るかを試めしてみるのはよからう。それとは別の征服すべき困難は、私自身の內心にある。誰でも自分の精神生活からそれほど多くの內輪の事を暴露するについては、あたりまへな羞恥を持つてゐる。その際に又、他人の誤解を果して受けずに通るかどうかも、安心はできない。併し吾々はそんなことを超越することができなければならない。デルベフは言つてをる。「凡ゆる心理學者はそれによつて何等かの隱微な問題に光明を投ずるものだと思つてるとしても、なほ自己の弱點をも告白せざるを得ないものである。」そして私はかう假定してもいいかもしれんのだが、讀者にとつても亦、私が犯さざるを得ないその祕密漏洩に對する興味を最初は抱くにしても、それは間もなくしてこれがために照らされた心理學的問題への專念的沒頭のために、席を逐はれることになるであらう。

それでは私は私自身の夢の一つを探し出して、それによつて私の判斷方法を說明するであらう。かういふ夢はどれでも一つの前置きを必要とする。さてところで、私は讀者にお賴みせねばならぬ。暫くの間、讀者は私の關心事を以て讀者自身の關心事となし、私と共に私の生活の極く細かな瑣事の中へまでも沈湎してくれねばならぬ。なぜならば、夢の匿れた意味を知らんとする

興味は、斷乎としてかかる轉身を要求するものだからである。

前置き。一八九五年の夏、私や私の家族と、親しい友人關係であつた一人の若い婦人に、私は精神分析法で治療を試みたことがあつた。關係が、かういふぐあひに入り組んでゐると、醫者、殊に精神治療學者にとつては、それがさまざまな昂奮の源となることがある。その醫者の個人的關心が大きくなるだけに、醫者としての權威の方は小さくなる。失敗することでもあつたら、その患者の緣戚者達との古い友情がぐらつきはしまいかなどと脅かされるものだ。で、その治療は一部的な成功を以て終つた。患者にはヒステリー症の憂慮はなくなつたが、彼女の身體上の徵候の全部までは無くならなかつた。私はその當時ではまだ、ヒステリー病歷の究極的な解決の特徵となる標準については、本當の確信はついてゐなかつた。それで、この婦人患者に對して或る解決を强ひたが、それは彼女には受け入れられるものとは見えなかつた。かういふそぐはない狀態で夏の時候のためこの治療を一先づ打切つた。——或る日、私の親友の一人であり私よりも年少の同僚が私を訪問したが、彼はかの婦人患者——イルマ——とその家族を田舍の轉地先に訪ねて來たのであつた。彼女はどんなだつたと私は訊ねた。するとその返辭は、前よりはいいぐあひだ

が、併しすつかりとはよくない、といふのであつた。友人オットオのこの言葉か、或はその言葉が話された時の調子か、どつちかが、私を憤つとさせたことを、おほえてをる。私は例へばあなたは患者にあんまり約束をしすぎたのだとでもいふやうな、何か非難をそれから聞き出すものと思つた。そしてオットオが私に對して反對の立場を取るらしいのを、かの患者の近親者達からの感化に――それが當つてゐたか、それとも當つてゐなかつたか――歸した。この近親者達は、私が認めたところでは、私の治療を決して悦んでは迎へなかつたのである。併し私の苦痛的な感じは私にも明瞭とはならなかつたし、その感じを、私は少しも外に現しもしなかつた。その晩のうちに私は、兩方に共通の友人であつてその當時吾々の社會では指導的な人物であつたドクトルMに、まるで自分の辯明のためのやうに、渡すため、イルマの病歷を書き誌したのであつた。その夜に（或は寧ろ朝にであつたかもしれん）、私は次に述べる夢を見たので、目を覺ました後直ぐにそれを記錄して置いた。（私が立ち入つた判斷をしてみた夢は、これが最初である。）

一八九五年七月二十三日から二十四日に亙る夜の夢。

一つの大きなホール――多數の客があつて、吾々がそれを接待してをる。――そのうちにイル

マが居る。私はすぐ彼女を傍へ伴れて行くが、それは彼女の手紙の返事をし、彼女がかの「解決」をまだ受け入れないのを彼女に向つて非難しようとするためのやうだ。私は彼女に言ふ。あなたにまだ痛むところがあるんなら、それは實際ただあなただけの責任だ。――彼女が答へる。わたしが今咽喉や胃やお腹にどんな痛みを持つてるか、あなたにおわかりだつたら！　身體をぎつと締めつけるんですわ。――私はびつくりして、彼女を凝と見る。彼女は蒼ざめて腫れぼつたい様子であつた。やつぱりこいつあ、私が何か器官方面の事を見落してるんだな、と考へる。私は彼女を窓際へ伴れて行き、彼女の咽喉を見てみる。その時彼女は、義齒を入れてをる婦人達がするやうに、ちよつと反抗を現した。そんなことする必要はあるまいに、と私は自分で考へる。――そのあとで、彼女の口が樂に開いた。そして私は右の方に一つの大きな白い斑點を發見する。それから別のところには、明かに甲介骨の形に作られ、著しい縮れた形になつて、廣く伸びた灰白色の結痂が見える。――私は急いでドクトル・Mをこつちへ呼ぶ。彼は診察をくりかへして確めてくれる。……ドクトル・Mはいつもとはまるで別な様子であり、非常に蒼ざめ、跛歩をひき、顎には髯がない。……今度は私の友人オットオも彼女の傍に立つてをる。そして友人レオポルトは彼女の小さい體を打診してみて、左下のところに鈍痛がありますね、と言つて、左肩の皮膚の

浸潤した一部を指し示しもした（彼と同じに私も、着物があるにも拘らず、それを感じるのである）……。Mが言ふ、これや疑ひもなく何かの傳染病だ、だが心配なことは何もない。まだ赤痢を併發するかもしれんが、病毒は排泄されるだらう。……吾々はこの赤痢の原因が何であるか、直接に知つても居る。友人オットオが少し前に、彼女の氣分がよくなつた時、プロピール製劑で注射をしてやつたのだ。プロピール……プロピオン酸……トリメチラミン（その化學方程式が肉太に印刷されて私の前に見えた）……こんな注射をそんなに輕々しくやるもんぢやないのだに……多分注射器も綺麗ではなかつたのだらう。」

この夢は多くの他の夢に對して優れてをる一點を有してゐる。この夢が昨日のいかなる出來事と結びついてをるか、そしていかなる題目を取扱ふものか、それが直ちに明瞭であるのだ。前置きがこの點については說明を與へてをる。私がオットオからイルマの病態について受けた報知、深更に至るまでかかつて書いた病歴、それ等が睡眠中にも私の精神活動を煩したのである。それにも拘らず、この夢の前置の報告と內容とを承知するに至つた人といへども、誰も、この夢が何を意味するかを、推察することはできまいと思はれる。私自身もこれを知らない。私はイルマ

が夢の中で私に訴へた病氣の徵候が、そのために私が彼女に治療を試みてやつたその徵候とは同一でないので、不思議に思ふのである。私はプロピオン酸を以てする注射といふやうな馬鹿げた考へと、ドクトル・Mが述べる慰藉の言葉を思ひ浮べて微笑する。この夢は終り頃となるに從つて、その冒頭に於けるよりは、朦朧となり手短かになつたやうに思はれる。それ等一切の意味を知るために、私は詳しい分析の決心をせねばならない。

分析。「ホール——多數の客、吾々はそれを接待してをる。」私の一家はその夏をベルギウで、カーレンベルクに接續してる丘の一つの上にある一軒家で暮した。この家は、以前には遊山場に定められてゐたから、普通でなく天床の高い、ホール風の部屋々々があつた。あの夢は實にこのベルギウで見たので、而かもそれは私の妻の誕生祭の數日前である。その日の晝に私の妻は自分の誕生日に數多の友人が——そのなかにはイルマも入つてをる——お客として私達の家へ來るだらうといふ期待を口外してをつた。してみると、私の夢はその時の狀況をお先に失敬してをるのだ。つまり、私の妻の誕生日であつて、イルマもその中に入つてをる數多の人達がお客としてベルギウの家の大きなホールで吾々に接待されてをるのである。

「私はイルマに向つて彼女がかの解決を受け入れてないことを非難する。私は言ふ。あなたにまだ痛みがあるんなら、それはあなた自身の責任だ、と。」こんなことならば、私は覺醒時にだつて、彼女に向つて言ふことはできたであらうし、或は彼女にさう言つたことがあつたのである。その當時に私は、私の任務は、患者達に彼等の徵候の匿れた意味を告げ知らせるのを以て盡きるものだいふ意見（後にこれは正しくないと認められた）を有してゐたので、告げ知らした時に彼等がこの解決を受け入れるか、乃至は受け入れないか、成功はその如何にかかつてをるのだが、それに對してはもはや自分は責任なきものと考へてゐた。避くべからざる無智のなかにありながら治療の成功を生み出さねばならなかつた或る時代に於いて、私の生存の苦を輕からしめてくれたのは、この間違つた意見であつた。今では幸にも征服されたこの誤謬に對して、私はその恩を感じてをる。——ところで、私が夢の中でイルマに向つて言つた文章によつて、特に何よりも、彼女がまだ持つてをる痛みに對して自分は責任ないと主張する點に氣がつく。それがイルマ自身の責任であるとすれば、さうすれば私のではないことになるのだ。この方向にこの夢の意圖を探ぐるべきであらうか？

「イルマの訴へ。咽喉と腹部と胃の苦痛、身體をぎつちり締めつける。」胃の痛みはこの患者の

微候錯綜に屬するものであるが、併しその痛みは大して押しつけがましいものではなかつた。寧ろ彼女は胸苦しさと嘔氣の感じを訴へてゐた。咽喉や、腹部やの痛み、喉の締めつけられる感じなどは、彼女の病狀に於いては殆ど役割を演じることはなかつた。何故私が夢中の徵候をこんなぐあひに選び出す氣になつたものか、不思議であり、目下のところその理由を見出すことはできない。

「彼女は蒼ざめて腫れぼたい樣子であつた。」私のこの患者はいつも薔薇色をしてゐた。ここでは誰か別の人物が彼女とすり換はつてるのだと、私は推測する。

「私はこいつは何か器官的感じを見落してるんだと考へてびつくりした。」讀者が進んで私を信用してくれるであらう通り、これは、殆ど專ら神經病患者だけを診てをり、そしてほかの醫者ならば器官的に治療を試みるやうな多くの現象を、ヒステリーに押しつける習慣のついてをる特殊專門醫が抱く、決して消え去らぬ一つの心配である。他方に於いて――これは何處から來るのであるか私は知らないのだが――私の驚愕が果して全然正直なものであるか、といふ微かな疑が襲うてくる。若しもイルマの苦痛が、器官的に基礎づけられてをるのであるならば、そんなら私はまたもやその治療の義務はないことになる。私の治療は無論ただヒステリーの苦痛を除くだけ

だ。だから實は私には、診斷は或る誤謬があると期待するのが、當然だといふ考へも浮ぶのである。さうなれば失敗の非難も除かれるだらう。

「彼女の咽喉の中を見るために彼女を窓際へ伴れて行く。彼女は義齒を入れてをる婦人のやうに少しばかり抵抗する。そんなことしなくたつていいのに、と私は自分で考へる。」イルマについては口腔を檢査する動機は決してなかつた。夢の中のこの經過は少し前に試みた或る女家庭教師の診察を私に思ひ出させる。彼女は始めには若々しい美しさの印象を與へたのであつたが、口を開けるに際して齒竝を匿さうとする或る身構へをしたのであつた。この事件へ更に結びつくのは、醫者の診察と、その診察の際に、醫者にも患者にもどつちにも面白いことにもならずに暴露されることのある小さな祕密とに對する別のいろいろな記憶である。――そんなことする必要はないのに、といふのは、いかにも先づ、イルマに對するお愛想であらう。併し私はなほもう一つ別の意味を推測する。注意深い分析では、吾々は期待すべき背景的思想を十分汲み盡くしたか、どうかを感ずるものである。イルマが窓際に立つてをる樣子は、私をして突然にも或る別の體驗を想起せしめる。イルマには一人の親密な女の友人が居る。私はこの人をいたく尊重してをる。或る夕方私が彼女の許を訪れた時、彼女が夢の中で再現された狀況を以て窓際に居るのを見出したの

である。そして彼女の醫者、かのドクトル・Mが、彼女がディフテリア薄膜を持つてるのだと說明して聞かした。ドクトル・Mといふ人物と、結痂とは夢の續きに再び出てくる。今私に思ひ付くのは、この別の婦人も、イルマと同じやうに、ヒステリー症であると認定すべき十分な理由を、私は最近數箇月間に握つてをる事である。然り、イルマ自身がその事をひそかに私に打ち明けたのであつた。併しかの婦人の狀態については私は何を知つてをるか？　正に次の一事、卽ち彼女は夢の中のイルマのやうに首を締められるヒステリー性妄想に惱んでる一事である。してみると私は夢の中で私の患者の代りに彼女の友人を置いたのであつた。今また私は思ひ出すのだが、私は屢々、この淑女も、イルマと同じく、その徵候から救つてくれるやうに私を賴むかもしれんといふ推測を弄んだことがあつた。併し後に私はそんなことはありさうもないことだと考へた。と言ふのは、この婦人は甚だ遠慮深い性質だつたからである。夢が示してをる通り、「彼女は抵抗した。」「彼女はそんなことしなくともいいんだ」といふのも、もう一つの說明になるだらう。彼女は今まで實際十分の强みを示して、他人の助けをかりないでも自分の狀態を統御してをつたのである。さてあとに殘るのは漸く若干の點のみで、それはイルマにも、又彼女の友人にも、あてはめられない。卽ち、蒼ざめて、腫れぼたく、義齒。義齒は私をして、かの女家庭敎師を思はしめ

た。ここでは粗惡な齒といふので滿足したらいい、といふ氣がする。さうすると、これらの點が暗示することのできる一人の人物が私に思ひ浮んでくる。その人は同じく私の患者ではない。そして私は、この人は私に對しては遠慮をすることに氣づいてをるし、温順な患者ではないと思つてをるから、この人を患者にほしいとは思はないのである。彼女は平素は靑ざめてをる。そして嘗つて特別に幸せな時代にあつた時は、腫れぼたい樣子をしてゐた、（腹部の苦痛についてのまだ明かにされてゐなかつた訴へも、この第三の人物へ歸せられる。勿論ここに持ち出されてゐるのは、私自身の妻である。腹部の痛みは彼女の羞恥の情が私に明白となつた動機の或る一つを私に思ひ出させる。私は自分で告白せねばならないが、イルマと私の妻をこの夢の中では、私は甚だ親切には取扱はなかつたのであるが、私がお詫びとして申して置きたいのは、私はこの兩人を實直で温順な患者の理想を以て忖度したのである。）かういふわけで、私は私の患者のイルマを二人の別な人物と比較をしたのであつて、この二人が患者であつたらやはり治療に反抗したかもしれなかつたのである。私が彼女を夢の中で彼女の友人と取り換へてしまつたといふ事は、いかなる意味を持つことであらうか？　或は、私が彼女を取り換へたく思つたのであつたかもしれない。別の婦人の方が私に一層强い同感同情の念を喚び起したか、又はこの婦人の智性について一層高く私は尊重するところがあつたか、どつちかである。

私はイルマは私の解決を受け入れない故に、彼女を悧巧でないと考へる。別の婦人だつたら、もつと悧巧だらうに、從つてもつと柔順だらうに、と考へるのである。口がその後で樂に開いた。これの意味も、彼女の方だつたら、イルマよりはもつと多くを話してくれるだらうに、といふのである。（この部分の判斷は匿れた意味一切を追求するに十分なところまでは運ばれてゐない、といふ氣がする。三婦人の比較をなほ續けようとしたら、餘り脫線になるかもしれない。――どんな夢にも、その夢が究めがたくなつてゐる或る一箇所があるものだ。これは謂はば一つの要石（かなめいし）であつて、それによつて夢は未知の世界と聯絡してゐる。）

「咽喉に何を見たか。白い斑點と、結痂のある甲介骨。」かの白い斑點はディフテリアを、從つてイルマの友人を思ひ出させるが、併しその外に、ほぼ二年近く前の私の長女の重いこの病氣とその災ひな時の凡ゆる恐ろしさをも思ひ起さしめる。甲介骨の結痂は私自身の健康についての配慮を注意してくれるものである。その頃私は苦しい鼻腔肥大を靜めるために、屢々コカインを使用してをつたが、數日前に、私と同じことをやつてをつた一人の婦人患者が鼻粘膜の或る擴大的な壞疽を招いだといふことを聞いてをつた。一八八五年に、私から唱導されたコカインの推賞は、私に重い非難をもたらして居る。一八九五年に死んだ私の大切な友人は、この藥品の亂用のた

めその死を早めても居つたのであつた。

「私は急いでドクトル・Mを呼び寄せた。彼は診察をくりかへした。」この事は簡單にMが吾々の間に於いて占めてゐた地位に相通じたことかもしれない。併しその「急いで」は或る特別な説明を要求するに十分なほど、目につくことである。それは私に醫者としての悲しい或る體驗を思ひ出させる。私は昔、その頃はまだ無害だと見做されてゐた或る藥品（Sulfonal）を續けて處方したために、一人の婦人患者を重い中毒症に陷らせ、その後大急ぎで經驗のある年長の同僚に援助を頼み込んだことがあつた。私がこの事件を實際眼中に置いてゐたのである事は、或る副的な事情によつて一層確められる。その中毒症に罹つた婦人患者は私の長女と同じ名を持つてゐた。私は今まで嘗つて一度もあの事を思ひ出さなかつた。そして今や殆ど一種の運命的報復の如くに私の心にそれが浮ぶのである。それはまるで、私は人物の代用を別の意味で續けなければならんとでもいふやうにである。あのマティルデの代りにこのマティルデを。まことに、眼には眼を、齒には齒を、だ。それはまるで、私は自分に向つて自分の醫師としての良心の缺乏を非難し得るための機會を、いつも探し出してをるかのやうである。

「ドクトル・Mは蒼ざめて、顎に髯がなく、跛足をひいてをる。」これについては、彼の悪い風貌

が屢々友人達に心配を抱かせることがある、といふ點では當つてをる。その外の二つの特質は誰か別の人に屬するものに相違ない。私には私の兄が思ひつく。彼は外國に住んでをるのだが、顎を剃つてをり、よく思ひ出してみると、夢の中のMに全體に於いて似てをつた。二三日前に、彼は關節炎を患つて腰部に故障がある（跛足をひいてをる）といふ報知を、私は受けてをつた。この兩人を夢の中で溶かして一人物にしたについては、何か理由がなければならない。果して私は、この兩人に對して似たやうな理由から不快を感じてをつたことを思ひ出す。兩人とも私が最近に彼等に與へた提議を拒絕したことがあつた。

「友人オットオが今度は患者の傍に立つてをる。そして友人レオポルトは彼女を診察し、左下部に鈍痛あることを證明する。」友人レオポルトは同じく醫者で、オットオの親戚である。彼等は同じ專門をやつてをるので、自然競爭者となる羽目に立つてをり、いつも世間から比較されてをる。この兩人は私がまだ神經病小兒施療所長をしてをつた時に、數年間私の助手をしてゐたことがある。夢の中に再現されたやうな情景は其處で再々起つたことであつた。私がオットオを相手に或る患者の診斷について議論をしてをると、レオポルトが新しくその小兒を診察して、病名の決定に對して何か期待しなかつた參考點を持ち出すことがあつた。彼等二人の間には、かの檢查

官ブレジヒとその友人カールの間にあるのと似た性格の相違が存してゐた。一方は才氣喚發で注目を惹くと、他方はのろくて用意周到で併し徹底的であつた。若し私が夢の中でオットオと用心深いレオポルトを互ひに向つて立たせるとすれば、それは明かにレオポルトの肩を持つてやるためになされるものだ。これは、前に不柔順な患者のイルマと彼女よりもつと悧巧だと思はれてゐた彼女の友達との間の比較と似た比較である。それから又私は、考への結合が夢の中で進行する軌道の一つに氣がつく。卽ち、病氣の子供から小兒科病院へ、といふやうなものである。――左の下に鈍痛がある云々は、いつかレオポルトが彼の徹底性を以て私を驚嘆さしたことのある、何かの患者の場合に於ける細かな事柄に合致するのかもしれん、といふ印象を與へる。その外、私には何か病毒轉位症的感じといつたものが思ひ浮んでゐるが、併しイルマの代りにこの女だつたらと、私が願つてをつたあの患者に何か關係のあることであるかもしれない。といふのは、この淑女は私の大體見てゐる限りでは結核病に類似してをるからである。

「左肩に浸潤した皮膚の一部分。」私にはすぐにわかる。これは、私が深更まで起きてをつたりすると、定まりきつて感ずる私自身の肩の僂痲質斯である。夢の中の文句はいかにも曖昧に聞える。「私が……彼と同じに感じるところでは。」これは、自分の身體に感じる、といふ意味だ。併

し「浸潤した皮膚の一部分」といふ言ひ方はいかにも普通でなく聞えるのが目につく。吾々は「左、背後（うしろ）、上部の浸潤」といふのになら慣れてをる。これも肺に關係してをり、從つてまた結核病とも關係するのかもしれない。

「着物にも拘らず。」これは勿論ただ挿句にすぎない。小兒施療所の小兒を吾々は當然着物を脫がして診察した。成人した婦人患者を診察するのにせねばならん樣子とは反對である。或る優秀なる臨床家は患者をいつも着物の上から物理的に診察をしてをつたといふ話は、よく聞くところだ。これ以上の事は私にはぼんやりしてをる。私は打ち明けて言へばこの點で深入りする興味を持たない。

「ドクトル・Mは言ふ。これは何か傳染病だ。併しちつとも心配はない。この上赤痢も並發して、毒素は排泄されるだらう。」これは最初には滑稽に思はれた。併し他の一切と同じに細心に分解されねばならない。蓋しこれとても、詳しく觀察をしてみると、一種の意味を示すのである。私が患者に發見したものは、局部的ディフテリティスであつた。私の娘が罹病した時代の記憶に、ディフテリティスとディフテリアとについての論爭がある。後者は一般的傳染病であつて、局部的ディフテリティスから發するものだ。レオポルトは鈍痛によつてかかる一般傳染病を立證してをるが、

その鈍痛は從つて病毒轉位症の病源地を思はしめるものである。勿論私はディフテリアにあつてさやうな病毒轉位が現れはしないと考へてをる。それは寧ろ膿毒症を思はしめる。

「ちつとも心配なことはない。」これは慰めだ。私は考へるのに、この慰めは次のやうな仕組みになるものである。夢の最後の部分は、患者の苦痛は或る重い器官的病患から出てをるものだといふ内容となつた。これで私は責任を私から轉じ去らうとする氣でゐるんだな、といふ氣がする。ディフテリア疾患の持續に對しては、精神的治療法が責任を持たされるわけはない。ところで併し、ただ自分の厄介をのがれたいためばかりに、イルマにこんな重い疾患をこぢつけたといふことが、私を僻易させる。これはいかにも殘酷に見える。だからそのをさまりがうまく行くといふ保證が私に要ることになる。かくてこの慰めの言葉を正にドクトル・Mといふ人物に言はしめてをるのは、下手ではなく選んだものかなと思ふ。併し私はここではその夢以上に超然としてをるが、これは說明を必要とする。

ところでこの慰めが何故そんなに馬鹿らしいか?

「赤痢。」病毒が腸を通つて排泄され得るかもしれんとは、一種の理論的考へではあるが、先づ思ひつきがたいやうなものである。こんなものを持ち出して、私はドクトル・Mが思ひがけぬと

ころから引き出してくる說明や、奇妙な病理學的關係をつなぎ合はせることなどやを、澤山にやるのをからかはうとしたのであるか？　赤痢についてはもつと別の事が私に思ひつく。二三箇月前に私は著しい便通障害に苦しんでる一人の若い男を引き受けてみたが、外の醫者達はこの男を「榮養不良を伴へる貧血症」の患者として診察してをつたのであつた。これはヒステリー症が問題の中心なんだと私にはわかつたが、私の精神療法をこの男に試みてみる氣はなく、海の旅行に出してやつた。ところで二三日前に埃及から出したこの男の絶望的な手紙を受取つたが、それには、彼はそこで新しい發作にすつかり參らされた、醫者はそれを赤痢だと言つた、と書いてある。私は無論その診斷は誤謬にすぎない、診斷をした無智な醫者はヒステリーに欺されたのだ、と推測はしたが、併し自分で考へれば、自分はこの男を旅行になど出してやつて、ヒステリー症的腸疾患に對してなほ或る器官的疾患をも若しかしたら加へるに至るかもしれんやうな境地へ置いたのだ、といふ非難を自分に加へずにはをられなかつた。その上、赤痢(Dysenterie)の音は、ディフテリア(Diphtherie)の音に似通うてをる。そしてこの後者の名稱は夢の中には擧げられてゐない。

　さうだ、私は「また赤痢が併發するかもしれん云々」の慰安的豫後診斷を以てドクトル・Mをからかつたものに相違ない。なぜなら私が思ひ出してみると、數年前の或る時、彼は別の醫者に

ついて全く似たやうなことを笑ひながら私に物語つたことがあるからだ。彼はこの醫者との立合診察のため或る重病患者のところへ招ばれたが、大變樂觀的に見えたこの相手に向つて、患者の尿を見ると蛋白がありますよ、と敎へてやらなければならない氣がした。併しその醫者はまごつかされないで、泰然として答へて言ふには、「心配なことはありません。あなた、蛋白はきつと排泄されますよ！」――それでこの夢のこの部分にはヒステリーの知識を持たぬ醫師達に對する嘲りが含まれてをる事は、もはや疑ひのないところである。これを實證するかのやうに、私の心へ次ぎのやうな考へが、ちらりと浮んでくる。一體ドクトル・Mはイルマの友人たるあの婦人患者に現れて、結核病患者でないかとの懸念を起さしめる徵候は、ヒステリー症にも基いてゐるのであることを知つてゐるだらうか？　彼はこのヒステリー症を認めたであらうか、それともそれに「一杯喰はされた」のであらうか？

併しこの友人をこんなに虐待するのに、いかなる動機があり得るだらうか？　それは甚だ簡單だ。ドクトル・Mは私がイルマに要求した解決に對して、イルマ自身と同じやうに、同意しなかつたのである。これを以てみると、私はこの夢の中で二箇の人物に仇討ちをしてをる。イルマに對しては、あなたにまだ痛みがあるんなら、それはあなた自身の責任だ、といふ言葉を以て。ド

クトル・Mに對しては彼自身の口に言はしめた馬鹿げた慰めの文句を以て。

「その傳染病がどこから發してゐるか、吾々は直接に知つてをる。」夢の中でかく直接に知るといふのは甚だ注意に價する。たつた少し前には吾々はそれをまだ知つてゐなかつたのだ。だつてその傳染病は漸くレオポルトによつて立證されたのだから。

「友人オットオは、彼女の氣分がよくなかつた時に、一度注射をしたことがある。」オットオが實際物語つたところでは、彼がイルマの家族の許に滯在した短い時間の間に、隣りの旅館から迎へに來られて、そこで突然氣分を惡くした誰かに、注射を一本してやつたのであつた。注射はまた私に、コカインで中毒してしまつた私の氣の毒な友人のことを思ひ出させる。私はこの友人にモルヒネ排除中にこの藥品を內服用にだけしたまへと忠告してをいたのであつたが、彼は直ちにコカイン注射をして貰つたのである。

「何かプロピール製劑を以て……プロピール……プロピオン酸。」さあ、どうしてこんなことを夢みたのか？　あの病歷を書いてそれからあの夢を見た同日の夕方に、私の妻はリキュール酒の一瓶を開けた。その瓶には「アナナス」と書いてあつた（「アナナス」は私の患者イルマの姓に著しく似た音を含んでゐる）。そしてこれは友人オットオの贈物であつた。オットオは凡ゆる機會にかこつけて

贈物をする僻がある。願くば將來細君でも貰つてこの癖が癒つてほしいものだ。このリキユール酒からは一種フーゼル油くさい臭ひが流れ出すので、私はそれを飲んでみるのを斷つた。この瓶は召使の者たちにくれてやりませう、と私の妻が言つた。だが、彼女よりはもつと思慮深い私はそれを禁じて、人情的なことを言つてやつたものだ。彼等だつて中毒していいわけはないよ、と。ところでフーゼル油の匂ひ（澱粉アミール……）は私の心に、プロピール、メチール其他の聯關したものに對する記憶を喚び起した。その記憶が夢にかのプロピール製劑といふ材料を與へた。勿論その際私は一箇の代用品を取つたわけで、アミールの匂ひを嗅いだ後でプロピールの夢を見たのではあるが、併しかかる代用品は有機化學に於いて恐らく正に許されてをるところであらう。「トリメチラミン。」この物質について私は夢の中で化學方程式を見たのであるが、それは私の記憶力がいかに大きな努力をしたかをとにかく證據立てるものである。その式は而かも、恰もその前後の聯絡のうちでどれかを全然特別に重要なものとして示さうとする時のやうに、肉太に印刷されてゐた。さてそれほどにして私の注意を呼んだそのトリメチラミンなるものが、私をどこへ伴れて行くか？　或る友人と私との對話へと伴れて行くのである。この友人は數年以來、私が彼の仕事を知つてると同じく、私の發芽中の研究一切について知つてをる。あの夢を見た頃に

彼は私に性の化學なるものを作る或る觀念を話して、いろんなことを擧げたなかに、彼はトリメチラミンを以て性的新陳代謝の産物の一つなりと認めていいと信じてる、といふのがあつた。かういふことがあつたから、この物質は私を性の問題へ導くのである。性の問題は、私が治療せんとする神經性疾患の成立にとつて、最も大きな意義を有するものと、私は考へてゐる。私の患者イルマは若い未亡人である。で、若し私にとつて、彼女に對する治療の失敗を辯解することが當面問題であるならば、恐らくこの事實を引き合ひに出したら一番うまくいくのであらう。彼女の崇拜者達はこの事實をどうにか變化することを望んでをるのだ。併しかういふ夢はなんといふ妙な仕組みになつてをることであらう！　私が夢の中でイルマの代りに私の患者にしてをる別の婦人も亦、若い未亡人である。

何故にトリメチラミンの方程式が夢の中で斯樣に幅を利かしてをるのか、私には推測がつく。この一語に甚だ重要なものが集合してをる。卽ち、トリメチラミンは單に性問題の壓倒的な點を暗示するばかりでなく、一人の人物をも暗示してをる。その人物の贊成を思ひ浮べると、私の見解が世間からは見捨てられてると感じてる時にも、私は滿足を與へられるのである。私の生活に於いてかやうに大きな役割を演じてをるこの友人が、この夢思想的聯絡にあつて、その外に現れ

て來ない筈があらうか？　どうして、現れてをるとも。彼は鼻と鼻腔の疾患から發する結果につ
いては、特別に精通した人であつて、鼻腔の女子生殖器に對する非常に注目に價する關係若干を
學界のために明かにしてをる。（イルマの場合、咽喉内の三つの曲りくねつた形成物。）私はイル
マの胃の痛みが若しかして鼻疾患的原因のものであるまいか、どうかを、この友人に診察して貰
つたことがある。ところが彼自身鼻の化膿に苦しんでゐて、それが私を心配さしてをる。夢の病
毒轉位の際に私の心に浮んだかの膿毒症も、恐らくこれを暗示するものであらう。
「こんな注射をそんなに輕々しくやるものぢやない。」ここではこの輕率の非難は直接に友人オッ
トオに投げつけられる。彼がその日の午後に言葉と眼付で私と反對派の味方となつてゐる證據を見
せるやうだつた時にも、私は心のなかで似たやうなことを考へてをつたと思ふ。それは略ぼこん
な風なことであつた。なんと輕々しくこの男は人から動かされることだ、自分の判斷をなんと輕
輕に片づけてしまふことだ、と。――その外に上掲の一文は、あんなにそそかしくコカイン注射
の決心をした亡友のことをも指示するのである。前にも言つた通り、私はあの藥品の注射などは
毫も意味したつもりでなかつたのだ。ああいふ化學的藥品を輕率に取扱ふものだな、といふぐあ
ひに私がオットオを非難してをる場合に、自分は復たあの不幸なマティルデの話に觸れてをるの

だ、と氣がつく。そこから同一の非難が私に向つて來るのだ。ここに私は私の良心性の實例を明かに集めてをるが、併しまたその反對の實例をも集めてをる。

「多分注射器も綺麗ではなかつたんだらう。」これもまたオットオに對する非難だが、出所は別である。私は毎日八十二歳になる或る婦人にモルヒネの注射を二本しなければならないが、昨日この婦人の息子に偶然出會つた。彼女は今田舍に居る。そして靜脈炎症に罹かつてるといふことを聞いた。私はすぐに、これは注射器の不潔から來た浸潤なんだ、と考へてみた。二箇年間といふもの、彼女にたつた一囘も浸潤を起さしたことはなかつたといふのが、私の自慢であつた。注射器が果して綺麗になつてるか、どうか、といふのが勿論私の常住の心配であつた。私は正しく良心的なんだ。その靜脈炎症から復た私は私の妻へ考へを移す。妻は姙娠中で靜脈結帶にかかつてゐたのである。さてかうなると、私の記憶の中には三つの相似た境遇が、私の妻について、イルマについて、及び死んだマティルデについて、浮びあがつてくる。この三つの境遇の同一性のために、私は明らかに當然にも、この三人物を夢の中で互ひ互ひに代用したのである。

*

さてこれで私は夢判斷をやり終つた。この仕事の間私は骨を折つて凡ゆる思ひ付、それは夢內

容とその背後に匿れてゐる夢思想との間に比較をなす時に必ず喚び起されるに相違ない思ひ付を全部拒んで、用ゐないで來た。そのうちに夢の「意味」が私に開かれた。私はこの夢によつて實現せられ、且つこの夢作用の動機であつたに違ひない一つの意圖を認めた。この夢はその夕方の出來事（オットオの報告、病歷の記載）によつて私の心に喚び起された若干の願望を實現してゐる。乃ち、イルマになほ存してゐる苦痛については私は責任がない、オットオにその責任がある、といふのがこの夢の結果である。ところで、オットオはイルマの不完全な治療に就いて述べたことで私を憤らした。夢は非難を彼自身へ投げ返して以て、私のため、彼に仇討ちをしてくれる。夢はイルマの病狀を他の要點（一系列の理由づけ）に還元せしめて、それに對して私は責任がないとしてくれる。夢は私がかうありたいと願つてゐる通りの一狀況を現し出すのである。これを以て考へれば、夢の內容は一つの願望實現であり、夢の動機は一つの願望である。

　これだけが先づ眼につく。併し願望實現といふ立脚點に立つと、夢の細部についても、いろんな點が私には理解のいくものとなる。私はオットオに對して醫者として輕率な振舞をすると押しつけて（注射）、彼が輕率にも私に反對の態度を取つたことに仇を討つばかりでなく、フーゼル油臭い匂ひのする粗惡なリキュール酒に對しても復讐を企ててゐる。そしてこの二つの非難を一つ

に現す表現を私はこの夢に見出すのである。卽ち、プロピール劑を以てする注射だ。私はまだ滿足でない。彼に對して彼よりももつと信用のできる競爭者を對立させて、私の復讐をつづける。これで私は、この人の方が君よりか私は好きなんだ、と言ふのであるらしい。併し私の憤怒の重さを感じなければならん人は、オットオ一人きりではない。私はもつと悧巧で、もつと溫順な人と取換へることをして、かの不柔順な患者にも、仇を討つた。私はドクトル・Mにも、彼の矛盾を平氣に許してはやらず、一つの明白な暗示を以て、彼はこの專門に對しては一箇の無智な人間であるといふ私の意見を、彼に示しやつてをる(「赤痢が併發するかもしれん、云々」)。のみならず、私は彼などを捨てて、もつと一層よい知識の別の人(私にトリメチラミンの話をしてくれた友人)へ訴へてをるやうだ。ちようどイルマを離れて彼女の女友達へ、オットオを離れてレオポルトへ心を向けると同じに。これ等の好かない人物を逐ひやつて、それの代りに私が好きで選ぶ三人が居てくれるならば、私の考へでは不當に蒙つてをるあれ等の非難を免がれるのだ! あれ等の非難そのものの根柢ない事は、夢の中で實に委曲をつくして證明された。イルマの苦痛は私の背負ふべきものでなくなる。彼女は私の解決を受け入れることを拒むのだから、彼女自身がその苦痛に責任があるのだ。イルマの苦痛は少しも私の關知するところでない。なぜならそれは器

官的性質のものであつて、精神的治療では全く治癒し難いのであるから。イルマの苦惱は彼女が寡婦であるといふ境遇によつて十分說明はつくが（トリメチラミン！）、無論私がこれを變更してやることはできない。イルマの苦惱はオットオがそれには適せざる藥劑を以てやつた不用意な注射のため惹き起されてをるのだ、私だつたらそんな注射はしなかつたらう。イルマの苦惱が不潔な注射器での注射の結果であるのは、私の老婦人患者の靜脈炎症と同じであるが、私は私の注射に際しては決して一度も何かを惹き起したことはない。勿論私は、私の負擔を除くために集つてくる、イルマの苦惱についてのこれ等の說明が、お互ひの間に於いて一致してをらない、のみならず互ひに互ひを排斥し合つてる事には、氣がついてをる。この抗辯全部が――この夢は正に抗辯に外ならない――借りた釜を損じた狀態で返却したといふので、隣人から訴へられた男の抗辯を、生々と思ひ出させる。第一に曰く、釜は損ぜずに返却してをる。第二に曰く、釜は借りた時に既に穴が明いてゐたのだ。第三に曰く、隣人から釜など借りたことは決してない。更に一層結構なのは、若しこれ等三つの抗辯のうち一つでも吟味に合格するものと認められたら、この男は無罪放免されねばならんのである。

なほ他の題目がこの夢の中へ入り込んでをる。イルマの病氣の負擔から私が免れる事とそれ等

の題目との關係は、あんまり透明ではない。それは私の娘の病氣、彼女と同名だつた婦人患者の病氣、コカインの被害、埃及に旅行中の私の患者の疾患、私の妻や私の兄やドクトル・Mの健康についての心配、私自身の體の不快、鼻の化膿に惱む不在中の友人についての心配、等がそれである。併し是等一切を眼中に纏めてみると、それが互ひに組合はさつて、唯だ一つの思想圏となり、言つてみれば、それにはかういふレッテルが貼つてある。自已及び他人の健康の心配、醫師としての誠實。オットオがイルマの病狀の報知をもたらした時に、私は或る不明瞭な苦痛を感じたことを思ひ出す。このほんの一時的な感じに對する表現を、夢の中に一緒になつて働いてをる思想圏のうちからして、追加として入れて置きたい。オットオは私にかうでも言つたのであつたか、といふ感じなのである。あなたは醫者としてのあなたの義務を十分眞面目には引受けてをられない。あなたは誠實でない、自分で約束なさることを守らない、と。これに對して、私がいかに高い程度に於いて誠實であるか、私の家族、友人、患者達の健康がいかに甚だ私の氣にかかつてをるものか、その證據を提供することのできるために、上述のやうな思想圏は私が使はうと思へば、使へたのであつたかもしれないのである。この思想材料のうちに、私の辯解よりは、寧ろオットオに向けられた非難を賛成する苦痛な記憶も存在してることは、注目に價する。材料は謂

はゞ不偏不黨だ。併しこの夢の基礎となつてるこの廣汎な方の材料と、イルマの病氣に對して責任なくてあらうとする願望が因つて生じてをるこの夢の狹い主題との間に聯絡あることは、見誤らるるべくもない。

私はこの夢の意味を完全に發見した、この夢の判斷は缺け目なきものだ、とは主張する考へを持たない。

私はまだ長い間この夢に足を留め、その中からしてもつと先の説明を取出し、この夢が掘り出せと命ずる新しい謎を研究することができるのかもしれない。より以上の思想的聯絡がそこを出發點として、追跡せらるべき箇所いくつかを、私自身承知してもをる。併しどんな夢でも、自分のものとなると、それを取扱ふ時に必ず考へられる遠慮が、私をしてこの判斷の仕事から離れさすのである。この遠慮に對して性急にも非難を構へようとする人があるならば、その人はまあ自分でやつてみたらいい、私があつたよりもつと正しくあれるか、どうかを。私は今のところ、新しく得られた一つの認識を以て滿足する。それはかうだ。若しここに示された夢判斷の方法を守るならば、夢は實際に意味を有してをり、決して、著述家達が主張するやうに、四離滅裂なる腦髓活動の現れではない事を、見出すのである。判斷の仕事が完全にやられるならば、夢は一箇

209

の願望實現であることが認識される。

第三章　夢は願望實現なり

狹い窪んだ小徑を通つた後で、突然丘の上へ來た、そこからは道が分岐してゐる、そしていろんな方角に當つて實に豐かな眺めが開けてゐるとしたなら、暫くそこに足を停め、先づどつちへ向つたらいいかを考へるわけであらう。上述の第一の夢判斷を征服した後の吾々の氣持ちは、それと似たものだ。吾々は一つの突然なる認識の明るさのなかに立つてゐる。夢は、演奏者の手の代りに、何か外部的な暴力に打ち叩かれる樂器の、不規則な音響と比較し得るものではない。夢は無意味でない。荒唐無稽でない。吾々の表象の寶庫の一部分は、目覺め始めるのに、他の部分は眠つてゐるのだ、などといふ前提も要らない。夢は一箇の完全な精神的現象である。而も一箇の願望實現である。夢は覺醒時の理解し得る精神的行爲の聯絡の中へ組み入れられる。いとも複雜した一つの精神的活動が夢を築きあげてゐる。かういふ認識を享樂しようとするその同じ瞬間に、併し乍ら夥しい疑問が吾々を襲擊してくる。夢判斷の指示によつて、夢は一箇の實現された願望を現すものとするにしても、この願望實現が表現されてゐるあの著しい、そして、怪訝を感

ぜしむる夢の形は、どこから發するのであるか？　吾々が目を覺ました折に思ひ出すあの明らかな夢が思想からして構成されるまでには、その夢思想はいかなる變化を蒙つてをるのであるか？それ等の變化はいかなる道を通つて行はれたか？　加工されて夢になつたその材料はどこから出たか？　夢思想について氣づくことのできた、例へばその思想が、互ひに矛盾することもある（前出、釜の類例、第二〇六頁）といふ特色の多くがどこから起因するか？　夢は吾々の內的精神的經過に關して何か新しいことを敎へ得るか、吾々が晝の間に信じてをる意見を夢の內容が訂正するやうなことがあり得るか？　私はこれ等一切の疑問を暫らく傍に捨て置いて、ただ一つの道をなほ先へと辿つてみることを提議する。夢は或る願望をば實現されたものとして現す、この事を吾々は今見聞してしまつた。吾々の次の興味は、果してこれが夢の一般的一特質であるか、それとも吾々が分析を始めてみたあの夢（イルマの注射の夢）の偶然的內容であるにすぎないか、を探求することであるとしよう。なぜならば、凡ゆる夢は一つの意味と精神的價値を有するものだと定めて置くにしても、なほこの意味が凡ゆる夢に於いて同一ではあるまいといふ可能性を、吾吾は許さざるを得ないからである。吾々の第一の夢は願望實現であつた。併し第二の夢は恐怖の實現であるといふことになるかもしれない。第三の夢は內容に對する反映を持つてるかもしれな

い。第四のは簡單に或る記憶を再現するかもしれない。してみると、なほもつと別の願望夢があるか、又は恐らく願望夢よりほかに何も存在しないものか？

夢が屢々願望實現の特質を明白に認めしめ、その結果人をして何故に夢の言葉がとうの昔に了解を得なかつたのだらうと怪しませることがあるのを、指摘するのは容易である。例へば私が好きなだけ度々、謂はば實驗的に、自分で作り出すことのできる夢がある。私が夕食に鰯やオリーヴや又は其他強い鹹味のあるご馳走を喰べると、夜中に喉が乾いて、目が覺める。併しその目覺めの前に夢があつて、この夢は必ず同じ内容を持つてをる、卽ち私は水を飮むのである。私はどくどくと水を飮む。それが實においしい。そのおいしさは、渇に苦しむ時に、冷めたい飮料が與へる味はひにのみ較べられるやうなものだ。その後で私は目を覺まし、そして實際に水を飮まずにはをられない。この簡單な夢の動因は、私が目覺める折にも感じてをる渇である。この渇の感覺から水を飮みたい願望が發生し、そして夢は私にこの願望を實現さして見せる。その際に夢は或る機能に從ふのであるが、その機能を私はすぐに思ひあてる。私はよく眠る男で、何かの必要で目を覺まされる習慣がない。自分が水を飮むといふ夢によつて自分の渇を靜めることができれば、私などばその渇を充たすために目を覺まして起きるまでもないのである。だからこれは一つ

の便宜の夢 (Bequemlichkeitstraum) である。夢作用が實行の代りになる、實生活に於いてその他にもある通りに。遺憾ながら渴を消さんとするための水の要求は、友人オットオとドクトル・Mに對する私の復讐要求のやうには、一つの夢で滿たされるものでないが、併しそのよき意志は同じである。あの夢が近頃少しばかり變改されたことがある。その時私は就眠前に旣に渴を覺えて、私の寢床の傍の小箱の上にあつた水のコップを飮みほした。二三時間後、夜中に新しく渴の發作が來て、その結果いろいろの不便が生じた。水を手に入れるには、起き上がつて、私の妻の寢臺のところの箱の上にあるコップを取つて來なければならないやうだ。それで私の見た夢は合目的で、私の妻が水入れから私に飮ましてくれるのである。この水入れは私が伊太利旅行から持ち歸つて、その後人に吳れてしまつたエトルーリア產の納骨壺であつた。ところがその中の水は非常に鹽つぱかつたので(明かに、死骨のため)、私は目を覺まさざるを得なかつた。これで、夢がいかに都合のよい仕組みを作ることを心得てるかが、わかる。願望實現がその唯一の意圖であるから、夢は完全に利己的であるわけだ。便宜への執着は他への遠慮とは事實結ばれ得ない。納骨壺の入り込んで來たのも復た、多分一箇の願望實現と思はれる。私がこの壺をもはや持つてゐないことは、ちようどまた私の妻の側の水入れコップが私の手に屆かないのと同じに、私には殘念

なのである。納骨壺はまた、鹽辛い味の今や一層强まつた感じにも順應してゐるものであり、この感じのため私は目を覺ますべく餘儀なくされるだらうといふことを、自分で承知してゐる。(渴の夢の事實はヷイガントも知るところであつて、彼は第四一頁に次の如く逃べてゐる。「渴の感覺こそは凡ての人々によつて最も緻密に理解されてゐる。この感覺は常に渴を消す表象を生む。――夢がこの渴を消すをいかに表象するか、その方法は樣々であつて、手近かな或る記憶に從つて特殊化される。この場合にも一般的な一現象は、渴を消す表象のすぐ後に、その假想的淸涼の效果が僅少なるに對する一種の幻滅が現れる事である。」ヷイガントは併し、刺戟に對する夢の反應に存する一般妥當的のことを見落してゐる。――夜中に渴に襲はれて、その前に夢を見ることなくして目を覺ます人が外にあるとしても、これは私の實驗に對して何等の抗辯を意味しはしない。それは寧ろ、これ等外の人々がよく眠らない人である性質を示すものだ。――なほイェザイアス、(舊約書)第二九、第八を參考せよ。「腹の減つてゐる者は自分が食事をする夢を見るが、目を覺ますと、彼の精神はやはり空であると同じに、喉の乾いてゐる者は飮む夢を見るが、目を覺ますと、彼はぐつたりとしてやはり喉が乾いてゐる……。」)

かかる便宜の夢は私の靑年時代には甚だ頻々たるものであつた。以前から夜晩くまで仕事をする癖があつたので、定刻に目を覺ますのがいつも難事であつた。その時には私は自分が寢床から

出てしまつて洗面臺のところに立つてをる夢を見るのがきまりであつた。暫く經つと、私はまだ起き出してゐるんではなかつたといふ考へを、拒むことはできなかつたが、併しそのうちにまた暫く眠つてしまつてゐた。私の若い同僚の一人に、私とこの寢坊を同じうすると思はれるのが居つた。私は彼が見た特別面白い形の怠惰の夢を知つてをる。病院の近くの彼が居た下宿の主婦さんは、毎朝ちやんと時間に呼び起してくれるやうに、嚴重な賴みを受けてをつたが、さてこの賴みを實行しようといふ段になると、面倒なことであつた。或る朝のこと、眠りは特別に樂しかつた。主婦が部屋へ向つて呼びこんだ。誰それさん起きなさいよ、病院へ行かなけあいけません。それにつゞいて、なほ眠つてるこの友人は、病院内の一室、自分が寢てをる寢臺、それから頭のところに吊してある名表の夢を見た。その名表には、誰それ……助手。二十二歲、と文字が讀まれた。彼は夢の中で自分に言つた。ぢや、病院に來ちまつてるんなら、出掛けるまでもないこつた、と。そして〻るりと寢返りをして、眠りつゞけたものである。これで卽ち彼はその夢をみる動機を明けすけに自分で認めてしまつたわけであつたのだ。

これと同じやうにその刺戟が睡眠そのものの間に働きかけて來た、もう一つの夢。私の婦人患者の一人が顎の手術を受けたところ、それが拙く行つたため、醫者達の希望で、日夜患部の頰に

冷温裝置をしてゐねばならなかつた。併し彼女は眠り込んでしまふや否や、いつもその裝置を振りはづすのであつた。或る日、彼女にそれを叱つてくれるやうに私が賴まれた。彼女が復たしてもその裝置を床へ振落してしまつたのである。患者は辯解した。「今回は實際わたしのせいではないんです。昨夜見た或る夢の結果です。私は歌劇場の棧敷に坐つてゐて、そのお芝居を大變面白がつてる夢を見た。ところが療養所にはカール・マイエルさんが寢てをられて、顎が痛むので恐ろしく惱んでゐたんです。わたしは自分で考へました。わたしには痛みがないから、裝置の必要はない。それだからわたしはそれを投げ捨てたんです。」この可哀相な患者の夢は、誰でもが不快な境遇に居ると、口に出したがる文句を言ひ現すやうなものだ。卽ち、私だつてもつと面白いことを本當に知つてをるんだけど、と。夢がこのもつと面白いことを示してくれる。夢みた患者が自分の苦痛を押しつけてやつたカール・マイエル氏といふのは、彼女がその時思ひ起すことのできた知己のうちの、最も無關心的な若い人であつた。

これ等に較べて、私が健康人について集めてをる若干の他の夢の中に願望實現を見つけ出すことは、よりむづかしいことではない。私の夢學說を知つてをりそれを自分の妻に語つて聞かしたとある友人が、或る日、私に言ふには、「私の家内が昨日、月經が起つた夢を見たんだ。これを君に

語つてくれといふんだがね。これがいかなる意味か、君なら知つてるだらうから。」勿論私はそれを知つてをる。若し若い人妻が月經の起つた夢を見るなら、月經は止まつてをるのだ。母となるの厄介が始まる前に、婦人はなほ暫く、自分の自由を享樂したがつてるだらうことは、想像することができる。あれは彼女の最初の姙娠を告示する一つの巧智なる方法であつた。もう一人の友人は手紙でかう言つてよこした。彼の妻が近頃、自分の胴衣の胸のところに乳のよごれを見つける夢を見たのであつた。これも亦、姙娠告示の一種だが、併し最初の姙娠のではない。若い母は第二番目の兒のために、第一回目の時よりも、もつと榮養を持ちたいものだと願ふのである。

傳染病に罹つた自分の子供の看護中數週間もぶつ通して社交から遮斷されてをつた或る若い夫人は、その病氣が目出度く片づいた後で、或る集まりの夢を見た。その集まりにはア・ドウデエ、ブルジェ、エム・プレヴォー其他の人が居合はせて、みんなが彼女に對して大變親切をして彼女を素的に興がらしてくれた。これ等の作家達はその夢の中でも彼等の肖像畫が示してをる顔容をしてをつた。彼女がその肖像畫を知らなかつたエム・プレヴォーは、その前日病室を掃除し、長い時間の後最初の訪問者としてこの病室へ足を入れた男――消毒人夫に似てをつた。この夢なら缺け目なく飜譯せられると思ふ。卽ち、今こそ、あの果てしない病氣看護などよりももつと面白いこ

とに對する時節が來たのだ、といふのである。

恐らく以上の選擇で次の事實を證明するには十分足りるであらう。ただ願望實現としてのみ理解され、そしてその內容を明らかに見せてくれる夢が甚だ屢々、且つ實に樣々な條件の下に見出されるといふ事實を。これ等は大部分短いそして簡單な夢であつて、ありがたいことには、主として、かの著述家達の注意を惹きつけた紛糾して豐富すぎる構造の夢からは、際だつて異つてゐる。これ等の簡單な夢になほ暫く足を停めてみるのも、甲斐のあることだ。夢の最も簡單な形は勿論子供に期待することができる。子供の精神的作業は、確かに成人した者のそれよりも、複雜な程度は少ない。兒童心理學は私の意見では、成人者の心理學のために、ちようど下等動物の骨骼なり乃至は發達なりの調査が、高等動物類の體格の硏究にとつて與へると相似た務めをなすのを以て、使命とするものである。兒童の心理學をかかる目的のために利用せんとする目的意識的の步みは、現在まで僅かしか行はれてゐない。

小さい兒童の夢は單純な願望實現であつて、從つて成人者の夢に較べると、とても興味あるものではない。彼等の夢は解くべき何等の謎を與へはしないが、併し夢はその最も內的なる本質から言へば一箇の願望實現を意味するものだ、といふ事に對する證明にとつては、勿論いかに尊重

するも足りないものである。私は自分の子供達についてなした材料で、かかる夢の若干の實例を集めることができた。(經驗の敎へるところでは、既に四歲乃至五歲の小兒に、判斷の必要ある歪められた夢が現れる。この事は、夢の歪みの條件に關する吾々の理論的見解に、よく適應するものである。)

一八九六年の夏、アウスゼーから美しいハルシタットへ遠足をしたことがある。この遠足のおかげで私は二つの夢を得た。一つはその時八歲半の私の娘のであり、もう一つは五年四分の一歲の男の子のである。前置きとして次の事を報告せねばならぬ。その夏、私達はアウスゼーのほとりの或る丘の上に住んでゐた。そこからはいい天氣の時には、ダハシタイン山の素的な眺望を樂しむことができた。望遠鏡でみると、シモニーの小舍がよく見わけられた。子供たちはそれを望遠鏡で見ようと何遍も骨を折つてをつた。それがどれくらゐ成功したか、私は知らない。その遠足の前に私は子供達に、ハルシタットはあのダハシタインの麓にあるんだと語つて聞かした。彼等はその日を待つて悅んでゐた。ハルシタットから私達はエッシェルン谷へ入つて行つたが、この谷の風景が變化あるので子供たちは夢中になつて悅んだ。ただ一人、五歲の男の子だけは、だんだん不氣嫌になつた。新しい山が見え出す度に、彼は訊いた。あれがダハシタインかつて。それ

に私は、いいえ、これはほんの前山さ、と答へねばならなかつた。この問が二三度くりかへされた後、彼はすつかり默りこんでしまつた。瀧へ行く階段の道なんかは、彼は皆といつしよに行くのがいやらしかつた。私はこれあ疲れたんだなと思つた。ところが翌朝に彼がすつかり樂しさうにして私のところへ來だ。そして昨夜みんなでシモニー小舍へ行つた夢を見た、と語つた。これで私は彼のことがわかつた。彼は私がダハシタインのことを話した時に、ハルシタットへの遠足の時にはこの山へ登つて、望遠鏡で見る時に、あんなに話に出たあの小舍を見ることだらう、といふ期待を抱いたのだ。その時になつて、前山だとか瀧だとかで話をそらされるんだと思つた時に、欺まされた氣がして、不氣嫌になつた。夢がその代償をしてくれたのである。私はその夢の細かな點を聞き知らうと努めたが、その細かな點は貧弱であつた。「六時間も段々を登つて行くんだよ。」それは彼が前に聞いてをつたことである。

八歳半になる娘に於いてもこの遠足で願望が喚び起され、そしてそれを夢が滿足さしてくれねばならなかつた。私達は隣家の十二歳になる息子をハルシタットへいつしよに伴れて行つた。この子は立派に出來上がつた騎士(ナイト)であつて、私の見たところでは、旣にこの小さい婦人の凡ゆる好意を享樂してをつたやうであつた。この小さい婦人は翌くる日の朝に次のやうな夢を物語つた。

「ねえ、あたいこんな夢を見たの、あのエミールがうちの人になつて、うちのお父さんとお母さんにパパ、ママと言つてるのよ。そして大きなお部屋に、うちの赤ちやんたち見たいにして、あたいたちといつしよに眠つてるのよ。そしたらお母さんがお部屋へ入つて來て、青いのや綠色の紙にくるんだ大きな棒のチョコレートを、手一杯澤山に、あたいたちのお床の下へ投げてくだすつた。」彼女の兄弟たちは父から夢判斷の知識を遺傳してをらないため、全くかの著述家達と同じに言ひ切つた。「そんな夢は馬鹿らしいや。」すると娘は少なくともその夢の一部に對しては辯護をした。どの部分に對してであるか、を知ることは、神經病の理論にとつて價値あることである。「エミールがすつかりうちの人になつてるなんて、それや馬鹿らしいわ。だけど、棒のチョコレートのことはさうぢやないことよ。」私には正にこの後者がわかりにくかつた。これについては妻が說明を提供してくれた。停車場から家へ來る途中、子供たちは自動器の前で足を停め、この自動器が彼等の經驗では賣つてをる筈の金屬性の輝く紙に包んだ、正にかの棒狀のチョコレートをほしがつたのである。お母さんがその時かう思つたのは尤もであつた。今日は澤山、願ひを充たしてやつてしまつてある、と。そしてこの願望はこれを夢のために殘してやつたのである。その小場面は私の目に入らずにをつた。夢の內容のうち娘が無視した部分を私はわけなく理解した。

私はあの上品なお客さまが途中でパパかママが追ひつくまで待合はせるやうに、子供たちを促がしたことがあつた、といふことを親しく聞いてをつた。この時にエミールが一時私達の家族のやうになつた狀態を、この少女の夢は繼續的に採用したのである。まだ少女たる彼女の溫情は、夢の中に示された、そして自分の兄弟たちとの平素の關係から引き出された形以外では、エミールと一緒に居ることとの形を知らなかつたのである。棒狀のチョコレートが何故寢臺の下へ投げられたかは、この少女をすつかり訊きたださないでは、勿論說明のつくことでなかつた。

私の男の子の夢と全く似た或る一つの夢を私は知人方面からも聞いたことがある。それは八歲の女の子が見たものであつた。その子の父が四五人の子供を伴れて、ドルンバハの方へ散步をした。ローレル小舍を訪れるつもりであつたのだが、あまり晩くなつたのでき引返した。そして子供たちに向つて、いつか別の時にこんどの償ひをしてあげようと約束をした。その歸り途に彼等はハメアウへ行く道を指示する道標の傍を通りすぎた。すると子供たちはそのハメアウへも伴れて行つてくれと望んだが、同じ理由から復もや他日を約束してなだめられねばならなかつた。翌朝かの八歲になる娘がパパのところへ滿足げにやつて來て、「パパ、今日あたい夢を見た。パパはあたいたちといつしよにローレル小舍やハメアウへ行つたのよ。」　卽ち少女の性急がパパがして

くれた約束の實現を先にやつてしまつたのである。

アウスゼーの土地の美が私のその當時三年と四分の一歳である娘に喚び起したもう一つの夢も、同じやうに正直なものである。この娘は初めて湖水を舟で渡つたのであつた。その乘船中の時間が彼女にはあまりにも早くすぎてしまつた。着船場で彼女は船を離れたくなくつて、烈しく泣いた。翌朝彼女は、昨夜湖水を舟で遊んで歩いた、と語つた。望むらくはその夢の舟遊びが彼女を一層よく滿足さしてくれたであらうことを。

今八歳の私の長男は既に彼の空想の現實化を夢みてをる。彼はアヒレスと一つ馬車に乘つたことがある。御者はディオメデスであつた。その前日に勿論彼は、姉に贈られたのであつた希臘の傳說を讀んで感激してゐたのであつた。

子供たちの睡眠中の言葉が同じくその夢作用の範圍内に屬するものだといふ私の考へに同意して貰へるならば、私は私の蒐集のうちの最近の夢の一つを次に報告することができる。その時生後十九箇月であつた私の末女が或る朝吐瀉した。それでその日一日ぢう、絕食のままにされてゐた。この絕食の空腹の日の晩に、彼女が睡眠中に昻奮してかう叫ぶのが聞えた。「アンナ・フ（ロ）イト、い（ち）ご、すぐり、おむれつ、パップ。」この頃この小さい兒は自分の名前を所有權獲得を

現すために用ゐてゐた。列べた獻立は、彼女がほしく思ふ喰べ物に相違なかつた一切を包括してをる。欒果がこの文句の中に、二樣の變種となつて現れた事は、家庭の衞生方針に反對する一種の示威運動であり、その原因は、保姆が彼女の身體の不快を、あんまり澤山欒果を喰べすぎたのに歸してをつたといふ從的の事情に存してをり、よくも彼女はそれに氣がついてゐたものだ。自分にとつて不都合なこの鑑定に對して、彼女は夢の中で復讐を企てたわけである。(この小兒よりはほぼ七十歲も年よりである祖母の夢にその後間もなく、この一番小さい孫に起きたと同じやうなことが行はれた。遊走腎の不安のため一日間絕食を餘儀なくされた後で、この祖母は、明らかに昔の嫁盛りの幸福だつた時代へ逆もどりをして、自分は晝と夜の食事に「お招ぎを受けた」、お客に呼ばれて、二度とも實に立派なご馳走を据ゑて貰ふ夢を見たのである。)

小兒時代はまだ性慾を知らないから幸福であるといふにしても、生活の大きな衝動中のもう一つが、彼等にとつて幻滅と斷念と、從つて夢刺戟のいかに豐かな源となり得るものかを、見誤つてはいけない。(追記。小兒は性的無智なりとする考へに對する訂正。小兒の精神生活をもつと立ち入つて研究してみると、吾々は勿論次の事を敎へられる。幼穉な形となつてではあるが、性的衝動力が小兒の精神の活動に於いて十分に大きな、ただあまりにも久しい間看過されてゐた、一役を演じてをることを敎へられ、そ

して成人した人達が後になつてからそれを作つてみるやうな小兒時代の幸福といふものに對しては少しく疑を抱かせられるのである。著者の「性慾說に關する三論文」Drei Abhandlungen zur Sexualtheorie. 1905. 5. Aufl. 1922 參照)。これについて第二の實例。私の生後二十二箇月になる甥が私の誕生日のため私にお祝ひを述べ、贈物として小さな一籠の櫻桃を捧呈すべき役目を受けた。櫻桃はその季節ではまだ走り物の一つであつた。その役は彼にはむづかしいやうだつた。なぜなら彼は「櫻ん坊が入つてる」と繰返へすのを止めず、何と言つても、その籠を兩手から離さなかつた。併し彼はこの時の償ひをすることを心得てをる。今までは彼は毎朝その母に「白い兵隊さん」の夢を見た話をした。それは彼が嘗つて往來で見て嘆賞した白い外套を被た近衞の士官の夢だつたのだ。ところがこの誕生日の奉仕の次の日に、彼は目を覺ますと、悅ばしげに報告をした。その報告は何かの夢からでなければ出るものではない。「へ(ル)マンちやんは櫻ん坊をみんな喰べちまつたのよ!」(次の事もここに擧げずに置くわけにはいかない。小さい子供たちには、間もなく複雜した、そして透明なところの少ない夢が現れ出すのが常であり、他方に於いて成人者にも、事情によつては、子供のやうな簡單な幼稚な性質の夢が屢々現れる。四歲乃至五歲の年齡の子供の夢が既に、思ひもかけなかつた內容を、いかに豐かに含みうるかは、私の「五歲の男の子の恐怖症の分析」(Analyse der Phobie eines fünfjährigen Knaben.

1909）及びユンクの「兒童精神の葛闘について」(Jung, Ueber Konflikte der kindlichen Seele. 1910）の中にある實例が示してゐる。分析的に判斷された小兒夢についてはなほ、フーク・ヘルムート、プットナム、ラールテ、シピールライン、タウスク等の人の論文を見よ。バンシーリ、ブーゼマン、ドクリア、殊にヰガムの論文には、別の實例もある。ヰガムは小兒夢の願望實現說を力說してゐる。他方に於いて、成人者にも、幼稚な類型の夢が、殊に彼等が通常でない生活上の條件下へ移される時には、屢々現れるやうである。例へばオットオ・ノルデンスクヨルドは彼の著書「南極氷洋」(Otto Nordenskjöld, Antarctic. 1904. Bd. I. p. 336）の中に彼と共に冬を過した乘組員について次のやうに報告して居る。「正に現在のやうに旺んであり且つ多數であつたことは嘗つて決してなかつた吾々の夢は、吾々の最も內心の思想の方向にとつて、甚だ特色を示すものである。吾々の仲間のうち、平素は夢を見るのが例外であつたやうな人達でさへ、今では每朝、この夢といふ空想界の昨夜の經驗をお互ひに交換し合ふ時に、長い話を語ることができるのであつた。凡ての夢が現在の吾々からはいかにも離れた外部の世界に關係してゐるが、たまには現在の吾々の狀況にあてはまるものもあつた。特別に特色的な一つの夢の內容は、吾々の仲間の一人が昔の學校時代へ逆轉したと思ひ、そこで特に授業用に作製されたほんとに小さい海豹の小模型の皮を剝ぐ仕事を與へられたものであつた。併し吾々の夢が一番頻々と回轉される中心點は飮食であつた。吾々の一人は、この男は夜中に大午餐會へ出かける點で群を拔いてゐつたが、朝になつて、「おれは三皿も出る午餐をやつたぜ」と報告することができた時には大得意であつた。も

う一人は煙草の夢、山なす煙草の夢を見た。また外の人達は、帆を孕まして大海をやつてくる船を夢みた。なほもう一つの夢はここに擧げるだけの價がある。郵便配達夫が郵便を持つて來て、なぜこの郵便がこんなに長く待たせたのか、その長い説明をやる。彼はそれを間違ひて配達した。そしてそれを再び取り戻すのには大變な骨折をやつた後で、やつとできたのだ、といふのである。勿論睡眠中にまだもつと不可能的な事柄をも夢みたのであるが、併し私自身が見たり、又は人の話に聞いた殆ど一切の夢に空想の缺乏してをることは、全く著しいことであつた。若し是等の夢全部が記載せられるならば、それは確かに大きな心理學的興味のものであらう。併し睡眠は吾々の誰でもが實に熱望してをる一切を吾々に與へてくれることができたのであるから、この睡眠がいかに望ましいものであつたかは、讀者の容易に理解し能ふところであらう。」デュ・プレル（第二三一頁）に據つて私はなほ引用しよう。「ムンゴー・パルクは亞弗利加の旅行中に喉の渇きに惱み拔いて、絶えず彼の故郷の水に豐かな谷や沃野の夢を見た。マークデブルクのシテルンシャンツェに於いて饑餓に苦しめられたトレンクも、豪奢なご馳走に取り圍かれた自分を見たし、フランクリンの第一回探險隊の一員であつたジョーヂ・バックは恐しい食料缺乏の結果、餓死に瀕してをつた時に、常に定まりきつて食事の夢を見たのであつた。」

獸類が何の夢を見るか、私は知らない。私の學生の一人から教はつたのだが、一つの俚諺がそれを知つてると主張してをる。と言ふのは、俚諺にはかういふ問答がある。問うて曰く、「鵞鳥は

何の夢を見るか？」答へて曰く、「玉蜀黍の夢を。」（フェレンツィに歸せられてゐるホンガリアの或る俚諺は、なほもつと完全に、「豚は櫟の實の夢を見、鵞鳥は玉蜀黍の夢を見る」と主張してゐる。ユダア人の俚諺にはかういふのがある。「鷄は何の夢を見るか？――黍の夢を。」）夢は一箇の願望實現なりとする全理論が、これらの俚諺に含められてをる。（一つの夢を一つの願望から引き出すことを私以前に誰か或る著述家が決して考へてみたことはなかつた、などといふことを主張するのは私の心にないことである。次章の冒頭を見よ。これ等の暗示に價値を置く人であるならば、既に古代の人々のうちからプトレモイス第一世の治下に生きてゐた醫者ヘロフィロスを引用することができるだらう。ビュクゼンシュッツ、第三三頁に據ると、この古代の醫者は三つの種類の夢を區別した、神の遣はしたる夢、自然の夢――これは、精神にとつて有益であるもの、及び生じるであらうところのもの、そのものの一影像を精神が自分で作るので、發生する――それと混合的の夢、これは吾々が願望するものを吾々が見る時に影像の接近によつて獨りでに發生する。シエルネルの實例蒐集の中からシテルケは一つの夢を特に引き出してゐるが、これをその著者自分で願望實現と名づけてゐる、第二三九頁。シェルネル曰く、「この夢みる女の覺醒時の願望を、この願望はこの人の心情の中に潑溂として存在してゐたのだから、單にそのために、空想が直ちに實現してやつたのである。」この夢は「情調の夢」(Stimmungstraum) の中に入つてゐる。「男及び女の戀の憧憬」と「不快な情調」とに對する夢は、この慾望の

近くに置かれてる。讀者にもわかるであらう通り、シェルネルは夢に對する願望作用に對し、覺醒時の何等か通常時的な精神狀態に與へるのとはもつと違つた意味を與へてゐる、とは言へない。況んやその願望を夢の本質と聯絡せしめてゐるなどは決して言へない。）

今になつて吾々は、若し吾々がただ世上の言葉遣ひだけを問題としたのであつたならば、一番近道をして、夢の匿れた意味についての吾々の學說へ到達したつたかもしれないのであつた、と氣がつくのである。悧巧ぶつた言葉遣ひはなるほど夢のことを時々輕蔑的に言ふ――「夢は泡沫なり」などと判斷したら、この言葉遣ひはかの學問に道理を與へんとするものだと考へるだらう――併し世上の言葉遣ひにとつては、夢は主として優しい願望の實現者であるのだ。「こんなこといくら大膽な夢にだつて考へたことはないだらう」と、現實界に於いて自分の期待以上のことに出くわす人は、狂喜して叫ぶのである。

第四章　夢の歪み

さて若し私が、願望實現は凡ゆる夢の意味であり、從つて願望夢(Wunschtraum)より以外の夢は決して存在し得ない、といふ主張を開陳することになると、最も斷乎たる反對を受けることは始めから確かである。人は私に向つてから持ち出すだらう。「願望實現なりと解せらるる夢が存在する事は新しいことぢやない、とうから著述家達によつて指摘されてをる。(ラーデシトック、第一三七、第一三八頁。フォルケルト、第一一〇、第一一一頁。プルキンイェ、第四五六頁。ティッシエ、第七〇頁。エム・シモン、第四二頁、入牢中のトレンク男爵の饑餓夢に關して。及びグリージンゲル、第一一一頁の一節、參考。――既に新プラトーン派のプローティンが言つた「慾情が起るとその時には空想が生じ、そして謂はばその慾情の對象物を吾々に現してみせる。」デュ・プレル、第二七六頁。)更に願望實現夢より外に決して存在する筈はない、といふのは、復た不當なる普遍化であつて、幸ひにもこれは容易に擊退される。蓋し最も苦痛的な内容を認めしめ、何等かの願望實現の痕跡を少しも認めしめざる夢も、十分澤山に現れる。悲觀主義の哲學者エドゥアルト・フォン・ハルト

マンは恐らく願望實現說に最も遠く立つ人であらう。彼はその「無意識の哲學」第二部（シラレオティ版、第三四四頁）に曰く、夢に關して言ふならば、夢と共に覺醒生活の凡ゆる煩勞が睡眠狀態の中へまで移り入つて行く。教養ある人士を人生と或る程度までは和解せしめることのできる唯一のもの、卽ち學術及び藝術の享樂、これのみは入つて行かない云々。更に彼に較べて不滿の少ない觀察者でも、夢では快よりは不快と苦痛が一層頻繁であることを力說してをる。例へばショルツ、第三三頁。フォルケルト、第八〇頁等。のみならず、サラア・ギード、フロレンス・ハッラムの二婦人は、自分達の夢の推敲により、夢に於いて不快の一層優勢なることに對し數學的の表現をも作り出してをる。彼女等は、夢の五十八パーセントを苦痛的なりと示し、積極的に愉快なるは二八・六パーセントにすぎずとした。生活の樣々な苦痛的感情を睡眠の中へまで續けるこれ等の夢の外に、恐怖夢（Angsttraum）といふものもある。これに於いては凡ゆる不快感覺のうちの最も厭やな不快が吾々をゆすぶつて、終ひに吾々は目を覺ます。吾々が今願望夢を明かに見出したといふその小兒達こそは、かかる恐怖夢によつて實にたやすく見舞はれるのである（夜中恐怖 pavor nocturnus に關してデバッケルを參照せよ）。

實際にこの恐怖夢こそは、吾々が前章の諸實例からして得た、夢は一箇の願望實現なり、とい

ふ命題の一般化を不可能ならしめる、のみならずこの命題を荒唐無稽として罵倒するもののやうに思はれる。

　にも拘らず、これ等の一見するところでは强制的にも見える辯駁から脱却することは、大して困難ではない。讀者よ、ただ次の事實に注目してほしい。吾々の學說は顯然たる夢內容の評價に基くものでなく、判斷の勞作によつて夢の背後に認識せられる思想內容に關係するものである。顯然たる夢內容と潜在的なる夢內容とを相互に對立せしめてみよう。その顯在內容が最も苦痛的なる種類のものであるやうな夢が存在するのは、その通りだ。併し誰かがこれ等の夢を判斷せんと試みたことがあるか、それの潜在思想內容を發見せんと試みたことがあるか？ところで若しそれがないならば、そんなら、かの二つの辯駁は吾々にはもはや當らない。とにもかくにも、苦痛的な夢、恐怖夢も亦、判斷の後には、願望實現であることが明らかにされる可能性は依然として存してをる。（讀者や批評家がいかなる剛情を以てこの考量を拒み、顯在及び潜在夢內容の根柢的區別立てを無視して捨ててるかは、全く信じ難いほどである。——併しこの私の開陳に同意すること多い點に於いては、スリーの論文「啓示としての夢」(J. Sully, Dream as a revelation) の次の一節に及ぶもの、文獻に殘された る意見中には一つもない。私がそれをここに引用するがために、この一節の功績が減少されることなどはない

やうであつてほしい。「さうしてみると結局、夢はチョーサーやシェークスピアやミルトン等の權威者によつてさうだと言はれてゐる全然の無意義ではないと思はれるであらう。吾々の夜の空想の渾沌たる聚合物は或る意味を持ち、新しい知識を與へてくれる。暗號で書いた文字のやうに、詳しく吟味すれば、夢文字はその囈語の如き最初の容子を失ひ、眞面目で知的な音信の局面を見せるのである。或ひは形容を少し更へて言つたら、一度字を書いて更にその上へ又字を書いた或るパリムプセストのやうに、夢はその價値なき表面文字の下に或る古いそして尊い消息の痕跡を現すものである」(第三六四頁)。

學問的仕事に於いては或る一つの問題の解決が困難を與へる場合に、或る第二の問題を更に附け加へてみると、往々有利なことがある。ちようど二つの胡桃を一つづつに砕くよりは二つ一緒にやると一層容易であるのと同じに。それで吾々は、苦痛夢や恐怖夢がどうして願望實現であり得るかといふ疑問を前にするばかりでなく、更に夢に關する吾々の今までの探求からして、第二の疑問を掘り出してみてもいい。吟味すると願望實現だといふ結果になる無關心的内容の夢が、何故明らさまにこの意味を示さないのであるか? イルマの注射についての前に長たらしく取扱はれたあの夢を取りあげてみよう。あれは決して苦痛的性質のものではない。あれは判斷によつて立派な願望實現であると認識せられる。併し一體何のために判斷などが必要であるか? 夢は

何故その意味することを直接に言はないのであるか？　事實イルマの注射の夢でも、初めにはそれが夢みる當人の或る願望を實現されたものとして現してる、といふ印象を與へはしない。讀者はそんな印象を受けなかつたであらう。私でさへも自分であの分析をやつてみないうちは、そんなことはわからなかつた。若しこの說明を必要とする夢の狀況を、夢の歪みの事實と名づけるならば、そこで第二の疑問が起つてくる。かかる夢の歪みは何から發生するものか？

これについて先づ思ひ浮ぶいろいろな考へに訊ねてみるならば、さまざまな解決に行きあたるかもしれない。例へば、夢思想に想應な表現を與ふる不可能力が睡眠中には存在するのだなどといふ解決もあらう。併し或る二三の夢の分析は、吾々をして夢の歪みについては、もつと別の說明を與へしめずにはをかない。私はこれを私自身の第二の夢によつて示さうと思ふ。この夢は復たしてもいろいろな祕密漏洩を要求するけれども、そんな私的な犧牲を拂つたつて、この問題を根本的に明らかになし得るなら、償ひは得られるのだ。

前置き。一八九七年の春、吾々の大學の教授二人が、私を員外教授に任命することを提議したといふ話を聞いた。この報知は私には不意打ちであつた。そして、この二人の優秀なる人達の側から私が認められた、それは私的な關係があるためなどではなかつた、かかる私の尊重の現れと

して、この報知は私をいたく悦ばした。併し私は、すぐに自分に向つて言つて聞かした。自分はこんな出來事には何等の期待をもつないではいけないぞ、と。本省は最近數年間この種の提議を顧みずに捨ててをつた。そして年齡に於いては私に優つてをり、功績に於いては少なくとも私と匹敵する數多の同職が、その後彼等の任命を待つてゐたが無駄だつた。私にならそれらよりももつとうまく行くかもしれんなどと、假定すべき理由は一つもなかつた。だからひそかに自ら安んじてをる決心をした。私は私の知る限りでは野心家ではない。稱號などで推賞されなくとも、私の醫師としての働きを、滿足な成功を以て行つてをるぢやないかと。とにかく、葡萄は私にはあんまり高いところに垂れてをるのだから、それがあまいとか、酸つぱいとか、私が言へる段ではとてもなかつたのだ。

或る晩方、私と親しい同僚が私を訪問した。この人は、その運命を私が自分の警戒に用ゐた人達のうちの一人であつた。教授に昇進させられる事は、吾々の社會ではその醫師を患者にとつて神の如き者にまで高めてくれるものであるが、この人は久しい前からその教授昇進の候補者の一人であつて、私などよりは諦めが足りないから、時々本省の事務局へ顏を出しては自分の一件を渉らして貰はうとしてゐた。その時もさういふ訪問をやつた後に私のところへ來たのであつた。

彼の物語つたところでは、彼は今回は本省のその高官どのを追ひつめて、直裁に訊いた、自分の任命が遅延するのは實際——信仰上の點のためでせうか、つて。その返辭は——勿論、目下の思潮では、閣下も當分なんともできないやうな次第で、云々、であつた。「これでまあ、少くとも、自分の事がどこまで來てるのか、わかつたわけさ」と、この友人はその話を結んだが、その話は私に何等新しいことをもたらさず、而も私の諦めを一層強めざるを得ないものであつた。卽ち、彼と同じ信仰上の顧慮は、私の場合にも利用しうるものであるのだ。

この訪問の翌朝に私は次のやうな夢を見た。その夢は形式から言つても注目に價してをつた。卽ちそれは二つの思想と二つの影像から成り立ち、一つの思想と一つの影像とが互ひに交替したのである。併し私はここにはこの夢の前半だけしか述べない。後半はこの夢を報告する本來の目的とは何の關係もないからである。

一、友人Rは私の叔父である。——私は彼に大きな愛着を感じてをる。

二、私の眼前にある彼の顏は少し變つて見える。長めに伸びたやうだ。顏を包んでをる黃色い髭が特別にはつきりと目立つた。

その次に二つの他の部分、これもやはり一つの思想と一つの影像とが續くのだが、私はそれを

省く。

この夢の判斷は次のやうなぐあひに行はれた。

午前中にこの夢がふと思ひ浮んだ時、私は笑ひ出して言つた、こんな夢は無意味だ、と。併しそれでは片づけられなかつた。一日中私のあとを追ひかけてをつて、終に夕方に私は自分に向つてかう非難をしたのである。この夢は「お前の患者の誰かが、夢判斷のために、あれは無意味なんですといふ以外何事をも言ふことができなかつたなら、お前はそれを叱りつけて、その夢の背後には或る不愉快な話が潜んでをり、それを知る勞をこの患者は省きたがるのだ、と推測することだらう。お前自身に對しても同じやうな態度を取れ。あの夢が無意味だといふお前の意見は、夢判斷に對する一箇の内的反抗を示すにすぎないでないか。邪魔されちやいけないぞ。」私はそこで判斷に着手した。

「Rは私の叔父である。」これはいかなる意味のことだらう? だつて、私は一人の伯父しか持つてゐない、ヨゼフ叔父しか持つてゐない。(この時――覺醒時に於いて――私の記憶が分析の目的のために狹ばめられてをることは著しいことだ。私は私の叔父のうち五人を知つてをり、そのうちの一人を愛し且つ尊敬してをつた。然るに夢判斷に對する反抗に打ち勝つたその瞬間に、私は自分に向つて、だつて私は一

人の叔父しか持つてゐない、この叔父が正にこの夢で意味されてゐるんだ、と言つたのである。）この叔父については勿論或る悲しい話があつた。或る時、もう三十年以上も前のことであるが、この叔父は金儲けの目論見から誤つて法律が重く罰してをる或る行動をなすに至り、やがて事實刑罰をも課せられた。私の父はその時心配からして數日の間に白髮を生じたのであつたが、いつもかう言ふのを常としてゐた。ヨゼフ叔父さんは決して悪い人間ぢやない、だが馬鹿なんだ、と。父はさういふ言葉で言つた。從つて若し友人Rが私の叔父ヨゼフであるとすれば、それで私は、Rは馬鹿だと言はんとするのである。殆ど信じがたい、そして甚だ不愉快なことだ！　ところで、私の夢に見たあの顏がある。長めな容貌で、黄色い髯がついてる。私の叔父は實際さういつた顏をしてをつた。長めで、美しいブロンドの髯で包まれてゐた。私の友人Rはすつかり黑味の人だ。併し黑い毛髮の人でも白髮が出始めると、その若い時代の華やかさの逆になる。醜くなる。彼等の黑い髯は一本一本或る面白くない色の變化をずつとやりつづける。先づ赤褐色になり、次には黄褐色になり、それからやつと灰色になる。私の友人Rの髯は今ちようどこの程度にあつた。私のだつてまたさうなんだが、私はそれを見て不滿に思つてをる。私が夢の中で見たあの顏は私の友人Rの顏でもあり、同時に私の叔父の顏でもあつたのだ。それはちようど、家族間の類似性を發見

するために數多の人の顏を同一乾板の上へ寫させたガルトンの複合寫眞のやうなものである。これを以てみると、友人Rは馬鹿だ――私の叔父のヨゼフと同じに、と私が實際に考へてをることについては、何等の疑惑もあり得ない。

私が自分で必ず抗らはざるを得ないやうなこんな關係を、何の目的のために作り出したのであるか、まだ全く察しがつかない。こんな關係のつけやうは大して深刻ではない。たぜなら叔父は罪人だが、友人Rは瑕疵のない人であるから。罰を受けたことがあつたとすれば、自轉車で丁稚を引き倒した時だけぐらゐであつたらう。私はこの非行を考へたのか？ そんなことをしたとしたら、この比較を滑稽化することになる。併しその時に私に思ひ付いたのは、二三日前にもう一人の同僚Nとやつた會話で、而もこれは同じ題目に關したものであつた。私は往來で、このNと出會つた。彼も教授に推薦されてゐた。私の名譽のことも知つてゐて、そのお祝ひを述べた。私はきつぱりとそれを拒ねつけた。「なんだ、あなたはご自分であの推薦提議の價値を經驗してをられるのに、そのあなたがそんな笑談は言つちやいけませんよ。」 これに對して、多分は眞面目でないやうだつたが、彼は答へた。「それはわかりませんよ。私には或る特別な邪魔があるんですからね。あなたご承知ぢやないんですか、或る人が嘗つて私を裁判所へ告訴したんですが？ 申上

げるまでもなく、取調べがやられました。なあに、私を恐喝しようとした平凡な一件だつたんです。私としてはその告訴人の婦人を罰を受けずに救つてやるのに、うんと骨を折つただけです。ところが、私を任命させないため、本省ぢや恐らくこの一件を持ち出してゐるらしいんです。だが、あなたなら、あなたは無瑕なんですもの。」これに思ひつくと、ここに罪人が出て來たわけだし、それと同時に私の夢の判斷も、傾向も、現れて來る。私の叔父ヨゼフは、この夢で教授に任命されない二人の同僚を、一人は馬鹿者として、も一人は罪人として、私に現してくれた。かく現すのが、私にどんな役に立つか、かうなるとそれも私にわかる。私の友人RとNの任命の遲延に對して「信仰上の」顧慮が標準となつてをるのならば、私の任命も亦問題となつてくる。併し若し私がこの兩人が退けられてをるのを、もつと別の、私には當てはまらぬ理由へ押しつけ得るならば、私の希望は亂されずにをる。私の夢は、さういふ態度をして行つた。即ち、一方のRを馬鹿者となし、他方のNを罪人とした。そして私自身はそのどつちでもない。吾々の間の共通性は無くなされた。私は教授への任命を悅んで待つてゐてもいい。かくして私は、Rの報告から聞いた事、即ちかの高官が彼に告白したといふ事を、私自身の身にも應用しなければならない羽根を脫却してしまつたのである。

私はまだもつとこの夢の判斷に從事しなければならない。私の感じにとつては、この夢はまだ滿足のいくほど片づいてゐない。教授の職に就く自分の道を塞がないために、二人の尊敬する同僚をいかにも易々とこき下ろしたことについては、私は依然として安んじられないのである。夢の中の陳述の價値を値ぶみすることを知つて以來、自分のやり方に對する私の不滿は旣に輕減されてをることは勿論である。私が實際にRを馬鹿者と思つてをる、私があの恐喝事件のNの說明を信じてをらない、などといふ人があつたら、私は誰に對してでも異議を申立てるであらう。イルマがプロピール製劑を以てしたオットオの注射のため危險な病狀となつたとも、無論私は信じてゐない。あの場合でもこの場合でも、私の夢が表現するものは、さういふ事情になつてほしいといふ私の願望にすぎないのである。私の願望を實現しようとする主張は、第一の夢よりも第二の夢に於いて、曖昧の程度が低い。ここではその主張が事實上の引きかかり點を巧みに利用して作られてをり、譬へればそれは、「何か曰くありげである」やうに見える上手に作つた讒訴のやうだ。なぜなら友人Rはあの時に彼自身に反對する或る主任教授の決裁を受けてゐたし、友人Nは前誹謗に對する材料を暢氣にも自分で私に與へてくれたのであつたからである。にも拘らず、私は繰返へして言ふが、この夢はもつと先の說明を必要とするやうに、私には思はれる。

今私が考へ出すところでは、まだこの夢には、今まで判斷か何の顧慮も拂つてゐなかつた或る部分がある。Rは私の叔父であると私に思ひ浮んだ後で、私の夢の中で彼に對し暖かい愛着を感じてをるのだ。この感じは何に屬するものか？　勿論私の叔父ヨゼフに對しては私は嘗つて一度も愛著の情を抱いたことはなかつた。Rは數年この方私の好きなそして大事な友人である。だが假りに私が彼のところへ行き、夢の中の愛著の程度にほゞ相當するほどの好意を彼に向つて言ひ現すとしたならば、彼は疑ひもなくびつくりして啞然とするであらう。彼に對する私の愛著は不眞實で誇大されてると思はれる。それはちようど、彼の人格と叔父の人格とを溶け合はして私が述べる、彼の精神的素質についての判斷と似てゐる。兩方が誇大されてゐるが、併し正反對の意味を以てである。さてところで、私には一つの新しい事情がぼんやりと浮ぶ。夢の愛著は潛在內容に屬するものでない、夢の背後の思想に屬するものでない。それはこの內容とは反對になつてをる。それは私に對して夢判斷のもたらす知識を蔽ひかくさうとする傾向のものである。多分はこれこそ、この愛著の目的でありさうだ。私は始めいかなる反抗心を以てこの夢判斷に著手したのであつたか、どれほど長くこの判斷を延期せんと欲し、この夢を以て全くの無意味なりとしてをつたかを思ひ出す。私は私の精神分析學的診療からして、かかる排斥的批判の意味がいかに解

せらるべきものか、承知してをる。かかる批判は何等認識上の價値を持たず、ただ感情發表の價値を有するにすぎない。例へば私の小さな娘が人の呉れた林檎を欲しくない時には、それを喰べてみもせずに、この林檎はにがいんだ、と主張するのである。私の患者達がこの少女と同じ振舞をするとすれば、彼等には何かの表象が中心となつてゐて、彼等はこれを追ひ拂はうと欲してるのであることが、私にはわかる。それと同じことが私の夢にもあてはまる。私がこの夢を判斷したがらないのは、その判斷は私がそれに反抗する何物かを含むで居るからである。夢の判斷をすつかり行つてみた後に、私は私が反抗してをつたものを知つた。それは、Rは馬鹿者だ、といふ主張であつた。私がRに對して感じる愛著は、これを潛在夢思想に歸することはできない。併しそれをこの私の反抗に歸することはできる。若し私の夢がその潛在內容と比較してみて、この點で歪んでをるとすれば、而かも歪んで反對的になつてをるとすれば、その夢の中にあつて顯在的なる愛著は、この歪みのために働いたのである。或は、語を換へて言へば、かの歪みはここでは故意的である。假裝の一手段であることが證明せられる。私の夢思想はRに對する或る誹謗を含んでをる。私がこの誹謗に氣づかないでゐてほしいために、その反對、卽ち彼に對する愛著的の感じが、夢の中へ入つて來たのである。

これは、普遍妥當的な認識であるかもしれない。第三章にある諸實例が示す如く、明らさまな願望實現である夢も勿論存在する。その願望實現が見わけ難い、變裝されてをる場合には、この願望に對する防禦の或る傾向が存してをるに相違ない。そしてこの防禦の結果、願望は歪んでより外には、現し出されないのであるかもしれない。私はこの精神內部生活の現象に對する並行的現象を社會生活から探してみよう。社會生活のどういふところに、精神行爲の類似的な歪みが見出されるだらうか？　二人の人物が居つて、その中の一人は或る權力を所有し、他の一人はこの權力のため遠慮をしなければならないやうな關係の場合にのみ、それがある。この第二の人物はこの時に彼の精神的行爲を歪める。或ひは、彼は假裝する、と言つてもいいかもしれない。私が每日行つてをる禮儀は、大部分一箇のかやうな裝ひである。私が自分の夢を讀者の爲に判斷する時に、私はかやうな歪みを餘儀なくされる。かかる歪みの强制については詩人も亦嘆じてをる。

「君が知り得る最上のことを、君は孩兒にも言つてはならない。」

爲政者に向つて不愉快な眞實を言はねばならぬ政治記者はこれと似た境遇にある。政治記者はその眞實を明らさまに言ふ時には、爲政者は彼の言說を抑壓するであらう。それが口頭の論說であるならば、追加訂正的に——それが印刷の方法で公表せられる意志の場合には、豫防的に。記

者は檢閲を恐れなければならない。彼はその意見の表現を輕減し、且つ歪める。この檢閲の强みと敏感さに應じて、彼は止むを得ず、或ひは攻擊の或る形式だけは止めるとか、或ひは直接なる書き方をせずに諷示を以て述べるとか、或ひは彼の嫌がらせの意見を、或る無邪氣に見える變裝の下に匿さなければならない。彼は例へば、祖國の官吏を眼中に置いてをりながら、中華國の二人の大官の間の出來事の話をするわけである。檢閲が激しく勢を揮へば揮ふほど、變裝は益々範圍を廣くし、方法手段は往々益々機智的となるが、その機智的な手段でも併し、讀者をその本來の意味の軌道へちやんと伴れてくる。

(ドクトル・フォン・フーク・ヘルムート夫人は一九一五年に或る夢の報告をしてゐるが、恐らくこれほどに私の命名を辯明してくれるに適した夢はあるまい。この實例の中では、夢の歪みは、手紙の檢閲が不都合に思はれる箇所を抹殺するためにやると同じ手段を以て、仕事してゐる。手紙檢閲はかかる箇所を塗りつぶして讀めなくするが、夢檢閲はそれの代りに或る理解しがたいつぶやきを以て補ふのである。——その夢の理解のため次の事を報告して置かう。夢を見た當人は大變名望のある立派な五十歳の婦人で、ほぼ十二年ほど前に死んだかなり地位の高い士官の未亡人であり、數人の息子の母であるが、そのうちの一人はこの夢の時には戰場に出て居つた。——さて、その「愛の奉仕」の夢の話。「彼女は第一衛戍病院へ行き、門の番兵に言ふ。醫長……

彼女は自分の知つてゐない或る名前を言つた――にお目にかからればならんのだ。この病院で奉仕をしたいのだから。その際彼女は「奉仕」といふ語に大變力を入れたので、下士はこれや「愛の奉仕」なんだな、とすぐ氣がついた。それが一老婦人だつたものだから、その下士は少し躊躇した後に彼女を通らした。然るに醫長のところへは來ずに、彼女は澤山の士官や軍醫達が長い一つの卓のところに、立つたり坐つたりしてゐる、或る大きなうす暗い部屋へ來た。彼女は或る一等軍醫に向つて自分の申出でをしたところが、この軍醫はちよつと聞いたばかりで彼女の意を理解してくれた。その夢に於ける彼女の話の文句はかうだ。わたしやキーン市の澤山の婦人たちや若い娘たちがいつなりとも進んで、兵卒や、軍屬や、士官やに區別なく……。ここまで來て夢ではその後はつぶやきになる。併しそのつぶやきがそこに居合はせた凡ての人々に間違ひなく理解された事は、その士官達の一部は狼狽した、一部は意地惡さうな身振り表情をしたので、彼女にわかつた。この婦人は言葉をつづけた。わたし達の決心がおかしく聞えることはわかります。けど、それはわたし達には大眞面目なんです。戰場に居る兵卒は、死ぬ氣があるかないかなど、問題にもされてをりませんものね。その後に數分間苦痛的な沈默がつづく。かの一等軍醫は片方の腕を彼女の腰にまはしてかう言つた。奥さん、あなたがそいつをお引き受けなさい。實際さういふことになるかもしれませんよ……。(つぶやき。)彼女は彼の腕から離れたが、その時かう考へて居た。誰だつて同じだわ。それで答へて言つた。まあ、わたしは老人ですわ、だからそんなことにはなりますまいよ。とにかく、一つの條件は固く守らなければいけません。年齢を考へに入れる

ことです。中年以上の婦人ならまだほんの若い男にはしない……(つぶやき。) そんなこと考へてもぞつとしますわ。——一等軍醫、いやようくわかりました。二三人の士官が朗らかに笑ひ聲をあげた。その中には若い時に彼女に求婚した一人も居つた。婦人は萬事をちやんと片づけるため、彼女と知己の醫長のところへ伴れて行つて貰ひたいと言つた。その時彼女はこの醫長の名を自分が知らないことに思ひついて、非常に周章てた。かの一等軍醫はそれにも拘らず、非常に丁寧に且つ尊敬を現はしつつ、そこの部屋からして直接階上へ通じてゐる大變狹い鐵の螺旋の梯子段を登って二階へおいでなさいと敎へた。それを登りながら彼女は一人の士官がかう言ってゐるを聞いた。これや大した決心だ。若いのか年寄りのか、關はないんだつて。みんな、氣を付けい！——單に自分の義務をなすのだといふ感情を抱きながら、彼女は無限の梯子段を登って行つた。この夢が數週間のうちになほ二度も繰返されたが——この婦人のいふところでは——全く些細な本當に意味のない變更があつたにすぎなかつた。」)

檢閲の現象と夢の歪みのそれとの間に存する細部に亙つてまでも辿り得らるる一致は、この兩者に對して類似的の條件を前提してもいいことを承認させるであらう。ここに於いて吾々は夢構成の原因者として箇人に於ける二つの精神的力(流動、系統 Strömungen, Systeme)を假定してもいい。そのうちの一方は、夢によつて表現さるる願望を形成し、他方はこの夢願望に對して檢閲

を行ひ、そしてこの檢閲によつて願望發表に或る歪みを强制するのである。問題となるのはただ、この第二の取調所がそれによつて檢閲を行ふことのできるその職權が、いかなるものを本質とするかである。潜在夢思想は分析以前には意識されないが、この思想から發する顯在夢内容は意識されたもの、として記憶されてをることを思ひ出してみるならば、かの第二取調所の檢閲特權は正に意識への入場許可であるとの假定がすぐに生ずる。この假定に據れば、第一の系統からは前以て第二取調所を通過してしまつたものでなければ、いかなるものも意識に達することはできないし、第二取調所はその意識到達希望者を通過せしむるには、それに對して必ず職權を行ひ、必ず自分の意に適へる變更をやり通すのである。かく假定するのは、意識の「本質」について全然一定的な解釋を立てることにもなる。吾々にとつて、意識するとは、固定される又は表象される過程とは相違し、且つそれから獨立なる、一種特別な精神行爲である。そして意識とは吾々には、別のところで與へられた或る内容を知覺する一つの感官的器官である、と思はれる。精神病理學は絶對にこの根本假定を缺くことはできないことが明かになるであらう。それのもつと立ち入つた評價は、これをもつと後の節に讓することとする。

この兩つの精神の取調所なる考へ及びそれの意識に對する諸關係の考へをよく念頭に置くなら

ば夢判斷の中ではあのやうに引き下ろされた友人Rに對して、私が夢の中で感じる著しい愛著について、それの完全に同等的な一箇の類似が人間の政治的生活方面から生じてくる。或る國家の政治界へ身を置くとする。そこでは自分の權力に對して嫉妬深い一人の君主と或る旺んな公衆意見とが相爭うてをる。國民は自分の氣にくはぬ或る役人に反感を持ち、これを免職すべしと要求する。苟も獨裁君主たる者が國民の意志なんかを考への中に入れねばならん事を見せてやらないために、時もあらうに正にその時に、この役人に君主は或る高い表彰を與へる。この役人がかかる表彰を受けるのに、君主の今の意地以外には、何等のいはれも存してゐないのである。それと同じやうに、意識への入場を支配してをる私の第二の取調所は、大きすぎる愛著を灑いで友人Rを表彰するのであるが、それは、第一系統の願望努力が今當面の問題視してをる或る特別な利害關係に於いて、このRを馬鹿者と誹謗したく思つてゐるためである。（かかる僞善的夢は私にもまた他の人々にも稀れな現象である。私が或る學問的問題の推敲に從事してをつた折に、幾晩も、短かく間を置いて、微かに混亂した夢が私を見舞つたことがあつた。その夢は久しい前に緣を切つてしまつた或る友人との和解をその内容としてをつた。第四回目か又は第五回目かに、終ひにこの夢の意味を摑むことができた。それは、この人に對する顧慮の最後の殘滓を是非捨てしてまへ、この人から完全に解放されろといふ鼓舞であつて、そ

れがかやうに僞善的なぐあひにその反對の變裝をしてをつたのである。或る人の見た「僞善的エヂプス夢」の報告を私はしたことがあるが、これではその夢思想の敵意的な感動と死の願望の代りに顯在的な愛著が現れてをつた。Typisches Beispiel eines verkappten Oedipustraumes。僞然的夢のもつと別な性質のものは、第五章「夢の仕事」の一節に掲げられてをる。)

ここまでくると恐らく吾々は、今まで吾々が哲學から期待してをつたが駄目であつたところの吾々の精神器官の構造についての解說を、夢判斷なら吾々に與へることができる、かもしれんといふ豫感に襲はれるであらう。併し吾々はこの道筋には蹤いて行かない。寧ろ、夢の歪みを明かにしてしまつた後には、吾々の出發點の問題へ引き返へすのである。一體、苦痛的內容を持つてる夢がどうして願望實現であると解決され得るのか、といふ疑問が出たのであつた。さて吾々の見るところでは、夢の歪みが成立してしまつたならば、苦痛的內容は單に或る願望せられた內容の變裝のために働いてをるのであるならば、それは可能である。二つの精神的取調所なるものについての吾々の假定を考へると、吾々は今やかうも言ふことはできる、卽ち、かの苦痛的の夢は事實、第二の取調所にとつては苦痛的であるが、それと同時に第一取調所の或る願望を實現する、或るものを含んでをるのである、と。凡ゆる夢は第一取調所から出發し、第二の取調所は、夢に

對して創造的には關係せず、ただ拒否的にのみ振舞ふのである限りに於いて、この苦痛夢も願望夢である。第二の取調所が夢に對して貢獻するもの、そのもの評價だけに問題を局限するなら吾々は決して夢を理解することはないであらう。さうなれば、かの著述家達によつて夢に關し指摘されてをるもの凡てが、いつまでも謎として殘り居るであらう。

夢が實際に、或る願望實現を示す祕密な或る意味を有する事は、いかなる場合に對しても、分析によつて證明されねばならない。だから私は苦痛的內容の二三の夢を摑み出して、それの分析を試みてみる。その一部分はヒステリー患者の夢である。これには長い前置きが必要であり、部分的にはヒステリー症の精神的過程へ入つてみることをも必要とする。併し私はこの描寫の面倒を避けて通るわけにはいかない。

精神病患者を私が分析的に診療する時には、前にも言つた通り、定まりきつて患者の夢が私と患者との談合の題目となる。その際私は患者に凡ゆる心理學上の說明を與へてやらねばならないが、私自身もこの說明の助けで患者の徵候について理解を得るのである。そしてかうなつてる時に、專門家からだつてこれ以上銳いものは期待できないやうな假藉なき批評を蒙ることがある。全く定まりきつて私の患者達から起されるのは、夢は全部願望實現なりといふかの命題に反對す

る抗辯である。私に對して反證として持ち出された夢の材料から若干の實例をここに擧げる。

「あなたはいつも夢は實現された願望だと仰有やる」と、或る機智のある婦人患者がやり出した。「ところで、わたしは一つの夢をお話いたしませう。この夢の內容はまるで正反對に、或る願望がわたしに實現されてゐないことを示すんです。あなたはこれをあなたの學說と、どう合致させなさるでせう？　その夢は次のやうな內容です。」

「わたしは晩餐會をしようとしました。併し少しばかりの燻製の鮭のほか、何にも家に貯へてありません。買ひ出しに行かうと思ひましたが、考へついてみると、どこの店も閉まつてる日曜日の午後なんです。で今度は、二三軒御用聞きのところへ電話をかけようとしたんですけれど、電話に故障があるんでした。それで晩餐會をする願望は思ひ切らねばならなかつた。」

私は當然答へてやつた。この夢は一見するところでは、合理的で聯絡がついてゐるやうに見え、願望實現の正反對に似てるやうだ。それは認めてあげるけれども、この夢の意味については、分析を以てでなければ、決定することはできない。「ところでこの夢はいかなる材料から出て來てをるか？　あなたもご承知の通り、或る夢に對する刺戟は必ずその最近の體驗にあるんです。」

分析。　この婦人患者の夫は實直で働きのある大きな肉屋さんだが、前日彼女に向つて、自分は

あんまり太つて來る、だから肥胖症治療法をやりださうと思ふ、と語つて聞かした。彼は早く起き、運動をし、攝食を守り、殊に晩餐會の招待にはもう決して應じないだらう、といふのである。——彼女は笑ひながらなほつづけて夫のことを語つた。彼は行きつけの呑み屋で一人の畫家と知り合ひになつた。畫家はこんな表情に充ちた頭を見たことがないといつて、彼をどうしても寫生しようとした。併し彼女の夫は磊落な彼の調子で答へた。そいつあ、どうも折角のお志だがね、併し大丈夫わしの思ふところぢや、どつかの綺麗なお娘さんのお臀のところでも描く方が、わしの顔なんかよか、お前さんにや得だらうよ。（描いて貰ふため畫家に坐つてやる、については、ゲエテの句がある。お臀がなくては、いかな貴人もどうして坐る？）彼女は今大變この夫に惚れてゐて、彼をからかつてはいぢめてゐた。あたしに鯔を呉れちやいけないよ、と賴んだこともあつた。——これはどういふことだ？

卽ち、彼女は久しい前から毎日午前に鯔をつけたパンを喰べられたらと願つてゐたが、金を出す氣にはならなかつた。勿論彼女の夫にそれを賴んだら、そんな鯔ぐらゐ夫はすぐに與へたであつたらう。然るにその逆に、鯔を呉れないやうに賴んだのであるが、それはもつといつまでもこれで彼をからかふことができるためだつた。

（こんな理由づけは甚だ薄弱だと私には思はれる。かういふ不滿足な說明の陰にはいつも告白されてゐない動機が匿れてをるのが常である。ベルンハイムに催眠術をかけられた人達のことを考へてみるがいい。彼等は催眠術後の或る依賴を實行するが、その動機を訊ねられても、どうして私がそんなことをしたのか、わかりません、といふぐあひには答へないで、何か明かに不滿足な理由づけを工夫せずにはをられないのである。私の婦人患者の鮪についても似たやうな事情であらう。彼女は何か止むを得ずして、實生活にあつて、實現されない或る願望を抱かざるを得なくなつたんだ、と私は氣がついた。そして彼女の夢が、その願望拒否をその通りになつたものとして、示したのである。併し何のために彼女は實現されぬ願望などを必要とするのか？）

ここまでの思ひ付ではこの夢の判斷には事足りるものでなかつた。私はもつと先のことを話してくれと迫つた。何か反抗に打ち勝たうとするかのやうに、暫くの間を置いた後、彼女は報告をつづけた。昨日彼女は或る女の友達を訪問した。彼女の夫が、いつもこの女を大變賞めるので、彼女はこの女に對して實は嫉妬を抱いてゐたのであるが、幸ひにもこの女は非常に瘦せてか細かつた。そして彼女の夫は太つた體格の豐滿なのが好きであつた。さてこの瘦せた女の友達は何の話をしたか？　當然、少しいい體になりたいといふ彼女の願望の話であつた。またこのお友達は

彼女に訊いた。「お宅ではいつまたわたしどもを招待してくださるの？　お宅のご馳走はおいしいんですものね。」

今やこれでこの夢の意味は明らかである。私は患者に向つてかう言ふことができた。「その頼みの時にあなたはどうもかう考へたらしいですね、わたしのところで鱈腹喰べて太つて、ますますうちの人の氣に適れるやうに、無論招待してやるわ。いいえ、わたしもう晩餐會なんかしあない、と。ところでその後で、あなたの夢があなたに、あなたは晩餐會をやれないことを言つてくれた。卽ち、あなたのお友達の體格を丸つこくするのに、何等の力添へもしてやるまいといふ、あなたの願望を實現してくれたのです。會の時に前に据ゑて貰ふもので太れるといふ事は、肥胖症を治療するために晩餐會の招待にはもう應じないといふ、あなたのご亭主さんの計畫からあなたは覺えてをられたんですね。」あとまだ缺けてをるところは、或る締めくくりのみである。これが出來れば、この解決は實證される。夢內容にある燻製の鮭はまだ引き出されてをらない。「その夢に出た鮭のことはどうして思ひついたんでせうかね？」「燻製の鮭はこのお友達の好物なんですわ」と患者が答へた。偶然私はこのお友達にあたる婦人をも知つてをる。そして彼女はこの患者が鮞にお金を出したがらないのと同じに、鮭にお金を出したがらぬことを確めることができ

るのである。

この夢はなほまた別のもつと精細な判斷を許すのであるが、それはただ傍系的一事情によつて必然とせらるるものである。二つの判斷は互ひに矛盾することはない。互ひに重なり合ひ、そして凡ゆる他の精神病理的結合と同じく、夢の通例的な二重意味性に對する一つの立派な實例を作つてくれる。かの婦人患者は願望拒否の夢を見ると同時に、實際には或る拒まれた願望（鰛をつけたパン）を自分のためかなへるのに骨折つてをる、といふことを吾々は聞いた。彼女の友達も亦、卽ち太りたい願望をを持つてゐた、それでこの友達に對して願望が實現されない夢を患者が見ることがあつたとしても、それは不思議なことではないであらう。卽ち、この友人に願望が——といふのは、體が太つて來たい願望が——實現されてほしくない、といふのは彼女自身の願望なのである。併し彼女はそれの代りに、自分自身に一つの願望が實現されない夢を見たのである。で、この夢は、若し彼女が夢の中で自分を意味しなかつた、友達を意味したのであるとするならば、彼女が友達の代りに自分を置いたのであるとするならば、或は、吾々はかう言つてもいい如く、自分を彼女と同一化したのであるならば、一つの新しい判斷を得ることになる。

彼女はこれを實際やつた、と私は考へる。そしてこの同一化の徵候として、彼女はかの拒まれ

た願望を實際に自分で作つたのである。併しこのヒステリー症的同一化はいかなる意味を持つのであるか？　これを説明するには、もつと立ち入つた記述が必要である。同一化はヒステリー症的徵候の機械組織にとつて非常に重大な要點である。ヒステリー患者が自分自身のばかりでなく實に多くの人間の體驗をその徵候の中に現す、謂はば或る大衆の代りに惱んでをる、そして或る芝居の一切の役を一人で自分の個人的な手段で演出する、といふことに立ち至るのも、この道に於いてである。人は私に向つてかう抗議するであらう。これは有名なヒステリー症的模倣だ、他人に起つた場合には自分に印象を與へる一切の徵候を模倣する、再現にまで高められた同情とでも謂ふべきヒステリー患者の能力である、と。併しこれだけでは精神的過程がヒステリー症的模倣の際に通り過ぎる道が示されただけである。道と、それからその道を通る精神的行爲とは別々のものである。この後者は、ヒステリー患者の模倣がさうだと想像されがちであるよりは、少しばかりもつと複雜である。この精神行爲は、一實例が明らかにするであらう通り、或る無意識的推論過程と相通ずる。一種特別な種類の痙攣をやる一婦人患者を他の患者達と一緒に病院の一室に入れて置いたところ、その特別なヒステリー的發作がいろいろ模倣をされた、と或る朝醫者は聞いたが、驚いた容子は見せない。彼は簡單に自分にかう言つた。外の奴等がその發作を見てを

して倣ねをした。それは精神的の傳染だ。さうだ、併し精神的の傳染はほゞ次のやうに行はれる。普通に患者同志は、醫者が彼等の一人について知つてをるよりか、より多くをお互ひについて知つてをるものだ。そして醫者の回診が終ると、彼等はお互ひのことを心配し合ふ。そのうちの一人が今日發作があるとする、さうすると、その原因は家から來た一本の手紙である、戀の惱みが新しく起きたのである、等々の事が、忽ちに外の人達に知れる。彼等の同感が湧いてくる。彼等の心には、意識に達しない次のやうな推論が行はれる。かやうな原因からかやうな發作が生ずるとすれば、わたしも亦かやうな發作を起すかもしれない、なぜならわたしは同じわけを持つてるんだもの。若しもこれが意識され得る推論であつたらば、恐らくその推論の結果は、同樣の發作を起すかもしれんといふ恐怖となることであらう。併しヒステリー患者の推論は別の地域に於いて行はれるから、恐怖的徵候の發現だけに終るのである。してみると、同一化は單純な模倣ではない。病源を同じうすると考へるための同化である。それは「恰かも――かの如く」を現し、無意識的に止まつてをる一種の共通感に關係するものである。

この同一化はヒステリー症に於いては、或る性的共通性の表現のために、最も頻繁に利用せられる。ヒステリー婦人患者はその徵候に於いて――假令それが唯一ではないが――最も容易に、

嘗つて自分と性交のあつた人、若くは自分が性交をやつた同一の人と現在性交しつゝある人と、自分を同一化する。愛する二人は「一つ」だ。かういふ言葉も、この解釋を考へのなかへ入れてをるものだ。ヒステリー症の空想並びに夢に於いては、同一化にとつては、性的關係を考へはする、がそれのためにその關係が現實と思はれないでもいい、それで澤山である。かるが故に、かの婦人患者が夢の中で自分を友達の代りとなし、或る徵候（卽ち、拒まれた願望）を創くることによつて、自分を彼女と同一化しつつ、この友達に對する嫉妬（併し彼女自身はこの嫉妬を理由なきものだとは認めてをる）に對して表現を與へたとすれば、彼女はヒステリー症的思考過程の規則に從つたにすぎない。なほ言葉を換へて、この過程を次のやうに說明してみてもよからう。彼女は、友達が自分の夫に對しては自分の代りとなつてをるから、夫の評價に於いて占めてをる友達の地位を自分が占めたいと思ふから、夢の中で友達の代りとなるのである。（ヒステリーの精神病理學からかかる實例を出して挿入してはみたが、それを斷片的に記述した結果、そして凡ゆる聯絡を絕つてもをるので、大して說明の効果を擧げ得ないのを、私は自ら殘念に思ふ。若しこの實例が夢といふ題目と精神病との親密な關係を指示することができれば、私がこれをここに採用した目的は果されたのである）

もう一人の婦人患者も――私に夢を語つて聞かしてくれた婦人のうちでは、一番機智に富んだ

人だが――私の夢學說に反對した。併しこの反對は前述よりも一層簡單に、而かもまた一方の願望の非實現は他方の願望の實現を意味するといふ規準に從つて、解決がついた。或る日のこと、私は彼女に夢は願望實現である事を說いて聞かした。その翌日、彼女は私に一つの夢を持つて來た。彼女は姑と伴れ立つて一緖に田舍滯留地へ旅行してをる夢である。ところで私は、彼女がこの夏を姑の近くで暮らすのに烈しく反對をしたことを承知してをるし、また、彼女は最近に姑の住居からはずつと離れた田舍滯留地を借り入れて、この恐怖された同居を無事に囘避してしまつてることも、承知してゐる。然るに今の夢はこの願ひの如く遂げられた解決を取消すのである。これは、夢による願望實現なる私の學說に對しては、最も銳い反對ではないか？　確かにさうだ。この夢の判斷を得るには、この夢から結論を引きだしさへすればいい。この夢に據つて言へば、私の言ふことは不當である。そこで考へてみれば、私の言ふことが不當であらねばならんといふのが彼女の願望であり、その願望をこの夢は彼女に實現してみせた。私の言ふことが不當であらねばならんといふその願望は、田舍滯在なる題目によつて實現はされたが、併し實際は、もつと別な、そしてもつと嚴肅な題材と關係してをるのである。それと同じ頃に、私は彼女に對して試みた分析が與へた材料によつて、彼女の生涯の或る時期に於いて、何事か彼女の罹病に對し意義

ある事が持ち上がつてゐるに相違ない、と推論してをつた。そんなことは自分の記憶に見當らないと言つて、彼女はそれを否認した。併しやがて私の言つた事が本當であることになつたのだ。私の言ふことが不當であつてほしいといふ願望は、彼女がその姑と一緒に田舍へ旅行するといふ夢に變りはしたが、この願望は、あの時に始めて推測されたあの事柄が決して起つたことのないものであつてほしい、といふ辯明のつく願望にも、相通じてをつたわけである。

分析をしないで、ただ推測だけによつて、私は或る友人の小さな事件を敢て判斷してみたことがある。この友人は高等中學校の七年間私の同級生であつた。或る時或る小集會に於いて、夢は一箇の願望實現であるといふ新説についての私の講演を聞き、家へ歸り、そして凡ての訴訟に敗けた――彼は辯護士である――夢を見て、私のところへ來てそれを訴へた。凡ての訴訟に勝つことはできるもんぢやないさ、といふ逃げ口上で私はきり拔けたが、併し心中ではかう考へた。私は八年間を通して首席として第一の坐席に居つたのに、彼は級の半ばぐらゐの席をあつちこつち取り換へてゐたのであつたとすれば、この少年時代に基いて彼の心に、私とてもいつか根本的に恥さらしをしてくれたらといふ願望が、全くないといふことがあるだらうか？

もつと陰鬱な性質の一つの夢が、やはり私の婦人患者から願望夢の學説に對する辯駁として、

述べられた。若い娘であるその患者は語り出した。先生は覺えてらつしやいますね。わたしの姉には今は一人の子供、あのカールしか居ないんです。兄のオットォを、わたしがまだ姉の家に居た頃に、失くしました。オットォはわたしの寵愛兒でした。本當言つたら、わたしがオットォを育てたのです。今の小さいのも好きですわ。ですけど、とてもあの亡くなつた子のやうには好きでないのは、あたりまへです。ところが、昨晩わたし夢を見たんです。わたしの前に死んだカールが寢かされてる。あれが小さな棺の中に寢てる、兩手を組み合はして。まはりにはぐるりと蠟燭が立つてる。つまり、あの小さいオットォの時とすつかり同じなんですわ。オットォの死んだ時はわたしひどく感動したんでした。ねえ、これがどんな意味でせうか、おつしやつてください! 先生はわたしをよくご承知ですわね。わたくしは、姉がやつと持つてる一人の子が亡くなるのを願つたりするほど、そんな惡い人間でせうか? それともこの夢は、わたしがあれだけもつと可愛がつてをつたオットォが死ぬのよか、いつそカールが死んでくれたらと、その方を願つてをる、といふ意味なんでせうか?

私は彼女に斷言してやつた。その後の方の判斷は問題にならん、と。ちよつと考へてみた後に、私はその夢の正しい判斷を語つてやつたが、彼女はそれを實證してくれた。それが私に成功した

のは、この夢を見た患者のその時以前の經歷が私にはすつかり知れてなつたからである。

この娘は早く兩親を失ひ、ずつと年上の姉の家で大きくなつた。その家へ訪ねて來る友人のうちに、彼女の心へ殘つてる印象を與へたかの男もあつたのである。この殆ど口外されなかつた關係がやがて結婚で納まるらしいやうにも、一時の間は思はれてゐた。然るにこの幸福な落着は、姉のために水泡に歸せしめられたのだが、姉の動機はどうしてもはつきりとはわからなかつた。破綻の後はこの患者が愛してゐた男はその家へ來なくなつた。彼女自身も、その愛着をその間向けてをつた子供のオットオが死んだ後しばらくしてから、獨立した。併し一度陷つた姉の友人に對する愛情の羈絆から脫却することは、彼女にはできなかつた。彼女の誇りは、彼女にこの男を避けるやうに命じた。けれども彼女の愛を、その後に現れて言ひ寄る他の男達へ移すことは、彼女には不可能であつた。この昔の愛人は文學者階級に屬する人であつたが、この人がどこかで講演でもやるといふ豫告があれば、その聽衆の中には必ず彼女が居た。なほその外にも、第三者的立場で遠くから彼を眺める機會ならば、彼女はそれを一つのものがさずに捕へた。私が記憶してをるところでは、彼女はあの前日に私にかう語つた。文學者(敎授)が或る音樂會へ行く、それで彼女もまた一度彼の姿を見て悅ぶためにそこへ行くつもりである、と。それはあの夢の前日であつた。

彼女が夢の話を私にした日に、その音樂會が催される筈であつた。それで私は正しい判斷を構成することが容易にできる。そして彼女に向つて、オットォの死後に起きた何等かの出來事が思ひつかないか、と訊いてみた。彼女はすぐに答へた。確かにありますわ。あの時教授は久しく見えなかつた後でまた來たんでした。わたしはオットォの棺の傍であの方にもう一度お目にかかつたのですわ。これは私の期待してをつた正にその通りであつた。そこで私はこの夢を次のやうに判斷した。

「今度別の子供が死んだとしたら、それと同じことが繰返へされるだらう。あなたはその日ぢゆう姉さんのところに居るだらうし、教授が吊問のためにきつとやつて來るだらう。そしてあの時と同じ事情の下に、あなたはあの人と再會することになるだらう。この夢は、あなたが内心では拒み禦いでをる、再會のこの願望を意味したのにほかならないんです。私は知つてゐますが、あなたは今日の音樂會の入場券をその衣嚢に持つてるでせう。あなたの夢は焦慮の夢ですよ。今日起る筈のその再會を、夢が二三時間早めにやつてくれたのですね。」

明らかに彼女の願望を陰蔽するために彼女は、かかる願望が抑壓されるのを常とする一つの場合を選んだのである。悲哀に充たされてをるから、戀のことなんか考へはしない、一つの境遇で

ある。而かも、夢の中に忠實に復寫されたその境地の實際の場合にあつても、彼女がもつと強く愛してをつた第一の子供の本當の棺の傍でも、彼女が長い間見ることができずにゐたかの訪問者に對して、愛着の感じを抑へ得なかつたのである、といふ事はまことにあり得ることだ。

もう一人の婦人患者のこれと似た一つの夢には、これとは異つた說明が與へられた。この患者は昔は、當意卽妙の機智と快活な氣持ちに於いて群を拔いた人であつたが、今でも診療の間に、少なくともその思ひ付では、このお得意の空に非ざるを示した。或るかなり長い夢の聯絡の一部として、彼女が見たのは、彼女のたつた一人の十五になる娘が何かの箱に死んで仆れてをるところであつた。この夢現象を以て願望實現說に對する一つの抗辯たらしめるのが、彼女には惡くない氣持ちのやうであつたが、彼女自身、この箱の細かい點が、この夢の別な解釋への道を示すものに相違ないといふことには氣づいてをつた。(かの駄目になつた晚餐會の夢に於ける燻製の鮭と似てる)。分析してるうちに彼女に次のやうなことが思ひ浮んだ。前日の夕方の集りに於いて話が英語の box に及んで、それの獨逸譯にはさまざまある、箱(Schachtel)、劇場の棧敷(Loge)、函(Kasten)横面の平手打ち(Ohrfeige)等々があるなどと語られた。ところで、同じ夢の他の部分によつて補つてみたところでは、彼女は英語の box は獨逸語の Büchse (筥)と似通つてをることを思ひあて

たが、さうすると、この Büchse は女子生殖器の野卑な名としても使はれてる、といふ記憶に襲はれたのであつた。さうしてみると、局部解剖學についての彼女の知識の點を多少參酌してやれば、「箱」の中の子供は子宮内の胎兒を意味することは、あり得るところであつた。ここまで明かにしてみた時に、今や彼女はこの夢影像は實際に彼女の或る願望に相通ずることを否定しなかつた。多くの若い婦人と同じに、彼女も姙娠が始まると決して幸福ではなかつた、そして一度ならず、子供が子宮の中で死んでくれればいいがといふ願望を、わが心に承認したのであつた。のみならず、その夫と烈しくいさかひを一場演じた後の憤怒の發作で、或る時などは、兩方の拳で中の子供にあたれとお腹を打ち叩いたこともあつた。卽ち、死んだ子供は果して一箇の願望實現であることはあつたが、十五箇年間も取り捨ててしまつてゐた一つの願望の實現だつたのである。そしてかやうに遲延した出現では、その願望實現をもはや見わけないことがあるとしても、それは不思議なことではない。その間に多すぎるほど變化してしまつてるから。

愛する骨肉の死を内容とするこの最後の二つの夢が屬する部類のものについては、なほもう一度、類型的夢を論ずる時に、考慮するつもりである。その時には、新しい實例によつて、一切の是等の夢がその願望せられざる内容にも拘らず、願望實現なりと判斷せられねばならぬ事を、示

し得るであらう。次の、復たしても私をば願望夢の學說を早計に一般化することから引き止めるのが目的で物語られた夢は、患者に負ふのでなく、私の知己の或る聰明なる法律學者に負ふものである。この證人の報告するところ次の如し。「僕はこんな夢を見た。一人の淑女の腕を取りながら僕は僕の家の前へ來たんだ。そこに幌馬車が一臺待つてをる。一人の紳士が僕をめがけて進んで來て、刑事たる自分を證明してから、同行するやうに要求したんだ。僕はどうか用件を片づける時間だけ待つてくれと賴んだ。それで、君、拘引されるのは恐らく僕の願望であるかもしれんなどと、君は考へるかね?」確かにそんなこと考へはせん、と私は言はざるを得ない。だが、いかなる罪狀を以て君が拘引されるのか、恐らく知つてるんだらうね? ――「知つてる。子供を殺した、といふのだと思ふよ。」――子供殺し? だつて君は知つてるだらうが、こんな犯罪はただ母親だけが新しく生れたその子に對して犯すことがあるものなんだがね? ――「その通りだ。」(一つの夢が不完全に物語られ、そして分析をやる間にその脫落した部分の記憶が浮んで來ることは、屢々起る。この補遺的に組み込まれた部分が定まりきつて夢判斷の鍵を與へる。なほ後出する夢の忘却についての節を參照せよ。)して君はどんな狀態で夢を見たのか、その前の晩にはどんなことがあつたのだ? ――「そいつは君にも話したくないんだがね。デリケートな事なんだから。」――私には併しそれ

が必要なのだ。でなかつたら、この夢の判斷は斷念しなければならない。――「では聞いてくれ給へ。僕はその夜は家に居なかつた。或る婦人のところにゐたんだ。この婦人は僕には大いに大事なのさ。で、僕らが朝目を覺ました時に、新しく或る事が僕ら二人の間に行はれたわけだ。それから僕はまた寢こんだ、そして君に話した夢を見たのさ。」――それや結婚してる婦人かい？――「さうだ。」――して君はこの婦人に子を生ませたくないんだね？――「ないとも、ないとも、そんなことがあつたら、僕らのことが暴れるんだ。」――では、君たちはノルマルな性交をやつてるんぢやないね？――「僕は用心をして、射精をしないやうにしてるよ。」――かう假定してもいいかね、君はその夜何度もその術を實行した、そして朝のその反復の後では、それが自分に成功したか、どうか、少し不安になつた、とね？――「さうだつたかもしれん。」――さうしたら、君の夢は一箇の願望實現だよ。君はその夢によつて次のやうな安心を得たのだ、自分は子供をこしらへない、或ひはそれと殆ど同じことなんだが、自分はその子を片づけてしまつてるんだ、といふ安心だ。それを繼ぐ中間の事項を私は君にわけなく證明ができる。君は覺えてるだらう、二三日前に私達は、結婚難について、また受胎が成立しやすいやうに性交をやることは許されてをるのに、一旦卵と精とが出會つて胎兒が形成されたら、少しでも干渉することは、犯罪として罰せ

られるといふ不徹底について、話し合つたね。それと關聯して、本來いかなる時期に胎兒へ精靈が入るのであるか、その時期からして始めて殺害の概念は適用し得るものとなるんだから、といふ中世時代の論爭問題へも言及したのであつた。君はきつと、子の殺害と產兒豫防とは同じだとしてゐるあの悽慘なるレナウの詩をも、知つてゐだらう。――「レナウのことは、をかしいんだが、今日の午前に偶然のやうに思ひ浮べたんだよ。」――それも君の夢の餘韻なのさ。さて今度は君の夢の中のもう一つの傍系的の願望實現を證明してやらう。君は淑女と腕を組んで君の家の前へ來たんだつたね。してみると、君は實際はその夜をその淑女の家で明かしたのに、夢の中ではその婦人を家へ伴れて來るんだ。君の夢の中心を形づくる願望實現が、こんな不愉快な形の中に姿を匿してをるといふのは、恐らく一箇以上の理由を持つてる。恐怖神經病の病源に關する私の論文を讀んでをれば、君も知つてるかもしれんが、私は「中絕性交 Coitus interruptus」を神經病的恐怖の起源に對する原因的要點の一つとして要求してをる。若し君にさういふ種類の數度の性交の後で、或る不快な氣分が殘つてることでもあつたら、それは私の說と合致するものかもしれん。で、その不快な氣分が君の夢の構成の中へ入り込んで行く。この不快氣分をまた君は願望實現を蔽匿するのに利用してもをる。併し子供殺しの點は、まだ說明されてをらんね。どうして君

はこんな特別に婦人に限つた犯罪を思ひついたんだらうね？——「僕は君に白狀したい。數年前に一度僕はさういふ事件に捲き込まれたことがあるんだ。或る娘が私との關係から生ずる結果を墮胎によつて避けようと試みたことがあつて、それには私も責任があつた。その企畫の實行については私は毫も關係はなかつたが、併し勿論長い間、その事件が發見されるかもしれんといふ恐怖のうちにあつた。——私にはわかつた。この記憶が、何故君にとつて自分がいつもの術を拙くやつたかもしれんといふ推測が苦痛的でなければならなかつたのか、その第二の原因を與へてをるんだ。

私の講義でこの夢の話を聞いた或る若い醫者は、心を打たれた思ひをしたものに相違ない。なぜならその後で彼もすぐ夢を見たのである。この醫者の夢の思考形式は別の題目に利用すべきであらう。彼はその前日に彼の所得申告を提出しておいた。申告すべきものは僅かしかなかつたから、その申告も正しく書いてあつた。ところが彼はかういふ夢を見た。納稅委員會の會議から一人の知人が彼のところへ來て、凡ての他の納稅申告書は異議なしであつたが、彼のだけは皆の不信用を招いたので、手痛い脫稅刑罰を課せられることになるだらう、と知らしてくれたのである。この夢は大きな收入のある醫者と思はれたい願望がだらしなく隱蔽されてゐたものの實現であ

る。この夢は又、若い娘についての有名な話を思ひ出させる。相手の求婚者は癇癪持ちの人間で、結婚をしたら、きつと拳固を澤山お見舞ひ申すことだらうからといふので、その娘は求婚の承諾をしないやうに勸められた。ところが娘の返事はかうだ。「打つて貰ひたいわ！」結婚したいといふ彼女の願望はあんまり旺んなので、その結婚と結びついてをるといふその不愉快の見込みをも背負ひこんだ、否、その不快そのものが願望にさへなつたのである。

願望の拒絕、又は明らかに願望せられざるものの出現を內容とするので、私の學說に對して直接に反對すると思はれる、かういふ種類の甚だ頻繁に現れる夢を總括して、「反願望夢」（Gegenwunschtraum）としてみると、それ等は一般に二つの原理に歸納せられ得るといふことがわかる。そのうちの一つは、實生活竝びに夢に於いて一つの大きな役割を演じてをるに拘らず、まだ擧げ示されてをらない。これ等の夢の一方の原動力は、私の言ふことが不當であらねばならんといふ願望である。この種の夢は定まりきつて私の診療の最中に、患者が私に反抗する氣持ちでをる時起る。それで私は患者に向つて先づ始めに夢は一箇の願望實現であるといふ學說を持ち出して聞かせた後には、必ずやかかる一つの夢を喚び起すものと期待ができるくらゐである。——近年私の學生から何度もこれと似た「反願望夢」を報告されたが、それは彼等が「夢の願望說」に始めて出

會した時に、それに反應した結果であるのだ。——誠に、この書の讀者の多くにも同じやうなことが起るだらうと、期待することができる。讀者も、私の說くところが不當であつてほしいといふその願望だけが實現されるために、夢の中で唯々諾々として或る夢を拒絕してみることであらう。私が報告したいと思ふこの種の最後の治療夢も、やつぱりそれと同じことを示すものだ。或る若い娘が居る。この娘は彼女の一家一族や相談に與つた有力者たちの意志に反しても、私の治療を續けて受けたいと頑張つたのであるが、それがこんな夢を見た。家の人はこれ以上私のところへ來ることを彼女に禁じてしまつた。すると彼女は私のところへ來て、困つた時にはただでも治療してやると、私が彼女に約束を與へたことがあるとて、それを引き合ひに出したところが、私は彼女に向つて、お金の點では參酌はできません、と言つた。——

（それについて願望實現の證明を立てるのは實際容易ではない。が併し凡てのかういふ場合には、一方の謎の外になほもう一つの謎があつて、後者の解決は前者の解決を助けるものである。彼女が私の口に言はせる言葉は、どこから來たものであらうか？　私は彼女に對して何かそれと似たやうなことを言つたことは勿論ありはしない。然るに彼女の兄弟のうちの一人、それも彼女に對して一番大きい勢力を持つてをる一人が、實に御親切にも私についてその御托宣を述べてく

れたのであつた。そこで卽ちこの夢は、兄弟の言ふのが當つてをつてほしいといふ願ひを遂げようとするものであり、そしてこの兄弟に道理を與へんとするのは、彼女の夢にのみ於ける願ひではない。それは彼女の生活の內容でもあり、また彼女の病氣の動機でもあつたのである。）

（願望實現の學說に對して、一見を以てする時には、特別なる困難を與へると思はれる一つの夢を、或る醫者（アウグスト・シテルッケ）が見て判斷してをる。「私は左手の人差指の一番端の指節のところに黴毒初發炎症（プリメールアフェクト）がでてるのを見たのである。」この夢は實にその願望せられざる內容に至るまで明白で且つ聯絡的であるといふ考へからして、これを分析してみる氣には恐らくならないかもしれない。併しとにかく分析の勞を惜まないでやるならばその「初發炎症（プリメールアフェクト）」は prima affectis（初戀）と相通ぜしむべきものであり、結局この嫌ふべき膿瘍はシテルッケの言葉を用ひれば、「大なる情熱（アフェクト）を加へられた願望實現の代理者であつたことが證明される」のを知るであらう。）

（反願望夢のもう一つの動機は甚だ手近かなところにあるものだから、私自身も久しい間やつてをつたやうに、ややもすれば看過される危險がある。實に澤山の人間の性的體質のうちには、攻擊的なサヂスムス的成分がその正反對へ倒錯するために生じてをるマゾヒスムス的成分が存在してをる。かういふ人間が若し自分等に加へられた肉體的苦痛にでなくて、屈從と精神的苛責の中

に快樂を求むるのである時には、人はこの人間を「觀念上」のマゾヒストと呼んで居る。この種の人間が反願望夢と不快夢を持つことはあつても、彼等にとつてはそれは願望實現に外ならない、彼等のマゾヒスムス的傾向の滿足にほかならないことは、とかくの說明なくとも合點がいくことである。私はここに一つのさういふ夢を加へてをく。一人の若い男が居る。この男は自分が同性愛的の情を寄せてをつた兄を以前に大變苦しめたことがあつた。その後彼の性格は根本から變つてしまつたが、或る時三つの部分から成り立つ夢を見た。(一)彼の兄が彼を「辱かしめてをる」ところ。(二)二人の成人が同性愛の目的で互ひに氣嫌をとつてをるところ。(三)兄は家業を賣り拂つてしまつた。それの支配をするのが自分の將來の仕事だと定めてゐたのに。この最後の夢から目覺めた時に彼は苦痛的の感情を持つてゐた。而かもそれは一箇のマゾヒスムス的願望夢であつて、それを飜譯してかう言ふことができるかもしれない。兄が私から加へられた凡ゆる苦惱に對する罰として、あれを賣つて私を困らせるとしても、それは全く道理あるやり方なんだ、と。)

苦痛的內容を持つた夢であつても願望實現として解決される事を——なほもつと辯駁が生じて來ない限り——信じていいと思はしめるのには、以上の諸實例で足りることと、私は希望する。(不快夢の題目はここでは論じつくされてゐない、もつと後にまた、それを論ずるであらう。)こ

れ等の夢の判斷に際して吾々は必ずいつも、これを人が言ひたがらないか、又は考へたがらないやうな題目に行きあたるのであるが、誰もこれを以て偶然事の現れだとは、見做さないであらう。かかる夢が喚び起す苦痛的感情は、單純にかの反感と同一である。この反感がかかる題目を取扱つたり乃至は指摘したりするのを吾々にさせまいと——大抵は成功を以て——引き止めるのであるが、而かもどうしてもその研究に着手しなければならない時には、吾々は誰でも、かかる反感を征服しなければならない。併し夢の中に、實に再々現れるこの不快感情は、或る願望の實在を除外するものではない。いかなる人間にも、人には傳へ知らしたくない願望があるし、自分自身にも承認したくないやうな願望がある。他方に於いては、吾々は當然の道理からして、凡てのこれ等の夢の不快的性質をかの夢の歪みなる事實と關聯せしめ、そしてかう結論することができる。その夢の題目なり又はそれから汲み出された願望なりに對して、或る反感が、これを逐ひ拂はうとする一つの意圖が、存してをる故に、正にその故にこれ等の夢はかくも歪められてをり、その願望實現は夢の中では見わけのつかぬまでに變裝されてをるのである、と。かくして夢の歪みは事實、檢閲の一行爲であることが證明される。夢の本質を現すべき吾々の定義を次のやうに變へてみるならば、吾々は不快夢の分析が明かにした一切を考慮の中に入れたことになるであらう。

夢は或る（抑壓された排斥された）願望の（變裝せる）實現である、と。

（私の聞いたところでは、精神分析と夢判斷については何等知るところがないと主張してゐる現代の或る偉大な詩人が、彼自身の考へからして、夢の本質に對し殆ど同一な定義を述べてゐる。夢とは、「抑壓された憧憬の願望が偽りの額と名をして妄りに浮び現れるものだ。」(C. Spitteler, Meine frühesten Erlebnisse.)

（私がここに豫じめ引用して置かうと思ふのは、オットウ・ランクの言葉である。これは上述の根本定義を擴張もし、修飾もしてゐる。「夢は定まりきつて、排斥された幼時性慾的材料を基礎とし、またその助けをかりて現在の、概ねは戀愛的（エロテイシュ）な願望をば、蔽匿せるそして象徴的に装はれた形式に於いて、實現されたものとして現してゐる。」(Rank, Ein Traum, der sich selbst deutet. 1910)。私はいかなる箇所に於いても、ランクの定義が私の定義であるとは、言つたことがない。上述したもつと短かい私の定義で澤山だと、私には思はれるのである。併しとにかく私がかうしてランクの修飾を引用することその事だけでも、精神分析に對して數へ切れないほど幾度も繰返へされた非難、即ち精神分析は一切の夢は性慾的内容を持つと主張する者だといふ非難を招ぐのには十分であつた。若しこの文が誤解されずに解されるならば、この文はただ次の事を指摘するにすぎない。世の批評家がその批評を行ふに際して、誠實なる心を用ひることいかに少ないのが常であるか、また、反對者達は最も明瞭な意見をでも、若しそれが彼等の攻撃癖に役立たないものであれば、いかに好んで閑却し

たがるか、を指摘するにすぎない。何となれば、私は數頁前のところのでは、小兒夢の樣々な願望實現(田舍の散歩をしたいとか、湖水を渡つてみたいとか、喰ひはぐした食事を後で喰べたいとか)を擧げたし、別の箇所では饑餓の夢、渴刺戟や排泄刺戟、やに反應する夢、純粹の便宜の夢をも取扱つてゐるからである。ランク自身だつて、何等絕對的の主張を述べてゐるのではない。彼は言つてゐるでないか、「概ねは[illegible]な願望」と。そしてこれは成人者の大部分の夢に對して全然實證されるところである。――「性的」といふ[illegible]若し精神分析學に於いて今や常用される「戀愛」(Eros)の意味に用ひるならば、それはまた別なやうだ。けれども一切の夢は「逸樂的」(libidinös)衝動力(「破壞的」destruktiv のそれと相反して)によつて創られるのではないか、といふ興味ある問題は、反對者達がこれをその眼前に殆ど持たざるところである。)

さて殘るところは苦痛的內容を有する夢の特別な一種としての恐怖夢である。これを願望夢と解釋するのは、啓蒙されざる人からは好意ある承認を得ること最も少ないであらう。この恐怖夢の中に示されるものは夢問題の或る新しい一面ではなくて、恐怖夢問題の中心は神經病的恐怖一般の理解である。吾々が夢の中に於いて感ずる恐怖が夢の內容によつて說明されるのは、ただ外見的にすぎない。夢內容に判斷を加へてみると、吾々は次のことに氣がつく。夢恐怖を夢の內容から引き出すのは、恐怖症の恐怖をこの恐怖症が左右されてゐる或る表象から說明するのよりも、

もつと道理ある仕業ではないことに氣がつく。例へば、窓から墜落することがあるかもしれん、だから窓際に立つた時には一所懸命に或る用心をする理由がある、といふのはいかにも正しい。だが併し、それに相當する恐怖症患者に於いて何故にその恐怖があんなに大きくあり、そして何故にその恐怖がずつとその理由以上に患者を迫害するのであるかは、理解すべくもない。次にはこの恐怖症にも恐怖夢にも同一の説明があてはまるものだといふことが實證される。兩者に於いて、恐怖はそれに隨伴する表象へただ結びついてるにすぎないのであつて、その發生した源は別である。

かく夢恐怖は神經病的恐怖と密接なる聯絡を持つところからして、私はここに、前者を探求する際には後者に相談をかけよと注意しなければならない。「恐怖神經病」(Angstneurose. 1895)に關する一小論文の中にその當時に於いて私は、神經病的恐怖は性的生活から發に對る、そしてその目的から逸らされて使用されるに至らなかつた一つのリビド(Libido)に相通を者なのである事を、主張して置いたのであつた。この定義はその後益々强固にして搖ぎなきものたることが證明されてをる。ところでこの定義からして、恐怖夢は性的内容の夢であつて、それの所屬のリビドは變更を蒙り、恐怖となつてをるのである、といふ命題が引き出されてくる。後にこの主張を

神經病は患者の若干の夢の分析によつて支持する機會が生ずるであらう。また、夢の或る學說を詳しくせんとする今後の試みに際して、もう一度恐怖夢の條件と、恐怖夢と願望實現說との妥協性を話題とすることがあるであらう。

第五章　夢材料と夢の源泉

イルマの注射の夢からして夢は一箇の願望の實現なりといふ事を知り得た時に、先づ第一に吾吾を捕へたのは、果して吾々はこれを以て夢の一般的一特質を發見したものであるか、といふ興味であつた。そして吾々はその當座、その判斷に從つてゐるうちに吾々の心に起つてゐたかもしれなかつた凡ゆる他の學問的好奇心を、一切沈默せしめることにしたのであつた。今やこの一つの道で目的を達した後に於いて、吾々は引返へして、その夢の諸問題の間を逍遙するのに新しい出發點を選んでよいのである。勿論かの願望實現なる題目はまだ決して十分に片づいたのでないし、今かやうに逍遙を新しくする間には、かの題目が暫時吾々の眼中から逸せられることにも、なるかもしれないのではあるが、さうしてみてよいのである。

吾々は夢判斷の吾々の方法を使用して、一つの潛在的夢內容なるものを發見することができた。そしてこれはその有意義性に於いてはかの顯在的夢內容を遙かに凌ぐものであつた。この發見の行はれた後にあつて、吾々の心に迫り來るものは、かかる顯在夢內容しか知られなかつたうちは

手をつけがたいものに思はれてをつた謎や、矛盾が、今の吾々には滿足のいくやうに解決されるのではあるまいか、それを試みるために、更めて箇々の夢問題を取りあげてみることでなければならない。

夢と覺醒生活との聯絡竝びに夢材料の來歷に關する諸家の陳述は、緖言にあたる章に於いて詳しく報告されてをる。また吾々の記憶するところでは、夢記憶力の三つの特色をいろいろに指摘して置いた。が併しこれはまだ說明はされてをらない。

(一)夢は明らかに、特に最近の日の印象を用ひるものである事。(ローベルト、シトリュムペル、ヒルデブラント、またキード・ハッラムも)。

(二)夢は本質的で重要なものを思ひ出さないで、傍系的で注目されなかつたものを思ひ出すから、吾々の覺醒時記憶力とは異なつた原理によつて選擇を行ふのである事。(前出第三三頁參照)。

(三)夢は吾々の非常に昔の小兒時代の印象を思ふままに利用する力を持つてをり、その時代のもので、今の吾々には下らないものと思はれ、且つ覺醒時にはとうの昔に忘れたものと考へられてをつた細かな事柄をさへ引き出してくる事。(夢は吾々の記憶力に對し、日中の無價値な印象の貢擔

を除いてやる目的のものだ、といふローベルトの解釋は、夢の中にも或る程度まで頻々と吾々の子供時代のどうでもいいやうな記憶影像が現れるとすると、もはや支持されることはできない。强ひて支持しようとすれば、夢は自分に課せられる任務を、甚だ不十分に實行するのが常である、といふ結論を作るよりほかはなからう。)

夢材料選擇に於ける是等の特異性は、諸家によつて勿論顯在的夢内容を手がかりに觀察されたものである。

第一節　夢に於ける最近的のものと無關心的のものと

さて今、夢に現れる要素の來歴に關係して、私自身の經驗に相談してみると、私は先づ第一に次の主張を述べねばならない。凡ゆる夢に於いて、最近に經過した日の體驗に對する或る結合が見出される、と。自分のでも、他人のでも、どんな夢を取つてみても、私のこの經驗は、必ず實證される。この事實を知つてゐると、その夢を刺戟した日中の體驗を先づ第一に探求してみるといふ事で、夢判斷の皮切りとすることができるであらう。多くの場合にとつてこれが最捷徑でさへもある。私が前章に於いて精密な分析をやつた二つの夢（イルマの注射の夢、黄色い髯をし

た私の叔父の夢）によつて、日中に對する關係は實に顯著であつて、それ以上の說明は必要でないくらゐである。併しこの關係がいかに常規的に實證されるかを示すために、私は私自身の夢記錄の一部を、その方面へ向つて、吟味してみようと思ふ。私は探求される夢源泉の發見に必要な範圍だけ、これ等の夢を報告することにする。

(一)私は或る家を訪問するが、面倒な目に會はなければ家へあげられない、云々。その間ぢゆう或る婦人が私を待ち詫びてをる。

源。前の晩に一人の親類の婦人と話したことには、彼女が賴んだ一件の工面はまだ待つて見なければならない、云々とあつた。

(二)私は或る種(不明瞭である)の植物に關して一册の著書を著はした。

源。午前中に本屋のショーキンドウでシクーラメン(Zyklamen)屬に關する著述を見てゐた。

(三)往來で二人の婦人を見る。母と娘。その娘は私の患者である。

源。私の治療を受けつつある一人の婦人患者が夕方に私に告げたところでは、彼女の母が治療を續けるのに對してひどく反對をしてをる。

(四)S・Rの本屋に私は或る定期刊行物の豫約をする。これは一箇年に二十グルデンの價であ

る。

源。その日に私の妻が私に思ひ出さしたのであつた、妻に一週費用の二十グルデンをまだ渡してない事を。

（五）私は社會民主黨の委員會から一本の書狀を受取る。その中では私は會員として取扱はれてをる。

源。自由黨選擧委員會からと博愛協會總裁からと同時に書狀を受け取つてをつた。私は事實後者の會員である。

（六）海の眞中の嶮しい巖の上に一人の男がをる。ベエックリンの繪模樣で。

源。惡魔の島のドレフュース。同時に英吉利に居る私の親類からの報知。

人或はこんな問ひを投げ出すかもしれない。夢の結合は、必ず最後の日の出來事に對してなされてをるか、どうか？　それともまた、それは最近の過去の相當廣い時間に亙ることもあり得るか、どうか？　この問題は多分原理的な有意義性を要求するものではないらしい。だが、私は夢の前の最後の日（夢の日）が獨占特權を有してるといふ方に決めたいと思ふ。二日乃至三日前の一印

象が夢の源であつたと假りに考へてみた度每にも、もう一層精密に探求を續けてみると、かの印象が夢の前日に再び思ひ出されてをる、從つて出來事の日とその夢の時間との間に、夢の前日に於ける再現が挿まつてゐることを證明しうるとの確信を持ち得たし、その外に、より古い印象に對する記憶の出發點となり得た最近的の動機をも、證據立てることができたのであつた。

(反之、私は次のことの確信は得られなかつた。日中の刺戟的印象とそれの夢に於ける出現との間に、生物學的有意識性の規則的な間隔(スウォボダは此種の第一のものとして十八時間を擧げてをる)が挿まつてをる、といふ確信は。第一章にも(第一六一頁)報告してある如く、スウォボダはフリースが發見した二十三乃至二十八時間の生物學的間隔を廣汎に精神的經過の上へ應用し、そして殊に、夢の中に夢要素が出現するに對しては、これ等の時間が決定間であると、主張もしてをる。假りにかかることが立證されるとしても、夢判斷は本質的には變更されないであらうが、併し夢材料の來歷にとつては一つの新しい源泉が與へられることになるであらう。ところで私は近頃、この「週期說(ペリオデンレーレ)」が夢材料にも利用し得るやを吟味するために、若干の夢によつて調査を行つてみた。そしてそのためには、夢內容の要素のうちでも、それが實生活に現れる夢には確實に時間的に決定されるやうな、特別に顯著なものを選んだのであつた。

一〇　一九一〇年、十月一日から二日へかけて見た夢。

（斷片）……「伊太利の何處かである。三人の娘が、ちようどどこかの骨董店でもあるやうに、私に小さな高價な品物を見せる。さうしながら彼等は私の膝に腰かける。その品物の一つを見た時に私は言ふ。これや私から貰つたんだれ。その時私は明らかに、サヴォナロラのはつきりした輪廓の顏容をした一つの小さな横額の假面を見てゐるのである。」

サヴォナロラの肖像を最近に見たのはいつであつたらうか？　旅行日記に照らし合はしてみると、私は九月の四日と五日にフローレンスに居つた。其處に居る間に、私は私の同行者をこの狂信的な僧が焚かれて殺されたピアッツア・シニョリアの現場に伴れて行き、其處の敷石にあるこの坊さんの顏の浮彫を見せてやらうと思つたことがあつた。五日の午前に、同行者にそれを注目さしてやつたと思ふ。この印象からそれが夢の中へ再び現れるまでは、なるほど二十七プラス一日經過してゐる。フリースの所謂「女子の週期」だけである。が併しこの實例がその說を證明する力にとつて不幸なことには、私は次の事を擧げればならない。正にその夢の日に手腕はあるが憂鬱な眼をした同僚が私のところへ來た（私が旅行から歸つて以來始めてであつた）。この人に私は數年前に「ラッビ・サヴォナロラ」といふ渾名を冠らせてやつてゐつた。同僚は私のところへ一人の病人を伴れて來た。病人はポンテッバ線汽車の不慮の慘事に遭遇したのであつたが、この線は私自身が一週間前に旅行して來たのである。それでこの同僚は私の考へを最近の伊太利旅行へ引き返へらしたのであつた。「サヴォナ

ロラ」といふ顯著な要素の夢中の出現は、夢の日に於けるこの同僚の訪問で明らかにされたけれども、二十八日の間隔はこの要素を引き出すことに對するその意義を失ふことになる。

二。十月十日から十一日へかけて見た夢。

「私はもう一度大學の實驗室で化學を研究してゐる。宮内官のLが、ほかのところへ來てくれと言うて、私を誘ひ出す。そして廊下を私の前に立つて歩いて行く。ランプか、何かその外の道具を、炯眼にも(?)(眼を鋭くして?)、差しあげた手で自分の前にかざしながら、頭を前へ突き出した特色ある體つきで。やがて吾々は屋外の廣場を歩いて行く……(その後は忘れてしまつてゐる)。」

この夢内容で一番顯著なのは、探るやうに眼を遠くへ向けながら宮内官Lがランプ(か又は擴大鏡(ルーペ)か)を自分の前にかざしてゐる樣子である。私はLには數年間會つたことがなかつた。ところが今考へてみると、夢の中の彼は單に別の人、彼よりももつと偉い人の代りの人物にすぎないのであることがわかる。それは、ローマ人の包圍軍の方をすかし見ながら、火鏡をちようどさういふぐあひに扱つてをり、夢の中の彼と正確に同じ恰好で立つてゐる、シラクサのアレテゥサ噴水の近くにあるアルキメデスの像である。この記念像を最初に(そして最後に)見たのは、いつであつたらうか? 私の記録によると、九月の十七日の夕方に於いてであつた。そしてこの日附から夢までは、事實十三日プラス十日卽ち二十三日間が經つてしまつた。フリースの所謂「男

子の週期」だけにあたる。

この場合にも夢の判断に立ち入つてみると、週期的聯絡の必須性の一部が、遺憾ながら駄目となるのである。この夢の動機はその夢の日に私が受け取つた次の報知であつた。そこの講堂で私が講師として講義をしてゐる大學附屬病院が、近いうちにどこかへ移轉される豫定になつてゐる、といふ報知であつた。そこで私は移轉先の新しい場所は甚だ不便な位置のところだらうと考へて、講堂などはちつとも使用できないことになるかもしれん、と心に思つたのである。その時からして私の考へは、私の講師時代の始まり頃へ溯つて行つたものに相違ないやうに思ふ。その頃私は實際に講堂を持たなかつた。そして一つ手に入れようといろいろ骨を折つても、有力な宮内官や教授諸公からは僅かな好意しか持たれなかつた。その時に私はLのところへ行つた。彼は學部長の職にあつたし、私の庇護者だと思つたので、私の難儀を彼に訴へたのである。彼は私に援助の約束をしはしたが、その後更に何等の頼りをもくれなかつた。その彼が夢の中では、あちらへと言つて、自分で私を別の場所へ案内するアルキメデスなのである。復讐心も、誇大意識も、夢思想になくはないものだといふ事は、夢判斷の知識ある人には容易に思ひあたることであらう。併しこの夢動機がなかつたならば、この夜の夢へアルキメデスの入つてくることは殆どなかつたところであらうと、私は判斷しなければならない。シラクサのかの立像の强いそしてまだ新しい印象は、もつと異つた時間の隔りを置いたならば、用ひられることはないだらうかもしれない、といふ事は、私には依然として不確かである。

三。一九一〇年、十月二日から三日にかけて見た夢。

「(斷片)……オーゼル教授についての何かである。彼は自分で私のために獻立を作つてくれた、それが私には大變安んじた氣持ちを與へる(その他は忘れられてゐる。)」

この夢はこの日の消化障害の反應であつて、その障碍から、私は攝生法を定めるため誰か同僚に賴んでみなければならないと考へたのであつた。この夏に死去したオーゼルを私が夢の中で相談相手に決めた事には、私が尊敬してゐる某大學部教師のほんの少し前(十月一日)に起きた死が結びついてゐる。オーゼルの死んだのはいつか、また私がその死を聞き知つたのはいつであつたか？八月二十二日の新聞の報知によつてであつた。その時に私は和蘭に滯在してをり、そこへ夢キーンの新聞を規則正しく送らしてをつたから、私はその死の報導は八月二十四日か又は二十五日に讀んでをつたに相違ない。ところがこの間隔はもういかなる週期にも合致しない。七日プラス三十日プラス二日、卽ち三十九日間若しくは四十日間を包括する。その間にオーゼルの話が出たつたか、又は彼のことを思ひ出したことがあつたかは、もう考へ出すことができない。)(もつと進んだ推敲がなくては、もはや週期説のために用ひることのできない、かやうな間隔が、規則的な間隔よりか比較にならないほどもつと頻繁に、私の夢から生じてゐるのである。夢の當日の一印象に對する前述した關係のみが不變であると私は思ふ。)

（ハーヴェロック・エリスもこの問題に注意を拂ひ、「注目したにも拘らず」、かかる再現の週期性を自分の夢の中に發見することはできなかつたと言うてをる。彼は一つの夢を見た。その夢の中で彼は西班牙に居つて、ダラウスかヴァラウスかそれともツァラウスか、とにかくどこかへ旅行しようとしてをつた。目が覺めた後彼はこんな地名を思ひ出すことができず、その夢を打ち捨てて置いた。二三箇月後になつて後はツァラウスなる地名が事實サン・セバスティアンとビルバオとの間の一驛の名であり、そこを彼はその夢よりも二百五十日前に汽車で通過したことがあるのを見出したのであつた。第二二七頁）。

であるから私の意見はかうである。凡ゆる夢にとつて一つの刺戟が、それを「まだ一晩も眠つて過ごしてはゐない」體驗の中に存在してをる、と。

最近の過去（夢の夜に先だつ晝を除いた）の印象は、それ故、夢內容に對しては、任意にどれほど遠い過去に屬する他の印象とも、何等變るところのない關係を示すのである。夢は生活のいかなる時代からでもその材料を選び、探ることはできるが、併しそれはただ、或る思想の絲がその夢の日の體驗（「最近的の（レツエンテ）」印象（アインドリユツケ））からしてこれ等の以前のそれへとつながつてをる場合に限られてをる。

最近的印象が特に擢んでられるのは何故であるか？　前に掲げた夢のうちの一つにもつと精密な分析を加へてみるならば、この點についての推測に到達するであらう。私は「植物學の著述の夢」を選ぶことにする。

内容「私は或る植物に關する一篇の著書を著した。その本が私の前にある。今しも私は開けられた一枚の彩色ある繪圖をめくるところである。各册に、ちようど乾腊植物標本集から取つたやうに、その植物の乾腊した見本が一つづつ刷り込まれてをる。」

分析。私はその日の午前に或る本屋のショーヰンドウで一新刊書を見た。それには、シクラーメン屬について、と標題がついてをつた。——明らかにこの植物に關する著述であつた。

シクラーメンは私の妻の寵愛する花だ。私は彼女の願ひどほりに、この花をいゝいゝ持つて來てやるのを考へることが、いかにも稀れにしかないのであつた。私は自分に向つてそれを非難してをる。——花を持つて來てやる、といふ項目については、私は或る話を思ひ出す。それは近頃友人の集りで私が物語つて、忘却は無意識圏内の或る意圖の實行であることが甚だ屢々である、とにかく忘却は忘却する本人の祕密な思考に對して或る推定を與へるものである、といふ私の說の證據に用ひたものであつた。或る若い夫人がその誕生日にはいつも彼女の夫から花束を贈つて貰ふ習慣

であつたが、或る誕生日にこの愛着の徵しが見出されなかつたので、彼女は泣き出した。夫がやつて來て、なぜ泣くのかわけがわからなかつた。つひに彼女が、今日はあたしの誕生日よ、と言ふに至つてやつとわかつた。そこで彼は額を叩いて叫んだものだ。ご免よ、だつてすつかり忘れてたんだからなあ、と。そして出て行つて彼女のため、花を取つて來ようとした。併し彼女は慰められなかつた。何故なら彼女は夫のこの忘却を以て、自分が夫の考への中で、もはや昔のやうな役を演じてゐない事の證據だと考へたからである。——この夫人が二日前に私の妻に出會つて、達者で居ることを告げ、また私の近況も訊いてくれたのであつた。彼女は昔私の治療を受けたことがあつたものだから。

もう一つの手がかり。——私は嘗つて實際、植物に關する著述のやうなものを書いたことがあつた。卽ち、コカ植物に關する一論文を草したのであるが、この論文がコッレルの注意を惹いて、彼をしてコカインの痲醉的特質に思ひ至らしめたものであつた。私の發表の中に私は有機アルカリのかかる應用を既に暗示して置いたのではあつたが、それはその問題をそれから先へと追求するのには十分根本的なものではなかつた。加之、今思ひつくところでは、私はその夢の翌日の午前に(私はこの夢の判斷をするのにその日の夕方になつてやつと暇があつた)、一種白日の空想の

やうなぐあひで、コカインのことを思ひ浮べてゐた。その空想はかうであつた。萬一自分が綠內障にかかるやうなことがあつたら、伯林へ出かけて、そこの友人の許に居つて、友人の推薦してくれる醫者から、自分の名を打ち明けずに、手術して貰ふだらう。手術されてるのが誰であるのかを知らないそのお醫者も、やはり、コカインの使用術發見以來この手術がいかにも樂になされるやうになつたことを、推賞するであらう。私はその時でも顏つきに現したりして、私自身がこの發見に對して或る關與を持つてをるんだなどといふことを、少しも暴露することはないであらう。この空想にはこんな考へが結びついてゐた。醫者といふ者にとつては、自分の一身のために他の同業者が醫師としてやつてくれた世話をそれ相當に考へることは、いかにも樂でないものかもしれない。だから私を知らない伯林の醫者にならば、私は他人と同じに報酬を拂ふことができるだらう。この白日の夢が私の心に現れた後に、やつと私は、その背後には或る一定の體驗に對する記憶が匿れてをるのに氣がついた。卽ち、コッレルの發見後間もなく、私の父が綠內障を患つた。父は私の友人の眼科醫ドクトル・ケエニヒシタインに手術された。ドクトル・コッレルがコカイン麻醉の世話をしたが、その後で、今度の場合にはコカインの採用に關與した三人の人物が全部協同してをるわけですね、と彼が言つた。

さて私の考へは先へ歩を進める。コカインのこの話を一番最近に思ひ出したのは、いつであつたらうか？　それは二三日前に祝賀論文集を受取つた時であつた。この論文集の出版を以て謝恩的に弟子達が彼等の恩師にして實驗所長たる人の記念祝日を慶賀したものであつた。實驗所の功績表の中にコッレルによるコカインの麻醉的特質發見も亦記錄されてゐるのを私は見出した。ここまで來ると突然私は、私の夢は前の晩の或る體驗と聯絡してをることに氣がつく。私は恰度ドクトル・ケエニヒシタインを家へ伴なつて來たが、彼を相手に私は、それに觸れることがある度に必ず猛然と昂奮させられる或る件について、話を始めてしまつてをつた。家の玄關口に彼と一緒に立つてをつた時に、ゲルトネル教授がその若い夫人を伴れてやつて來た。彼等夫婦がなんと花盛りのやうに見える、その幸福を彼等に向つて祝はずにはをられなかつた。ところでゲルトネル教授は私が今話をしたかの祝賀論文集の編纂者の一人であるから、この人が來たことは、私にこの論文集を思ひ出させることと十分なり得たのであつた。それから少し前にその誕生日の失望の話をしたL夫人も、私とドクトル・ケエニヒシタインとの對話の中に、勿論別の關係に於いてではあるが、出て來てをつた。

私は夢內容の其他の項目をも判斷してみようと思ふ。恰かも乾臘植物標本かなんかのやうに、

その著述には植物の乾腊した本が一つ綴ぢこんである。この植物標本には高等中學校の思ひ出が結びついてゐる。或る時私達の高等中學校長が上級の生徒を呼び集めて、彼等に學校の植物標本の檢査と掃除をせよと申渡した。小さな蟲が――蠹魚の居るのが發見されたからであつた。校長は私の働きには信頼を持たなかつたらしい。彼は、私にはほんの僅かの標本しか任してくれなかつた。私は今でも覺えてゐる。それには十字花科植物が押してあつた。私は植物學に對しては嘗つて一度も特別に親密な關係を持つたことはなかつた。植物學の豫備試驗に私はやはり或る十字花科植物を判定するやうに出されたが――私はそれの見わけがつかなかつた。理論的知識の方で埋め合はせがつかなかつたら、試驗も拙いことになつてゐたかもしれない。――十字花科植物からして私は菊科植物を思ひ出す。元來朝鮮薊は菊科植物の一つである。而かもそれは私の寵愛する花と言つていいかもしれないものだ。私よりも人間が立派な私の妻は、市場からこの花を私に買つて持つて來てくれるのが常である。

　私は私の著はした著述が私の前に置いてあるを見る。これとても關係なくはない。昨日伯林に居る私の千里眼的友人が手紙をよこした。「僕は君の夢の本のことを非常に考へてゐる。それが出來上がつて私の前に置いてあつて、私はその頁をめくつてゐるんだ。」私はこの友人の千里眼的

才能をどんなに羨ましく思つたことだらう！　私自身がその本がもう出來て、私の前に置いてあるを見ることができたらばなあ！

綴ぢ合はしてある彩色した繪圖。私が醫學生であつた頃、私はただ著述によつてだけ學ばうとする衝動のため大變に苦しんだ。この頃、學資は制限されたものであつたに拘らず、私は數多の醫學叢書の類を取り寄せてをつたが、それにある彩色の圖繪は、私の狂喜して眺めるものであつた。私はこの徹底性に對する自分の傾向を誇りとしてをつた。その後自分で著書を刊行し始めるやうになつた時、自分の論文のために自分で繪圖を描かねばならなかつた。今も覺えてをるが、その繪圖の或る一枚が實にみじめな有樣に出來たので、親切な或る友人でもそれを以て私を嘲けつたことがあつた。これになほ、どうしてなのか、私にもよくはわからないのであるが、或る非常に古い小兒時代の記憶が加はつてくる。或る時、私の父が私と一番年上の妹とに彩色した繪圖のある一冊の本(ペルシャ旅行記)をくれて、それを引き千切らしては面白がつたことがあつた。そんなことは教育的に言へば殆ど辯解のできないことではあつた。私はその時五歳、妹は三歳より下であつたが、吾々子供たちが有頂天になつてその本を引き裂いてをる(朝鮮薊を花びら一枚一枚やるやうにと、言はねばならん)有樣は、この時代のうちで、私に彫塑的記憶となつてをる

唯一のものである。その後大學生となつた時、本を集めて所有する判然たる特殊な趣味が（著述によつて勉强しようといふ傾向と類似で、シクラーメンや朝鮮薊に關して既に夢思想の中に現れてくる一種の好事癖である）伸びて來た。私は蠹魚（書物の蟲）となつた（植物標本のこと參照）。自分で自分のことを追想するやうになつて以來、私はこの私の生涯の最初の情熱を、いつもかの子供の時の印象に溯らしめるのである、又は寧ろかう言つた方がよい、私はこの小兒時代の場面が私の後の愛書僻に對する一種の「隱蔽記憶」であることを認識してをる。（私の論文「隱蔽記憶に關して」を參照。Ueber Deckerinnerungen. 1899)。當然私は早くからして、情熱のため人は易すく苦惱に陷ることを經驗してをつた。私が十七歲の時に本屋には著しい借りが出來て、それを返濟する資力がなかつた。そして父は私の趣味が何等惡しき事に投ぜられたのでなかつたといふことを以て、辯解の辭とはさせてくれなかつた。ところでこの比較的後期少年時代の體驗を考へ浮べると直ちに、私は友人ドクトル・ケエニヒシタインの會話へと立ち戻つてくることになる。何となれば、私はあまりに自分の好事に耽りすぎるといふあの時の同一の非難が、夢の日の夕方に於ける吾々の對話に於いても、中心となつてゐたのであつたからである。

ここには關係のない理由から、私はこの夢の判斷を追跡することはしないで、ただその判斷に

導く道を指示して置かうと思ふ。判斷をやつてゐる間に、私はドクトル・ケエニヒシタインとの對話を思ひ出させられた、而かもその對話の一箇所以上をであつた。で、この對話のうち、いかなる事柄に觸れたかを自分で考へてみると、この夢の意味は私に理解のいくものとなる。辿りだしてみた凡ゆる考への進行、私の妻の好事及び私自身の好事について、コカインについて、醫者同志の間での診療の面倒について、著述による研究に偏した私の趣味と植物學の如き或る學科に對する私の閑却について、考へを辿り進めてみたが、それ等凡ては後にも繼續してゐるのであつて、そしていろんな方面に亙つた談話の絲のうちの或る一つの絲へ凡てが注ぎ込むのである。またもやこの夢も、一種の辯明たる特質を帶びることになる。第一に分析したイルマの注射の夢と同じく、私の正當なるに對する一種の辯護たる特質を帶びることになる。のみならず、この夢はあの夢で始められた題目を繼續してゐる。そして二つの夢の間に亙る時期に於いて附け加はつて來た新しい材料によつて、かの題目を究明してゐるのである。この夢の外見上は無關心的にも見える表現形式さへも、或る重要性を得ることになる。今度の夢ではかういふのである、おれはこんな價値に充ちたそして成功した論文(コカインについて)を書いた立派な男なんだ、と。それは恰度私があの時には自分の辯明として、僕は實力のあるそして謹勉な學徒なんです、と言つたの

と同じである。兩方の場合にあてはめると、私は敢てさう言ひ得るのだ、といふことになる。併しここでは夢判斷を詳述することは斷念してもよろしい。何となれば元來この夢を報告すべく私の心を動かしたのは、一箇の實例によつて前日の刺戟的體驗に對する夢內容の關係を吟味するだけの意圖であつたのだからである。私にしてこの夢についてただ顯在內容のみを知つてゐるに止まる限りは、夢の或る日中印象に對する關係のみが目に着くことであらう。併しその分析をやつてしまつた後にあつては、同じ日中の他の一つの體驗の中にその夢の第二の源が生ずるのである。夢が關係する印象のうちの第一は、一つの無關心的な、一つの傍系的事情である。私はショーヰンドウに一册の本を見た。その標題はちらと私の心に觸れたが、その內容は殆ど私に關心を起させなかつたといつてよい。第二の體驗は一つの高い精神的價値を持つてゐる。私は眼科醫である私の友人とたつぷり一時間もの間熱心に話をした、そして彼に暗示を與へてやつたが、それは吾吾兩人にとつて密接に關係があるのに相違なく、そして私の心には記憶を呼び起したのである。この記憶が浮んでくると共に、私の內心の實に樣々な動きが私には認め得るものとなつた。その上に、この對話は知人がやつて來たためにすつかり終らずに中斷されたのであつた。さて、その日の二つの印象は、相互にどう關係するか、またその夜に生ずる夢にどう關係するか？

夢內容の中に私が見出すのは、かの無關心的な印象に對する暗示のみである、從つて夢は實生活からして特に好んで傍系的のものをその內容へ取りあげるといふ事實を確めることができる。反之、夢判斷に於いては、一切がかの重要な、そして刺戟となる理由を有つてをる體驗へと導いて行つてくれる。若し私が夢の意味を、さうするのが唯一に正しくある通り、潛在的にしてそして分析によつて明るみに出される內容によつて判斷するならば、私は思はずも一つの新しい重大な認識に到達してしまつてるのである。私は、夢はただ日中生活の價値なき斷片のみを取扱ふものだ、といふかの謎が崩壞するのを見るのである。私は又、覺醒時の精神生活は夢の中で續けられてゐない、その代り夢は馬鹿げた材料のために精神的活動を亂費してをるものである、といふ主張にも反對しなければならない。その反對こそは眞實である。日中に吾々を捕へたものは、夢思想をも亦支配してをる。そして吾々は日中に思考すべき動機を吾々に與へてをつたところの、さういふ材料の場合にのみ、敢て夢を見る骨折りをするのである。

刺戟を與へる理由ある日中の印象が私の夢の動機となつてをるのにも拘らず、私が夢みるのは無關心的な日中印象である、この事に對する最も明らかな說明は、確かに、ここにはまたやはり、吾々が前に、檢閱として管理しつつある一つの精神威力に歸せしめた、かの夢の歪みの現象が存

するのである、といふ說明である。シクラーメーン屬に關する著述の記憶は、恰もそれが友人との對話に對する暗示ででもあるかのやうに用ひられてゐるが、これはかの妨げられた晚餐會の夢に於いて友達のことを言ふ代りに、「燻製の鮭」といふ暗示が用ひられたのと、全く似てゐる。ただ問題となるのは、かの著述の印象がいかなる中間要素によつて、眼科醫との對話に對し暗示の關係をなすに至つたからである。ここではかかる關係は先づ見受けられない。妨げられた晚餐會の實例では、この關係は始めから與へられてゐる。友達の好きな喰物としての「燻製にした鮭」は、そのままで、この友達なる人物が夢みる當人に對して刺戟して起すことのできる表象範圍に屬してゐる。然るに吾々の新しい實例では、ただそれが同日に起きたといふ事以外には先づ何等の共通を持つてゐない、二つの別々な印象が、中心問題なのである。かの著述は午前に私の目に入つた。そしてその夕方にかの會話をやつた。分析が與へてくれる解答は、かうだ。兩者の間に最初は存在してゐなかつた、かやうな關係は、後になつて補充的に、一方の表象內容から他方の表象內容へと紡ぎかけられるのである。この分析を書き誌す際に、旣に私はその問題となる中間要素を指摘しておいた。シクラーメンに關する著述の表象へ、何等別のところからの影響が加はることなくして、ただ、これは私の妻の寵愛する花であるといふ考へが結びつくだけであり、

或はなほその外には、L夫人の持ち得なかつた花束についての記憶ぐらゐが結びつくにすぎない。これ等の背景思想だけで一つの夢を喚び起すのに十分であらうとは、私は信じない。「わが君よ、これをわれわれに知らせるのに、亡靈が墓から出てくる必要はありません」といふ文句が、「ハムレット」の中にある。併しどうだらう、分析に私が思ひ出させられるところでは、吾々の會話を邪魔した人の名はゲルトネル（花屋の義）であつたし、私は彼の妻を今が花盛りの時だと思つたのであつた。のみならず、それを更に補ふものとして恰度今、私に思ひ浮ぶのは、フローラ（羅馬の花の女神）といふ美しい名前の私の婦人患者が暫く吾々の對話の中心となつてゐたのであつた。それで、植物の表象範圍に屬するこれ等の中間要素を渡りつつ、無關心的のとそれから刺戟的のと、二つの日中體驗の結合が完行された、といふぐあひになつたものに相違ない。その後に、もつと先の關係、卽ちコカインの關係が現れる。これは當然の事として、ドクトル・ケエニヒシタインなる人物と私が書いた植物學の著述との間を仲立ちすることができるものであつて、その兩つの表象範圍の融合を固めて一つの表象範圍としてしまふ結果、一方の體驗の一部が今や第二の體驗に對する暗示として流用されることができたのである。

この說明を勝手なもの、若しくは企んだものとして攻撃する人もあるかもしれんことは、私の

覺悟してゐるところである。若しゲルトネル教授が彼の花盛りの夫人を伴れて出て來なかつたらば、また若しその話に出た婦人患者がフローラといふのでなく、アンナといふ名であつたらば、どうなつたらうか？　と問ふであらう。而かもその返答は容易である。若しもこれ等の思想關係が生じなかつたであるならば、その時には恐らく他の關係が選ばれたであつたらう。かかる關係を作り出すことは、吾々がそれで日々を愉快にしてゐる洒落や謎の問ひが十分證明してくれる如くに、易々たるものである。機智の勢力範圍は無制限なものだ。更になほ一歩を進めて言うてみるに、若し日中の二つの印象の間に何等の十分に效果ある中間關係が作り出されなかつたとするならば、その時にはこの夢は正に別なものとなつたであらう。群れをなして吾々に迫つて來ては吾々に忘れられてゐる日中の印象のうち、どれか別の無關心的な印象がその夢のためにかの「著述」の代りを引き受け、會話の內容と結合をなし、そして夢內容に於いてこの會話を代表したであつたらう。それが、著述の印象以外のいかなる印象も、この運命を持たなかつたところをみれば、その印象こそはこの結合にとつて最も適當な印象であつたのであらう。レッシンクの描いたヘンスヘン・シュラウの如くに、「世の中の金持ちだけが一番たんとお金を持つてらあ」といつて、不思議がる必要は毫もないのである。

吾々の解說に據ると、無關心的體驗が心理的過程によつて精神的に價値ある體驗の代理をなすに至るといふことになつたが、その心理的過程はまだ疑問的で且つ怪訝なものに思はれるに相違ない。後章に於いて、吾々はこの外見上は不正確な作業の特色をもつとよく理解することを力めてみるであらう。今ここでは、この過程の結果だけを取扱へばよい、のである。吾々は夢分析の際には、無數の、そして定まりきつて復活して現れる經驗のために、この過程をどうしても認定せざるを得ないのである。ところでその過程の有樣は、恰も或る轉移が——吾々をして言はしむれば、精神的力點（アクツエント）の轉移が——あの中間要素の道を經て成立するのである、といつたやうなもので、始めには微弱な強度を有してゐた表象が始めから一層大きい強度を有してゐた表象の負擔を引き受けるために、自身も強度を增して、その結果意識へ到達するだけの力を得るのである。かかる轉移は、感情を與へることか若しくは一般に原始的動作が問題である時には、少しも吾々に不思議とは思はれない。孤獨に暮らしてをる處女がその溫情を動物に移すとか、獨身者の男は熱情的な蒐集家になるとか、兵士が色を塗つた布地の一流れ、卽ち旗を自分の心血を以て守護するとか、戀愛關係では一秒間でも握手が延びれば嬉しさが湧くとか、又は「オセロ」に於いては落した手布が憤怒の爆發を生ずるとか、これ等は總べて、吾々には爭ふべからざるものに思は

れる精神的轉移の實例である。然るに何が吾々の意識へ入つてくるか、何が吾々の意識の前に引き留られて殘るか、即ち吾々が何を考へるか、その事についてとなると、同じ道によつて、又同じ原理によつて決定が與へられることは、吾々に病的の印象を與へる、そしてそれが覺醒生活に於いて現れると、吾々はこれを思考過失と名づけてをる。吾々は後節に行ふ觀察の成果を豫めここに洩らして置かう。それは、吾々が夢の轉移の中に認めるであらうところの精神的過程は、なるほど病的に妨害されたのではないけれども、併し乍ら、常規的のそれとは異つてをるものである、それよりかもつと、根元的な性質の過程であることが明らかにされるであらう、といふのである。

從つて吾々は夢內容は傍系的體驗の殘物を採用するといふ事實をば、(轉移による)夢の歪みの現れなりと解し、そして今ここに、二つの精神的取調所の間に存在する、かの通過檢閲の結果が夢の歪みであると知つてしまつたことを思ひ出すのであるが、かくて吾々に期待されるのは、夢分析は規則的に日中生活からして、現實的であり精神的意義ある夢源泉を發見してくれ、そしてその源泉の記憶がかの無關心的記憶の上へ自分の力點を轉移してをる事をも指摘してくれることである。この解釋の結果、吾々はローベルトの學說には全く反對になる。ローベルトの學說は吾

吾には用ひがたいものとなつてしまつた。彼が說明せんと欲した事實は正に存在しないのである。その存在せざる事實を假定せるは、誤解に基いてをる。外見的夢內容の代りに、夢の實際の意味を置き代へることをせざるに基いてをる。ローベルトの說に對しては、更になほ次の如く抗辯することができる。若しも實際に夢が特別な精神的働きによつて日中記憶の「屑」を拂ひのけ、吾々の記憶力の負擔を輕からしめるべき任務を持つものだとしたならば、吾々の睡眠は、吾吾が覺醒時の精神生活から推して主張し得るよりかも、もつと煩はしきものであり、もつと努力的な働きをなすやうに使用されねばならないであらう、と。何故なら吾々の記憶力をこれに對して保護してやらねばならんやうな日中の無關心的印象は、明らかに測り得ざるほど多數である。その總額を征服するのには、夜では足りないくらゐであらう。であるからそんな說よりは、無關心的印象は吾々の精神力から何等能働的に干涉を受けずに忘れられてしまふのである、といふ方がずつともつとあり相なことである。

それにも拘らず、吾々はどこかに一種の警告を感じる。もつと考慮を拂ふことをしないでは、ローベルトの考へに別れを告げてはならないのだぞ、と。日中の——而かも最後の日の——無關心的印象の一つが、定まりきつて夢內容に對して一寄與をなしてをる事實に、吾々はまだ說明を

與へずに捨てて置いた。この印象と無意識圏內にある本來の夢源泉との間にある關係は、必ずしも始めからして存在するものではない。前に觀察した如く、この關係は後から補遺的に、謂はば目論まれた轉移の役に立つために、夢の仕事の間に漸く作り出される。してみると、正にこの假令無關心的ではあるが、最近的なる印象の方向に應じて、結合の道を立てるべき一種の强要が存在してをるものに相違ない。この印象は何等かの性質のお蔭で、それに對する特別な適合性を有つものに相違ない。若しさうでなかつたら、夢思想が自分の力點を自分自身の表象範圍の非本質的な成分の上へ轉移することも、やはり同じやうに、容易に行ひ得ることであらう。

次の經驗は吾々にとつてこの問題を明らかにする方便となり得るかもしれない。夢の刺戟となるだけの價ある二つ以上の體驗を一日のうちになしたとすると、夢は二つの體驗の指示を聯合して、唯だ一つの全一的なものに作る。夢はそれ等から一統一を構成すべしといふ强制に從ふのである。例へば、私が夏の或る日の午後に汽車へ乘つたら、車室の中で二人の知人に出會つたが、この二人はお互ひに知り合ひではなかつたとする。そのうちの一人は勢力ある同業者であつた。もう一人は私が醫師として出入してをつた或る身分高い家族の一員であつた。私は二人をお互ひに紹介してやる。併しこの二人の交際は、その長い旅行の間、私を通過して行はれる。卽ち私は

或る時は一方と、或る時は他方と、或る對話材料を取扱はねばならなかつた。一方の同業者に對しては私は彼と私と兩方に共通な知人で、恰度醫者を開業したばかりの人を引き立ててくれるやうに賴んだ。同業者は答へた。自分はあの若い人の手腕については確信を持つてをるけれども、彼の揚らない風采が身分高い家庭への出入りを容易ならしめないかもしれない、と。私は答へた。それがあるからこそ、引き立てて貰はねばならんのさ、と。すぐその後でもう一人の知人に向つて私は彼の伯母さん——私の婦人患者のうちの一人の母にあたる人——で、その頃重い病氣に罹つて寢てをつた人の近況を訊ねてみた。この旅行後の夜に、私は夢を見た。私が引立を賴んでやつた若い男が高雅な廣間に居り、そして私が凡ゆる身分高く富裕な人達をその中へ持つて來て作つた選り拔きの人の集りの前で、世馴れた人の表情をしながら、一人の老婦人に對する追悼演説をやつてをる。その婦人は汽車で一緒になつたもう一人の人の伯母であつて、夢の中では死んだことになつてゐた。(私はかくさず打ち明けるが、私とこの婦人とは仲よい間柄ではなかつた。)かくて私の夢はまたしてもやはり、日中の兩つの印象の間に結合を見出し、その結合によつて一箇の統一的な境地を構成してをる。

これと類似の多數の經驗を基礎として私は、夢の仕事にとつては一種の强要が存在してゐて、

凡ゆる夢刺戟源泉を組み合はせ、一箇の統一を夢の中に作るものである、といふ命題を陳述せざるを得ない。

今や私は、分析が指示する夢刺戟の源泉が、いつも必ず或る最近的の(そして有意義なる)出來事であらねばならないか、或は又、或る内的體驗、從つて或る精神的に價値多き出來事に對する記憶、或る考への進行が、夢刺戟者たる役目を引き受けることができるか、この問題を研究してみようと思ふ。多數の分析からして最も一定的に生ずる答へは、後者を肯定する意味を持つてをる。夢刺戟者には、一箇の内的過程であつてそして謂はばその日中の思考働きのために最近的となつてをるものが、なり得る。で、今こそ、夢源泉を認めしめる種々の諸條件を一箇の方式に纏めてみてもいい時であらう。

夢源泉は次の如し。

(一)夢の中に直接代表されてをる最近的にして精神的に有意義なる一つの體驗。(イルマの注射の夢、私の叔父である友人の夢)。

(二)夢によつて一つの統一に聯合されてをる數多の最近的にして有意義なる體驗。(若い醫師の追悼演說の夢)。

（三）夢內容の中で或る同時的な併し無關心的な體驗の指示によつて代表される一つ又は數多の最近的にして有意義なる體驗。（植物學の著述の夢）。

（四）記憶、思考の進行の如き）或る內的な有意義の體驗であるが、その後夢の中で規則的に或る最近的な併し無關心的な印象の指示によつて代表されるもの。（分析中の患者の大抵の夢はこの種のものである）。

これでわかる通り、夢內容の一成分はその夢の前の日の、或る最近的印象を繰返へすものであるといふ條件が、夢判斷にとつて全く確定せられる。夢の中の代表者と定められたこの參加部分は、或は本來の夢刺戟者自身の表象範圍に屬するものであるか —— 而かも、それの本質的成分となつてることもあるし、でなければまた重要ならざる成分となつてることもある —— 或は多かれ少なかれ複雜な結合によつてその夢刺戟者の範圍と關係を結ばれてをる或る一つの印象の領域から發してをるか、そのどつちか一つであり得るのである。その條件が一見したところでは多數に見えるけれども、それはこの場合ではただ、或る轉移が起らずに終つたか、それとも起つてをるか、その兩者のうちいづれか一つであることによつて生じるのであり、そして吾々はここに、この兩者のうちいづれか一つといふ事が夢の對照をば說明するのを容易ならしめるのは、ちよう

ど夢の醫學的理論にとつて腦細胞の部分的覺醒から十分なる覺醒までの系列が說明を容易ならしめるのと同一であることに、氣がつく。(前出、第一三三頁參照)。

更にこの系列について指摘される事は、精神的な價値に滿ちてはをるが併し最近的ではない要素(思考の進行、記憶)が夢形成の目的のために或る最近的であるが併し精神的には無關心的である一つの要素によつて代用され得るのは、ただその際に次の二つの條件が守られる場合のみである。(一)夢內容が最近に體驗されたことへ接合する事、(二)夢刺戟者はやはり精神的價値に充ちた一つの經過である事。この兩つの條件が同一印象によつて實行されるのは、ただ一つの場合のみ(前出、夢源泉の第一)である。なほ若し、無關心的印象でも、それが最近的である限りは、夢のために利用せられるが、それが一日だけ(又はせいぜい四五日)古くなつてしまふや否や、その利用される性質を失つてしまふものである事を考量してみるならば、その時には斷然次の事が認定されねばならない。卽ち、印象の新しさそのことが、その印象に夢形成のための或る精神的價値を與へるのであり、この價値は感情的に强められた記憶乂は思考進行の價値にとにかく匹敵するといふ事が認定される。夢形成にとつての最近的印象のかかる價値がいかなるところに基礎づけられてをるものか、この事は後に心理學的熟考を試みる際に始めて思ひあたることであらう。

(第七章參照)。

序でながらここで吾々の注意を惹く事實がある。それは、吾々の記憶及び表象材料について、夜間に且つ吾々には意識されずに、重大な變更が行はれることがあるといふ事實だ。或る件について結局の決定をなす前に先づ一晩寢るのがよい、といふ要求には、明らかに十分の道理がある。併しこの點になると、吾々は夢作用の心理學からは出てしまつて、睡眠の心理學へ手を出してをるものだといふことに氣がつく。これはやはり、再々やり勝ちのことだ。

(夢形成のために演ずる最近的なものの役割に關する重要な參考を、オ・ペエッツル が多方面に亙りすぎるぐらゐに、多方面的な或る研究に於いて與へてをる。O. Pötzl, Experimentell erregte Traumbilder in ihren Beziehungen zum indirekten Sehen. 1917. ペエッツルは種々の實驗者をして、彼等が一つのタヒストスコープで露出された肖像畫について、意識的に理解した部分を圖に書かしめておいた。そしてその夜に於ける實驗者の夢を念頭に置いて、その夢のこの肖像と關係する部分をまた圖によつて現さしめた。するとその結果として明らかに生じた事は、露出肖像の實驗者によつて理解されなかつた細部が夢形成の材料となつてをるのに、露出に倣つて圖の中に書かれ、意識的に知覺された細部は、顯在的夢內容の中に、二度と現れて來なかつたのである。夢の仕事はその取り上げた材料をば、かの有名な「我儘勝手な」、それより正しく言へば、自

主獨立的な夢のやり方を以て、夢形成傾向の役に立つやうに、加工してしまつたのである。プレエッツルの調査の刺戟は、この私の著書の中で試みられてをる夢判斷の意圖などを遙かに通り過してをるものである。なほもう一言指摘して置きたいのは、夢形成を實驗的に研究せんとするこの新しい方法は、睡眠妨害的刺戟を夢內容の中へ入れるのを主眼としてゐた昔の粗野な技術に對しては、遙かに隔りを有つものであることだ。)

さて上述せる吾々の究極の推定を覆さんと脅かすところの抗辯が一つある。若し無關心的印象がただそれが最近的である間に限つて夢內容の中へ入ることができるのだとするならば、吾々が夢內容の中に、吾々の昔の時代に屬する要素をも見出すのは、どうして起ることであるか、それがまだ最近的であつた時にあつても——シトリュムペルの言葉に從へば何等の精神的價値を所有してゐなかつた、從つてとうの昔に忘れられてしまつてる筈の要素を、從つて新しくもない、精神的に有意義でもない要素をも見出すのは、どうして起ることであるか？

吾々が神經病患者に試みる精神分析の結果を考への基礎とする時、この抗辯は完全に片づけられてしまふ。卽ちこの解決はかうだ。精神的に重要な材料を無關係なもので代用した（夢作用のためにも竝びに思考作用のためにも）轉移は、この場合には既にその昔の時代に於いて生じてしまつてをり、そしてそれ以來この轉移は記憶力の中に固定されてしまつてをる。かの一番初めに

は無關心的であつた要素は、それが轉移のお蔭で精神的に有意義なる材料たる價値を引き受けた後にあつては、正にもはや無關心的ではないのである。實際に無關心的のままでゐたものは、もはやまた夢の中に再現されることはできない。

以上の究明からして、私が決して無關心的夢刺戟材料は存在しない、從つて決して無邪氣な夢は存在しないといふ主張を述べる者だと推論するのは、尤もである。小兒の夢、及び夜間の感應に對する反應的夢の如きを除いて言ふならば、これだけが、唯一嚴正に、私の意見である。人が普通に見る夢は、精神的に有意義であると顯然認識せられるものか、或は、歪められてをるかであるが、この時も併し、夢判斷を完行してみた後には、やはりそれも復た有意義であると認識せられるのである。夢は決して小事を相手にしない。吾々はつまらない事のために吾々の睡眠を邪魔させてはおかない。（私の著書「夢判斷」の最も親切な批評家であるハーヴェロック・エリスはかう書いてゐる。第一六九頁。「ここが、吾々の多くがそれから先もはやフロイドに蹤いて行くことのできなくなる點である。」併しエリスは夢の分析をやつたことがない。それで顯在的夢內容に據る判斷がいかに道理無きものであるかを信じようとしないのである）。外見上無邪氣な夢も、それの判斷に骨を折つてみると、厭やなものであることがわかつてくる。世上の俗語を使つてよければ、「あいつは甚だづるい奴なん

も考へるから、私は以下に私の蒐集したうちから。一列びの「無邪氣な夢」(harmlose Träume)に分析を加へてみよう。

一

或る聰明で上品な若い婦人が物語つた。この婦人の生活振りは遠慮勝ちな人、所謂「靜かな水」の部に屬するものである。「わたしはこんな夢を見ました。わたしは市場へ遲れて行つたので、肉屋でも八百屋でも、何も手に入りませんのです。」確かに無邪氣な夢である。併し夢はこんな樣子のものぢやない。私はそれを細かく語つて貰つた。するとその報告は次のやうである。彼女は籠を持つた料理女中を伴れて市場へ行つた。肉屋は彼女が何か賴んだ後で、そいつはもうありませんと言つて、こいつも結構ですぜと言ひながら、何か別のものを彼女に渡さうとした。彼女はそれを斷つた。そして八百屋の神さんのところへ行つた。神さんは束にして結ひつけてある、黑い色の何か一風變つた野菜を彼女に賣らうとした。彼女は言つた、そんなもの何だか知らない、そんなもの要らない、と。

この夢の日中への聯絡は甚だ簡單である。彼女は實際遲れて市場へ行つた。そしてもう何も手に入らなかつた。肉屋の露店は既に閉ぢてあつたのだ、とこの體驗の記事に書きたい氣がする。だが、待てよ、この文句は——又は寧ろその反對は——男子の服裝のだらしなさに關係する全く平俗な慣用語ではないか？　夢みた當人はこの文句を用ひはしなかつたものの、恐らくこの文句を避けたのであつた。で、この夢に含まれてをる細部の判斷を試みよう。

夢の中で何事かが說話の性質を持つ、卽ち言はれたり聞かれたりして、ただ考へられただけではない——この兩つは大抵の場合確實に區別される——場合には、その說話されたものは覺醒生活の說話を因にしてをるが、勿論それは原料として取扱はれ、細かく裂かれ、微かな變化を加へられ、殊にその聯絡からもぎ離されてしまつてをる。（夢の中の說話については夢の仕事の章を參照せよ。諸家のうち唯だ一人、デルベッフだけは夢說話の來歷を認識してをるやうである。彼は第二二六頁に夢說話を「ステロ版」に比較してをる。）　夢判斷の仕事に際しては、かかる說話から出發することができる。肉屋の說、そいつはもうありません、といふのは何が因になつたのか？　私自身から出たのである。二三日前に私は彼女に說明してやつた。「一番古い小兒時代の體驗はそのままではもうありません。併し分析をするとそれの代りに「移動」と夢とになつてるのです。」してみると、私が

その肉屋であるのだ。彼女は古い考へ方及び感じ方をかく現在へ移動することを拒むのである。――そんなもの知らない、そんなもの要らない、といふ彼女の説話は何から發してをるか？　これは分析のために分解される。そんなもの知らないと彼女自身が前日料理女中と口論をした時に言つた。その時には併し附け加へて、嗜みよくしなさいよ、と言つたものだ。ここに一種の轉移あることがわかる。彼女は料理女中に向つて自分が使つた二つの文章のうちから、意味のない方を夢の中へ採用したのである。ところで「嗜みよくしなさいよ」といふ抑壓された方のみが併し其他の夢内容には合致する。無作法なことを强ひて、所謂「肉屋の露店を閉ぢる」のを忘れてる人に向つたら、かう呼びかけるのはありさうなことだ。これで判斷の道筋を實際行きあてたのである。それを證據立てるのは、八百屋の神さんについての出來事の説話に含まれてをる暗示と、これとの一致である。束に結ひて賣られる或る野菜（彼女が後に補つて言つたところでは、長めなものである）、その上黒いといへば、それはアスパラガスと牛蒡との、夢の中での結合以外の何であり得ようか？　アスパラガスの意味を解くことは、どんな男の人に向つても、どんな女の人に向つても、その必要があるまい。併しもう一つの野菜も亦――「黒い奴、牛蒡みたいな！」と呼びかけとして、吾々がこの夢物語を始めようとした時に、すぐ冒頭に推測したのと同一の性慾的題

目を指示するものと私には思はれる。卽ち、肉屋の露店は閉まつてゐた、云々。この夢の意味を完全に知るのが主ではない。以上の說明だけでも、この夢は內容豐富で、決して無邪氣でないといふ點は、確かである。（物好きな人のために言つて置かう。この夢の背後には私が不行儀な性慾挑發的な振舞ひをなした、そして彼女が拒絕をなしたといふ一種の空想が匿れてをるのである。かかる判斷は前代未聞のことだと思ふ人がをつたら、私はその人に向つて、醫者がヒステリー症患者からかかる訴へを蒙つた多數の實例あることを敎へてやる。それ等の場合では、これと同じ空想は歪められて夢となつて現れず、却つて明白に意識せられ妄想となつてをるのである。——この夢を見たのは、婦人患者が精神分析的診療に入つた時であつた。後になつてからやつと理解し得たところでは、彼女はこの夢を以て彼女の神經病の原因たる初期傷害を繰返へしたものであつたのである。私はその後に、彼等の小兒時代に於いて性的侵害に曝らされてをり、そして現在になつて夢の中で、その侵害の再來を願望してをつた他の患者達について、これと同じ事情を發見してをる。）

二

同じ婦人患者のもう一つの無邪氣な夢。これは前のに對して或る點では對蹠をなしてをる。彼女の夫が訊いた、ピアノの調子を見さしたらいいんでないか？　彼女は答へた、無駄ですわ。で

なくともそれは新しく革を張らなければならないんです。これも復たやはり、前日の實際の出來事の反復である。彼女の夫がさう訊いて、そして彼女はそれと似た返事をした。ではあるが彼女がそれを夢に見た事は、何を意味するか？　なるほど彼女はそのピアノについてそれはまづい音を出す厭やな箱で、彼女の夫が結婚前から持つてをつた云々（ここは吾々が判斷の後に明かに知る如く反對のもので代用されてをる）の話をすることはしたが、併し解決に對する鍵を與へるのはただ、無駄ですわ、といふ說話である。この說話は、昨日彼女が女の友達を訪ねたが、その時に出來してをる。友達の家で彼女はジャケツをお脫ぎなさいとすすめられたが、かういつて斷つた。ありがたう、無駄ですわ、わたしすぐ行かなければなりませんから。この話を聞くと私は、昨日のことだつたが彼女が精神分析診療の間に突然そのジャケツを摑んだ、そしてそのジャケツのボタンが一つ空いてゐた事を思ひ出さずにはゐられないのである。その樣子は、恰も彼女はどうかここは見ないでください、無駄ですわ、と言はうと欲するかの如くであつた。かくてピアノの箱(Kasten)は補充されて胸廓(Brustkasten)となり、この夢の判斷は直接に彼女の體格の發達期たる時代へ入つて行くが、その頃彼女は自分の姿恰好に不滿を持ち始めたのであつた。また、「厭やな」といふ語や「拙い音」をも考へてみた上、更に夢や暗示に於いては、女子の身體の胸廓の部分が——身

體全體の代りに——對照としてまた代用として——現れることがいかに屢々であるかを思ひ起してみるならば、これもまた昔の時代へ溯らしめるものである。

三

私はこの系列を中斷して、ここに或る若い男の短い無邪氣な夢を一つ嵌めてみる。彼は、また冬の外套を着るんだが、それがひどく厭やなことである夢を見た。この夢の動機は表面上、突然にまたやつて來た寒さであつた。併しもつと細かい判斷は次の事に心づくであらう。この夢の短い兩つの部分は相互にぴたりとしない、何故ならば寒い時に重い又は厚い外套を着る、何でそれに「ひどく厭やなこと」があり得ようか。分析をしてみると生じた第一の思ひ付がまた、この夢の無邪氣性には不利益な記憶をもたらしたのである。彼は昨日或る婦人が自分の最近の兒はサックがばちんと破けたために出來たのだ、と親しげに打ちあけたことを思ひ出したのであつた。ところで彼はその機會に考へを纏めてみた。薄いサックは危險だし、厚い奴は拙いな、と。サックが外套(Ueberzieher)になるのも道理でないか。それはほかりと冠せるものなんだから。ドイツ語では、輕い上着をもまた、上つ張り(Ueberzieher)と言つてをる。かの婦人が知らせてくれたやう

な一箇の體驗は、この未婚の男子にとつては、勿論「ひどく厭やなこと」であるかもしれない。
さてまた吾々の無邪氣な夢の婦人患者へ歸つていかう。

四

彼女は一本の蠟燭を燭臺へ立てる。併しその蠟燭は折れてしまつて、うまく立たない。學校の少女たちがいふ、あんたが下手なんだ、と。お孃さんたる彼女は、それは自分のせいぢやないわと答へる。

この場合には現實的な動機はあつた。昨日彼女は實際に一本の蠟燭を燭臺へ立てた。併しその蠟燭は折れてゐなかつたのである。ここに或る見透しの利く象徵が利用されてをるわけだ。蠟燭は女子生殖器を昻奮させる道具である。それが折れてしまつて、うまく立たないとすれば、それは、夫の陰萎を意味する(「それは自分のせいぢやないわ」)。ただ問題は、周到な教育を受けたそして凡ゆる醜汚を知らずに來た若い夫人が、果して蠟燭のかかる利用を知つてをるか、である。ところが圖らずも、いかなる體驗によつて自分がこの知識を得たかを、彼女は示すことができた。ライン河を小舸で渡つてをると、彼等の傍を一艘のボートが通りすぎた。そのボートの中には大

學生達が乘つてゐて、大愉快を以て一つの唄をうたつて、否吹鳴つてをつた。「若しやスウェーデンのお妃が、窓の鎧戸しめて、アポロの蠟燭で……」。

その最後の語が彼女に聞えなかつたか、それとも判らなかつたかであつた。彼女の夫は彼女にせがまれて、その說明を與へねばならなかつた。かくて後に、その詩句がこの夢內容の中で或る賴みに對する無邪氣な記憶によつて、代理された。蠟燭をつけるその賴みといふのを、彼女がまだ女塾に居た頃或る時下手にやつたことがあつた。而かも詩句とこの記憶とは、共通點を持つてをる、卽ち兩方に於いて、窓の鎧戸がしまつてゐる。手淫の題目を陰萎と結び合はせるのは、十分明らかなことだ。この夢の潛在的內容にある「アポロ」が、この夢をこれよりもつと以前の或る夢に關聯させる。その夢には處女の女神パラスのことが出て來たのであつた。これ等凡て、まことに無邪氣ではない。

五

夢を土臺として、その夢をみる當人の現實の生活狀態への推定を、あまりに輕々しく浮べないために、私はなほもう一つの夢を附け加へる。この夢も同じやうに無邪氣に見え、且つ同じ婦人

患者のものである。彼女はかう物語つた。私は晝の間に實際にやつたことを夢に見ました。それは閉めるに骨を折つたほど一杯にご本を入れた一つの小さな鞄の夢です。そして實際に起つた通りに夢を見たんです。この話では話してる當人が夢と事實との一致に專ら力を入れてをる。ところが、夢に關するかういふ批判や、夢についての指摘は、覺醒時の思考の中にあつて或る席を占めてをるのではあるが、併しなほ後に出る實例が實證するであらう通り、凡て定まりきつて夢の潜在的內容に屬するものである。夢が語るものはそれに先だつ晝に實際起つてをる、と示されたわけだ。が、この夢を分析して判斷する際にも英語と關係することになつたが、どうしてそんなことに思ひ付いたかをここに報告するのは、もう沉漫であるかもしれない。要するに、またしても一つの小さな箱(box)が問題となり(前出、第二六五頁、箱に入つてる死んだ兒の夢、參照)、そのボックスはもう何も入らないほど一杯に滿たされてしまつてるのである。ただ今囘の夢では、少くとも道ならぬことは存してゐない。

以上凡ての所謂「無邪氣な」夢に於いて、性的要素が檢閱の動機となつてをる、その事が甚だ著しく目に立つ。これは原理的意義のものであるが、併し今は吾々はこれを傍に捨ててをかねばならない。

第二節　夢源泉となる幼兒的のもの

夢内容の特色中の第三のものとして、吾々は（ローベルトを除いた）凡ゆる著述家が述べてをる事實、夢には覺醒時の記憶力の支配下にはないものと思はれる、極めて古い昔の時代に屬する印象が、現れてくることがある事實を、引用してをいた。この事がどれほど稀れに、又はどれほど屢々起るものか、それを判定するのは、もとより難かしい。何故ならば夢の中のその關係的要素は、覺醒した後には、それの來歴が識別されないからである。であるからここで主となるのは、小兒時代の印象であるといふ證明は客觀的な方法で與へられるよりほかはなく、そのための諸條件が綜合的に集まることは稀れな場合にしかない。モーリはこれについて特別に證明力ある一例として、二十年間不在の後に自分の故郷を訪ねようと決心した或る男の話を語つてをる。その出發前の晩にこの男はこんな夢を見た。自分は自分の全く知らない土地に居る、そして其處の街路で一人の見知らぬ紳士と出會ひ、その人と談話をしてをる。ところが實際自分の故郷へ歸つてみると、その見知らなかつた土地は彼の故郷の町のすぐ近くに存在してをることを確かめることができたし、夢の中の見知らなかつた紳士も死んだ父の友人で其處に生き殘つてる人であることが

わかつたのである。これは、この男がその紳士もその土地も小兒時代に見たことがあつたのであるといふ事に對する、信服せしむるに足る一箇の證據である。その外にこの夢は、かの音樂會の入場劵を衣嚢に持つてをる娘の夢（前出、第二六二頁）や、父がハメナウへの遠足を約束したあの小供の夢などと同じく、焦慮の夢とも解せられる。ものもあらうに、小供時代のかかる印象を夢の中に再現せしめる動機は、勿論分析を行はないでは、發見されるべくもない。

自分の夢は滅多にしか歪みを受けることはありません、と自慢してをる私の學生の一人が少し前にこんな有様を夢に見たといつて、私に報告してくれた。彼の昔の家庭敎師が保姆の寢床に入つてをる、この保姆は彼が十一歳になるまで彼の家に居たのでした、と。彼にとつては、この場景の様子が、夢みてる間にも、目立つてをつた。大いに興味を感じて彼はその夢を自分の兄に語つたが、兄はその夢みた事實の實際なることを笑ひながら彼に確めてくれた。兄の方はそれをよく憶えてをる。彼はその頃六歳であつたから。この戀人同志は、周圍の事情が夜分の交はりに都合のよかつた時には、大きい方の子にビールを呑まして醉はせるのが常であつた。この頃三歳で保姆の部屋に眠つてゐた小さい方の子――この夢をみた當人――は邪魔者とは見なされなかつたのである。

夢が小兒時代の要素を含んでをるといふ事が、夢判斷の助けをかりないでも、確實に定められる場合は、なほもう一つある。それは卽ち、その夢が所謂繼起的な夢であつて、最初小兒時代に見たのが、成人した後にも、睡眠中に繰返へし時々現れる場合である。この種の實例は、よく知られてをる。私自身についてはかかる繼起的の夢は一つも覺えてはをらないが、見聞のうちから二三附け足すことはできる。三十代の或る醫者が私に語つたところでは、彼の夢生活の中に、小兒時代の初期からして今日に至るまで、屢々一匹の黄色い獅子が現れるが、これについては、彼は正確な說明を與へることができる。卽ち或る日の事、夢でよく見覺えのあるこの獅子が明らさまに陶器製の奴となつて出て來たのである。これは久しくどつかに紛失してしまつてゐたのであるが、その時もう青年であつた彼は、母親からこれはお前の小兒時代に一番ほしがつた玩具であつたと聞かされたけれども、彼自身はもうそれを思ひ出すことはできなかつた。私の婦人患者の一人は、彼女の三十八年の生涯の間に、四回乃至五回も同じ恐怖的場面を夢みたことがあつた。彼女は追ひかけられる、或る部屋へ逃げこむ、扉を一度閉ぢるが、外側にはさんである鍵を拔かうとして、また扉を開ける、これを取ることができねば何か恐ろしいことが起るかもしれんといふ氣持ちで、その鍵を掴んで、そして內側から扉を閉ぢる、そしてからほつとして息をついた。

この小場面の實際に於いて勿論彼女はただ傍觀者であつたのであるが、それがいかなる以前の時代へ移されねばならぬものか、私は指示することができない。

さて顯在夢內容から離れて、分析が始めて發見する夢思想に考へを向けるならば、その內容が何等そのやうな種類の推測を、喚び起さなかつた夢にあつても亦、小兒時代の體驗の働きが加はつてをるのを、確かに認め得て、驚愕するのである。前述せる「黃色い獅子」の話をしてくれた醫者が、やはり或るかういふ夢の特別にご親切なそして敎ゆるところ多い一實例を私に知らしてくれた。ナンゼンの極地探檢旅行記を讀んだ後で、彼はこんな夢を見た。彼はこの勇ましい探檢家がその苦痛を訴へる坐骨神經痛のために、氷原の中で、電氣療法をしてやつてをる！ この夢の分析に對して小兒時代の或る話が彼に思ひ浮んで來たが、それがなかつたら、この夢は勿論いつまでも理解しがたいものであつた。彼が三歲か四歲の子供であつた時は、或る日、大人たちが發見旅行について話してをるのを彼はもの珍らしさうに聞いてをつたが、その後でパパさんに訊いた、それは何か重い病氣なの？ 明かに彼は旅(Reisen)を痛み(Reissen)と取り違ひてゐたのであつた。そして姉にからかはれたので、この恥かしい經驗は忘れられずにをつたのである。

かのシクラーメン種屬に關する著述の夢を分析してをるうちに、五歲になる私に引き破らせる

ため父が彩色した繪圖の附いてゐる一册の本をくれたといふ、保存されてゐた小さい時の記憶に行き當つたのも、全く類似の場合の一つである。人或ひはこんな疑ひを出すかもしれない。この記憶が實際に夢內容の構成に參與したのか、寧ろそれよりは、分析の仕事が後に補足的に或る關係を作り出してゐるのではないか、と。併し聯想結合の豐富なると錯綜せるとが第一の解釋の妥當なるを保證してゐる。シクラーメン——寵愛する花——好きな喰べ物——朝鮮薊、朝鮮薊のやうに千切る、一枚一枚（この言葉はその頃支那帝國分割に因んで毎日人々の耳朶を打つたものであつた）——植物標本——書物が好きな喰べ物である蠹魚（しみ）。その外、私がこの例については詳述しなかつたその夢の究極の意味が、かの小兒時代の場面に對し、最も密接な關係に立つてゐることを、私は斷言することもできるのである。

もつと別の系列の夢についてみても、分析によつて敎へられることは、夢を刺戟した、そして夢がそれを實現してやる願望そのものが、小兒生活から發生してをり、その結果吾々は案外にも、夢の中に小兒がその小兒的衝動を有したままで生きつづけてゐるのを見出す事である。

私はこゝに或る夢の判斷を續行してみる。嘗つて前に、吾々はこの夢からして新しい敎訓を汲み出したこともあつた。私の言ふのは、友人Rは私の叔父である、といふあの夢である。敎授に

任命されたい願望動機が吾々になるほどと理解し得る程度のところまで、吾々はあの夢の分析を進めてみた。そして友人Rに對するあの夢の愛着をば、二人の同僚について夢思想の中に含有されてゐた誹謗に對する一種の對抗及び反抗が、作り出してるものと、説明をしたのであつた。あの夢は私自身のであつた。だから私はその分析を續行するに當つて、私の感情はあの點までの解決ではまた滿足してゐなかつたのだと報告することができる。夢思想の中で虐待されてをる同僚達についての私の批判は、覺醒時には全然別のものであつたことを、私は承知してゐた。覺醒時と夢に於けるとの評價のかかる對立を十分に明らかにするのには、任命に關して彼等の運命と同じ運命には會ひたくないものだといふ願望の力だけでは、あまりに微弱であるやうに思はれた。教授といふ別の稱號で呼びかけられたいお前の欲求がそれほどに強いのだと言ひ聞かされても、それは私が自分の心に知らない、私の心からは遠いものだと信じてをる一種病的な名譽心を示すものである。私の人柄を知つてをると考へる他の人達が、この點について私をどう批判するであらうか、それは私は知らない。恐らく私も亦實際名譽の野心を持つてをるかもしれない。併し若しあるとすれば、その野心は一員外教授の稱號と身分よりは、もつと別な對象へ、とうの昔に投げかけられてゐたのである。

してみると、私にこの夢を唆かした野心はどこから來たのであるか？　そこで先づ私に思ひつくのは、私が子供であつた頃、よく人が語つてゐるのを聞いた話で、私が生れた時或る年とつた百姓の神さんが、長男を生んで悅んでる私の母に向つて、あなたはこの世界へ一人の偉人を生んでくれたのだ、と豫言をしたといふ話である。こんな豫言は甚ば屢々起るものに相違ない。自分の力がもうこの世では利き目がなくなつたので、考へを未來に向けてしまつてをる年寄りの百姓の神さんとか、又は他の老婆なんか、澤山居るものだし、また子の未來に期待をかけて悅んでる母も澤山居るのだ。そんな豫言をして當らなくつたつて、當人は平氣でも居られることだらう。私の出世の野心がこんな源から湧き出てゐるものであらうか？　ところがまた、それよりか後の少年時代の或る印象が考へついた。この印象の方が說明にはなほ一層よく適するかもしれない。私が十一二歲の頃、兩親がよく私をプラーテル公園へ伴れて行つた。そのプラーテル公園の或るレストーランで、或る夕方のことであつたが、一人の男が私達の目を惹いた。彼は食卓から食卓へと渡り歩き、僅かな報酬を受けて、與へられた題目についての詩句を卽興で作つてゐた。私達の卓のところへ來るやうに、私はこの詩人を呼びにやられた。彼はお使者たる私に感謝の意を現してみせた。卽ちまだ題目も訊かない前に、私を歌つた二三行の詩句をものし、靈感に浸りながら、

どうもこのお子さんは將來一度は「大臣」になるらしいやうですぜ、と言つたものだ。この第二の豫言の印象は、私の今なほよく思ひ出し得るところである。それは平民內閣の時代であつた。父は少し前に平民出身の閣僚たるヘルブストやギスクラやウンゲルやベルゲル其他の博士連の肖像畫を家へ持つて來た。私達は彼等に敬意を表してイルミネーションをやつた。閣僚の中にはユダヤ人さへもあつたのである。だから勉强なユダヤ人の子は誰でも、自分の今の學校鞄がやがて大臣の折鞄になる日があるんだといふ志を抱いてゐた。大學へ在學登錄をする少し前までは法律を學ぶ氣であつて、やつと最後のいざといふ時に鞍替へをしたのも、あの時代の印象と聯絡するものに相違ない。無論醫學者には大臣になる道は大體塞がれてをるのである。ところでさて私の夢だが！　今漸く私に氣がつくのは、あの夢は私を憂鬱な現在からあの平民內閣の希望に充ちた時代へ溯らしめ、その當時の私の願望を夢の力相應に實現してくれたのである。私はかの兩人の學殖あり且つ尊敬すべき同僚をユダヤ人なるが故にあんなに虐待した、一方は恰かも馬鹿者の如くに、他方は恰かも犯罪人であるかの如くに虐待したが、さういふ處置をすることによつて、私は自分は恰かも大臣であるかの如くに振舞ひ、自分が大臣の代りになつたのである。大臣閣下に對する何といふ根本的な復讐であらう！　彼は私を員外教授に任命するのを拒絕した。その代り私

は夢の中で彼に成り代つてやつた。

もう一つの場合に於いては、夢を刺戟する願望は、それが假令目前の願望であつても、深いところに達してをる小兒時代記憶からして、或る有力な援軍を得てをるものである事を、私は認めることができたのであつた。この場合の中心となるのは、ローマへ行きたいといふ憧憬がその根柢となつてる一系列の夢である。私は恐らくなほ長い間、この憬がれを夢によつて滿足させてるなければならないことであらう。なぜなら一年のうち私が旅行のため自由に使ふことできる時節に當つては、ローマに滯在することは、健康のことを考へると、避けるべきであるからだ。(その後久しい間の經驗で、あんなに長い間遂げ得られぬものとのみ思つてゐた願望を實行するのにも、ただ少しばかりの勇氣があればいいことがわかつてゐるので、今では私は熱心なローマ巡禮者となつてしまつてをる。)さういふわけで、私は或る時にはこんな夢を見た。私は車室の窓からタイバー河と天使橋を眺めてをる。やがて汽車が動き出した。そして自分はこの町にはちつとも自分の足を踏み入れなかつたのだと思ひついた。この夢の中で見た眺望は、前日或る患者のサロンでちらと目に留めた或る有名な銅版繪に倣つて形づくられてゐた。またもう一つの夢では、誰かが私を丘の上へ伴れて行き、ローマの町を見せてくれる。町は半ば霧に包まれた上、まだ大分遠方にあつたので、私はそ

の眺望がどうしてこんなにはつきりしてをるのかを不思議に思つた。この夢の內容は甚だ豐かであるが、ここにそれを詳述してるわけにはいかない。「この永遠の國を遠くから眺める」といふ動機は、ここに容易に認識せられる。私がこんなぐあひに霧に包まれてをる町を最初に見たのは――リュベックであつた。夢の丘の原本は――グライヘンベルクの丘である。第三の夢では、その夢が私に敎へるところでは、私はたうとうローマへ來てをるのである。ところが少しも都會らしい場景はないので、私は幻滅を感じた。見えるのは、うす黑い水のある小さな河、その一方の側には黑い岩石があるし、他の側には大きな白い花の咲いてる草原がある。私はツッケル氏（この人と私はほんのちよつとした知り合である）が居るに氣づいて、彼に町へ行く道を訊いてみようと決心する。覺醒時に見たこともない或る町を、夢の中に見ようと骨を折つても、無駄であることは明らかだ。この夢の風景をその要素に分解してみると、あの白い花は私には知られてをるラヴェンナの町を示してる。この町は、少くとも一時の間、イタリアの首都としてローマよりも優勢な地位を占めてゐたことがあつた。ラヴェンナ郊外の沼地で、私達は黑い水の眞中に實に美しい睡蓮を見つけたことがあつた。それを夢が、恰度吾が國のアウスゼーに咲く水仙のやうに、草原の中に生えしめたのであるが、それはラヴェンナでこの睡蓮を水から取るのが大變に難儀であつたか

らなのである。水にいかにも近く立つてをる黑い岩石は、私にカールスバートの近傍テブルの沿岸をありありと思ひ出さした。さてその「カールスバート」が今度は、私がツッケル氏に道のことを訊かうとする特殊な一點を、明らかにしてくれることができる。この夢を紡ぎあげてをる材料の中には、あのいかにも意味深長で、時としては辛辣でもある人世哲學を藏してをり、吾々が會話や手紙の中に好んで引用する、ユダヤ人の愉快な逸話のうちの二つもが含まれてをる事が、わかる。その一つは「身體（コンスティトウツイオン）」の話で、その內容は、軌る貧しいユダヤ人が乘車券を持たずにこつそりとカールスバート行きの直行列車へ乘り込んだが、やがて改札があると發見される、そして改札每に列車から逐ひ出され、その度每に益々ひどくいぢめられる、かうして苦痛の旅をなほ續け、またどこかの驛に下ろされてゐるところで、知人と出會つた、どこへ行くかと訊かれて、彼は答へて「身體が持ちこたへてくれたら――カールスバートへ」、と言つたといふ話である。私の記憶の中にこの話と近く並んでをるもう一つの逸話は、フランス語のできない一人のユダヤ人がパリへ行つたら、リシュリュー通りへ行く道のことを訊くやうに、ようく覺えこまされたあの話である。パリも亦、永年の間、私の憧憬の的であつた。そしてこのパリの敷石の上へ初めて足を下ろした時の嬉しさを以て私は、自分の其他の願望の實現も亦、遂げられるであらうといふことの

保證である、と考へてみたのであつた。道のことを訊く、といふ考へはまたローマへ對する或る直接的な諷示でもある。卽ち凡ての道はローマへ通じてる、といふ誰でも知つてる言葉がある。その外、ツッケルといふ名がまた、カールスバートを思ひ出させる。だつて、私は身體の病氣、糖尿病（Diabetes 譯者曰、糖尿病はまた Zuckerkrankheit とも言ひ、ツッケル氏 Zucker 砂糖の名と相通ずる）に罹つてる患者は皆ここへやるのであるからだ。この夢の動機は伯林に居る私の友人が言つてよこした、復活祭にプラークで會はうといふ提議であつた。この友人と私が相談せねばならなかつた事柄からも、「ツッケル（砂糖）」と「糖尿病」との、もつと別の關係も出てくるかもしれなかつた。

今述べた夢の少し後に見た第四の夢がまた、私をローマへ伴れて行つた。私の前に或る街角が見える、そこには澤山の獨逸語で書いた廣告が貼つてあるので私は不思議がつてをる。前の日に私は友人に手紙を書いて、プラークは獨逸人の遊山客にとつては決して都合よい滯在地ぢやないかもしれんと、豫言的な豫想を述べたのであつた。してみるとこの夢は、友人とボヘミヤの町のプラークよりかローマで會ひたいといふ願望と、そのプラークの方が獨逸語を使ふとしたらローマよりかもつと間に合ふかもしれんといふ、多分私の學校時代に根ざしてをる期待とを、同時に

現してゐるけである。その外に、私はごく小さい小兒時代にはチェック語を知つてをつたに相違ない。私はスラヴ人が住んでをるメーレンの或る小さな町で生れたのであつたから。十七歳の時に聞いた或るチェック語の童謠が、わけなく私の記憶に刻みつけられゐて、その意味については少しの推察をも持つてゐないに拘らず、今なほそれを空で言ふことができるくらゐである。かくして以上の夢にも、私の生涯の初期に屬する印象に對する種々樣々の關係が無くはないのである。

私は最近の伊太利旅行に於いていろんな所をも通つたが、トラシメヌス湖水の傍をも通つてみた。この旅行で私はタイバー河を見て、そしてローマから八十基米突離れたところで、心苦しい感動の下に引返へして來た後に、この永遠の都に對する私の憧憬は、少年期の印象からして强調を受けてをることを、終ひに發見したのであつた。ちようど私は次の年にはローマの傍を通つてナポリへ旅行する計畫を考へてをつたのであるが、その時私に一つの文章が思ひ浮んだ。この文章は獨逸の古典作家の誰かの作中で讀んでゐたものに相違ない。それはかういふのだ。副校長さんのキンケルマンと將軍ハンニバルと、この二人がローマへ行かうと計畫を立てた後で、二人のうちのどつちが一層熱中的に部屋の中をぐるぐる走り廻つたか、こいつは問題だ。（この文を草した作家は確かジャン・パウルであつたに相違ない。譯者曰、副校長キンケルマンとは第十八世紀初葉に古代美

術研究を大成したヨハン・ヨアヒム・ヰンケルマンである。彼はゼーハウゼン高等中學校の副校長であつたが、古代美術研究のためローマへ行きたい强烈な憧憬を抱いてゐた。そのためにカソリック教に改宗したほどである。その宿願は達せられ、その結果大著「古代美術史」が一七六四年に出てゐる。）私はハンニバルの辿つた足跡を歩いてゐたのであつた。ローマを見ることは彼に許されなかつたと同じに、私にも許されなかつた。世間を擧げて彼はローマへ來るものと期待してゐたのに、ローマへは來れなかつた彼も亦、南のカムパニアの野の方へと進んだのである。このハンニバルと私はかやうに似たことをするに立ち至つたのであるが、彼はまた私の高等中學校時代の好きな英雄でもあつた。あの年頃のいかにも多くの者がするやうに、私はカルタゴ戰爭の間ローマの勇士達にでなく、却つてこのカルタゴの英雄に同情を注いだ。その後上級になつてから、國土と無關係な人種の血を引いてをる爭の結果に對する理解が始めて生じ、級友間の反ユダヤ人的昂奮のため自分の態度を定めなければならなくなつた時に、私の眼の中では、このユダヤ系の將軍の姿がなほ一層氣高くなつて來たのである。青年の私にとつては、ハンニバルとローマとは、ユダヤ人の不撓不屈とカソリック教會の統制との間に存する對立を象徵化するものであつた。反ユダヤ人運動がその後吾々の情緒生活に刻みこんだ意義は、やがてその昔の思想と感じを固定させるのに與つて力あつた。かう

いふわけで、ローマへ行かうといふ願望は、夢生活の中にあつては、それと別の數多の熱望されてをる願ひに對する假面且つ象徴となつてしまつてをるのであり、この願望の實現を遂げるためには、かのカルタゴ人の忍耐と專心とを以て働かうと思ひ、而かもその實現は當分の間、恰度ローマへ入城せんとするハンニバルの一生の願望と同じに、運命からは惠まれてをらないものと思はれてをつたのである。

さて今漸く、私はこれ等の心持ちや夢の凡てに於いて、今日なほその威力を現してをる少年時代の體驗に、行きあたるのだ。私が十歳乃至十二歳の頃であつたらう。その頃から私の父は、私を一緒に散歩に伴れて歩き、この世の中のいろんな事柄についての自分の見解を私と語り合つて、打ち明け始めたのであつた。さういふ或る時に彼は、彼よりも私の方がどれほど結構な時代に生れ合はせてをるかを示すために、次のやうな話をした。「わしが若い者だつた頃に、お前の生れたあの町で、或る土曜日のこと、往來を散歩してをつた。綺麗な着物を着て、新しい毛皮の帽子を冠つてね。すると、向うから一人の基督教徒がやつて來た。こいつが一打ちして、わしの帽子を泥の中へ叩き落した。そしてわめいたもんだ。「ユダヤ人め、歩道から退いてをれ！」」「してお父さんはどうしたの？」「わしは車道へ行き、そして帽子を拾つたさ」といふのが、父の平然たる答

であつた。これが今小さい私の手を曳いてゐてゐてくれる、大きな嚴乘な男子のしたこととしては、勇士らしい仕業とは私に思はれなかつた。私を滿足せしめなかつたその狀況に對して、私はもつと別な狀況を較べて置いてみた。これの方が私の心持ちにはもつとふさはしかつたのだ。それはハンニバルの父ハミルカール・バルガスが、家の祭壇のところで、その子をしてローマ人に屹度復讐をするといふ誓ひをさせる場面であつた。(第一版にはここにハスドルバルといふ名が印刷されてゐる。怪訝な間違ひをしたものであるが、それの説明を私は私の著書「日常生活の異常心理」の中に與へてをる。)その後ハンニバルは私の空想の中に一つの場所を有してゐたのである。

私の考へるところでは、このカルタゴの將軍に對する私の熱中は、なほもう一歩先の小兒時代へ溯らせることができるものであつて、從つてこの場合に於いても中心の問題はただ、既に形づくられてをる或る感情關係が或る新しい媒介者へ轉移せられてをることにすぎないやうに思はれるのである。本が讀めるやうになつた子供の頃の私の手に入つた最初の書物の一つは、テールの「執政官と帝國」であつた。私は憶えてをるが、私は木製の兵隊の平たい背中へ皇帝麾下の將軍達の名を書いた小さい紙片を貼りつけた、そしてその當時から既に將軍マッセナ(ユダヤ人としての名はメナッセ)が私の自他相許したる寵愛の人物であつた。(この人が特に好きであつたのは、偶

然にも私の方が恰度百年晩れて、同月同日に生れてをるためだとも說明されるかもしれない。)ナポレオン自身だつて、かのアルプス越えによつてハンニバルとは相關聯してをる。そして武將についてのこの理想の進化は、なほもつと先の小兒時代へと溯り、遂には、三歲頃までの間に一つ年上の男の子と遊んだが、その或る時には仲のよい、或る時には戰鬪的な交はりが二人の遊び仲間のうち弱い方である私の心に惹き起したに相違なかつた願望へと、達するものであるかもしれないのである。

夢の分析へ深く入れば入るほど、いよいよ頻繁に小兒時代の體驗の痕跡へ達する。そしてかかる體驗こそは、夢の潛在內容に於いて、夢源泉としての一つの役割を演じてをるものである。記憶が切り縮められもせず變更もされずして、夢の唯一的な顯在內容をなしてをるやうなぐあひに、夢の中で再現されるのは甚だ稀れである事を、吾々は前に聞いてをる(前出、第三七頁)。とは言へ、その稀れな現象の二三の確かな實例は前にも出されてをる。私はここになほ二三の新しい實例を附け加へることができるが、それ等はやはり幼兒的場面と關係するものである。私の患者の或る一人が、或る時見た夢は、すぐに忠實な記憶であると認識された或る性的出來事の、殆ど歪みのない再現であつたことがある。その出來事の記憶は、覺醒時にあつては、なるほど決

して完全には消失してはゐなかつたのだけれども、ひどくぼんやりとなつてしまつてゐた。そしてそれを新しく生かしたのは、その前に行はれた分析の仕事の結果であつた。この夢を話した男は十二歳の時に病氣で寢てをる級友を訪問した。その時この病友は、恐らくはただ偶然にであつたらしいが、寢床の中で身動きをした際に體を露出した。その陰部が眼に入つた時、一種の强迫に襲はれて、彼は自分でも露出して、相手の陰莖を摑んだ。相手が併し不快さうな不思議さうな眼で見つめたので、彼は周章ててやめた。ところが二十三年後になつて、一つの夢がこの場面を、そこに現れる感情の凡ゆる細かな點までを同じなままで、繰返へしたのである。變更された點は、夢の當人は積極的な役の代りに受け身の役を引き受け、またその級友の人物は現在の誰か或る人物を以て代用された點のみであつた。

大抵この幼兒的場面は、顯在的內容にあつては、勿論ただ暗示によつてのみ代表されてをり、從つて判斷によつてその夢の中から引き出されねばならない。子供時代の體驗に對しては、多くの場合、他の證據は一切缺けてをる故、その實例を報告してみても、それは大して證明になる結果を與ふることはできない。その體驗が以前の年代に屬する場合には、それは記憶によつてもはや識別されないのである。精神分析的仕事に於いて、夢を土臺として、昔の小兒時代の體驗を推

定し得る理由は、共働的作用の中にあつて十分に信頼し得ると思はれる要點の系列全體を辿つて行く結果に存してをる。夢判斷の目的のために、小兒時代の體驗へと夢を溯らしてみるのであるが、その結果、それが組織から引き離されることになるからして、恐らく聞く人には印象の淺いものとなるかもしれない。殊に私は判斷の支柱となる材料全部を報告することさへないのであるから、さうなることであらうが、併しそのために私は報告を止める考へはない。

第一例。

私の婦人患者の或る一人の夢はいづれも、「せつかれた人」の特色を有してをる。彼女はきちんと時刻通りに行くとか、汽車に乘り後れないやうにとか、その他のことでせかせかとしてをる。或る夢で、彼女は女のお友達を訪問せねばならなかつた。お母さんは歩いて行かずに車へ乘つて行つたらいいと彼女に言つてくれた。けれど彼女は馳けて行つた。そしてひつきりなしに轉ろんだ。――分析をしてをるうちに現れて來た材料によると、子供時代のせかしつくらについての、記憶があることが判別されたし、特別この夢に對しては、溯つてみると、子供等の間に喜ばれる諧謔(いたづら)、かの「牝牛は轉ぶまで走つた」といふ句を、それがまるでたつた一語であるかのやうに、

早口に述べるいたづらまで行きつくのであるが、これ亦やはり一種の「せかし立て」である。小さい女の子同志の間に於けるかういふ無邪氣なせかしつくらが、すべて思ひ出されるのではあるけれども、それはそのせかしつくらがもつと別な、そしてそれよりも無邪氣ではない何物かを代理してをるためである。

第二例。

もう一人の婦人患者の夢は次の如し。彼女は或る大きな部屋に居る。その部屋にはいろいろな機械が置いてあつて、どうやらそれは整形科手術室のやうな樣子である。彼女は私には暇がない、それで自分は五人の他の患者と一緒に診療を受けねばならないことを聞いた。併の彼女は反抗して彼女にと定められてあつた寢臺――であつたか、それとも何であつたか、ともかく其處へ――橫にならうとしなかつた。彼女は部屋の隅に立つてゐて、私があれは本當ぢやなかつたのだ、と言ふのを待つてゐた。他の人達がその間彼女を嘲笑つて、そんなことしてるとはお前さんも馬鹿なことだね、と言つた。――その外に、彼女は澤山の小さな四角をこさへるんだといふやうな氣もした。

この夢內容の前半は治療と私への轉移とに結びついてをる。後半は小兒時代の場面への暗示を含んでをる。寢臺のことが出てくるので前半と後半とが接合されてをる。整形科手術室云々は私の話の一つに基くもので、その話の中で、私はこの治療を時間の長さ並びに性質上から整形治療と比較してみたことがあつたのである。治療の始めに私は彼女に向つて、當分のうち私はあなたの爲めの時間は少ししか持てないが、後になつたら毎日丸一時間あなたのために割いてあげるやうになるでせうと、言つておかねばならなかつた。これが、ヒステリー症に罹るに定まつてをる子供達の一大特徴である敏感、彼女の昔の敏感を動かし出すことになつた。さういふ子供達は愛情を欲する點では飽きることを知らない。私のこの婦人患者は六人の兄弟姉妹のうち末つ子であつた（だから他の五人と一緒に、である）、そして末つ子として父親の寵愛兒であつたのだが、それでもまだお父さんは自分にはあんまり時間を割いてくれないし、注意を拂つてくれないんだと思つたらしい。――私が、あれは本當ぢやなかつたのだ、と言ふまで彼女が待つてゐた。といふのは、次のやうに引き出してくることができる。仕立屋の小さい丁稚が彼女のところへ着物を屆けた。それに對する代金を彼女はこの丁稚に持たしてやつた。その後で彼女は夫に訊いてみた。あの丁稚があのお金を失くなしたら、わたしがもう一度拂はなければならないのかしら？　夫は

彼女をからかふため、さうとも、と斷言した（夢に現れる揶揄）。彼女は幾度も訊いた、そして彼が終にそれは本當ぢやなかつたのだといふまで待つてゐたのである。潜在的夢内容として、若し私が彼女に二倍の時間を割くならば、彼女は私に二倍の料金を支拂はねばならぬのであるか、といふ考へが構成されるが、それは慾張りである、又は汚ない考へである。（小兒時代の不淨は、夢に於いて、非常に屢々金錢の慾を以て代用されるものである。その際の橋は「汚ない」といふ語である。）「この汚ない」といふ語が、夢の中では書き改められて、私がこれこれ云ふまで待つてをる云々の凡てに替へられた。さう考へてみると、隅に立つてをるとそれから寢臺へ横にならないといふのは、或る小兒時代の場面の成分として、ちようどそれに合致することになる。その情景で、彼女は寢臺を汚なくした、その罰として隅へ立たされ、パパにはもうお前を可愛がつてやらないよと威かされてをる、そして兄や姉が彼女を嘲笑ふ、云々。小さい四角は彼女の小さい姪に關係するので、この姪は彼女に、九つの四角の中へ各々數字を書きこんで、それをいかなる方向へ向つて加算しても、十五の和が生ずるといふ算術の術をしてみせたのであつた。

第三の例。

或る男の夢。彼は取つ組み合ひをしてをる二人の男の子を見た。あたりにある道具から推定するところでは、彼等は桶屋の小僧達であつた。一方の男の子が相手を投げ仆した。その仆れてる子は碧い石のついた耳輪をはめてゐた。彼はステッキを振りあげながら、その投げ仆した方の悪童を追ひかけて、懲らしてやらうとした。こいつは一人の婦人のところへ逃げた。その婦人は板塀のところに立つてゐて、その子の母ででもあるかのやうであつた。それは日傭人の神さんであつて、この夢を見てる人には背中を向けてゐた。つひに彼女は振り向いた。そしてものすごい眼付をして彼を睨んだので、吃驚して彼は逃げだした。彼女の眼には下眼瞼のところから赤い肉が前へ出てゐた。

この夢は前日の些細な出來事を澤山に利用してをる。彼は昨日實際街路の上で二人の男の子を見、そのうちの一人は相手を投げつけてゐた。仲裁してやらうと急いで行つたら、彼等は一目散に逃げ出した。——桶屋の小僧については、その次の夢でやつと説明されるのであるが、それを分析してるうちに彼は、「桶の底を打ち抜く」といふ成句を使つた。——碧い石のついた耳輪は、彼自身の觀察によると、淫賣婦が大抵かけてをるのである。二人の男の子を唄つた或る有名な滑稽詩にちようどこんなのがある。「もう一人の男の子、そいつの名はマリーと言つた」(卽ちそれは

女の子だつた)。――立つてゐる女、については、この夢を見た男は二人の男の子の一件の場面があつた後で、ドナウ河の岸邊へ散歩に行き、そこの寂しいところを利用して、板塀に向つて小便をした。更に歩き續けて行くと、品のよい服裝をした中年の婦人が大變親しげに彼に微笑を送り、自分の名刺を彼に渡さうとしたのであつた。

夢の中の婦人は彼が小便をした時のやうにして立つてをるのであるから、それは小便をしてをる婦人のつもりである。さうしてみると、かのものすごい光景、赤い肉が前へ出てをることはそれと合致する。それは蹲る時にかつと口を開ける陰部に關係するもので、さういふのを小兒時代に見てゐると、それはその後の記憶の中では「贅肉」として、「傷」として再び現れる。で、この夢は、小さい少年の時に少女の陰部を見た二つの機會、投げ仆す時と少女が小便をする時と、この二つの機會を一つに合はせてをる。そして又他の聯絡から現れるところでは、彼はかういふ機會に男の子が示す性的好奇心のために、父親から受けた懲らしめ又は威嚇に對する記憶を保有してをるのである。

第四の例。

次は中年の婦人の夢。これの背後には、辛うじて結合されて一つの空想とはなつてをるが、多量の小兒時代の記憶が見出される。

彼女は買物をするためにせかせかと出かけた。やがてグラーベン通りへ來た時、彼女はまるでぶち仆れたやうに膝を折つて轉ろんだ。澤山の人が彼女のまはりへ集まつた。殊に辻馬車の馭者達が。併し誰一人も彼女を助け起してくれない。彼女は何遍もやつてみるが駄目だつた。けれどおしまひにはうまく行つたものに相違ない。なぜなら彼女は辻馬車の一つに乘せられ、家へ伴れて行かれるところであつたから。窓から彼女のところへ一つの大きな一杯何か入れた重い籠を投げてよこした（買出し籠に似たものであつた）。

これを見たのは、自分の子供の時にはせかし立ててゐたやうに、今では夢の中でいつもせかし立てられてをる、あの婦人患者その人である。この夢の最初の局面は、「ぶち仆れる」といふ語も競馬を示すものである通り、明らかに仆れた馬の光景から取り入れられたものである。彼女はその若い頃には馬乘りであつた。もつと若い時には多分馬でさへもあつたやうだ。仆れるといふことについては、門番の十七歳になる息子が街路上で癲癇の發作を起し、車で家へ伴れて來られた事に對する、小兒時代の最初の記憶が關係してゐた。その事は勿論彼女がただ話に聞いただけで

あつたのではあるが、併し癲癇病の發作について、「ばつたり仆れる人」についての想像は、彼女の空想に對して大きな威力を有するに至り、その後彼女自身のヒステリー症發作の形に影響を與へてをる。——婦人が轉ろぶ夢を見る時は、それは大抵或る性的意味を有してゐるので、即ち彼女は「墮落せる女」となるのである。この場合の夢にとつては、この判斷は最も疑ひのないところであらう。何故ならば彼女はグラーベン通りで、ヰーンのうちでも淫賣婦の行列で有名な廣場で、轉ろぶのであるから。買出籠から取り出される判斷は一通り以上にある。先づ籠を肘鐵砲（譯者曰、獨逸語の籠 Korb は拒絶の返答の意味がある）とすれば、この買出し籠は始めのうちは彼女の方で求婚者達に分ち與へた籠（肘鐵砲）、そして後には、彼女の思つてるところに據ると、彼女自身も頂いたところのそれを思ひ出させる。次には、誰一人も彼女を助けて起してはくれない、といふのも、彼女自身がこれを以て恥しめられることと解してをるから、その籠とまた關係する。更にこの買出し籠は、分析をしてをる間に彼女が抱いてをることがわかつた空想、即ち彼女は自分よりもずつと身分の低い者と結婚をした、そして今や自分で市場へ買出しに出かけると思つてをる、その空想を思ひ出させる。最後には買出し籠は、人に使はれてをる人の徵しと、判斷されることができるであらう。さうすると、これ等の事に更に小兒時代の記憶が加はつて來る。それ

は盜みをしたために追ひ出された料理女中についての記憶である。この女中もあいふぐあひにいゝいゝ膝を折つてそして憐愍を乞うたのであつた。彼女はその頃十二歳であつた。その次には、家の馭者と出來合つたからお拂箱にされた小間使についての記憶がある。この馭者は併し後でこの小間使と結婚した。かくしてこの記憶は夢の中の馭者達に對する一つの源泉を示すものである（この馭者達は、現實とは反對に、轉ろんだ女を引き取らないのであるが）。ところでまだ、籠を投げてよこした、而かも窓をいゝいゝ通していふのの說明が殘つてをる。これは彼女にいろいろなことを思ひ出させる。汽車の荷物の運搬もある。田舍で行はれる戀人同志の窓越しの密會（フェンステルルン）もある。田舍に滯在した時の小さないくつかの印象、例へば一人の男が婦人の部屋へ窓から靑い杏を投げこむとか、前を通り過ぎる白痴が窓越しに部屋の中をのぞいた時小さい妹が恐ろしがつたとか、さういふ印象もある。ところでこれ等の記憶の背後になほ、彼女が十歳の時のぼんやりした一つの記憶が浮んで來る。それは或る保姆についてのものであるが、この保姆は田舍に居つた頃家の下男と濡れ場を演じてゐたが、小供であつた彼女はその濡れ場のいくつかを見てをつたこともあつたらう、そしてその保姆は戀人と一緒に逐ひ出された、「投げ出された」のであつた（夢ではその反對に投げ込まれた」）。こんな話は吾々が、多くのもつと別の場合でも、親しんだことのあるものである。

の七つの杏をひつくるんで、出ておいで。」

下男などの荷物、鞄などをキーンの人達は輕蔑的に「七つのちっちやい杏」と言つてゐる。「お前

以上の患者達の夢を分析すると、時としては二三歳の時代にさへ屬することもある、ぼんやりとした、又はとてももはや記憶されては居らない、小兒時代の印象にまで溯れるのである。私の蒐集したものの中には、勿論かかる夢の貯藏品が有りあまるほどある。併しそれ等を土臺として、一般の夢に適用させせんとする結論を引き出すのは、失當である。それ等にあつては定まりきつて神經病、殊にヒステリー症の人々が主人公なのである。そしてそれ等の夢に於いて小兒時代の場面が引き受けてをる役目は、神經病の性質に左右されてをつて、夢の本質には左右されてゐないかもしれない。併しながら私は私に明らかな病苦の徵候があるからして、自分の夢の判斷をやつてみるのではないにも拘らず、その私自身の夢の判斷に際して、やはりあれ等の夢の場合と同じやうに屢々、夢の潜在內容の中に於いて、思ひもかけず幼兒時代の場面に行きあたつたり、多數の夢がいづれも、突然に小供時代の或る體驗から發してをる道筋の中へ入りこんでいくことになつたりするのである。その實例は既に前にも提出してをるが、なほこれから先にもさまざまな機會に、もつと提出されるであらう。この全章の終りをつけるのには、若干の私自身の夢の報告を

以てするのが、恐らく最もよいかもしれない。それ等の夢では、最近的の動機と永い間忘れられてゐた小兒の體驗とが一緒になつて、夢源泉として現れるのである。

(一)旅行をして疲れて空腹で寢床へ辿りついた後に、生活の大なる要求が睡眠中に催促をしたと見えて、私はこんな夢を見た。私は何か麥粉の食物を貰はうと思つて臺所へ行つた。そこには三人の婦人が立つてゐたが、その中の一人は主婦で、その手に何かを持つて、團子を拵へるやうにしてくるくる廻してをつた。彼女の返辭では、これが出來るまで待つてて貰ひたいといふのであつた(その話の文句ははつきりしてない)。私は我慢ができなくなつて、憤つとして出て來た。私は外套をひつかけた。併し最初に着てみたのは、あんまり長すぎた。私をそれをまた脫いだ。そしてそれには毛皮の緣がついてるのにびつくりした。二番目に着たのには、トルコ繪模樣のある長い一本の紐が縫ひ込んであつた。長い顏をして短い尖つた顎髯のある見知らない男が來て、それは僕のものだと言ひながら、私がその外套を着るのを邪魔した。私はその男にこの外套は全然トルコ風に刺繡をしてあるぜ、と言つて見せてやつた。彼は訊いた。どうしてあなたにそんなトルコの(繪模樣、紐……)なんか關係があるんだね? ところで、その後で、吾々はお互に仲よくなつてゐた。

この夢の分析中に全く思ひもかけず、私が多分十三歳だつた頃に讀んだ、といふのはその第一卷の終りから讀み始めたのであつたが、最初の小說が思ひ浮んで來た。その長篇小說の名も、作者の名も、私は決して知つてをつたことはなかつたが、その結末は生々と記憶の中にある。主人公は狂人となり、彼の生涯に於いて最大の幸福でもあれば、また不幸をも意味するものであつた三人の婦人の名を、絕えず呼んでをる。ペラギー(Pélagie)はその名のうちの一つであつた。で、この思ひ付だけでは、分析をどう始めたらいいか、まだわからない。ところが、その三人の婦人について、人間の運命を司るかの三人の運命の女神(パルツェン)が思ひついてくる。そして三婦人の一人、夢の中の主婦は、生命を與へる、折々はまた私の夢でのやうに、生きてる者には第一の養ひをも與へる母であることがわかる。婦人の乳房は、愛と饑餓が集まるところだ。長じてから婦人の美の大崇拜家となつた或る若い男が或る時、話が自分の乳呑兒であつた頃に乳を呑ましてくれた美人の乳母に及んだ時、その頃そのよい機會をもつとよく利用しなかつたのは殘念であると言つた、といふのは逸話の物語るところである。私はこの逸話をいつも精神病の機構に於ける補遺性といふ重要點を說明するために利用してをる。ところで、私の夢の中の運命の女神の一人が、恰も團子を作さへるやうにして、兩手の掌を擦り合はしてをることになるのだが、それは運命の女神が

やることとしては、妙な仕事である。これは切に說明を必要とする！　ところがこれはもつと別な、もつと以前の小兒時代の記憶から來てをる。私が六歲で最初の學業を母から授けられてをつた頃に、吾々は土から作られてをり、それであるから復た土へ歸らねばならぬものである事を、信じねばならなかつた。併しそいつはいい氣持ちではなかつた。私はその敎に疑を持つてゐた。その時に母は兩手の掌を擦り合はした――團子を作さへる時と全く似た恰好だが、ただその掌の間に捏ねた粉がないだけである――そして吾々が作られてをる土の見本として、その擦する間に出來たうす黑い皮の垢の塊を、私に見せたことがあつた。かく目前にありありと見せる實物敎育に出會つた私の驚愕は、限りないものであつて、後になつてから世間の人が「どうせ一度は死なねばならぬもの」といふ言葉で言ひ現してをるのを聞いた、あの考へを納得したのであつた。（この小兒時代の場面に屬する二つの情緖、驚愕とそれから避け難いものへの納得とは、その少し前の夢にもあつた。この夢は始めて私に小兒の體驗の記憶を復活さしてくれたものであつた。）　さういふわけであつてみれば、私が臺所へ行つて出會つたのは、實際運命の女神達である。その經驗は、空腹でをると、爐の傍に居る母がお晝のご飯が出來るまでお待ちなさいと言つて聞かしてくれた小兒時代に、屢々あつた通りなのである。さて今度は團子（Knödel）の件である！　私の大學時代の先生の少く

とも一人、そして私がその人から組織學の學問（皮垢）を敎へて貰つた人は、Knödl といふ名に出會はしたら、或る人物を思ひ出すことであらう。先生は、この人物が先生の著作から剽竊を行つたので、告訴しなければならなかつたのである。剽竊（Plagiat）を行ふ、假令それが他人のものであつても、自分の手に入るものは自分のものにする、といふのは、明らかに私の夢の後半へ導くものである。そこでは私は、學校の講堂で一時横行した外套泥坊のやうに取扱はれてをる。私は剽竊といふ字を思ひ浮ぶままに何の氣もなく書いたのだが、今氣がついてみれば、この字は顯在內容の種々なる部分の間に橋として役立つことのできるものであるから、夢の潛在內容に屬するものに相違ない。聯想の鎖たる Pélagie—Plagiat—Plagiostomen（Haifisch 鮫）—Fischblase（魚の浮嚢）は、かの古い小說を Knödl 事件と結び、更に外套と結ぶ。外套は明らかに性的技巧の或る道具を意味してをる（前出、モーリのキローロットオの夢參照。第一〇四頁。Plagiostomen 鮫屬をここに補充したのは私の勝手からではない。この魚は、同じ先生の前で起つた或る不面目な忌々しい場合を思ひ出させるのである。） 勿論非常に無理なそして馬鹿げた結合であり、これが夢の仕事によつて作り上げられてなかつたなら、私は覺醒時ではかやうな結合を作ることは到底できないであらう。のみならず、是非とも結合を作らずにはをられない衝動にとつては、いかなるもの（の）も神聖犯し難いも

のなどはまるでないと言つたやうに、今度はその大切な名の Brücke（橋となる語については前述せり）が役に立つて、私がそこで學生時代の最も幸福な時を過した學校を思ひ出させるのである。この學校に居た間はいつも全く慾望なく暮してゐた（「知識の乳房にこそ、日々の樂しみは、なほ多からん」）。それは夢の中で私を苦しめるかの慾望とは全然正反對である。後に浮ぶのは、もう一人の大切な先生に對する記憶であるが、この先生の名がやはり復た何か喰べるものに通じてをり（かの團子の轉訛が Knödl の如く、肉の轉訛としてこの先生の名は Fleischl）、そして或る悲痛的な場面を思ひ出させる。その場面では皮の垢の塊が或る役を演じてをり（母—主婦）、精神障害（小説の主人公）及び拉典語の臺所（藥局）の或る材料で空腹を消えさせるもの、即ちコカインなどが、それぞれ役を演じてをるものである。

かうして私は錯綜した思考の道をなほもつと先へ辿つて行き、分析の中に缺けてをるこの夢の部分をすつかり明らかにすることも、しようとすれば、できるのである。併しそのために生ずる私的の犧牲があまりにも大きいものだから、私はそれを止めねばならない。私はただ、この縺れの根柢に存する夢思想のうちの一つまで、直接に立ち至らしめてくれることのできる、一本の絲を摑みあげるにとどめる。長い顏をして尖つた顎髯を持つてる見知らない男が、私が外套を着る

のを邪魔しようとする。この男は、私の妻がその店からトルコの反物をどつさり買ひ込んだことのある、スパラトオの或る商人の面貌をしてをる。その商人の名はポポギクと言つたが、妖しな名前であつて（譯者曰、獨逸の子供等の言葉では Popo はお尻の意味がある）、滑稽作家のシテッテンハイムもこれを知つて諷刺に富んだ文句を述べるに至つた。「彼は私に自分の名前を言つたが、顏を赤くしながら私の手を握つた」云々と。とにかくこれも、前に持ち出したペラギーやクネエドルやブリュッケやフライシュルなどの名と同じやうに、人の名前の惡用であるかもしれない。さやうな名前の笑談は子供らしい無禮であると言つても、抗議は申せない。併し私がその子供の無禮を面白がつてやるのは、これは一種の仕返へしなのである。何故ならば、私自身の名前が數知れないほど度々、さういふ低能な駄洒落の犧牲とされてゐるからだ。ゲエテ（Goethe）が或る時、人は自分の名前について いかに敏感なものであるか、人は自分の名前とは、ちようど自分の皮膚から離すことができないやうに、離れ得ざるものとなつてる氣がしてるものだ、といふ意味を述べたことがあつたが、その時ヘルデルはゲエテの名についてこんな詩を作つた。

「君はゲッテル（Götter 神々）から出てをるか、ゴーテ（Gothe）古代ゲルマン人）か又はコーテ（vom Kote Kot は泥）から出てをるかだ——

だから神々のやうな姿のものも亦、つひに塵埃だ。」

名前の惡用についてこんな脫線をしてゐたら、非難を招ぐ因になるだけだと心得るから、それはここで中止にする。――スパラトオでの買物は、私にカッタロでやつて別の買物を思ひ出させる。この買物では私はあんまり遠慮深くしてゐたので、立派な儲けの機會を捕へそこなつた。(乳母に對して機會を失つた前出の逸話)。空腹が夢を見る私に注ぎ込んだ夢思想の一つは、卽ちかういふ內容だ。手に入れることのできるものなら、そのため何か少しの不正がいつて起ることがあつても、決してそれを逃がしてはいけない、何でも取らなければならない。いかなる機會をも捕へそこねてはいけない。人生は短かい。死は避けがたいのだ。これは性的方面にも共通であり、そして慾情は不正などといふ考へのために止まうとはしないのだから、このcarpe diem（その日を利用せよ）の衝動はかの檢閱を懸念しなければならない、そして夢の背後に匿れなければならないのである。ところでそこへ更に凡ての反對的思想が加はつて權利を主張する。精神的榮養だけで滿足してゐた時代の記憶とか、凡ゆる邪魔、及び厭ふべき性的の罰を以てする威嚇などまでも、反對思想として主張を出すのである。

（二）。第二の夢はちよつと長い前置きの說明が要る。

私はアウスゼーへ休暇の旅行にでかけるため西停車場へ乘りつけたが、もつと早く發車するイシュル行の列車の着いてをるプラットフォームへ行つた。そこへ行くと、テゥーン伯爵が居るのが見えた。伯爵は陛下の居られるイシュルへ行くのである。彼は雨が降つてるにも拘らず無蓋の馬車に乘つて來た。そして眞直ぐに支線列車の發着所へ通ずる入口の扉を通つて入つて行つたが、彼を目覺えてゐない改札係りが彼から切符を受け取らうとした時、何の言譯もせず、手をちよつと動かして、改札係りをどけさした。彼はイシュル行列車に乘つて出發してしまつた。その後で私は、そこのプラットフォームから去つて待合室に戻つてをつてくれと言はれたが、言ひ張つて、やつとのこと、そのままそこに居ていいことになつた。私は暇つぶしに、誰かやつて來て、鼻藥を遣つて、車室の世話をして貰ふ奴でもゐないかと見張つてゐた。それを見つけたら騷いでやるぞ、といふのは私にも同じ權利をとつちめてやるぞと、目論でゐたのであつた。その間私は何か鼻唄をうたつてゐた。それはフィガロの結婚の中の小歌曲（アリエ）であることが自分にもやがてわかつた。「伯爵さまが踊りを一つ、踊りを一つ、なすつてみなさる思召しなら、どうかまあかう言うてくだされ、わしが一曲彈くやうに。（ほかの人にはこの唄は恐らく何だかわからなかつたであらう。）

私はその日の夕方ぢゆう、思ひあがつた突つかかつて行きたい氣分であつた。給仕人や馭者にも意地惡をしたが、併し氣持ちを惡くさせたほどではなかつたと思ふ。さて私の頭にはいろいろな大膽で革命的な考へが往來した。それ等はフィガロの言葉にしてみたら、ふさはしく、また私がフランス喜劇座でその實演を見たことがあつたボウマルシェの原作喜劇についての記憶にもあてはまるものであつた。生れるのに苦勞をして來た偉い貴族達についての文句、アルマギヴァ伯爵がスザンナに對して押し通さうとする貴族の特權、吾々の國の意地惡な反對派の新聞記者達が伯爵テゥーン（Thun 仕事の意）の名を伯爵ニヒツテゥーン（nichtsthun 何もしない）と仇名してをる諧謔、さういつたものが頭の中を往來した。私はこんな伯爵なんか實際羨ましくはないぞ。彼は今しがた何か面倒な用件があつて皇帝のところへ出掛けたが、私の方こそ何もしない伯爵どのなんだ。私は休暇で出かけるんだからなあ、などとも思つた。それにつづいて休暇中の凡ゆる愉快な計畫が考へられた。すると一人の紳士が來た。この紳士は醫學試驗の時に政府の代表者として來てゐたから、私には見覺えがあつたし、おまけにその陪席といふお役目からして「政府の同衾者」といふありがたい仇名を頂戴してゐた人であつた。彼は自分の官職を持ち出して一等の半室を註文してゐた。驛員の一人が別のに、一等の半室とおつしやるんだが、どこへ乘せてあげよ

うかね？　と言つてるのが私に聞えた。結構な特別扱ひだ。私は一等の賃錢をすつかり拂つてるのに。やがて私も自分の車室をあてがはれたが、廊下の通じてゐる車輛ではなかつたので、夜中には便所を使ふことができなかつた。車掌に訴へてみてもどうもならなかつた。その仇討ちに、この車室の床にせめて穴を一つ明けさして、旅客の萬一の用に備へるやうにしたらよからうぜ、と車掌に言つてやつた。ところが實際にも私は朝二時四十五分に、尿意を催しつつ、次の夢から目覺めたのである。

人の群れ、學生の集會。――某の伯爵（テゥーンか又はタアーッフェ）が演説をしてをる。獨逸人のことについて何か辨じろとせがまれて、彼は嘲笑的な表情をしながら、獨逸人の寵愛する花は欵冬なりと述べ、それから引き千切つた葉のやうなもの、よく見ると一枚の葉の骨ばかりをくちやくちやに丸めたのを、ボタンの穴へ挿した。私は腹を立てた。乃ち私は腹を立てた（この文句が繰、返へしてこの夢のもとの手控へに入つてゐるのは、うつかりしてをつたためであるらしい。併しかく繰返へされるのも、それには意味のある事だと分析が敎へるから、私はそのまま印刷させてをく。）が併しその自分の考へに自分で驚いた。（その後はもつとはつきりしなくなる。）學校の大講堂のやうだつた。出入口が滿員だ。逃げなければならないやうだつた。私は綺麗に整頓された一列びの部屋部屋を

辿つて進んだ。それは明らかに政府の役所の部屋だつた。赤褐色と紫色との中間の色に塗られた家具類があつた。おしまひに廊下へ出た。そこに中年の太つた女の監理人が腰かけてゐた。私は彼女と話しするを避けた。併し彼女は明らかに私をここを通つて歩いてもいい者だと考へてゐた。なぜなら彼女はかう訊いた。ランプを持つてついて行つてあげましようか、と。私は手ぶりで示すか、又は口で言つた。あんたは階段のところに立つたままでゐてください、と。さう言ひながら私には、それで結局監視を避けるんだとはわれながら大變悧巧なもんだなあ、と思はれた。かくて私は下へ降りた。そして狹い嶮しく坂になつてる一本の道を見つけて、そこを歩いた。

(復たはつきりとしなくなる)……前には家の中から逃げ出すのであつたが、今度は町から逃げ出すといふ第二の任務があるかのやうであつた。私は一頭立の馬車に乘つてる。そして或る停車場へ行けと頼んだ。馭者はまるで私が彼を過酷に疲らしたかのやうに、私に向つて抗議を申込んだ後で、私は言つた。「鐵道線路の上をこの車で走ることはできないんだね。」その時はいつも汽車で通る線路の或る區間をこの馬車で走つて來てしまつたやうな氣がしたのである。停車場は人で一杯だつた。クレムスへ行かうか、それともツナイムへ行かうか、どつちにしようかと考へてみた。併しあすこらには宮廷の人達が行つてるかもしれんと思つたので、グラーツか又はさういつ

たところに行くことに決めた。すると今度は車室の中に坐つてる。その車室は街鐵のに似てゐた。私はボタンの穴に、特色ある編み方をした長いもので、それに固い材料で作つた紫がつた褐色の菫がついてるものを挿してゐたが、それが大變人々の眼を惹いた。(ここでこの場面は杜絶えた。)

私は復たその停車場の前に居つた。併しずつと離れて、一人の中年の紳士と一緒に居る。誰だかわからずに居ようといふ工風をしてをるが、その工風はもうちやんと實行もされてをるのがわかる。思考と體驗は謂はば一つなのである。かの紳士は盲人のやうな樣子をしてみせる。少くとも片方の眼は見えないやうな風をする。私は彼に男の尿の壜を支へてやつてをる(この壜を買ひに町へ行かねばならなかつたのか、町で買つて來たのかしたのである)。してみると、私は看護人であつて、この人は盲人だからその壜を渡してやらねばならんのである。吾々がこんな樣子をしてるのを車掌が見たら、注意を拂はずに行つてしまふに相違ない。その時その盲人の姿勢と彼の小便をしてをる陰莖とが彫塑的に見えた。(その後尿意を催して目が覺めたのである。)

この夢全體は、自分が一八四八年の革命の年に居る如くに、考へさせる一つの空想だな、といふ印象を與へるやうだ。この革命の追憶は一八九八年の五十年祭によつて、新らたにされてゐたし、またその上、ワッハウへ小遠足をして、革命學生の指導者であつたフィシュホーフの隱遁所

である。（これは後に聞き知つたところでは、間違ひであつた）。エムメルスドルフの町を知つたためにも、新らたにされてゐたのであつた。フィシュホーフにはこの夢の顯在內容の二三の點が關係あることが明かになるであらう。この兄弟はその細君に向つていつも何かの時に笑談に「五十年前にはなあ」と言ふのが常であつた。これはテニスン卿の或る詩の題目を眞似てるのであるが、これを言ふと、子供たちはいつも、十五年前には、なのよと訂正する習慣になつてゐた。テゥーン伯爵を見たのが因で生じたかかる考へに聯絡してをる空想は、併しながら恰度伊太利のお寺の正面景が、その背後の建物と有機的な結合もなく、前へ附けられてるのと同じやうなものだ。そのお寺の正面景とこの空想の異るところは、この空想の方は缺け目があり紛糾してゐて、そして多くの箇所で、內部の要素が突き破つて出てをる點である。この夢の第一の局面は數多の場面から組み立てられてをるが、私はそれをそれぞれに分解することができる。夢の中の伯爵の傲岸な態度は、私の十五歲の時高等中學校で經驗した或る場面に倣つて、模寫されてをる。吾々は或る嫌はれ者で無學な敎師に對して謀叛をたくらんだ。陰謀の中心となつた一人の級友は、その後英吉利のヘンリ八世を自分のお手本にしてをるらしかつた。このクーデーターの指揮は私に負はされた。そして墺太利

（ワッハウー）にとつてのドナウ河の意義に關する討論が動機となつて、公然たる騷動となつたのであつた。謀叛徒黨のうちにたつた一人の貴族の子があつた。彼は目立つて背が伸びてゐるので、吾々は「麒麟」(Giraffe)と仇名をつけてゐた。その彼が暴君先生、獨逸語の教授に辯明を求められて立つたが、その樣子は夢の中の伯爵の如くであつた。ボタンの穴へ挿んだものはやはり何かの花であるに相違ない（が、それはその同じ日に私が或る女の友達のところへ持つて行つた蘭とその外には何か含生草(Rose von Jericho エリチョの薔薇)のやうなものを思ひ出せるものである)。で、寵愛する花の說明と、その何かをボタンの穴へ挿むこととは、シエークスピアの諸王劇中にあつて、赤い薔薇と白い薔薇の內亂の緒口を描寫する場面を思ひ出させるとすれば、それは著しいことであるが、今ハインリヒ八世のことを言つたために、この囘想を生ずる道がついた。さうして次には、その薔薇からして赤と白の石竹を考へつくのは、緣遠いことではない。(この間へ、分析中に、二つの詩句が挿まれてくる。一つは獨逸語ので、薔薇も、チューリップも、石竹も、すべての花は色褪せる、といふのである。他の一つは西班牙語ので、イサベリタよ、花の萎むのを悲しむな、といふのである。西班牙語が思ひつくのは、「フィガロ」から來てゐる。）白い石竹は吾吾のキーン市では反ユダヤ主義者の徽章であり、赤いのは社會民主黨のとなつてゐる。その背後

には美しいサクソニア（アングロサクソン）を汽車旅行してゐた時にあつた、或る反ユダヤ主義的挑戰に對する追憶が潜んでをる。夢の第一局面の形成に對して成分を與へてをる第三の場面は、私の大學生時代の初期にあたる。或る獨逸の大學生協會で、自然科學に對する哲學の關係についての討論會があつた。まだ黃口の若輩であつた私は唯物論を悉く遵奉して、敢て進み出で、極端に片よつた立場を代表した。すると一人の優秀らしい年長の學生が立ち上がつて、私達をひどくこき下ろした。この人も動物界から取つた名を持つてをり、この時以後人間の氣を引き導いて大衆を組織するその才能を實地に示してもをる人であるが、その時彼は更に附け加へて言つた。自分も少年の時に豚飼ひになつたことがあつたが、その後後悔して父の家へ歸つたのであると。私は腹を立てた（夢と同じである）、牝豚のやうに横着になつた、そして答へて言つた。君が豚飼ひをしたことがあつたと知つて以來は、もう君の演説の調子には驚かない、と。（夢の中では私は自分の獨逸國民主義的考へに驚いてをる。）大きな騷ぎになつた。私は多くの方面から私の言葉を取り消せと要求されたけれども、頑として應じなかつた。私に罵られた相手は甚だ道理のわかつた人であつたから、人が彼に勸める挑戰の要求を受けつけなかつた。そして事件をそれなりにした。

夢場面のその他の要素はもつと深い層から出て來てゐる。伯爵が「欵冬」を宣言したのは何を意味すべきものだらうか？　これについて私は私の聯想の系列に訊ねてみねばならない。Huflattich（欵冬）—lattice（ちしや屬）—Salat（サラダ）—Salathund（ザラートの後に犬といふ字を加へた語は、自分では喰べもしないのにそれを他の者にくれてやることを好まぬ犬を意味する）。この場面には澤山の惡口がある。Gir-affe（麒麟）、Schwein（豚）、Sau（牝豚）、Hund（犬）。又、別の廻り道をすれば、私は或る人名によつてEsel（驢馬）に達することもでき、その惡口が或る學校の先生へ奉る嘲りなのである。その外、私は——それでいいかどうか、自分では知らないが——Huflattichをpisse-en-lit（寢床に小便する）と飜譯する。この知識はゾラの「ジェルミナル」に基くもので、そこでは子供達がさういふサラダを持つてくるやうに言ひつけられるのである。Hund—chienはその名の音からいふと大きい方の機能に對する類似を有つてゐる（chier—大便をするである。小さな機能に對してはpisser—小便をするがある）。さて吾々はこの不體裁のものが、その混合狀態の三つの凡てに一緒になつてゐるのを、ぢきに見つけるであらう。と言ふのは、未來の革命を十分問題としてゐるかの「ジェルミナル」そのものの中に、或る全く一風變つた競爭が描かれてをり、この競爭は瓦斯狀の分泌物、Flatusと名づけられたものの製作に關係してをるか

らである。(これは「ジェルミナル」に於いてではなく、「土」の中でであつた。この間違ひに私は分析後になつて氣がついた。――とにかく私は、Huflattich と Flatus との同一的な文字を指摘して置く。)ところで今後は、私はこのフラテゥスに至りつくまでの道が、どれほど久しい前から作られてをつたものかに氣づかざるを得ない。それは、花からして西班牙の小詩句を通過して、Isabelita を橋として、Isabella と Ferdinand に到着した。又、ヘンリー八世、英吉利の歴史を橋として、西班牙アルマダ艦隊の英吉利に對する戰へと到着した。この戰が勝利を以て終つた後、海上の暴風雨が西班牙艦隊を吹き散らしたのであつたから、英吉利人は Flavit et dissipati sunt (彼等は吹き散らされたり)といふ銘を入れたメダルを作つたのである。私はこの銘文をこそ、若し將來私のヒステリー症の解釋と診療について詳細な報導を與へ得るまでに立ち至つたならば、その「治療法」の一章のみだしに採用しようと、半分笑談的に考へたこともあつた。

夢の第二場については、こんなに詳しい解答を與へることはできない。而かもそれは檢閲のことを考へるからである。と言ふのは、私はかの革命期の或る高官の代りになつてをる。この人は一羽の鷲を相手に冒険をやつたことがあり、兩便不整の病氣にかかつたりしたことなどもあるといふ話である。この話の大部分を話してくれたのは或る宮内官 (Aula, ― 宮廷、講堂 consiliarius

aulicus—宮廷の顧問）であつたのだが、ここで檢閲を通過する權利が私にはあるまいと私は考へたのである。續いてをる部屋部屋が夢に出たのは、私が一瞬間中をのぞくことのできたかの閣下の貴賓車が刺戟となつてをる。併しこの部屋は夢に於いては、屢々ある如くお局（Zimmer—Frauenzimmer—ärarische Frauenzimmer）を意味するものである。取締りの婦人が現れたについては、私は或る中年の頭のよい婦人の家で歡待を受け澤山いい話を聞いたことがあつたのに、その婦人をここで借りたわけで、恩を仇で返へしてをる。——ラムプ云々の件は詩人グリルパルツェルの作品に基いてる。この詩人はこれと似た或る面白い體驗を記錄してをるし、又「ヘロとレアンデル」の中に利用してゐる（「海の波、戀の波」——アルマダ艦隊と海上の暴風雨）。——（ジルベレルは「空想と神話」H. Silberer, Phantasie und Mythos. 1910 と題した中味の豐富な一研究に於いて、この夢の部分を手がかりとして、夢の働きは、ただに潛在的夢思想ばかりでなく、夢形成の際の精神的過程をも再現する力がある事を示さうと試みてをる。「機能的現象（ダス・フンクチォナーレ・フェノーメン）」と名づける。併し私の考へるところでは、この際彼は、その「夢形成の際の精神的過程」は他の凡てと同じく、夢にとつては思想の一材料である事を見落してゐる。この高慢な夢の中で、私はその過程を發見してをるのを、明かに自慢してゐるのである。）

殘る二つの部分の細かな分析をも、私はさし控へねばならない。私はただ二つの小兒期場面に

溯る要素だけを摑み出すであらう。もともとこの場面のため、私はこの夢を採用してみたのである。私を强制してかく遠慮せしめるのは、性的材料なるがためであると推量する人もあるであらうが、その通りである。併しそれだけの說明で滿足してくれないでもよい。蓋し人は、他人の前では祕密として取扱はねばならないいろいろな事でも、自分にとつてはちつとも祕密にはしないからだ。そして今の場合の主要事は、その解決を人に匿すやうに、私を强制するその理由にあるのでなくて、夢の本來の內容を私自身に對して匿してみせまいとするかの內心の檢閱の動機に存するのである。さういふ次第であるのだから、私はかう言ふよりほかはない。この夢を分析してみると、この三つの部分は厚顏な法螺である。私の覺醒生活に於いてはとうの昔に抑壓されてゐた或る笑ふべき誇大妄想の流出であることがわかる、と。そしてこの誇大妄想は、ちよこちよこと飛び出した箇々の部分では、顯在內容の中へまでも顏を出してゐる（自分で自分が悧巧な氣がしたし、その夢の前の夕方の思ひあがつた氣持ちを見事によく理解せしめてくれるものである。法螺は凡ゆる方面に亙つてゐる。例へば、グラーッといふ名の出てくるのも、たつぷりとお金を用意してゐると思ふ時に得意になつて使ふ俗語の「グラーッがなんぼかかるもんかい？」といふのと關係してゐる。ラブレエ師匠のものした「ガルガンテュアとその悴パンタグルエルの生涯と行

蹟」の比類なき描寫を思ひ合はせてみる人だつたら、この夢の第一部の顯示的内容を法螺のうちに入れることはできるであらう。ところで前に約束した小兒期場面の二つに屬するものは、次の如くである。私は今度の旅行のため一つの新しい鞄を買つたが、それの色は褐色がかつた紫であつた。それが夢の中に數度出て來る。(固い材料で出來てる紫がかつた褐色の菫。それに或る物がついてゐるが、それは「娘釣り」と呼ばれてをるものだ。――政府役所の部屋の家具。) 何か新しいものを持つてると人々の眼につくといふのは、誰でも知つてる小兒信仰である。さて私の小兒時代に屬する次のやうな場面の話を聞いてをるが、それの記憶は話の記憶で、事柄の記憶ではない。私は――二歳の時に――なほ時として寢小便をすることがあつたさうである。そして父にそれを叱られると、N町(一番近いかなり大きな町)で新しい美しい赤い寢臺をお父さんに買つてあげるよ。と約束して父を慰めたのであつた。(夢の中で吾々が壜を町で買つていしまつたか、又は買はねばならなかつた。約束したことは守らねばならない。)――(讀者よ、その外、男子の尿壜と女子的な鞄、箱(ボックス)との對照に注意せられよ。) この約束の中には小兒の誇大妄想が含まれてをる。小兒の尿の面倒が夢に對して持つ意味は、既に前出した夢判斷の一つに於いて吾々の眼を惹いたことがあつた(第三四五頁)。(精神病患者に試みた精神分析からして、吾々は遺尿と名譽

心の特色との間に密接な關聯あることをも認め得てをる。）

次には私が七歳乃至八歳であつた頃に起つたもう一つの家庭的事件がある。この方は私は大變よく記憶してをる。兩親の寢室でその居るところで、大小便の用を足すことはしないやうに愼しみなさいといふ命令を、私は或る晩床に入る前に超越してしまつたのである。父はその叱言を言つてるうちにふとこんなことを言つた。この兒はものにならんだらう。それが私の名譽心にとつては恐しい侮辱であつたに相違ない。何故ならば、この場面の暗示が、私の夢にいつも繰返へされ、そしてそれには定まりきつて、恰も、そらどうです、私はものになつたぢやありませんか、と言はんとするかのやうに、私の業績や成功の列擧が結びついてをるからである。この小兒期場面がこの夢の最後の場面の材料となつてをる。ここでは勿論復讐として、役割が逆に替へられてをる。中年の男は明らかに私の父である。その片方の眼が盲目であるのが私の父の片方の綠內障を示してをる。（別の判斷では、その男は片眼である點が神オディンと同じ。オディンは神々の父である。――オディンの慰藉の話。――父に新しい寢臺を買つてあげるといふ夢の慰藉。）この男が嘗つて私が父の前に立つてゐたやうにして、今や私の前に立つてをる。綠內障を持ち出すのは、それで私は恰も私の約束を實行したかのやうに、コカインのこと、父の手術の時に利益になつたことなどを、思ひ

起させるのである。その外に、私はその男をからかつて面白がつてをる。彼は盲目であるから、私は彼の前へ尿壜を當ててやらねばならない。そしてその際に私は、自分が自慢にしてをるヒステリー症についての學說の中の私の認識に對する、いろいろな諷示をなして悅に入つてをるのである。

（なほ若干の判斷材料を附け加へて置かう。硝子の壜を前に當ててゐることは、眼鏡屋で硝子の眼鏡玉を、次から次へと、當ててみたが字を讀むことができない百姓の話を思ひ出させる。——百姓欺し——百姓釣りとこの夢の前の部分の娘釣り。——ゾラの「土」の中に出る百姓達が白痴になつた父を取扱ふ有樣。——父がその晩年には小兒のやうに寢床を汚したといふ悲しいめぐる因果。だがら私は夢の中で病人の看護人である。——「思考と體驗はこの場合謂はば一つである」といふ考へは、オスカル・パニッツァのひどく革命的な一脚本を想起させる。そこでは、父なる神は痲痺症の老人として甚だ不面目に取扱はれてをる。その脚本に、意志と行ひは彼の場合では一つである、といふ文句があり、神は一種の稚兒たる大天使によつて、惡口したり呪詛したりしないやうに、引き止められねばならない。なぜなら神の呪詛は立ちどころに實現されるだらうからである。——計畫を工風する點は、私が後になつて物の批判ができるやうになつか時代に發する父に向けた非難である。それと共に、この夢の叛逆的で權威を侮辱し且つ上司を嘲けるやうな內容全部も大體、父に對する反抗に歸着す

るものである。國民は國の父と謂はれる。そして父は最も年長の第一の、小兒にとつては唯一的な權威であり、この父の權威の勢力完成からして、人間文化史の進む間に、その他の社會的官憲上司といふやうなものが生じてゐる(「母權」がこの點の局限を强要しない限りは)。――「思考と體驗は一つなり」といふ夢の中の考へは、ヒステリー症の徵候の說明をも目あてにしてをり、この說明には男子の排尿器も亦或る關係を有してゐる。キーンの人なら Gschnas の方法を說明して貰はずとも知つてることであらう。それは、珍らしいそして價値に富んだ外見の品物を、些細な、殊に悅ばれるのは滑稽な、そして價値のない材料で作るといふのが趣旨である。例へば、わが國の藝術家達が何か愉快な夜の催しなどの時に好んでやるやうに、武具を鍋や藁帚や長い鹽菓子など作るのである。ところで私は、ヒステリー症患者はそれと同じことをやる事に氣がついた。彼等の身に實際出會はした事柄の外に、彼等は無意識的に厭な、又は脫線的な空想的出來事を自分で構成するのであるが、それは彼等が體驗の極めて無邪氣な、そして極めて平凡な材料を用ひて作るところのものであるのだ。彼等の病症徵候は先づこの空想と關係を有してゐて、實際の出來事が重大なものであるにもせよ、或は無邪氣なものであるにせよ、その出來事の記憶には賴つてゐない。この點を明らかになし得た結果、私は數多の難問題を通り越すことができ、非常に喜ばしかつた。今「男子の排尿器」といふ夢要素が出たのについて、このヒステリー症の解釋を暗示するに至つたわけは、最近の「グシュナス會」に於いてルクレティア・ボルギアの毒杯を陳列した者があつて、その杯の大切な主要部分は、病院などで使用してをる硝子の男子用排尿器で出來て居た、

といふ話を人から聞かされたためであつた。）

とにかく、小兒期の小便に關する二つの場面が誇大妄想の題目と密接に結びついてをつた外に、この場面を喚び起すことに對しては、アウスゼーへの旅行の途上、私の車室には便所がなかつた、乘車中に狼狽したりすることないやうに、前以て用意しなければならなかつた、といふ偶然的の事情が力を添へるに至つたのである。そして果して翌朝にその狼狽はやつて來たのであつた。私は尿意を催してる感じを以て目が覺めた。私の考へでは、人或ひはこの感じに對して、本來の夢刺戟者たる役目を負はせたく思ふかもしれないが、私であつたらば倂し、それとは異つた解釋、卽ち夢思想が始めて尿意を催させたのであるといふ解釋の方に、優先權を與へるであらう。睡眠中に何かの身體的必要のため妨害される、少なくとも此の場合の目醒めの時刻、朝二時四十五分頃などに妨害される事は、私には全然異例である。それでもまだ辯駁する人があつたら、私は他の幾度もの旅行に於いて、もつと都合のよい狀態にあつた時には、早朝に目を覺ました後尿意を感じたことは殆ど一度もないと、答へる。とにかく、この點なんかは未決定のままに捨てて置いても、私の理論に差し障りはない。

夢分析に際して得た經驗によつて、私は次の事實に注目を拂ふやうになつた。その夢の源泉と

願望刺戟が容易に證明し得られるのであるから、先づその判斷は完全なものだと思はれてゐるやうな——さういふ夢からでも、重要な思想の絲が出て來て、そしてそれが極めて初期の小兒時代へつながつてをる、といふ事實である。で、この事實に注目を拂ふやになつた後は、この點にも亦、夢作用の或る本質的な條件が存してをるのではあるまいか、と私は自ら問うて見ずにはゐられなかつたのである。若しもこの考へを一般化してよろしいならば、凡ゆる夢にとつてその顯在內容の中には最近に體驗されたものへの或る聯關が與へられてをり、而かもその潜在內容の中には最も昔に體驗されたものへの或る聯關が與へられてることになるであらう。そしてこの最も昔に體驗されたものについては、それが眞實の意味に於いて現在に至るまで最近的のものとしてあつたものである事を、私はヒステリー症の分析に際しては、實際に示すことができるのである。併し一般の場合についての上記の如き推測は、未だその實證は眞に困難であるやうだ。私はなほ別の聯關に於いて(第七章)夢形成に對する最初期的小兒體驗の蓋然的役目の問題に再び戻らねばならぬかもしれない。

冒頭に於いて觀察された夢記憶力の三つの特異性のうち、一つは——夢內容では傍系的のもののが特別に採用されるといふ一特異性は——これを夢の歪みに歸することによつて滿足に解決さ

れた。他の二つ、卽ち最近的のもの並びに幼時的のものの選拔の事實については、これが存在を確かめることはできたが、これを夢作用の動機からは導出することができなかつた。この二つの特質の說明又は評價はまだなされぬものとして殘つてをる。吾々はこの二つを記憶に留めて置きたい。吾々はやがて後に、夢判斷による時には、恰度窓の隙目からのやうに、精神といふ道具の內部へ一瞥を投げることができるといふことを認めるであらう。それを認めた時に、吾々はこの精神といふ道具の構造について、考量を試みるであらう。その考量に際してか、又は睡眠狀態の心理學に於いてか、とにかくいづこかに、この二つの特質はその歸屬すべきところを見出すに相違ないであらう。

併しここに最近の夢分析からのもう一つの成果を、私は力說して置きたいと思ふ。夢は屢々多義的に見える。實例が示して居るやうに、夢の中には數多の願望實現が相並んで聯合されてることがあるばかりでない、一つの意味が、一つの願望實現が、他のそれを蔽うて居り、それをめくつて行くと終に一番下に於いて、初期小兒時代の或る一つの願望の實現に行きあたることもある。そしてここの文にあつても、その「屢々」といふ字は「定まりきつて」といふ字によつて取り替へられるのが一層正しくはないか、といふ考へが生ずるのである。（夢の意味が重なり合ってなる事

は、判斷の最も取り扱ひにくい、併しまた最も內容に富んだ問題の中の一つである。この可能性を忘れると、すぐに迷ひ出し、誤つて夢の本質について支持すべからざる主張を列べる弊に至り易い。けれどもこの題目については、今までまだ餘りと言へば餘りにも、少ししか調査が行はれてゐない。今日までのところでは、尿剌戟夢にある、かのかなり規則的な象徵の重なりが、オットオ・ランクによつて根本的に評價されたのがあるにすぎない。)

第三節　夢の身體的源泉

人若し敎養ある素人に夢作用の問題の興味を呼び起さんと試み、その目的を以て彼に向ひ、あなたの意見では夢は一體どんな源泉から發して來るものか、といふ問を出してみると、大抵の場合に認められるは、その訊かれた人が解答の一部分は確かに自分の知識の中にあると思つてゐることである。卽ち彼は卽座に、消化の障害又は困難とか(「夢は胃から來る」)、睡眠中に於ける偶然的な體の位置や小さな體驗とかが、夢形成に對して現す影響のことを擧げる。そして彼は、それ等の重要點凡べてを考慮した後にも、或る說明を要することがまだ殘つてゐるのには、氣がつかないやうである。

専門的文獻がこの身體的刺戟源泉に對して、夢形成上のいかなる役割を承認してをるかについては、吾々は序論の章に詳しく論述して置いた。それ故ここでは、その調査の成果だけを思ひ出してみるのみで足りる。吾々の聞き得たところでは、身體的刺戟源泉は三通りに區別される。一つは外界の對象から出て來る客觀的感官刺戟、第二は感官器官のただ主觀的にのみ基礎づけられた内部的昂奮狀態、第三は身體内部から發生する肉體的刺戟。そして吾々は著述家達がややもすれば、この身體的刺戟源泉の外に或ひはあるかもしれない夢の精神的源泉を背景へ押し込めるか、或ひは全くこれを除外せんとするかの傾きあることを認めたのであつた（前出、第七三頁）。この種の身體的刺戟源泉の利益となるやうに述べられた諸說を吟味してみたところが、吾々が知り得た事は、客觀的の感官昂奮の價値は——それが睡眠中の偶然的な刺戟であるにせよ、又は睡眠中の精神生活から引き離されぬ刺戟であるにせよ——多數の觀察によつて確定せられてをり、又實驗によつて確認されてをる事（前出、第四五頁）、主觀的の感官昂奮の役目は夢の中に催眠術的象徵が再現することによつて說明がつく（前出、第五八頁）と思はれてをる事、及び、吾々の夢影像と夢表象とが内部的肉體刺戟に歸せしめ得られるといふ考へは、非常に廣い範圍に亙つて認定されては居るものの、それはその全細目に及んでは證明され得るものでない、とは言ひ併

し、それは消化器官や尿器官や性的器官の昂奮狀態が夢の內容に與へる周知の影響力によつて支へ得られる考へである事、等であつた。

「神經刺戟」と「肉體刺戟」はそれ故夢の身體的源泉である、といふのは、多くの著述家の意見に據れば、夢一般の唯一の源泉である、といふことになる。

併し吾々は又、この身體的刺戟說の正しさといふよりは、寧ろそれで足りるか、を攻擊するやうに見える疑惑の一群にも、耳を貸したのであつた。

この說の凡ての代表者がこの說の事實的根柢については――殊に、夢內容の中にそれを再發見するのに何等の骨折を必要としないやうな、偶然的にして外界的な神經刺戟が問題である限りにあつては――大丈夫な感じを持つてをるに相違なかつたにしても、それでも併し彼等のうちの誰れ一人だつて、夢の表象內容は豐富であるから、これをただ外界的な神經刺戟からだけ引き出し得るものとは限られない、といふ見解を全然遠のけてをる者はゐなかつた。メリー・ホヰットン・カルキンス孃は、自身の夢ともう一人の人の夢とを、六週間の間、この立場から吟味してみて、外部的感官知覺の要素が證明され得た夢は、その中にただ十三・二パーセント、若しくは六・七パーセントを見出したにすぎなかつた。その蒐集のうちでただ二つの場合だけが、器官的感じに歸

せられるものであつた。この統計はこの點で、吾々自身の經驗を大體見渡した時に既に吾々に推測された事を、實證してくれるのである。

人によつては、「神經刺戟夢」は夢のうちでも、よく研究の行き届いた一種であるから、それを他の夢の形よりは重んずるといふので、滿足してをる場合も數々あつた。シピッタは夢を分けて、神經刺戟夢及び聯想夢となした。併し身體的夢源泉と夢の表象内容との間にある紐を證明することが成功しない限りは、その解決は依然として不滿足であることは明らかである。

外界的刺戟源泉の存することは十分なほど屢々ではない、といふこの第一の抗議と相並んで、第二の抗議となるのは、この種類の夢源泉を持ち出したのでは、夢の説明が十分にはなしとげられない事である。身體刺戟源泉説の代表者は、吾々に二つの事を説明してくれねばならない。第一には、夢の中の外界的刺戟がその刺戟の現實的な性質のままでは認識されないで、寧ろ定まりきつて誤認されるのは、何故であるか（前出、第五〇頁、目覺し時計の夢を參照せよ）、第二には、この誤認された刺戟に對する知覺的精神の反應の結果が、何故にあのやうに規定し難い、變化多いものとなり得るのであるか、この二つを説明してくれる責任がある。この問に對する解答として、シトリュムペルの言ふところを聞くと、かうである。精神は睡眠中には外界から離脱す

る結果、客觀的感官刺戟の正しい判斷を與へる力がなくなつてをり、多くの方向に向つて動搖してる昂奮を土臺として、幻影を作らねばならないのである。彼自身の言葉でいふと（第一〇八頁）「睡眠中に或る外部的又は內部的神經刺戟のために精神の中に或る感覺、又は或る感覺結合體、或る感情、或る精神的過程と言ひ得るものが成立し、そして精神によつて知覺されるとすぐに、この過程は覺醒時以來精神に殘留してゐた經驗の範圍から感覺形象を、從つて以前の知覺を呼び出すのであるが、それは無飾のままのこともあるし、或ひはそれに從屬する精神的價値を加へてをることもある。精神的過程は謂はば自分のまはりに斯かる形象を招集する、或る時はかなり少數の、又或る時はかなり多數の形象を招集し、それによつて神經刺戟から發生した印象は或る精神的價値を有することになる。この場合にも吾々は、覺醒時の處置に對して慣用語となつてる通りに、睡眠中の精神は神經刺戟の印象を判斷する、と普通に言つてをる。この判斷の結果が所謂神經夢であつて、これは、その成分の條件として、成る神經刺戟が再現の法則に從つて精神生活の中で心理的作用をなし終るといふことになつてをる、夢の一種である。」

この說と主要部分に於いて同一なるはヴントの意見である。それに據ると、夢の表象はいかなる場合でも大部分は感覺刺戟、殊に一般的感じの刺戟から發し、從つて大抵の場合空想的幻影で

あり、錯覺とまでなり終つた記憶表象であるが、それが純粋の記憶表象であることは、恐らくただ小部分にすぎないやうに思はれる。この學說によつて生ずる夢内容の夢刺戟に對する關係を、シトリュムペルはいみじくも次のやうに比喩してをる(第八四頁)。「それは、音樂のことを丸で知らない人間の十本の指が樂器の鍵盤の上を走る時のやうなものである。」であるから、夢は心理的動機から發生した或る精神的現象とは思はれず、寧ろ生理的刺戟の結果である、そしてこの結果はその刺戟を受けた器官が何等他の發現方法を知らないために、精神的徵候の方法で現れるものである、といふことになる。例へばマイネルトが、箇々の數字が特別に盛り上がつて出てをる時計の指針面の、有名な比喩を以て試みてをる强迫表象の說明なども、それと似た前提に基づいてをるものである。

身體的夢刺戟の說はいかにも人氣を得てをり、またいかにも人心に迎合するものと思はれるかもしれないが、併しその說の弱點を指摘するのは容易いことだ。身體的夢刺戟はどれもこれも、幻影を形成することにより睡眠中に精神を動かして判斷を促がすものであるから、數限りないほど多數のさういふ判斷の試みを喚起せしめるわけであつて、從つて實に種々雜多な表象の中を探つては、夢内容に於いて自己を代表する者を見出してをるのである。(私はモアリー・ヴォルドの實驗

で作つた夢の記錄を通讀するやうに、誰にでもお勸めしたい。これは二册に集めた詳細で正確な記錄ではあるが、これを通讀するならば、ここに指定されてるやうな吟味條件の下では、箇々の夢の內容がいかに明らかにされることが少ないか、又、かかる實驗が夢問題の理解のためにはいかに利益の少ないものであるかを、確信することができるからである。） ところで、シトリュムペルとヴントの說は、外界の刺戟とそれの判斷のため選まれた夢表象との關係を統制してをる何等かの動機の存在を指示することができない、卽ち刺戟が「十分屢々その生產的働きの間に行ふものである」ところの、かの「奇妙な選擇」を說明することができない（リップス、「精神生活の根本事實」、第一七〇頁。Lipps, Grundtatsachen des Seelenlebens.)。幻影說全部が次の事を根本前提としてをる。睡眠中の精神は客觀的感官刺戟の現實的性質を識別することはできなくなつてをると。この根本前提に對しては、もつと別のいろいろな抗議が向けられる。老生理學者ブルダハの證明するところでは、精神はたとひ睡眠中にあつても、手許へやつてくる感覺的印象を正しく判斷することが十分できるし、その正しい判斷に從つて反應することも十分にできる。彼はまたかうも論じてをる。吾々は吾々個人にとつて重要に思はれる或る種の感覺印象を、睡眠中には閑却される他の印象とは、別にすることができる（乳母と小兒）。また、何か無關係な聽覺印象によつてよりかも、自分の名を呼ばれれば、目を覺

ますことは遥かに確實性がある。この事實は、睡眠中でも精神は感覺性の間に區別を立ててをることを前提とするものである（第一章、第九二頁參照）。これ等の觀察を土臺としてブルダハは、睡眠狀態の間には感覺刺戟を判斷するのに無能力があると見做すべきでなく、その刺戟に對するいいいいいい關心が缺乏してをるのだと認定すべきだ、と結論してをる。一八三〇年にブルダハが使用したこの議論と同じ議論が、そのまま變更するところなく、一八八三年にリップスが身體的刺戟說を攻擊する時に、再び現れてをる。それに據ると、精神は、逸話に出てくる眠り男のやうなものだ。「君は眠つてるのか？」と訊かれた時は、「いいえ」と答へる。つづいて、「ではわしに十グルデンお金を貸してくれ」といはれると、「わしは眠つてるのさ」と言ひ拔ける。

身體的夢刺戟の說が不十分なる事は、別の方法でも證明される。吾々が日常觀察するところでは、外界の刺戟は吾々が夢みるや否や、そして夢を見る場合には、夢內容の中に現れてくるにしても、それが動機となつて、夢みるやうに吾々を强ひることはない。例へば、睡眠中に吾々を襲ふ皮膚の刺戟又は壓覺刺戟に對しては、種々相異した反應が吾々の自由を以て行はれる。先づ、吾々はその刺戟を聞き流してしまふことができる。そしてその後で目を覺ましてみると、例へば片方の脚に布團がかかつてゐなかつたとか、片方の腕が壓しつけられてゐたとかしてをるのを見

出すことがある。病理學は私に多數の實例を示してをるが、それによると、種々のそして力强い昻奮を與へる感覺及び運動刺戟が睡眠中に何の作用も起さないままでをるのである。これは大抵苦痛的刺戟の場合に起ることであるが、謂はば睡眠の始めから終りまで打ち通して、その睡眠中に感應を覺えてをりながらも、その苦痛が夢の中へ織り込まれないことがある。第三には、刺戟につづいて目が覺めてしまひ、その刺戟を拂ひのけることもある。(これについてはランダウエル、「睡眠者の動作」參考せよ。K. Landaer, Handlungnen des Schlafenden. Zeitschrift f. d. ges. Neurologie u. Psychiatrie. XXXIX, 1918. 觀察をすると、睡眠中の人の動作には目に見える意味に充ちたものがある。睡眠者は絕對に痴呆にはなつてゐるものでない、寧ろ反對に、彼は論理的に且つ意志を以て動作することができる。)いよいよ第四の反應として擧げるのが、その神經刺戟によつて夢を見るに至る場合である。この最後の夢形式の可性能が實現される度數に較べて、上記の他の可能性が實際に行はれてをる度數は、決して劣ることはない。若しも夢みる動機が身體的刺戟源泉の以外にあるのでなかつたらば、こんなことが起り得るわけはないであらう。

他の著述家達は――シェルネル、及び彼に附隨してフォルケルトも――身體の刺戟を以て夢を說明する說には、上述の如き缺陷あることを正當に認めた結果、身體の刺戟が因で、樣々なる夢影

像を發生せしめる精神活動を、もつと緻密に決定してみようと試みてはをるが、併し彼等はやはり復た、夢作用の本質をば精神的方面及び或る精神的能動性の中へ歸屬せしめてしまつた。シェルネルは、夢形成に際して展開される精神的特色を、詩的な心持ちで捕へて、それを燃えるやうな言葉で生々と叙述してをるばかりでなく、精神が自已に提供される刺戟を取扱ふ原理をも探し當てたと信じてをる。彼に據ると、日中の束縛から解き放された空想が、自由自在に働きをなすのであるから、夢の仕事の向ふところは、刺戟が生じてくる器官の性質とその刺戟の性狀を、象徵的に現し出すことにある。かくの如くであれば、夢判斷の手引きとして、一種の夢占ひの本も出來るわけで、その本によつて夢影像を調べれば、身體的感じ、器官狀態、刺戟狀態を推定することもできる。「例へば猫の影像は心情の不氣嫌を現すし、薄色の滑らかな麪包菓子の影像は肉體の裸體を現す。全體としての人間の體は、夢の空想では、家として表象され、箇々の身體器官は、家の一部として表象される。齒の刺戟夢では、高い圓天床の玄關が口蓋に相當し、梯子段は咽喉から食道への通路に當る。頭痛の夢では、部屋の天床が見るも厭やな蟾蜍のやうな蜘蛛で蔽はれてをる有樣が、頭の高さの位置を現すために、選び出される」(フォルケルト、第三九頁)。「夢の象徵は樣々な選擇を以て、同一の器官に使用される。例へば、呼吸をしてをる肺臟の象徵として

は、ぶうぶうと音を立ててをる炎で一杯になつたストーヴが選ばれ、心臟の象徵には背の高い櫃と籠があり、膀胱のそれには圓い囊狀のか又は一般にただ中味を刳りとられた品物がなる。特別に重要な事實は、夢の終りに當つて屢々、その昂奮中の器官又は、それの機能が明らさまに現される、而かも大抵はその夢みる當人自身の體についてをるもので現される事である。例へば、齒の刺戟夢は普通に、その夢みてる當人が、自分の口から齒が一本拔けるところで終つてをる」(同上、第三五頁)。この夢判斷の學說が諸家の間に大して悅ばれたとは言ふことができない。この學說は何よりも先づ法外なものに思はれた。私の批判するところでは、この學說には是認を要求してもよい部分もあるのだが、諸家はその部分的是認をさへ躊躇したのである。この學說を進めると、古代人が利用したかの象徵性による夢判斷の再來になることはわかるだらう。ただそれと相異するのは、この學說では、判斷を取り出して來るべき領分が、人間の肉體方面に局限される點である。シェルネル流の判斷では、學術的に摑み得る技術が缺乏してをる。その缺乏がこの說の使用價値をひどく減殺さぜるを得ない。殊に、或る一つの刺戟が夢內容の中でいく通りもの代表者によつて現されることあるのは、この場合でも同じ事なのであるから、この說による夢判斷が、勝手氣儘でないとは決して言はれない。であるから旣にシェルネルの追隨者であるフォルケル

トが、體が家として現されるといふ考へを確認することはできなかつた。この說に據る時には、精神は自己に關係する刺戟について空想するだけで滿足して、その刺戟を何とか片づけるといふやうな見込みさへも持たないのであつてみれば、精神はやはり夢の仕事によつて、益のないそして又目的のない仕事を背負はされてることになる、といふ攻擊をも招がざるを得ない。

併し夢が身體刺戟を象徵化するといふこのシェルネルの說にとつて、手痛い攻擊が一つある。この身體刺戟はいかなる時でも存在してをるし、一般の認定によると、覺醒時に於いてよりも、睡眠中の方が精神はかかる刺戟に對して感應し易い。さうだとすると、何故精神は、全夜中の間、繼續的に夢を見ないのか、殊に每夜凡ゆる器官の夢を見ることがないのか、それが理解し得ないことだ。この攻擊に對して、假りに夢活動を喚び起すためには、眼、耳、齒、腸等から特別なる昂奮が發生しなければならんのであるといふ條件によつて言ひ拔けようとするにしても、それ等の刺戟昂奮を客觀的なものと證明するのに困難が控えてゐて、その證明はただ小數の場合にしかできないのである。若しも蝿の夢は、呼吸に際しての肺葉の上下運動の象徵を意味するものだとするならば、この夢は、シトリュムペルの指摘したやうに、もつとずつと頻々と起らねばならないか、或ひはこの夢の間に於いて呼吸活動が昂ぶつてをる事が證據立てられるかしなければなら

ないと思ふ。なほ或る第三的の場合があり得る。而かもこれが、凡ゆる場合のうちで、最も蓋然性のあるものである。卽ち、時々は特別な動機が働きをなして、平等に存在する內臟的感應に對し注意を向けしめる場合である。併しこの場合はもはやシェルネルの學說では說明し得ない。

シェルネルとフォルケルトの探求の價値の存するは、夢內容の特質のうち、說明を必要としそして新しい認識を生むやうに思はれる、いくつかの特質を注目せしめる點にある。夢の中に身體器官や機能の象徵化が含まれてをるといふのは、正にその通りである。夢の中の水は屢々尿意を意味してをる。男子の生殖器は、眞直ぐに立つてる杖とか柱とかによつて現されることもある、等等、或るひどく動搖のある光景や、輝く色彩やを示す夢では、その他の夢のどんよりとしたのとは反對に、これを「視覺の夢」として判斷することを拒むわけにはいかない。騷音や入り亂れた人聲などを含む夢に於いては、幻影形成の貢獻があることも、同じく否定することはできない。シェルネルが見た夢——美しいブロンドの髮の毛の少年達が二列になつて橋の上に向ひ合つて立つてをる、互ひに摑み合ふ、それからまたその以前の位置にかへる、遂ひに夢みてる當人が橋の上に出て來て、自分の顎から一本の長い齒を拔くといふ夢や、抽斗の二列が或る役を演じてをりやはり同じく一本の齒を拔くので終つてをるフォルケルトの見た夢や、この二人の著書の中に豐

富に報告されてをる同樣の夢形成は、そのものの中味を吟味もせずして、一概にシェルネル說を以て閑人の發明なりとして捨て去ることを許さざるものである。してみると、その所謂齒刺戟の推定的象徵化に對して、何かもつと別の種類の說明を與へてやるべき任務が生ずることになる。

身體的夢源泉の說を問題として論じてをつた間は、吾々の夢分析から導き出される議論の方をすつかり捨てて置いた。他の著述家達がその有する夢材料に對し使用してみたこともない或る方法によつて、若し吾々が次の事實、夢は精神的行爲として自己に特有な價値を有する事、願望が夢形成の動機となる事、前日の體驗が夢の內容にとつて最も手近かな材料を與へる事、等を實證するを得たとすれば、これほどに重大なる吟味方法を閑却し、さればこそ夢を以て身體的刺戟に對する無益にして謎の如き精神的反應なりなどと思はしめる、凡ゆる他の夢學說は、特別な批判をこれに加へなくとも、吾々からはもはや裁かれてしまつたものである。かうなると、一方は吾吾にだけ屬し、他方は夢についての以前の判斷者達にだけ屬する、二つの全然相異した種類の夢が存在するといふことにもならなければならなくなつてくるやうだが、そんなことは眞にあり相もないことである。で、吾々のなすべきこととして殘るのは、身體的夢刺戟の通俗說が支柱としてをる事實をば、吾々の夢學說の範圍內へ收容してやることしかない。

これに對する第一歩は既になされてをる。それは、夢の仕事は同時的に存在してをる夢刺戟一切を加工して、一つの統一になすべき强制を受けてをるものだ、といふ命題を吾々が開陳した時にであつた。前日に起つた二つ若しくはもつと多數の印象的なる體驗が殘つてをる時には、それ等から生ずるいくつかの願望が一つの夢の中で合一される、同じく前日の無關心的な體驗と精神的に價値多い印象とは、若しも兩者の間に共通的な表象が作り得られるならば、寄り合つて夢の材料となる。この事實を吾々は既に觀察した。從つて、夢は睡眠中の精神に同時的に實行力あるものとして存在する一切に對する反應なりと思はれるのである。吾々が今まで夢材料を分析した限りでは、その夢材料は精神的經過の殘物、記憶痕跡の集合であることがわかつた。この殘物と痕跡に對しては、實際性を與へるにしても、最近的と幼時的の材料は特に重んぜられるといふことがあるため、その實際性の特質を心理學的に決定することは、あの時にはできなかつたのである。ところで、睡眠狀態の間にこの實際的な記憶に對して感じの方面の新しい材料が加はつたならば、いかなることが起るであらうかを豫言するのに、吾々は大して狼狽するにはあたらない。この刺戟は、それが實際的であるといふ點によつて、夢にとつては、或る重要性を得ることになる。この刺戟は、精神内の他の實際的のものと合一されて、夢形成に對して材料を與へる。言ひ

換へると、睡眠中の刺戟は、加工されて一箇の願望實現となり、それの他の成分には吾々に知られてをる日中の精神經過の殘物がなつてをる。かかる聯合は必ずしも完全にやられるものではない。睡眠中の身體的刺戟に對しては、一種以上の態度があり得る。そのことは、勿論吾々の聞いてをるところでないか。若しもこの聯合が完全にやられる場合があるならば、身體的と精神的と、兩方面の夢源泉に對してその代表となる夢內容の表象材料を見出すことは成功してしまつてるだらう。

夢の精神的源泉に身體的材料が加はつて來ても、夢の本性は變更されない。夢は飽くまで願望實現である。その實現の現れ方が實際的材料によつて左右されてゐようと、ゐまいと、それはどうでもかまはない。

外部的刺戟が夢に對して持つ意義を變化せしめる一系列の特色について、私はここに悅んで紙數を割き與へようと思ふ。睡眠中の比較的强い客觀的刺戟の箇々の場合にあたつて、いかなる擧動をするか、それを決定するものは、その人の性的、生理的、偶然的、その時の事情に存してをる要素要素の綜合的作用である、と私は想像する。習慣的の及び偶然的の眠りの深さの程度と刺戟の强さとが結び合はさる工合によつて、或る時には刺戟を抑壓して睡眠の邪魔をさせないこと

もあり得るであらうし、或る時にはどうしても目を覺まされることもあらうし、また或は、その刺戟を一つの夢の中へ織り込むことによつて始末する試みが助成されることもあらう。その多樣なる狀況に應じて、外部的客觀的刺戟は或る人にあつては、別の人にあつてよりも、夢の中に表現されることが、より頻繁であるか、又はより稀れであるか、といふことになるであらう。私は實によく眠る男であつて、いかなる動機によつても睡眠中に邪魔されまいと頑張るのであるが、さういふ私には、外部的刺戟の原因が夢の中へ混入して來ることは、甚だ稀れにしかない。それに反して、精神的動機は明らかに私をば甚だ容易に夢に陷らせるのである。實を言へば、私の記載してをる夢の中には、或る客觀的苦痛的刺戟源泉が識別される夢は、たつた一つしかない。そして正にこの夢によつて、外界の刺戟がいかなる夢の結果を持つたかを見てみるのは、甚だ得るところ多いかもしれない。

私は灰色の馬に乘つてをる。始めは丸でただ倚つかかつてをるかのやうに、臆病さうに、下手にしてをる。すると同僚の一人Ｐに出會つた。彼は粗い毛織の着物を着て、馬上に高く坐り、何か私に忠告をした(多分、私の坐り方が惡いといふのであつたらしい)。今度は私は非常に明敏な馬に益々きちんと坐つてをる。寛ろいで、全く樂な乘りごこちである。鞍の代りに、一種の敷物

があつて、それが馬の頸から腰のところまで完全に行き亙つてゐる。私はそのまま二つの荷馬車の間をやつと擦れ擦れに通つて行つた。街路を或る距離の間乘つた後で、私は引返へした。そして先づ、屋並の間にある、小さな扉の開けてある禮拜堂の前で降りようとした。併し實際は、それの近くにある別の禮拜堂の前で降りた。旅館は同じ街路にあつた。馬をそのまま放してやつてもよかつたのであるが、私は旅館までそれを曳いて行くことにした。旅館へ馬乘りなどになつて着くのは、恥しいだらうなあといつたやうな氣がした。旅館の前にはボーイが立つてゐて、私に一枚の紙片を見せた。それは私のだとわかつたので、ボーイは私を嘲笑した。紙片の上には二本下に棒が引いてから書いてあつた。「何も食べない」。それから第二の文は（不明瞭だが）「何も働かない」といふのらしかつた。すると鈍い考へが出た。「私は何も働かずにどこか外國の町に居るんだ。」

この夢では先づ誰も、これが或る苦痛的刺戟の影響、否寧ろその强制の下に、生じたものだとは氣づかないであらう。ところが前日私は癤瘡（ねぶと）に惱んでをつたのである。そしておしまひには、陰囊の根際のところに一つの癤瘡が林檎大にまで大きくなつて、歩く毎に我慢できないほどの苦痛を與へて、熱のあるやうな倦怠、食慾不振を起し、それにも拘らず、その日是非やらねばなら

なかつた重い仕事があつて、それが苦痛と結び、私の氣分を亂してをつた。私はこれに對して、自分の醫者としての任務を遂行するまでの氣力は全くなかつたが、その疾患の性質と場所からして、寧ろもつと別の或る處置が考へられた。自分の最も不得意とするやうな或る處置のことが考へられた。そしてそれは乘馬である。ところが夢が正にこの仕業へ私を置いてくれたのである。それこそはこの苦惱に對して表象し得る限りのうちの、最も精力的な否定であつたのだ。大體私は乘馬はできないし、いつもはそんな夢を見ることはない。たつた一度だけ馬へ乘つたことがあつたが、その時には鞍がなくて、それが私には氣持よくなかつた。然るにこの夢の中で私は丸で會陰のところに癤瘡など少しもないかのやうにして、馬に乘つてをる。否、それは、私は癤瘡に惱んでゐたくないが故なのである。夢の記事から考へると、私の鞍は罨法であつて、罨法をしたから、私は寢つくことができたのであつた。恐らく――その處置をしたお蔭で――寢ついてからも、最初の數時間は、苦惱を少しも感じなかつたらしい。その後で苦痛的な感じが現れ出し、そして私を喚び起さうとした時に、そこへ夢が生じて、なだめながらかう言つたのだ。「もつと眠つておいで。だつて目を覺ましたくはないんだらう！　癤瘡なんかちつともないんだぜ。現に馬に乘つてるぢやないか。そんなところに癤瘡があつたら、馬乘りなんかできるもんぢやないよ！」そして

夢はうまく成功した。苦痛は感じなくなり、私は眠り續けたのであつた。

この夢は、子を亡くした母親や、損失で財産を失つた商人の錯覺性想妄（グリージンゲルの一節及び「拒否性神經精神病」に關する私の第二論文を參照されたし。Ueber die Abwehr-Neuropsy chosen. 1896）と同じやうな振舞をしたものであるが、かの癤瘡を暗示で除去せしめようとする表象は、苦惱そのものとは兩立すべからざるものであるに拘らず、その表象を頑固に固持するだけでは滿足することなく、この否定された感じとこの感じをかく追ひ拂ふために用ひられた影像との細部をば材料に使つて、そしてこの場合の外に精神中に實際的に存在してをるものをまでも、夢自身の局面へ結び合はせて描出してをる。卽ち、私は灰色の馬に乘つてをるが、馬のこの色は、最近に私が田舍で出會つた同僚Pが着てをつた胡椒色と鹽色の着物に、きちんと合致するのである。私の思ふところでは、かの癤瘡の原因は藥味をきつく入れた食料にあるやうだつたのだが、併し病源學上は癤瘡の場合に於いて考へ得る原因は砂糖であるとする方がよい。友人Pは私に代つて或る婦人患者を診療するやうになつて以來は、私に向つて得意でをる（馬上高く坐つてをる）。私はその前にこの患者に對してえらい技術（藝）を施したのであつた（夢の中で私は最初の間馬に倚りかかつて、恰度曲藝乘りみたいにしてをる。ところが患者は、恰度日曜日の馬乘りの逸話にある馬の

やうに、私を自分の好きなところへ引つ張つて行つたものであつた。それで馬は一婦人患者を象徴する意味のものとなつた(夢の中の馬は非常に明敏である)。「全く樂な乘りごこちがした」云々は、Pが私の代りにならなかつた以前に、私が患者の家庭で占めてゐた地位に聯絡してをる。私の町の偉い醫者達の中に見出される少數の私の診療術の後援者の一人が、少し以前にその家庭に關係して私にかう言つたことがあつた。「あなたは大丈夫鞍に納まつてるんだと思つてましたがね。」また、このやうな苦痛を忍びながら、八時間乃至十時間も毎日精神治療を行ふのは、一つの技術(藝)でもあつたのだが、私ののやうな特別に面倒な治療法は、身體が完全に健康でなければ、長くは續けられるものでないことを、自分でよく知つてをる。それでこの夢には、さういふ場合に必ず生ずるに相違ない境地に對する、陰鬱な諷示が、澤山ある(神經衰弱患者が持つてゐて醫者に出してみせるやうな紙片)——何も働かないし、何も喰べない。更に判斷を續けてみると、乘馬といふ願望局面からして、非常に昔の小兒期の喧嘩の場面へまで道をつけることが、夢の仕事として成功してをるのである。その小兒期場面は、今は英吉利に住んでをる私よりか一つだけ年上の甥と私との間に、演ぜられたものに相違なかつた。その外なほ、この夢は私の伊太利旅行からもいくつかの要素を採用してをる。夢の中の街路はヴェロナとシエナの印象から組み立てら

れたものだ。まだもつと判斷を深めて行くならば、性的の夢思想にも達する。かの婦人患者は嘗つて伊太利に行つたことはなかつた。その婦人患者と關聯して、かの美しい國に對する夢中の諷示は、何を意味すべきであつたか、私は思ひ出すことができる（gen Italien—Genitalien 飜譯すると、伊太利へ向つて——陰部）。友人Pが代る以前にそこで私が醫者であつたあの家庭とか、私の癤瘡の出來てをる箇所とかへ、それと同時に結びつけてみないでも、これだけで性的の夢思想へ達するのである。

（夢によつて刺戟を除去するもう一つの實例。——もう一つの夢に於いて私は、上述のと同じやうな工合に、睡眠の妨害を排除することができた。今囘のは、睡眠が將に或る感官の刺戟のため妨害されんとしたものであつた。そしてただ不圖したことからして私は、その夢と偶然的な夢刺戟との間の聯絡を發見し、そして夢はさういふ性質のものである事を理解し得るに至つたのであつた。盛夏の頃ティロルの或る高地に居た時だ。或る朝私は目を覺ましたが、法王が亡くなられた夢を見た覺えがあつた。それは短いそして視覺的でない夢なので、私にはその判斷がつかなかつた。その夢の一つの手がかりとしてはただ、少し前に新聞に法王の輕微なご不快の事が報告されてあつた記憶のみであつた。併しその日の午前の間に私の妻が問うた。「今朝あなたあの恐ろし

い鐘の音をお聞きになつた?」自分がそれを聞えた覺えは少しもなかつた。けれどもそれで私の夢のことが理解された。それは、信心深いティロルの人達が私をも呼び起さうとした、その騒がしい音に對する、私の睡眠欲求の反動であつたのだ。ティロル人のご親切に向つては、その夢の內容をなしてをる推定でお答へをしたのみで、その鐘の音には何の關心も持たずに、私は眠りつづけたのである。)

前の數章に擧げられてをる夢の中に旣に、所謂神經刺戟の加工に對する實例として役立ち得るものが、數多見出されるであらう、どくどくと水を飲むあの夢はその一つである。あの夢では身體的刺戟は外見上唯一の夢源泉に見えるが、その感じから湧いて來る願望——喉の渴きが——唯一の夢動機である。その他の簡單な夢に於いても、若し身體的刺戟がそれ自身で一つの願望を形づくる力があるならば、やはりそれと似たやうなものである。夜中に冷温器を頰から投げ出す婦人患者の夢は、苦痛的刺戟に對して願望實現を以て反應する一つの普通でない種類を示してをる。この患者には、自分の苦痛を他人に押しつけて、自分を他人と同じものにすることが、一時の間成功してをるやうである。

三人の運命の女神についての私の夢は、明白な饑餓の夢であるけれども、併しこの夢はその榮

養の要求を母の懐を慕ふ小兒の情にまで溯らせることができ、そしてそんなに明らさまに現れてはならないもつと眞劍な慾情を蔽匿するものとして、この無邪氣な慾情を利用することを心得たものである。テゥーン伯爵の夢では、或る偶發的の身體的要求が、いかなる方法を通つて最も強い、併しまた最も強く抑壓されてをる、精神生活昂奮と結び付けられるものかを、吾々は觀察することができた。そしてガルニエが報告してをる場合のやうに、ナポレオンが爆發する地雷の物音を一つの戰の夢へ織りまぜて見た後に、それで目が覺めたのであつたとすれば、この夢などには特別に明瞭にかの目的が啓示されてをる。その目的あればこそ、夢の中で、この大ナポレオンと全く同じやうな振舞をしてをる。彼は初めての大破産問題のことで心が一杯で眠つた或る日の午後に、その論爭で知つてをるフシィアティン（譯者曰、Hussiatyn は獨逸語の husten 咳をすると音が似通つてをる）のゲ・ライヒ某の夢を見たが、そのフシィアティンがどんどんおつかぶせて迫つて來る。彼は目を覺まさざるを得なかつた。目を覺ますと、氣管支カタルに罹つてゐた彼の妻が烈しくフーステン（咳）してるのを聞いた。

ナポレオン第一世のこの夢と、寢坊な大學生の前に述べたことのある夢とを、比較してみよう。

ナポレオンは實によく熟睡する人であつたし、かの大學生に至つては病院へ行かねばなりませんと主婦に呼び起されながら、もう病院の寢臺に寢てをる夢を見て、それで、もうちやんと病院へ來てしまつてをるんなら、何も出かけるため起きるには當らぬことだといふ理由をつけて、また眠りつづけたのである。この大學生の夢は一つの明白なる便宜の夢であつて、夢みてゐる當人が自分の夢みる動機を大びらに白狀して居りはするが、併しかくすることを以て、彼はその夢全體の祕密の一つを暴露してをる。或る意味に於いては、一切の夢は——便宜の夢(Bequemlichkeitsträume)だ。それ等は目を覺ます代りに、眠りをつづけんとする目的に役立つのである。夢は眠りの番人であつて、その妨害者ではない。吾々は睡眠から喚び覺ます精神的動機に對しては、この見解をもつと別の箇所で辯明するであらう。併し客觀的な外界の刺戟の役目に對してこの見解を當てはめて、用ひることならば、既にここでその說明を立てることができる。精神にして若しも刺戟の强さと、それから精神が十分理解してをるその刺戟の意味とに反抗して、それを無視することができるならば、睡眠中の感應を生ずるその刺戟などについては、大體顧みることをしないか、又は夢を利用してその刺戟を否定するか、第三には又、どうしてもその刺戟を承認するよりほかない場合であつたらば、その刺戟の解釋を探し求める、そしてその解釋によると、實際に存

するやうな感應を以て、ただ或る願望せられ且つ睡眠と妥協し得るやうな或る境地の一箇の部分的要素なりとするかである。實際的に存する感應が夢の中へ織り込まれるのは、その感應からその現實性を奪ひとるためである。ナポレオンは眠りつづけてもいい。彼を妨害せんとするのは、ただアルコル戰場の雷鳴の如き大砲の音に對する夢記憶のみなのであるから。（この夢の內容は、私が知つてゐる二つの話では兩方一致してをらない。）

それ故眠らんとする願望は、いかなる場合でも、夢形成の動機の一つに數へられねばならない。そして夢が出來るのは、その願望の實現である。この願望は意識的自我が志したところであり、かの夢檢閲及び後章に述べる「附隨的加工」作用と相竝んで、夢を作るのに貢獻するものである。普遍的で正規的に存在してをりそして變化することのないこの睡眠願望が、時に應じてこれか又はあれか、とにかく夢內容によつて實現せられる或る他の種類の願望に對して、いかなる關係に立つものか、それはまたもつと別の解說の題材であらう。吾々はここに、睡眠願望を持ち出すことによつて、一つの重要點を發見したものである。この重要點はシトリュム・ペル・ヴント說に存する缺け目を充塡することもでき、外部的刺戟の判斷に存する偏頗と氣紛れを明らかにすることもできる。睡眠中の精神には正しい判斷をする力が十分にあり、そしてその正しい判斷だつたらば

能動的な關心を喚び出して、睡眠を終りにせよといふ要求を出すことであらう。であるから、大體存在し得る判斷のうちでも、許されるものは、睡眠願望の絕對的權威で行はれる檢閲と聯合せられ得るものに、限られるであらう。譬へて言へば、それは夜鶯であつて、雲雀ではない。と言ふのは、雲雀だつたらば、愛しい夜は終りとなつてしまふだらうからだ。ところでその刺戟の許される判斷のうちでも、精神の中に待ち伏せしてをる願望昻奮との結合を摑みうるやうな判斷が、更に選び出される。さういふわけで一切は明白に決定されてをり、いかなるものも我儘勝手には任かされてゐない。判斷の仕損じは思ひ違ひではなくて、寧ろ——かう言つてよければ——言ひ拔けである。夢檢閲のために轉移による代用があるのと同じく、この場合にもやはり復た、通常なる精神經過を曲げる行爲が認められるのである。

外界の神經刺戟と內部的肉體刺戟とが十分の强さを持つてゐて、むりやりにも精神の注意を惹く時には、その刺戟は——結果として目を覺ますには至らず、先づ夢を生ずる場合であるならば——夢形成にとつて、一つの確固たる點をなすものとなる。それは夢材料中の核心であつて、それに適應した一つの願望實現が探し求められる過程は、前述した二つの精神的な夢刺戟の間を表象が媒介するのと似たものである。この意味に於いてなら、身體的要素が夢內容を左右するとい

ふ考へは、多くの夢にとつて正しい。かかる極端な場合にあつては、夢形成のために、今現には存在してゐない或る願望が喚び覺まされることさへある。併し夢は、或る境地に於ける或る願望を、實現されてしまつたものとしてしか、現すことはできないものだ。謂はば夢は、今現に存在する感應のために、いかなる願望が實現されたものとして現され得るか、それを探るべき任務を負はされてゐるやうなものだ。この今現に在る材料が、苦痛なる又は不快なる性質のものであるとしても、そのために、その材料が夢形成の役には立たぬといふことはない。精神生活は、その實現が不快を惹起するやうな願望をでも處理する。これは矛盾に思はれるが、併し二樣の精神取調所が存在することを考合し、且つこの二つの間に檢閱が嚴存することによつて、說明のつくことである。

吾々が聞いてをるところでは、精神生活の中には排斥された願望がある。これは第一系統に屬してをり、別の第二系統はこれの實現に對して反抗するのである。かかる願望がある、のであつて、かかる願望が嘗つてあつたのだが、それが後に撲滅されてしまつた、といふやうに、謂はば歷史的に考へてるのではない。却つて精神神經病學に於いて必要とされてをるこの排斥の學說は、かかる排斥された願望はなほ今も實在してをる、併しその上にそれを押さへてをる或る制止も亦、

同時に存在してゐるのである、と主張してゐる。かかる衝動の「抑壓」云々といふ語を使つてゐるが、その文句はうまく言ひ當てたものである。かやうな抑壓された願望を現實化せしめる精神の氣構へは、消失されずに居つて、いつでも働かうと思へば、役に立つ力がある。然るにかかる抑壓された願望がなし遂げられることがあると、その時には第二の(意識力ある)系統の制止がそのために打ち敗られ、そしてそれが不快となつて現れる。さてこの吟味を打ち切ることとして要約してみると、若し睡眠中に身體的源泉から來た不快的性質の感應が存在する時には、夢の働きはこの狀勢を利用して、或る以前に抑壓されてゐた願望の實現を——多かれ少なかれ檢閲の拘束を蒙りつつ——現すのである。

この事情が恐怖夢の一系列の存在を可能ならしめる。願望說には都合の惡い他の一系列の夢形成は、反之、これとは異つた機制を認識せしめてくれる。卽ち夢の中の恐怖は、精神神經病的の恐怖であり、精神的性慾昂奮から發してゐることがある。その際にこの恐怖は排斥されたリビドと相通ずるものである。かうなると、この恐怖竝びにこの恐怖夢全體は或る神經病的徵候を有するものとなり、吾々の立場は夢の願望實現的傾向が挫折するあたりの境目へ來てしまつたのだ。併し他の恐怖夢では、恐怖の感じは身體的に與へられてゐる(例へば肺患者及び心臟病患者が偶

然的な呼吸障害に會つた場合のやうに)。そしてこの場合では、恐怖の感じは、强く抑壓されてゐた願望を夢の形式で實現してやるのを助成するに利用されるのであつて、この願望の夢を見れば精神的動機からして、結果としては恐怖からの解放を得ることになるかもしれないのである。以上の外見上は區別あるやうに見える二つの場合を合一するのは、むづかしいことでない。二つの精神的形成物がある。その一つは感情的傾向で、他は表象的內容、この二つは密接に聯絡し合つてをる。それで夢の中でもやはり、今現に存在してをるそのうちの一方は、他方を惹き起してやる。身體的に與へられてをる恐怖が、抑壓されてゐた表象內容を引き起すこともあるし、排斥の手を脱れたそして、性的の昂奮と相添うて現れる表象內容が、恐怖解放を惹き起してやることもある。前者の場合については、或る身體的に與へられた情念が精神的に判斷されるのである、と言つてよろしい。又、後者の場合では、一切が精神的に與へられてをるが、抑壓されてゐた內容は容易に或るその恐怖に適當する身體的判斷によつて代理されるのである。この經過の中に了解しにくい難事が生ずるであらうが、それは夢そのものとは殆ど關係するところなきものである。それ等の難事は、吾々がここの吟味を以て恐怖の經路と排斥の諸問題に觸れるために生ずるのである。

身體の全身的氣持ちは、疑もなく內部肉體に關係する支配的な夢刺戟の一つである。それは、その氣持ちが夢の內容そのものを與へることができるからではなく、夢內容の表現に役立つべき筈の材料のうちから或る選擇を行ふやうに、夢思想を强制するからである。それをやるのに、全身的氣持ちは、かかる材料の一部分を自己の性質に適したものとして推薦するが、他の部分は遠ざけておく。その上、前日以來のかういふ全體的氣持ちは、勿論その夢にとつて有意義な精神內の殘滓と結びついてをる。（そしてこの氣持ちそのものは、夢の中にも維持されて殘ることもあるし、又は征服されてをることもある。その結果、この氣持ちはたとひ不快に充ちたものであつても、一變してその反對となることもある。）

睡眠中の身體的刺戟源泉――從つて睡眠の感じは――若し普通ならざる强度のものでなければ、私の評價するところでは、恰度かの最近的として殘留はしてをるが併し無關心的である、日中の印象と似た役目を夢形成に對して演ずるものである。私の言ふ意味はかうだ、その刺戟源泉は精神的夢源泉の表象內容と合一するのに適當してをれば、夢形成のために呼び寄せられるが、さうでなかつたらば、呼び寄せられることはない。身體の刺戟は、恰度廉價な何時でも備へてある材料のやうに取扱はれ、高價な材料だつたらばそれの使用に何かの規定があるのとは異つて、

いつなりとも必要がある毎に使用される。その工合は、美術の愛玩者が、工藝家のところへ珍奇な石、縞瑪瑙でも持つて來て、それで何か細工物を作らせる、といふやうな場合と、まづ似てをる。大理石とか砂岩とかのやうなむらのない豐富な材料だつたら、作家はただ己れの心に出來る念ひのままに、仕事もできるのであるが、この珍奇な石の場合では、その石の大きさ、その色、その縞模樣が相共に力を合せて、この石の中にはいかなる頭又はいかなる情景を描出したらいいかを決定するのである。吾々の肉體に關係する刺戟のうちでも、普通程度以上には立ち昇らなかつたやうな刺戟によつて與へられる夢内容であると、凡ゆる夢には現れず、又毎夜毎夜の夢にも現れない、といふ事實は、かく考へてこそ、始めて理解のいくものであると、私には思はれる。

（ランクがいくつかの研究に於いて示してゐるところでは、器官刺戟によつて惹起される或る種の覺醒を起す夢、尿意刺戟夢や遺精夢は、眠睡欲求と器官的慾望の要求との間に存する爭鬪並び　後者の夢内容に與へる影響を證據立てるのに、特別適當してゐる。）

恐らく一實例が私の意見を一番よく解説してくれるであらう。この實例の夢をまた前のやうに吾々は判斷してみよう。或る日私は屢々夢となりそして恐怖にごく近い感じ、即ち阻止されてをる、どうしてもその場から動けない、片づけられない、といつたあの感じが、一體いかなる意味

のものであらうかを理解しようと骨を折つたことがあつた。その夜に私は次のやうな夢を見た。私はだらしのない服裝で第一階の住居から出て、階段を登つて階上へあがつて行つた。その際私は一度に三段づつ飛んでは、こんなに輕敏に階段を昇ることのできるのに嬉しがつた。突然一人の女中がその階段を降りてくる、卽ち私の方へやつてくるのが見えた。私は恥かしくなつた。急がうとした。するとかの阻止の狀態が出たのだ。私は階段のとこに釘づけになつて、その場から動けないのである。

分析。この夢の局面は日常の現實から拔き取られてをる。私はヰーン市で住居を二つ持つて居るが、それはただ外部の階段で聯絡されて居る。中二階に私の診療所と書齋があり、その一階上に住宅がある。晩くなつてから下の住居で私の仕事をやり終つてしまふと、私は階段を昇つて寢室へ行く。この夢の前晩に、私はこの短い道を實際に少し取り亂した服裝で通つた。といふのはカラーとネクタイとカフスを外づして居つたのだ。夢ではそれが强調されて、着物無しの狀態になつてるが、併し夢ではいつもさうであるやうに、その着物無しの程度がどれ位なのか、はつきりとはしてゐない。段々を飛び越すのは私が階段を昇る時いつもの風だが、併し夢の中でちやんと識別された一箇の願望實現でもあつたのである。なぜならば、この仕業の輕快さを以て、私は

私の心臓の働きの狀態について、自ら安心をしてゐたのであつたからだ。更に、階段を昇るこのやり方は、夢の後半に於ける阻止に對する、一つの效果的な對照でもある。この輕快なやり方が私に——それは證明の必要もないことだが——夢では身體の行動を實に完全に行はれるものと表象するのに、何の面倒もない事を示してくれる。讀者よ、夢の中の飛行を思ひ合はして見給へ！
ところが私が昇つて行く階段は、私の家のそれではないのである。私は初めのうちはそれの見わけがつかなかつた。私の方へ降りてくる人物が始めて、私にそこに意味された場所の性質を明らかにしてくれた。この人物は、私が注射をしてやるために、毎日二度づつ訪ねて行く老婦人の家の女中だつたのである。その階段も亦、私が一日に二度づつその家で昇らねばならぬあの階段に全く似てゐた。
さて、この階段とこの女中とがどうして私の夢へ入つたのであるか？　十分に着物をつけてゐないから恥ぢる、これは疑もなく性的特質を有してをる。私の夢に出たその女中は私よりも年上で、無愛想で、決して人を惹くところなどはない。で、この疑問に對して私に思ひ浮ぶのは正に次の事である。私がこの家に午前の訪問をする時に私はいつも階段の上で咳拂ひをしたくなる。その咳拂ひの後の産物は階段の上へ落ちることになる。といふのはこの家の上下に痰壺は一つも

見つからんのである。それで私の守る立場は、この階段を清潔に保つのは私の費用で出來るわけのものでなくて、一つの痰壺を備へつければなし得らるべき筈だ、といふのである。この家の取締りの女は、夢の中の女中のやうに、やや年寄りじみた無愛想な人物だが、綺麗好きであることは、私の進んで承認するところだ。けれども彼女はこの階段の一件については私と別の立場を取つてをる。彼女は私をこつそり伺つてゐて、またしても私が上述のやうな自由を敢てするかどうかを見張つてをり、そしてその通りだと確めると、彼女は聞えよがしにぶつぶつつぶやくのが私にはわかる。數日間は、いつも出會つた時に示す敬意を拂はなかつたこともある。さて、かの夢の前日に、この取締りの女の黨派が、かの病家の女中によつて一層の軍勢を増すことを得たのである。私はいつものやうに、急いで患者の見舞を片づけた。その時この女中が私は次の室へ呼んで、自分でかう言つてくれたものである。「先生は今日部屋へおはひりになる前、お靴を綺麗にしてくだされたんでせうにねえ。赤い絨毯がまたしてもあなたのお靴ですつかり汚なくなつてますよ。」これこそは、階段と女中とを私の夢の中に現れしめるに至つた原因をなす要求であつた。

私が階段を飛んで昇るのと、階段の上で唾を吐くのとの間には或る密接な聯關が存してをる。そして咽喉カタルと心臟故障とは兩つとも喫烟の罪惡に對する刑罰を示すものださうである。そしてそ

の喫烟の故に、私は私の住家の取締りの女にも、非常に綺麗好きだといふ評判は得て居らんのであつて、その點はあの患者の家とこの私の家でと同じことである。夢はこの二つの家を溶かし合せて一つの形に作つてをる。

この夢のこれ以上の判斷は、不完全な服裝の類型的夢が何處から生ずるかを報告するまで、延期せねばならない。ここに報導した夢の當座的の結果としては、ただ次の事を申し述べて置く。運動が阻止されるといふ夢の感じは、或る種の聯關がその感じを必要とする場合には、つねに喚び起されるものである、と。この夢內容の原因には、睡眠中に於ける私の動作能力の何か特別な狀態がなつてをることはあり得ない。何となれば、私はその一瞬間前には、恰かもこの認識を認めるもののやうに、足輕々と段々を急ぎ行く自分を見てをるのであるから。

第四節　類型的な夢

一般に言へば、他人の夢を判斷することは、若しその人が夢內容の背後にある無意識的の思想を傳へてくれない場合には、できないことである。この事情のため吾々の夢判斷法の實際的應用價値は、ひどく不利益な影響をうける。(夢を見た當人の聯想材料を自由に利用できなければ、吾

吾の夢判斷法は用ひ得られなくなる、といふ文に對しては併し、次の事を補つてをく必要がある。吾々の判斷の仕事は、その夢を見る當人が夢內容の中に象徵的要素を使用してをる場合であるならば、その人の聯想內容には左右されないでいいのである。この時には吾々は、嚴格に言へば、或る第二の、補助的の夢判斷法を利用する。）個人は普通に自分の夢の世界を個性的な特殊事情を以て作り上げて居り、そのためにその人の夢の世界は、他人の理解にとつては、手のとどかぬものとなつてをる。ところがさういふ個人的自由とは正反對をなす多數の夢も亦ある。この種の夢は殆ど誰でも同じ工合で見てゐるものであつて、それについては、吾々は誰の場合でもその夢は同一の意味を持つてゐるのだと認定するのが普通である。この類型的な夢は察するところ凡ゆる人間に於いて同じ源泉から發してをる。從つて夢の源泉に關して吾々に解決を與へるのに特別適當してをるやうに思はれる點からして、特に興味を惹く。

それで吾々は特別な期待を抱いて、この類型的な夢に吾々の夢判斷の技術を試みてみることになるが、さていよいよこの材料に手をかけてみると、甚だ遺憾ながら、吾々の技術がよくはその實力を發揮するところなきを告白することになるであらう。類型的の夢の判斷の際には、大抵その夢を見た當人の思ひ付が浮んで來ない。外の場合にはこの思ひ付が夢の理解への導きをなすの

であるが、それがこの場合には出て來ないか、又は出て來てもそれは不明瞭で且つ不十分であつて、その結果吾々はこれを補助としたのでは、吾々の任務を果すことはできないのである。

これは何が原因であるか、そして吾々は吾々の技術の不足をいかにして補充するか、その事はこの著述の後章に於いて擧げ示されるであらう。この時讀者は、何故私がここには唯だ二三の類型夢のみを取扱つて、其他のものの探求をば後章に述べる機會まで延期するのかを、理解してくれることができるであらう。

（I）　裸體に狼狽する夢。

他人の居る所で裸かで居る、又は拙い服裝をして居るといふ夢であつても、それをちつとも恥かしくは思はない云々の內容が加はつてをる場合もある。併し吾々の興味が裸體の夢に向けられるのは、ただ次の場合のみである。夢の中で羞恥と狼狽を感じ、逃げるか匿れるかしようとする、そしてその際にその場から動くことができなくて、その上その不快な境地をいかんとも變更する力がないのを感じる、といふ特色的な阻止に抑へられる場合の夢である。ただかかる結合あつてこそ、この夢は類型的である。夢內容の中心がいろいろ他の聯絡の中へ引き込められてゐても構はないし、又は個性的な附加をなされてをつてもいい。主として問題とすべきは、自分の裸體を

大抵は場所を移すことによつて匿したく思ひつつも、それができないその羞恥の情の、不快な感覺である。讀者の大多數は既に夢の中でさういふ境地に立たれた經驗を持つてをられることと思ふ。

裸體の樣子と程度は普通に殆ど明白でない。例へば私はシャツを着てましたなどと話すのを聞くけれども、これが明瞭な影像であることは稀れだ。着物を着てないといふのは大抵は非常に不確定で、その話の時には「襦袢を着てゐたか、それともペチコートを着けてゐたかでした」といふやうに、かうだつたかそれともああだつたかといふ言葉で、說明される。大概は、服裝の粗漏は、そんなに恥づかしがるのが當然と思はれるほどに、ひどくはないのである。軍職にある人にとつては、裸體の代りに屢々規定に反した服裝が出て來る。「私は劍を吊らずに往來に出てると、士官連の近づいて來るのが見えた」とか、「私はネクタイをつけないでゐた」とか、「私は碁盤縞の平服ズボンをはいてゐた」等々。

恥づかしい思ひをする相手は殆ど常に見知らぬ人で、その顏のことなどははつきりしないままでをる。そんな狼狽の原因となつてをる服裝のために非難をされるとか、又は單に人に氣づかれるとかのことさへ、類型的の夢では、決して起らない。寧ろ反對に、相手の人々は無關心的な、

又は私が或る特別明瞭な夢の中で知覺することができたところでは、嚴そかに硬直した表情をしてをるのである。これは考へさせることだ。

夢見てる當人の羞恥の狼狽と相手の人々の無關心とを一緒に考へてみたら、一つの矛盾が生ずる。この矛盾は夢の中に屢々現れるのだ。だつて、その夢を見てる當人の心持ちにとつては、見知らない人達が驚いて自分を見つめて嘲笑ふとか、又は自分の無禮を怒るかするのこそ、適はしいであらうからである。ところで私の考へでは、この風俗壞亂といふ點は願望實現によつて取り除かれてをる。のに反して羞恥の狼狽は、何等かの力によつて、支へられて殘つてをる。かくして兩者がこのやうに互ひにぴたりとはしなくなる。夢は願望實現のため形を局部的に歪められるから、正當な理解を受けてをらないといふ事について、ここに一つの面白い證據がある。卽ちこれが或るお伽噺の基礎となつてをるので、吾々は誰でもそれを纏めて作つたアンデルゼンの童話「皇帝の新しい着物」を知つてるであらう。このお伽噺はごく最近にはルドキヒ・フルダが取りあげて、「お護符」といふ作品に詩化してをる。アンデルゼンの童話では、二人の詐欺師の話がある。この二人は皇帝のために高價な衣服を織つてあげる。その衣服は併し善良で忠義な人にしか見えない筈のものであつた。皇帝はこの眼に見えぬ衣服を纏うて出て行く。するとこの衣服の

試金石のやうな力を聞いて驚いた人々は、恰かも皇帝の裸體には氣がつかないかのやうな風をしてをるのである。

ところが吾々の夢の局面は、正にそれだ。理解できない夢內容が一つの刺戟となつて或る表現法を發明した、そしてその表現法を用ひれば記憶に存してをる局面が意味深いものになつてくるのだと認定するのには、大して大膽を必要とすることでもない。この場合にその記憶中の局面は元來の意味を奪はれてしまつてゐて、無關係的な目的のために役立つやうにされてをる。然るに第二の精神的系統に屬する意識的思考の働きのために、夢內容が、かやうに誤解される例は、屢屢現る、そしてそれは究極的な夢構成に對する、一因子となつてゐるものだと認めるべきである事、更に、强迫表象や恐怖症(フオビー)の形成にあたつては、これと類似の誤解が――同じやうに同一の精神的個性の以內に於いて――或る主要な役目を演じてをる事を、吾々は後に知るであらう。かの不體裁な服裝の夢に對しては、表面的意味の變裝の動機がいかなるところから取り出されるのか指示することができる。お伽噺の詐欺師は卽ち夢そのもので、皇帝は卽ち夢みてる本人である。そしてこの夢の道德ぶつた傾向は、却つてその潛在的夢內容に於いては許されざるそして排斥の犧牲となつた願望が中心となつてゐることを、ほんやりとながら自ら承知してるのを、暴露するの

である。即ち、神經病患者について分析をやつてみると、この種の夢が現してみせる聯絡から考へて、この夢にも、極めて初期の小兒時代に屬する記憶が根柢となつてをることについては、少しの疑もなくなる。吾々が不完全な服裝をして家族の者や、よその人である保姆や女中や訪問客などの眼に觸れるのは、ただ小兒時代にのみあることだ。そして吾々はその頃にはその裸體を恥づかしくは思はなかつた。（アンデルゼンの童話にも小兒が出て來る。或る小さい子供が突然叫ぶところがあるのだから。「だけど、あの人はなんにも着てないんだよ。」）やや大きくなつた小兒の多くを觀察すると、彼等には着物を脱いてるのが恥づかしいといふよりは、却つて狂喜せしめることである。彼等は笑つて、飛び廻つて、自分で腹を叩いたりする。お母さんか、誰かそこに居合はせた人が彼等を叱つて言ふ。まあ馬鹿だこと、そんなことは恥ですよ。そんなことしてはいけません、と。小兒は屢々露出慾を現す。私達の地方のどつかの村を通ると、殆ど定まつて通行人の前で、恐らくは敬意を表するのであらう、下着を高くまくしあげる二歲乃至三歲の小兒に出會ふ。私の男子患者の一人は、彼が八歲の時の或る情景を意識的記憶の中に保存してをるが、それは床に就く前に着物を脱いだ後、シャツ一枚になつて、隣室の小さい妹のところへ踊りながら出かけようとするが、女中か誰かに遮ぎられる場面であつた。神經病患者の少年期には異性の小兒の前で露出す

ることは、或る大きな役を演じてをる。偏執狂(パラノイア)にあつては、着衣と脱衣の際に人に見られてをると思ふかの妄想は、この少兒期の體驗に溯るべきである。變質者のうちには或る一群がある。彼等に於いては、幼時的衝動が徴候にまでも昂まつてしまつてをる。彼等は露出派の一群とでも謂ふべきである。

羞恥といふものを知らぬ小兒期は、後で回顧してみると、一種のパラダイスのやうに思はれる。そしてこのパラダイスなるものが元來個人個人の小兒時代についての集合的空想に外ならない。であるから、またパラダイスでは、人間は裸體でゐてお互ひに恥づかしくは思はなかつたが、遂に時が來て、羞恥と恐怖とが目覺め、放逐が行はれ、性的生活と文化の營みが始まる。ところがこの失はれたパラダイスへ、夢は吾々を毎夜毎夜伴れもどすことができる。初期小兒時代（ほぼ滿三歳の終り頃までの有史以前的時期）に屬する印象が、恐らくはその內容には格別の重きを置かずに、ただそれ自身として、再現を要求する、卽ちその印象の反復は一箇の願望實現である、といふ推測を吾々は既に表白してをいた。裸體夢は從つて露出夢(エクスヒビチオンストロイメ)(Exhibitionsträume)である。（フェレンツィは婦人について多數の興味ある裸體夢を報告してをる。それ等は容易に幼兒の露出快感に溯らされるものではあるが、併し多くの點に於いて、前に取扱つた「類型的」裸體夢とはかけ離れてをる。）

露出夢の中心を形づくるのは、自分の姿と不十分な服裝とである。併しその姿は、小兒の時のではなくて、現在見らるる通りのままであり、服裝はその以後の數多の略服についての記憶が重なり合つてるためか、又は檢閱の氣に適るためか、不明瞭なものにされてをる。この二つに、恥づかしさを感ずる相手の人が加はる。幼兒時代の露出の時に實際見物人であつた者が、夢の中に再び出て來る實例を、私は一つも知つてをらない。夢は殆ど決して、さやうに簡單な記憶ではないのだ。小兒時代の吾々の性的興味の對象であつたやうな人物が、夢の凡ゆる再現に、ヒステリー症や強迫神經病者の凡ゆる再現に於いて、除外されてをるのは著しいことだ。偏執狂(パラノイア)だけが漸く、見物人を入れ、そしてその見物人は見えない者になつてをるに拘らず、狂信的な確信を以てその人物が目前に居ることを推定してる。夢はかかる人物の代人を出してみせる。演ぜられた芝居に對しては注意を拂はない「數多の見知らぬ人達」がそれだ。この人物こそは、嘗つて露出をやつてみせた箇々のよく知り合つてるた人物に對する願望對照である。ところがこの「數多の見知らぬ人達」なるものは、夢の中に於いて屢々任意な他の聯絡を以て現れることもある。併しいつでもそれは願望對照として「祕密」を意味してをる。(明白な理由からして、夢の中では「全家族」の居合はせることも、同じ意味を有するものである。)パラノイアの場合に起る如き古い狀況の復活も、

いかにこの對照作用に順應するものであるかは、人の認めるところであらう。一人で居るのでない。確かに人から見られてをる、けれどもその見てをる人は、「數多の見知らない、妙に不確定のままにされてをる人達」である。

その外に露出夢では排斥作用も働いてをる。夢の不快な感覺は實に、その露出場面の內容が、排斥されるにも拘らず、表象に浮んで來る事に對する精神の第二系統が與へる反感であるのだ。この不快感覺を生ぜずに濟ましたければ、その場面が復活されてはならなかつたものだ。

阻止された狀態の感覺についてはなほ後にもう一度論述するであらう。この感覺は意志の爭鬪、否定を現すのに、夢の中で素的な働きをしてをる。露出は、無意識的な意圖からすると繼續されたいのであるが、檢閱の要求からすると中斷されねばならない。

童話及び其他の創作材料に對する類型夢の關係は確かに偶然のものでもなく、又散在的のものでもない。時として詩人の銳い洞察がこの變態の過程を――普通には詩人こそこの過程の道具なのであるが――分析的に認識して、そして逆の方向へこの過程を辿つてみせることがある、卽ち創作を夢に溯らしてみせてるのである。ゴットフリート・ケルレルの「綠衣のハインリヒ」の中に次のやうな一節がある。それを或る友人が私に注意してくれた。「レーさん、ホーマーの詩に、

オディッソイスが裸かで泥まみれになつて、ナウジカアと彼女の遊び朋輩の前へ現れるところがありますね。このオディッソイスの境遇に含まれてをる卓越した奇拔な眞理を、いつかご自分の經驗であなたもしみじみと感じなさるやうなことがあつたら、などと、私は願つてをるのぢやありません！　ですが、これがどうしたことなんだか、知りたいですか？　この實例をひとつ、みつちりと考へてみませうね。假りにあなたが故鄕を離れ、あなたにとつて愛著のある一切から別れて外國を流浪してるとしますよ。あなたはいろんなことを見聞してしまつた、苦鬪もあり、心配もある、そしてひどく零落して一人ぼつちになつてをるとすると、その時あなたはきつと夜に夢を見るでせう。夢の中であなたは故鄕へ近づいてくる、故鄕が實に美しい色に光り輝いてをるのが見える、優しい綺麗な可愛い姿があなたの方へやつて來る。するとその時にです、あなたは突然ご自分がぼろぼろな風をして、裸かで、塵埃にまみれて、歩き廻つてるのを見つけるでせう。名狀しがたい恥づかしさと懸念が湧いて來ます。自分の身を包みかくしたい、どつかに匿れたいと焦る、そして目が覺めると、汗をびつしよりとかいてゐる。これはですね、人間が存在する限りは存在する夢です、苦惱に充ちた散々流浪した男の見る夢です。ですから、ホーマーが人情の最も深い、そして永遠な本性からして、あのオディッソイスの境遇を作り出してるのですね。」

普通に詩人が讀者に期待するのは、この人情の最も深いそして永遠な本性を呼び覺ますことである。そしてこの本性こそは、精神生活内の昂奮のうちでも、後から考へれば意識以前の時代ともなつてしまつてる小兒時代に根を下ろしてをる感動であるのだ。故郷なき男の意識力あり且つ非難點なき願望の背後から、夢の中で、小兒期の抑壓されそして許し難いものとなつてしまつた願望が、顏を出して來る。この理由からして、かのナウジカアの傳統が具體化してをる夢は、ちやんと一つの恐怖夢に變態するのである。

第四一〇頁に述べた私の夢は、階段を急いで昇るのから、すぐその後に階段に釘づけになる狀態へ變化したのであつたが、これも同じやうに一箇の露出夢である。露出夢たる本質的要素を明示してをるからだ。だからこの夢は小兒期體驗に溯らねばならなかつたものだし、かの女中の私に對する態度、私が階段を汚なくしたといふ彼女の非難は、彼女がこの夢で占めてをる地位を作るのに一體どれだけの助けになつてをるのか、それについて、私の小兒期體驗の智識が解說を與へてくれねばならなかつたのである。今やその必要な說明を私は實際に提供することができる。精神分析法によつて吾々が學ぶところでは、時間上の接近を利用して內容上の聯絡を判斷することができる。外見上は聯絡なきかの如くに見えて時間上は直接に相次いで起る二つの思想は、判

讀し得られる或る統一に屬してをるのであつて、それは恰度、私が相並べて書いて見る、一つのイと一つのロとが、一つの綴りになると、イロと發音されねばならない事と同じである。夢の繼起的關係もそれと似てをる。前述せる階段の夢は或る系列のいくつかの夢から摑み出されてをるもので、他の部分は判斷によつて私に知られてをる。階段の夢はその系列の中へ包含されてをるから、その系列の夢と同一の聯絡へ屬さざるを得ない。ところで、この系列の他の夢の根柢となつてるものは、或る乳母についての記憶である。この乳母は私が乳吞兒であつた或る時期から二歲半の年頃まで私の世話をしてくれた者で、私の意識の中には彼女についてのぼんやりした記憶が、今も殘つてをる。先頃私の母から聞き出した話によると、この乳母は年寄りで醜かつたが、大變悧巧で働きがあつた。私の夢から推して考へれば、彼女は私に、必ずしも愛情に充ちた取扱ひばかりはしてくれなかつた。清潔に對する躾けに、十分な聞き分けを現さなかつたやうな時には、ひどい叱言も私に言つたのである。してみると、夢の中の女中がこの清潔の躾けの仕事を續けようと骨折つてるのは、即ち夢の中で私の有史以前(意識以前)の老婆の化身として取扱はれる要求をして居るわけなのである。あの時の小兒が、この乳母の虐待にも拘らず、彼女に愛情を抱いてゐたことは、十分認定される。（この夢の補充的判斷としては次の事もある。階段の上で唾を吐く

au der Treppe spucken は粗つぽく飜譯をすると佛蘭西語の esprit d'escalier 階段の機智になる。獨逸語の spucken は spuken 幽靈が出る、幽靈 Geist—esprit ——は機轉の働きに變るからである。階段の機智——出し後れの洒落の義——は當意卽妙に缺けるぐらゐを意味する。自分にこれが缺けてをるのを私は非難せればならない。併し果して私の乳母がその「當意卽妙」を缺いてゐたかどうかは、明かでない。)

（II） 近親者の死の夢。

類型的と名づけてよい夢のもう一つの群は、大事な近親の者、兩親とか又は兄弟姉妹、子供等が死んだといふ内容の夢である。この種の夢は先づ二つに分類されねばならない。その一つに於いては、夢の間に悲哀の情によつて動かされずに居り、覺めた後にこの無情を自分で不思議に思ふ。他の一つに於いては、その死の事件について深い苦痛を感じ、眠りながらも熱い涙を流してまでその苦痛を現す。

第一類の夢を吾々は捨ててもよい。それは類型的として通用するだけの價あるものではない。それを分析してみると、それはその内容とは別の何事かを意味してをり、何等か別の願望を蔽匿するのを目的としたものであることが、知られるのである。例へば、姉のただ一人の息子が棺の上に寢かされてをるのを目前に見た婦人の夢は、それであつた（前出、第二六二頁參照）。あの夢

は、この婦人が小さい自分の甥の死を希ふことを意味するのでなくて、或る愛してをる人物と久しく會へずに居つた後で、再會したい願望を藏し匿してをるにすぎない。そして以前に一度、別の甥が死んだ時、その骸の傍でやはり久しぶりに、その人物と再會したことがあつたのである事を、吾々は知り得たのであつた。この願望が夢の本來の内容であつて、それは悲哀の情の動機とはならない。であるから、夢の中でも、何等の悲哀が感じられない。この夢の場合に吾々に認められるのは、夢の中に含まれてをる感覺は顯在内容に屬さず、潜在内容に屬してをる事、夢の情緒内容は表象内容に蒙らされてをる歪みからは影響されずに居つた事である。

大事な近親の者の死が表象せられそしてその際に苦痛的情緒が感ぜられる夢は、上述のとは異つてをる。その夢の内容が證明するところであるが、この種の夢は、當面のその人物が死んでくれたらば、といふ願望を意味するものであるのだ。そしてかく言ふならば、凡ゆる讀者、これと類似の夢を見た凡ゆる人々の心持ちが、かういふ私の解釋に反抗することであらうと期待されるから、私は基礎を極めて廣くして、證據を立てることに努めねばならない。

吾々は既に或る一つの夢を明らかに究めて、それによつて、夢の中に實現されたものとして現されるる願望は、必ずしも現在に存する願望ではないといふ事實を、學び知ることができた。それ

はとくの昔に過ぎた、片づけられてしまつた、下積みになつてをる、そして排棄されてをる願望であることもあつて、ただそれが夢の中に再び浮び上がつて來るためにのみ、なほ續いて存在するものだ、と見做してやらねばならないやうなのである。それは普通の概念でいふ死者の如く死んでをるものではない。血を飮むとすぐ或る程度の活氣を得て目覺めてくる、オディッソイス物語の中の亡靈の如きものである。箱の中に入つてる死んだ子供の夢(前出、第二六五頁參照)では、十五年前には實際に存在してをり、そしてその時以來明らさまに承認されてをる或願望が中心をなしてゐた。この願望にさへも、極めて初期の小兒時代に屬する或る記憶が根柢となつてをる事實を、ここに附記するならば、これは夢の理論にとつて恐らく無關心の事ではあるまい。あの夢を見た婦人が小さな子供であつた頃——それがいつ頃であつたかは確定されない——聞いた話では、彼女の母親が彼女を胎内に宿してゐた時にひどく氣嫌を損じ、胎兒に對して切に死を願つたことがあつたのである。彼女自身が成人してそして身重になると、彼女は母のこの先例に倣つたにすぎなかつた。

若し誰かが苦痛の表現をしながら自分の父又は母、兄弟又は姉妹が死んだ夢を見るとしても、私はその夢を以て彼はいま彼等の死を願つてをるのだといふ事の證據に使用するやうなことは決し

てしないであらう。夢の理論はそんなことまで要求しはしない。夢の理論は、彼が――いつか一度その小兒時代に於いて――彼等の死を願つたことがあるのだ、といふ推定をなすだけで滿足する。併し私にはこれだけの制限では、まだ苦情を唱へる人達をなだめるのに殆ど足りまいか、と懸念される。彼等は現在に於いてかかる願望を大丈夫抱いちやゐないと感じてをると同じに、嘗つてそんな考へを持つたことがある可能性をも、猛烈に反對するだらうからだ。であるから私は現在がなほ明示する證據によつて、沒し去つた過去の小兒精神生活の一部を復活さしてみせねばならない（過去の小兒精神生活については、「五歳の男童のフォビーの分析」及び「幼兒期性慾理論に關して」を參照せられたし。Analyse der Phobie eines fünfjährigen Knaben.—Ueber infantile Sexualtheorien.）。

先づ小兒のその兄弟姉妹に對する關係を觀察してみよう。この關係は、愛情の籠つたものでなければならぬ、などと前提する理由を私は知らない。だつて、大人同志の間に於ける同胞間の敵意の實例は誰でもの經驗に蝟集するところであり、そして吾々はこの不和が小兒時代から發してをる、若しくはその時代以來持續したのである事を、實に屢々確かめ得るのだ。更に、今日ではその同胞に對して優しい感情を抱きその助けになつてやつてをる大人でも、その甚だ多くは、小兒時代には殆ど間斷なき敵意を持ちながら、一緒に生活して居つたのである。年上の子供は年下

のをいぢめた、その告げ口もした、その玩具を取りあげることもあつた。年下の子供は年上のに對して憤怒を感じても無力なために氣を腐らした、年上のを羨みそねんだ、そして恐れた、或ひは彼の自由慾と正義意識の最初の昂奮が向つたのは壓迫者たるこの年上の子供にであつたのだ。兩親達はよく、どうも子供等が仲よく致しませんと言ふが、その原因を見出すことはできない。行儀がよいと言はれる小兒であつても、その性格は、大人について行儀がよいのはかうかうだと期待されるのとは、異つたものである事實を知るのは、困難ではない。小兒は絶對に主我的だ。小兒は自分の欲求を深刻に感じてをる。そして遠慮なくその滿足を得ようとする。殊にその競爭者、他の小兒を相手にする時にはさうであり、何よりも第一に、自分の同胞が相手の時にさうである。併し吾々はそのために小兒を邪惡だとは言はない、いけないと言ふ。小兒はその惡い行動に對して吾々の批判の前でも、刑法の前でも、責任はない。そしてそれでいいのだ。なぜならばなほこの小兒時代と謂はるる年頃の間に於いて、小エゴイストの心内に利他的心情の動きと道德が目を覺ましてくる、マイネルトの言葉を借りて言ふと、或る第二次的自我がその第一次的自我の上に現れ、そしてそれを阻止するやうになる事を、吾々は期待してよいのであるからである。確かにこの道德性は凡ゆる方面に亙つて同時的に發生してくるものではないし、又道德なき小兒

時期の長さも、各箇々の箇人によつて相違してをる。この道德性の進化が現れずに居る者については、吾々はよく「變質」云々といふ。この場合の問題は、明らかに進化の阻止である。後期の發達によつて第一次的性格が既に下積みとされてをる場合には、ヒステリー症の病氣に罹かるとその第一次的性格が少なくとも、部分的には再び自由に浮び上らせられることがある。所謂ヒステリー症性格と不良小兒の性格との一致は正に著しいものだ。反之、强迫精神經症は再び動き出してくる第一次的性格に對し一層抑壓を加へるものとして背負はされてをる、一種の過重な道德性に相當するものである。

かるが故に、今日ではその同胞を愛してをり若しそれが死去することでもあれば、わが力をもぎ取られたやうに感ずるだらう多くの人でも、その無意識界には以前からして同胞に對する惡い願望を抱いてをるのであつて、それが夢の中で實現され得るのである。ところで三歲又はそれを少し越した位までの小兒の。更に自分よりも年下の同胞に對する態度を觀察してみると、全然特別な興味がある。その小兒は今までは一人子であつた。ところが鴻の鳥が新しい赤ちやんを伴れて來てくれたと敎へられる。小兒はその新參者をじろじろと見て、それからきつぱりと言ふ。「こんなの、鴻の鳥にまた伴れて行つて貰つたらいい」と。（その恐怖症を私が分析の材料にしたことのあ

つた五歳半のハンスは、妹が生れて間もなく熱に浮かされて叫んだ。「だつてあたい、妹なんか、ちつとも要らないんだ。」その後一箇年半經つてから、彼は神經症に罹つた時、お母さんがその赤ん坊をお風呂に入れる時、盥の中へ落つことしてくれたら、そしてそれで死んぢまつたらいいに、といふ願望を明らさまに告白した。而かもこのハンスは行儀のよい優しい小兒で、間もなくその妹が好きにもなり、そしてこの妹を特に面倒みてやつて居るのである。）小兒はこの風來坊のために自分がいかなる損害を覺悟せなければならぬかを、ちやんと評價することができるのだ、といふ意見を私は大眞面目で信奉する。私に親しい知り合ひの一婦人がある。この婦人は今日では四歳年下の妹と大變仲よくしてをるが、彼女はこの妹が生れた知らせを聞くと、「でもあたいの赤い帽子なんか、どうしてもくれてやらないからいい」といふ條件を留保したといふ話を、私は知つてをる。小兒がそれと知るやうになるのはやつと後になつてからであるとしても、小兒の敵意はこの時に目覺めるのかもしれない。三歳に滿たぬ女の子が搖籠の中の乳香兒を縊め殺さうと試みた事件を、私は知つてをる。女の子はこの乳香兒がこれから先も居るために、自分にとつては何等よいことはないと、豫想したのである。この年頃の小兒は、非常に強く且つ明白な嫉妬を現すことができる。更に又、その小さな同胞が實際間もなくどつかに消えて居なくなつてしまつた、そして自分が以前のやうに復た家ぢうの温

情をわが一身に集めてしまつてゐる、ところへ復た新しいのが鴻の鳥のところから贈つてよこしたとする。さうしたら、この愛すべき小兒の心中に、今度の新しい競爭者も前のと同じ運命に會つてくれればよい、そして自分が前と同じに、又この間ぢうと同じに、安心して行けるやうだつたらよい、といふ願望を作り出すのは、それは不自然なことであらうか？（かかる小兒期に體驗された死の事件は、家庭では間もなく忘れられてしまふことかもしれない。併し精神分析的研究の示すところでは、この事件は後期の神經症にとつて甚だ意義あるものとなつてゐるのである。）勿論後から生れた者に對する小兒のかうした態度は、通常の狀態にあつては、年齢の相異が惹き起す簡單な働きなのである。或る年齢の距りがある場合では、年長の少女には、既にその可哀相な孩兒に對する母性的の衝動が起るであらう。

小兒時代の同胞に對する敵意の感じは、大人の鈍い觀察に入るより以上に、なほずつと頻繁なものであるに相違ない。（小兒が同胞や兩親の中の一方に對して見せる元來からして敵意的な態度に關しては、その後多數に觀察が行はれ、精神分析學文獻の中に記載されてゐる。殊に純に且つ率直に、この類型的な小兒の立場を、自分の極めて初期の小兒時代に基いて描寫してゐる人に、詩人シピッテレルが居る。「そのほかまだ、もう一人のアドルフが居つた。ちつちやい奴だ。それが私の弟だと人は言つて聞かせるんだけれど、

こんな奴が私に何の役に立つのか、私はわからなかつた。まして何のためにこんな奴を私と同じやうなものにしてをるのか、なほわからなかつた。私の要求には私だけで澤山なのに、何で兄弟なんか要るもんか？　そして彼は無用なばかりでない、時々は邪魔つけでもあつた。私がお祖母さんに何か面倒を頼むと、彼奴も同じやうに頼みたがつた。私が乳母車に乘つてると、彼奴は向ひ合つて坐つてゐて、私の坐席の半分を取りあげちまふから、お互ひに足がぶつつからざるを得なかつた。）

私の家の子供は矢繼早やに生れた。私は家の子供達についてかかる觀察する機會を取り逃がしてしまつたが、今私の小さな甥によつてその埋め合はせをしてをる。この甥は生後十五箇月にして競爭者たる妹の出現のために獨り天下を妨害されたのだ。なるほど私は、若い男といふものはその小さな妹に對して大變騎士的な振舞ひをする、その手に接吻をしたり撫でてやつたりする、といふ話は聞いてをる。併し私の確信するところでは、その若者でも滿三歲になる前に言葉が言へるやうになると、それを早くもその妹に對する批評に利用したのであり、その妹なるものは、彼にとつてどうしても要らざる者にしか、見えない人物だつたのだ。話が妹に及ぶ度每に、彼はその話の中へ口を出し、そして不快げに叫ぶ。あんまり、ちっちやいんだもの。あんまり、ちっちやいんだもの。その孩兒が見事な成長をしてこの兄の輕蔑を脫し得るやうになつた最近の數箇月

には、彼は妹がそんな大して注意に價するものでないといふ彼の警告を、今度は別に理由づけることを知つてをる。彼は適當な機會のある毎に、孩兒ちやんには齒がちつともないよ、と指摘してみせる。(三歳半になるハンスはこの文句の中へ妹を無視せんとする批評を包んでをるのだ。彼は妹は齒が無いからものを言ふことはできない、と認定するのである。)もう一人の私の姉妹の長女について私達が皆記憶してをるところでは、六歳だつた時に、この長女が、三十分間も全部の伯母さん達に保證して貰つたことがあつた。「ねえ、ルツィーちやんはまだそんなことわからないんだわね?」ルツィーといふのは彼女よりか二歳半年下の競爭者であつた。

例へば私の婦人患者のどれについてみても、同胞の死の夢であり、それが昂じた敵意に該當するものである夢を、發見しないことはなかつた。たつた一つの例外がある。併しこの例外も、解釋をし直すと、原則の確證となるのにわけのないものであつた。分析診療のため或る婦人と坐つてゐた時、私はその日の分析題目となつてをる徵候を論ずるには考察に入るべきものと考へられたこの事情を、その婦人に說明してやつたことがある。するとその婦人は、そんな夢は一度も見たことがないと答へて、私を吃驚さした。併し彼女にもう一つの夢が思ひ浮んだ。その夢は表面的には、吾々の問題と何の關係もないものであつた。その夢を彼女は四歳の時に初めて見たのだ

が、その後繰返へして見たことがある。最初に見た時、彼女は末つ子であつた。「子供の一群が居る。皆、彼女の兄や、姉や、從兄弟や從姉妹達である。彼等は草原の上で跳ね廻つてをる。突然彼等に翅が出來て、飛びあがつて、行つてしまつた。」この夢の意味については彼女は何の推測も抱いてゐなかつた。併しこの夢が、檢閱によつて殆ど影響されてゐない起源的な形をした夢で、凡ゆる同胞の死の夢であることを認識するのは、吾々にとつて困難なことではないであらう。私は敢て次のやうな分析を挿んでみる自信がある。その小兒群の中のどれか一人が死んだ折に――この婦人の場合には、二人の兄弟の子供達が互ひに同胞のやうに一緒に育てられてゐた――その頃まだ四歳にはならないこの夢を見た婦人が、誰か悧巧な大人の人に訊いたことがあつたらう。死んだ子供は一體どうなるのか? その返事はかうであつたらう。さうすると翅が生えて天使になるのさ。この説明を聞いた後の夢の中で、同胞達が皆天使のやうに翅が出來てそして――これが主要點であるが――彼等は飛び去つたのである。夢の中で他人を皆天使にしてしまつたこの小供だけが、獨りで後に殘つてをる。あんなに澤山居たのに、今はただ一人つ子である、のを考へてみ給へ! 子供達が草原に跳ね廻り、そこから飛び去るといふのは、胡蝶を暗示すると見ても殆ど誤解ではあるまい。とすると、この子供を導いた思想の結合は、まるで古代人をして心靈の

女神プシヘを描くのに胡蝶の翅を附け加へさせた、それと同一であるやうにも思はれる。

さて誰かが恐らく次のやうな抗議を申し入れるであらう。小兒のその同胞に對する敵意的の衝動は、なるほど承認してよいとしても、併し小兒の心情が、恰かも凡ての罪過はただ死の刑罰によつてのみ償はるべきであるかのやうに、自分の競爭者又は自分よりかもつと強い遊び仲間に對しその死を希ふなどといふ、そんな程度の邪惡にまで、どうして立ち至るのであらうか？　こんな抗議を口にする人は、小兒が「死んでをる」といふことについて有してをる表象は、吾々の表象とは、ただその文句だけが共通であつて、その外には、殆ど共通するところがないのである事を、考量してゐない人だ。小兒は死滅の悲慘について何も知らない。冷めたい墓の中の身慄へについても、無限の虛無の恐れについても、何も知らないが、大人には、それ等がその表象の中に於いて、どうにも仕末のつけにくい厄介物である事は、彼岸の國についての凡ゆる神話が示してをる通りである。死の恐怖を小兒は知らない。だからこそ、このものすごい言葉を玩ぶのだ。そして相手の小兒を威嚇して、「そんなこともう一度やつたら、お前はあのフランツのやうに死んでしまふぞ」とも言ふ。それを聞いてをる氣の毒な母は、慄つと身の毛がよだつであらう。母には恐らく、この浮世に生れて來る者の過半數は、小兒時代を越えぬうちに、死んで行く事實を忘れ

ることはできないであらうから。八歳になつた子供でさへ、博物標本館を見物して歸つた後、お母さんにこんなことを言ふこともあるのだ。「ママ、僕はママさんが大好きなんだ。ママがいつか死んだら、あの標本のやうに作さへて貰つて、このお部屋に陳べてをくよ。そしたら僕いつでも、いつでも、ママと會ふことができるんだものね！」かやうに死んでしまつたことについての小兒の表象は、吾々大人の表象とは同じでない。（父が急死した後でその男の子が次のやうなことを言つたのを聞いて、私は吃驚させられた。その子は非常に聰明で十歳にもなつてゐるのだに。お父さんが死んだことは僕にわかる。併しお父さんがお夕食になぜお歸りにならないのか、僕には合點がいかないんです。——この題目についての材料は雜誌「イマゴ」誌上・ドクトル・フォン・フーク・ヘルムート夫人が擔當編輯してゐる「小兒精神」欄に集めてある。Frau Dr. v. Hug-Hellmuth— „Kinderseele" in „Jmago", Zeitschrift für Anwendung der Psychoanalyse auf die Geisteswissenschaften, Bd. I—V, 1912—1918）

殊に死の前の苦惱の場面を見せられてゐない小兒にとつては、死んでしまつた、といふのは、「行つてしまつた」、生き殘つてる人をもう邪魔しない、といふのと同じ意味しかない。この不在がいかなる工合にして生じたのか、旅立ちによつてか、疎遠によつてか、それとも死によつてかそんなことに、小兒は區別を立てるものでない。（精神分析學的修養ある或人が、觀察によつて、自分

の四歳であるが精神的には大變發達した娘が、「行つてしまつた」のと「死んでしまつた」のとの間の區別を見わけ得た瞬間を捉へることができた。その子は食事の時に面倒な手數をかけたので、その宿の給仕女の一人から不惡想に監守されてゐるのを感じた。それで彼女は父に向つて言つた。「あのヨセフィネは死んでしまつたらいゝ。」父はなだめながら訊いた。「なぜまたそんな死んでしまつたらなんて言ふんだい？　行つてしまつたのだけぢやいけないのかれ？」「いけないわ。そしたらまた歸ってくるもの」とその子は答へた。小兒の無制限的な利己心（ナルチス型 Narzissmus）に對しては、いかなる邪魔でも一つの權能侵害（Crimen laesae majestatis）である。そしてドラコーンの峻嚴なる立法の如く、小兒の感情は凡ゆるかかる罪過に對して、ただこの一つの酌量なき刑罰のみを科するのである。）　小兒の有史以前（記憶以前）的時代に於いてその乳母が行つてしまつた、そしてその後少し經つてその母が死んでしまつたとすると、吾々が分析の際に發見するところに據れば、その小兒の記憶にとつては兩つの出來事は、一系列となつて重なり合つてゐる。小兒が不在の人々について大して深くは感じない事實は、母親達が數週間も夏の旅行をした後で歸宅して、どうだつたと訊ねてみると、お子さんたちはただの一度もママさんのことをお訊きにはなりませんでしたといふ返事によつて經驗して、苦痛に感じるところである。併し母が實際に「その境からはいかなる旅人も二度とは歸らぬまだ發見されぬ國」へ旅立ちをしてしまつた

場合には、小兒達は先づ始めはその母を忘れてしまつてゐるやうである。そして漸く後に補充的にその故人を思ひ浮べ出すのである。

かく考へてくると、小兒が他の小兒の居ないことを願望する動機を有してをる時には、この願望を包むのに、他の小兒が死んでしまつてくれたらいいといふ形式を用ゐるのに、小兒にとつては何の妨げもないわけである。そしてその死の願望夢に對する精神的反應は、內容に於いてこそ實に相異はしてをるけれども、小兒の願望はとにかく大人の同じ意味の願望と同一であることを證明してをる。

小兒の利己心が同胞を自分の競爭者であると考へさせる。そして同胞に對して抱く小兒の死の願望はこの利己心によつて說明されるとして、さて然らば、兩親に對して抱く死の願望はどう說明すべきであるか？　兩親は小兒にとつて愛情を灑いでくれる人であり、欲求を滿たしてくれる人であつてみれば、小兒は正にその利己的な動機からでも、兩親の生存を願望するのが當然ではないか？

この難問の解決に吾々を導いてくれる經驗がある。それは、兩親の死の夢は、主として兩親のうちのいづれか一方にのみ關係する。そしてその一方といふのは、夢を見る當人と性を同じうす

る側である。從つて男は大抵父親の死を夢に見るし、女は母親の死の夢を見るものだ、といふ經驗である。私はこれを通則とすることはできない。併し以上の如き意味に於いての主としてといふ傾向が、いかにも明白なものであるから、普遍的な意義の或る重要點を捕へて、これを說明してみる必要がある。(この種の夢の實狀は屢々或る刑罰的傾向の出現のために蔽匿されてをる。その傾向は、道德的反動として、兩親のうちの愛された側を失ふに至るかもしれんぞ、といふ威嚇になつてをる。)その事情は——大雜束に言へば——恰かも一種の性的偏愛が早くから働いてをるかのやうである。男の子は父親を以て、女の子は母親を以て愛情の競爭者であると見做し、自分の利益が生ずるためには、その競爭者を除外するよりほかないかのやうであるのだ。

この想像を不氣味なものだとして排斥する前に、兩親と子との間の現實的な關係を眼中に留めて貰ひたい。孝順といふ文化的要求がこの親子の關係に對して求めるものと、日常の觀察が事實として與へるものとの間には、區別を立てねばならない。親と子との間の關係には、敵意を釀す因緣の包み匿されてるもの、一つのみには止まらない。檢閱に會つたら合格はできないやうな願望が生じてくるのに對して、條件は實に豐かな範圍に於いて存してをるのである。先づ吾々は父と息子との關係に觀察を向けてみよう。私の思ふところでは、吾々がモーゼ十戒の掟に對して承

認してやつた篤信が、現實の知覺に對する吾々の心の働きを鈍らすのである。卽ち、吾々は恐らく、人類の大部分が、第五戒の遵奉を怠つてをる、といふ現實をば敢て認めようといふ氣慨がないであらう。人間社會のどん底の階級から最高の階級に亙つて、親に對する孝順の念は、他の利害關係のため押しのけられるのが常である。神話や傳說によつて人間社會の原始時代からして現代の吾々へ傳はつてをる曖昧な報告は、父親の權力の充實とその權力が使用せられる無遠慮について吾々に不愉快な表象を刻みつける。クロノスはその子供達を呑んでしまつた、まるで牡豚が牝豚の腹仔を呑んでしまふやうに。ツォイスはその父を去勢して自らその代りに支配者となつた。(ツォイスが父を去勢した話は、少くとも二三の神話的叙述の中に語られてをる。他の神話に據れば、この去勢をやつたのは、クロノスがその父ウラノスに對してだけともなつてゐる。この作意の神話的意義については、オットオ・ランクの「英雄誕生の神話」及び「詩と傳說に於ける近親相姦作意」參照。Otto Rank, Der Mythus von der Geburt des Helden. 1909; Das Inzestmotiv in Dichtung und Sage. 1912)。古代の家族にあつて父が無制限的の勢力を振へば振ふほど、その後繼者たる使命ある息子は、いよいよ益々父に對して敵たる立場に立み、この父の死によつて自ら支配を掌握せんとする息子の焦慮は、いよいよ益々大きくなつた。現代の市民階級の家庭にあつてさへ、父は息子の獨立とそれに必要な資本を與

へることを拒むために、既に父子といふ關係そのものに存してをる敵意の自然的萠芽を伸張せしめるに至るのが常である。醫師には次の事實に心づく機會が隨分多い、父を失くして感ずる息子の苦痛は、たうとう手に入れた自由によつて感ずる滿足の悅びを抑壓することができないといふ事實を。どこの父親でも、現代の社會ではひどく、黴臭くなつてしまつてる家長權(potestas patris familias)の殘物を、ぶるぶる痙攣しながらもしつかりと摑まへようとするが普通であり、そしてイプセンのやうに父と子の間の根元的な爭鬪をその作品の筋の前景に押し立てるならば、どんな詩人でも效果を擧げることは確かだ。母と娘との間の葛籐の動機が生ずるのは、娘が段々大きくなる、そして母親を以て監視人だと思ふやうになる時にである。娘の方は性的の自由を欲するが母親の方は娘が盛りとなるにつれて、そのために自分には性的要求を斷念すべき時節が來てしまつたのだと、戒められる時にである。

是等の事情は總べて誰の眼前にもあつて周知のものだ。併し兩親に對する孝順の念を以て、既に昔から或る神聖犯すべからざるものと、考へるに至つてをるやうな人々に現れる夢、その人達の兩親の死の夢を說明せんとするのには、そのやうな事情は吾々の役に立たない。そして一方、吾々は前にやつて置いた探求によつて、兩親に對して抱く死の願望は、極めて初期の小兒時代か

ら導き出されるといふ推測について、既に準備をやつてをる。

この推測は精神神經症に對して分析を試みてみると、寸毫の疑ひをも容れぬ確實さを以て、實證されるのである。この分析で吾々は、小兒の性的願望は甚だ早く目覺める事――その萌芽的狀態でもかく名づけ得る範圍內でのことではあるが――及び、女の子の最初の愛情は父親に、男の子の最初の幼兒的慾情は母親に向けられる事を學び知る。それで父親は男の子にとつて邪魔な競爭者となり、母親は女の子にとつて邪魔な競爭者となる。そしてこの感じを轉じて死の願望となすためには、小兒にとつてならば殆ど何等の手續きをも必要としない事は、同胞に對する場合の時に既に詳述した通りである。その性的選擇は大抵既に兩親のやり方に現れてをる。男子が小さな娘を甯めるやうに可愛がり、女子が息子達の加勢をするのは、これは天然自然の傾向である。それが、兩親が兩方とも、まだ性の魔法が子供等の批判力を亂してをらないうちに、彼等の敎育については嚴格に處置しようとしてをりながらも、この自然の偏よりが現れるのである。小兒はこの選り好みをようく認める。そして兩親のうち、自分には反欲する方の側へ反抗する。大人の心に自分に對する愛情を見つけ出すのは、小兒にとつて或る特別な欲求の滿足であるばかりでなく、それは、他の凡ての點に於いても自分の意志通りになることをも、小兒に示してくれるので

ある。かくして小兒は自分自身の性的衝動に從ふのではあるが、又それと同時に、小兒が兩親に對してなした選擇が、その兩親自身がなすのと同じ意味で行はれるのであつてみれば、小兒は兩親から發してをる刺戟を更新してをるわけなのである。

小兒に現れる是等の幼兒的愛著の表現のうち、大多數は看過されるのが常である。又、そのうちの若干は、小兒時代の初期を過ぎた後に氣がつかれることもある。私の知己の家の八歳になる女の子は、母が食卓から呼び出されることがあると、その機會を利用して自分がお母さんの後繼者であると宣言する。「今度はあたいがママさんですよ。カールさん、もつとお野菜がほしくないこと？　さあ、どうぞ、お取りくださいな」等々。四歳になる女の子、これは特別才智があつて活潑な子であるが、直截にかう言ふ。この場合では小兒心理のこの部分が特に透明である。「いつかお母ちやんが行つてしまふかもしれないの。そしたらお父ちやんはきつとあたいをお嫁さんにするわ。あたいお父ちやんのお神さんになりたい。」　小兒の生活に於いてはかういふ願望があるからと言うて、小兒がその母をも優しく愛してをることがないといふのでは、決してない。父親が旅行に出ると、小さな男の子が母の傍に寢てもよいと許される。そして父親が歸宅すると、復た小供部屋へ歸されて、母に較べれば、ずつと氣に入らない誰かのところに寢なければならな

いことになるとすれば、その小兒は、父親がいつでも不在であつてほしい、そして自分が美しいママさんの傍に自分の場所をいつまでも持ち續けることができたらいいなあ、といふ願望は容易に形づくられるであらう。そしてこの願望の成就に對する一つの手段は、明らかに父が死ぬ場合にある。なぜならば、この一つの手段を彼の經驗が彼に敎へたことがあるのだ。例へばお祖父さんのやうな、「死んだ」人はいつも不在であつて、決して二度と歸つて來ないからである。

小さい子供達によつて試みた以上の觀察は、私の提出した判斷に無理をしないで適合するとしても、それ等の觀察では無論十分なる確信を與へてはくれない。この十分なる確信を醫師として の私に迫るのは、大人の神經症患者の精神分析である。それ等の夢の報告に先立つて言つて置くことは、それ等な願望夢として判斷するのは避け得ざることであるといふ點である。或る日、私は一人の婦人が憂鬱にして泣いてをるのを見つけた。彼女は言つた。わたしはもう親族の者には會ひたくありません。あたしに會つたら厭やで身の毛がよだつでせうからねえ。さう言つた後で彼女は話を中途で飛ばすやうなことは殆どなく、或る夢を思ひ出した話をしてくれた。その夢の意味などは勿論彼女にはわかつてゐない。彼女はそれを四歳の時に見たのであつた。その內容は次の如くである。山猫だつたか、それとも狐だつたかが、屋根の上をぶらぶらと歩いてゐた。そ

してから何かが上から落ちて來た。それとも自分が落ちたのであつた。そしてその後でお母さんが死んでお家から運び出されて來た――ここまで話をしてこの婦人は苦しげに泣いた。私は彼女に向つて、この夢は、お母さんの死んでるのを見たいといふあなたの小兒時代に基く願望を意味するものに相違ない事、それからさういふ夢だからあなたは泣かずにはをられないのだし、親族の者もあなたに會つたら厭やで身の毛がよだつのだ、と語つて聞かしてやつた。私がそれを語り終るか終らぬかに、早くも彼女はその夢を明かにすべき或る材料を提供したのである。「山猫の眼」といふのは、彼女がほんの小さい子供だつた時に、往來にゐた惡たくれ小僧からつけられた惡口だつた。彼女が三歳だつた時に、屋根から煉瓦が一枚彼女の母の頭の上へ落ちて來て、烈しく血が出たこともあつた。

私は嘗つて機會を得て、一人の若いそして種々の精神狀態を經過した娘を詳しく研究したことがある。この娘の病氣の始まりは躁狂性の錯亂であつたが、その病狀にあつた時に、この患者は自分の母親に對して全然特別な嫌惡の情を見せ、母親が寢臺へ近づくや否や、打つたり惡口を言つたりした。而かも自分よりかずつと年長の姉に對しては、その同じ時に於いて、愛情をこめてをり、從順でもあつた。その病狀の後には、明晰な併しいくらか無感覺性の狀態が來て、睡眠は

甚だ亂れ勝ちであつた。この形勢に於いて私は診療を開始し、彼女の夢を分析した。その夢の無數は、多かれ少なかれ蔽匿はされてをるが、母の死を中心としてをつた。或る夢では、彼女は或る年とつた婦人の葬式に列席してゐた。又或る夢では、自分と姉が喪服を着けて、食卓に坐つてゐた。是等の夢の意味については、少しの疑惑も存してゐなかつた。なほその後漸次快方に向ひつつあつた時に、ヒステリー性の恐怖症が現れた。その恐怖のうちでも、最も苦惱的なのは、母親の身に何事かが起きてをる、といふのであつた。どんなところに居つても、その時には急ぎ歸宅して、母親がまだ生きてをるのを確めてみずにはをられなかつた。さてこの患者の場合は、私の其他の經驗と結合して考へてみると、甚だ教ゆるところに富んだものである。これは謂はば幾通りもの言葉の飜譯で以て、同一の昂奮的表象に對する精神機關の種々なる反應の仕方を示してをる。私は第二の精神的取調所が、第一のいつもは抑壓されてをる取調所のために壓倒されるのが、精神錯亂であると解釋してをるのであるが、この患者の場合には、その錯亂狀態に於いて母親に對する無意識の敵意が自動的に力を出して來たのであつた。やがてその次に最初の安靜狀態が現れ、心の騷擾は抑壓せられ、檢閲の支配が復舊してしまふと、その時には、この敵意にとつて母親の死に對する願望を現實するため自由に殘されてるのは、もはや夢作用の領分しかなくな

つた。更になほ常態が確實になつて來た時には、ヒステリー性對照反動としてまた拒否現象として、母親のための過度の心づかひなるものが作り出されたのである。この聯絡を以て考へてみるならば、ヒステリー症娘たちが、何故あのやうに屢々、優しすぎるまでにその母親達に縋りつくのであるかは、もはや説明のつかないことではない。

またもう一度は、或る若い男の無意識的精神生活の中を深く視察する機會を得たことがある。この男は强迫神經症のために殆ど生存に堪へ得られなくなり、自分の傍を通り過ぎる者を凡て殺してしまふかもしれないといふ氣遣ひに苦しめられ、街路へ出ることができなかつた。萬一市内に起つた殺人事件のため嫌疑が自分にかかるやうなことがあつた場合に、自分がその現場に居合せなかつた事についての證據を整理して置く、その仕事で彼は毎日を送り暮らしてゐた。彼が道德的な人間でもあり、竝びに立派な敎養ある人間でもあることは、これを以て見ても、言はずとものことであらう。精神分析が――而かもこれがこの患者を治癒することにもなつたのだが――この不快な强迫表象の原因をなすものとして、患者の少し嚴格すぎた父に對する殺害衝動を發見したのである。そして患者が七歳の時に、この衝動が意識的に現れたので患者は驚愕したのであつたが、勿論それはもつとずつと初期の小兒時代に發してをるものだつた。苦惱の烈しい病氣を

した後、それから父が死んだ後に、三十一歳になつて、强迫非難が現れたのだか、それは前述の恐怖症の形となり、他人の姿にも變つてをる。自分の肉身の父をさへ、山の頂きから深淵の中へ衝き落さんとするほどの考へを抱いた人間であるならば、身に關係の薄い人の命など用捨することは勿論あるまい。この男が自分の部屋にわが身を閉ぢ込めて置くのは、それ故道理ある振舞ひである。

既に多數にのぼつてる私の經驗に據れば、後に精神神經症に罹つた患者凡ての小兒時代に於ける精神生活にあつて、兩親が主要な役目を演じてをる。兩親の一方に對する愛著、他方に對する憎惡は、この小兒時代に形づくられ、そして後期の神經症の徵候にとつていかにも有意義な精神昂奮の材料の堅固なる要素をなしてをる。是等の精神神經病患者だけが何か全然に新しいもの、彼等にだけ特有なものを作り出すことができるので、彼等はその點で他の常態に終始してをる人間と、はつきり區別される、私はさういふことを信じないのである。それよりももつとずつと本當らしく思はれ、そして常態的な小兒について隨時試みる觀察によつても支持される事實は、かの患者達はその兩親に對する愛著的乃至敵意的願望を以ても、大多數の子供の精神にはより不明瞭に且つより弱く經過してをるものをば、ただ擴大して吾々に知らしめてくれるにすぎない事

である。古代から傳はつた或る一つの傳說材料が、この事實の認識を支持してくれる。この傳說材料の效果は徹底的であり一般妥當的であるが、その效果を理解するには、小兒心理學に基いた上述の前提の同じやうな一般妥當性に據るよりほかはない。

私が言ふのはエヂプス王の傳說、、ゾフォクレスの同名の戲曲である。テーベン國の王ライオスと王妃ヨカステの息子エヂテスは乳呑兒の時に捨てられた。やがて生れる息子は王を殺すであらう、といふ神託が、豫じめ父王に告知されてあつたからだ。捨てられた彼は拾はれ、別の國の宮廷に王子として育つた。或る時彼は自らの素性が不安になり、自分で神託を乞うたところが、お前は父を殺害し母の良人とならねばならぬ運命かもしれぬ故、故鄉に留まることを避けたらよい、といふ忠告を受けた。今の彼が自分の故鄉と思ひ間違ひてをるその國を去つて行く途中で、彼はライオス王と出會つた。そして兩人の間に輕率に燃え立つた口論の擧句、彼は王を撲ち殺した。(彼は無論この王者らしい老人が自分の父とは知らない。)やがて彼はテーベン國の國境へ來かかり、道を遮ぎつてをる怪獸スフィンクスの謎を解いた。(そのためにスフィンクスは海に飛び込み、通行人の災難が取りのぞかれた。)そのお禮としてテーベン人は彼は王に選び王妃ヨカステの手を與へた。後は年久しく平和と威嚴を以て國を治め、彼にはそれと知られぬわが母なるヨカ

ステに二人の息子と二人の娘を生ました。或る時國内に惡疫が起つた。そのためにテーベン人は更めて神託を乞うた。ゾフォクレスの悲劇はここから始まつてをる。使者が來て神託の解答をもたらす。それによると、ライオス王の殺害者がこの國から放逐さるるならば、惡疫は息むであらう、といふのである。併しその殺害者は何處に居るのであらう？

「古い罪の見わけがたくも朦朧たる痕跡はいづこにあるものか？」（第一〇九行。）

戯曲の筋はそれからさき――精神分析の仕事にも較べ得るやうに――一歩一歩と高まりつつ、巧みに引延ばされて行く事實の暴露にほかならない。エヂプス自身がライオスの殺害者である、併し彼は又そのライオスとヨカステの實子である事實の暴露だ。知らずに行つたわが惡虐の仕業に痛く心を撃たれたエヂプスは自らわが眼を剜ぐり、故郷を去る。神託の豫言は實現されたのである。

「エヂプス王」は所謂運命悲劇である。神々の壓倒的な意志と災害のため威嚇された人間の空しい反抗との對立に、その悲劇的效果が存するものと言はれてをる。深く心を捉へられた見物は、この悲劇からして、神の意志への歸依と、自己の無力の洞察を學ぶべきである。宜なる哉、近代の作家達も、これと同樣の對立をば何か自分で工夫した話の筋に織りまぜて、これと似た悲劇的

効果を擧げようと試みてゐる。併し彼等の描く罪なき人間が凡ゆる反抗をなすも拘らず、その身に或る呪詛又は神託の豫言が實現される有樣を、見物人は眺めてゐても、感動しない。その後の運命悲劇は効果を擧げずにゐる。

「エヂプス王」が、その時代の希臘人を感動さしたに劣らず、近代人をも感動せしめることができるとすれば、その理由は實にただ次の一點に存し得る。卽ち、　の希臘悲劇の効果は、運命と人間意志との對立によるのではなく、寧ろその對立を證明する手段となつてゐる材料の特殊性に求められる事である。吾々の衷心には、エヂプスに存する運命の止むに止まれぬ威力を、進んで承認せんとする或る聲があるのに相違ない。反之、吾々はグリルパルツェルの「妣姐」や又は其他の運命悲劇にあるやうな事件の成行ならば、それを勝手なものとして斥けることができる。事實エヂプス王の物語には一つの重大な點が含められてゐる。彼の運命が吾々の心を捉へるのはただその運命が轉じて吾々の運命にもなり得る、吾々の誕生以前の神託が、彼に與へたと同じやうな呪詛を、吾々の上へもかけてゐるが故にのみである。最初の性的昂奮を母親へ、最初の憎惡と暴力的な願望を父親に向つて振り向けるのは、恐らく吾々凡ての人間に定められたことなのであつたかもしれない。吾々の夢がその確信を與へる。その父ライオスを撲ち殺しその母ヨカステと結

婚したエヂプス王は、吾々の小兒時代の願望實現にすぎない。併し吾々がエヂプス王よりも幸ひなことには、その小兒時代以後に於いて、精神神經症患者とならない限りは、吾々の性的昂奮を吾々の母親から引き離し、吾々の父親に對する嫉妬を忘れることが吾々に出來てをるのである。吾々の衷心に於いては、小兒時代の原始的願望のいくつもが、その後に於いて驅逐の憂き目に會つてをる。偶々その原始的願望のうちのかの一つが、その人の身の上に實現されたやうな人物に出會ふと、吾々はこの排斥の全力を絞りつつ、戰慄しながら、あとずさるのである。作家は作中の吟味を以てエヂプスの罪を暴露させて行くが、それは吾々をして吾々自身の衷心を認識せしめずにはをかぬものであつて、吾々の衷心には、かの衝動は假令抑壓されてはをるものの、依然として存在はしてをる。合唱團は舞臺を去る時に次のやうな文句でエヂプスの身の變轉を語る。

……見ろ、あれが、むづかしい謎を解いたエヂプスだ、

權勢竝ぶ者もなかつたエヂプスだ。

市民がみんなであの人の幸運を讃へもし、羨みもしてゐたのだ。

見ろ、彼はなんといふ不運の怖ろしい荒浪へ落ちたことだ！

この警告は吾々自身、吾々の誇りの上へ振りかけられるものだ。吾々は小兒時代以後いかにも

悧巧に、いかにも力ある者になつた、と自分では考へてをる。だが、エヂプスのやうに、吾々も、自然が吾々に背負はした、道德を傷けるいろいろな願望のことを、知らずに生きてをる。そして若しそれ等の願望が暴露されたら、吾々は誰でも皆、吾々自身の小兒時代の場面から眼を逸らしたく思ふだらう。（精神分析的研究の調査のうちで、この小兒時代に發し無意識界に保存されてをる近親相姦傾向の指摘ほどに、批評界の辛辣な反對、憤激的な反抗、そして又――滑稽な的はづれの反響を喚び起したものは、ほかに一つもない。最近には近親相姦をば、凡ゆる經驗を無視して、單に「象徵的なもの」として認めしめんとする試みさへも、現れてをる。フェレンツィは「イマゴ」誌上に――一九一二年、同誌第一卷――ショペンハウエルの或る書簡に立脚して、エヂプス傳說の瞥拔なる解釋を附け加へてくれた。――私が「エヂプス錯綜」の問題に最初に觸れたのは、この夢判斷に於いてであつたが、この問題はその後の研究によつて人類史と宗教及び德義の發達の理解に對し思ひもかけなかつた大きな意義を得るに至つてをる。私の著述「トーテムとタブウ」參照。Totem und Tabu. 1913)。

兩親に對する關係が、性慾の最初の動きのために、不快にも攪亂される事を内容とする夢は、太だ古い。その古い夢材料からしてエヂプスの傳說が芽ばえてをる明かな證據は、ゾフォクレスの悲劇の本文そのものの中に見出される。エヂプスはまだ事情を明かにすることはできないが、

嘗つて受けた神託の豫言を思ひ起して心配してをると、ヨカステが或る夢の話を持ち出して、神託だつて夢と同じにあてにはならぬと彼を慰める。そしてこんな夢は、多くの人がよく見るけれど、何の意味もないものだ、と彼女は述べるのである。

いゝいゝいゝいゝ
だつて母親と一緒になつてる夢なんか見た人は澤山あるんです。
そんなことは全然何でもないことだ、と考へなくては、
世の中の重荷を輕く背負つていくことはできません。（第九五五行以下）。

母親と性交する夢は、希臘の昔と同じやうに、今日でも多くの人々に與へられる。その夢を見た人は憤り且つ怪んで、それを話して聞かせる。かかる夢がこの悲劇を解釋する鍵であり、又父の死の夢に對する補充でもある。エヂプス物語はこの二つの類型夢に基く空想の反應であつて、かかる夢を大人が經驗する時には否認の感情を抱くと同じに、その傳說は恐怖と自發的刑罰とをも、その內容の中へ組み入れねばならない。エヂプス傳說のその後の續きはやはり復た、この材料の一種誤解的な、第二次的加工に基いてをり、そしてその加工では、この材料をば或る神義論的目的に使用せんとしてをる。（前出、露出の夢材料を參照せよ、第四二〇頁にあり。）神々の全能と人間の責任とを結びつけようとする試みは、凡ゆる他の材料でも然る如く、この材料でも勿

論失敗するであらう。

（偉大な悲劇詩人のもう一つの創作、卽ちシェークスピアの「ハムレット」も、「エヂプス王」と同じ地盤に根ざしてをる。併し材料は同じであつても、その取扱ひの異つてをるところに、希臘と近世と二つの遠く隔つてをる文化期の精神生活に於ける全相異、人類の情緖生活に於けるかの排斥の幾百年間に亙る進步が啓示されてるのだ。「エヂプス」では、小兒の根柢的な願望空想が、夢に於いてと同じやうに、暴露せられ且つ實現されてをる。「ハムレット」ではそれが排斥されたまだ。そしてそれが實在するのを知るのは――神經症の狀況に類似して――それがために生ずる阻止の作用を通じてのみである。讀者がこの戲曲の主人公の性格について、かく全く不明瞭で居ても我慢ができる。それが奇妙にも作品の印象と矛盾しないのは、近世戲曲の壓倒的な效果を以てするためだ。この作品は、ハムレットが身に課せられた復讐の任務を實行するのに逡巡するのを、土臺として組み立てられてをる。その逡巡の理由なり又は動機なりが、何であるかを、原本は告白してゐない。種々樣々な解釋の試みも、それを擧げ示すことはできずにをる。ゲェテに基き、今日なほ行はれてる解釋に據ると、ハムレットは潑溂とした行爲力を、思考力のあまりにも豐かすぎる働きのために、麻痺されてをる人間の型を現すものである（「蒼白い思想の病ひに罹つ

た」)。他の解釋に從へば、作家は病的な不決斷の、神經衰弱の領分に陷りつつある一性格を描かうと試みるのである、とも言ふ。併しながら作品の內容の敎へるところでは、ハムレットが大體行動力のない人物などに見えることは、決してあり得ない筈である。彼が行動的に出づるところは二度もある。一度は、突如として激情を發し、壁掛けの背後に立聽きする男を刺し仆す時であり、もう一度は、計畫的に、のみならず狡猾とさへ思はれるほどにして、自分をねらつてをる二人の廷臣をば、ルネサンス時代に見る王子の泰然たる態度を以て、死に至らしめる時である。してみると、父の亡靈が彼に與へた任務を果たすのに、彼を阻止してをるのは何であらうか？これについて提供される說明はやはり、それはこの任務の特別な性質である、といふ事だ。ハムレットは何事でもできる。ただあの男に對する復讐だけは、やり終せない。あの男は自分の父を除き、自分の母の傍に父の地位を占めてをる。あの男はハムレットに小兒時代の排斥された願望の實現を見せてくれてるのだ。ハムレットを馳り立てて復讐を行はしむべき嫌惡の情は、ハムレットの心境では、自己非難、良心の呵責と重り合つてしまつてゐてその非難と呵責とが彼に向つて、お前自身はあのお前によつて罰せらるるべき罪人に較べても、それよりよい人間ではないのだぞと言ひ聞かしてをる。この私の言葉は、ハムレットの精神の中では無意識のままで居るに相違な

い考へをば、意識へ移して、言つてみたものだ。ハムレットをヒステリー症であると言はんとする人があるならば、私はこの私の判斷からの推論としてのみ、それを承認することができる。ハムレットがオッフェリアとの對話で現す性的嫌惡はまた、以上の考察と甚だよく一致する。この性的嫌惡は、この戯曲創作以後の數箇年間にシェークスピアの精神を益々占領して、その頂點の表現が「アゼンスのティーモン」であるといふ話であるが、正にその性的嫌惡がここにもある。ハムレットに於いて吾々の遭遇するものは、勿論作者シェークスピア自身の精神生活のみである。ゲオルク・ブランテス著「シェークスピア評傳」（一八九六年）の記述に據ると、この戯曲はシェークスピアの父の死（一六〇一年）後間もなく、卽ち父を悼む悲哀の情なほ新しいうちに、又吾々はかう想定してもよい――父に關する小兒時代の感じの復活せる時に、創作されたのであつた。」又、シェークスピアの早世した息子がハムネット（Hamnet—Hamlet）といふ名であつた事も、世に知られてをる。ハムレットは息子の兩親に對する關係を取扱うてるのに對し、成立年代から言つてこれに近い「マクベス」は子なき者の狀態を主題の根柢としてをる。とにかく凡ゆる神經症の徵候、夢の如きすらも、判斷、再判斷をなされ得る、のみならずそれを完全に理解するのにはこの判斷を必要とするのであると同じく、凡ゆる純粹なる創作物は作家の精神生活に於ける一にして止ま

らざる動機と昂奮とから發生してゐるものであり、從つて一にして止まらざる判斷を語るものであらう。私はここでは、創作家の精神に於ける最も深い層の動きの判斷だけを試みてみた。――上述せるハムレットの分析的理解に對する暗示を、その後、イ・ジョーンスが完全に纒め上げ、文獻に記載された他の解釋に對抗してこれが辯護をなした。「ハムレットの問題とエヂプス錯綜」E. Jones, Das Problem des Hamlet und der Oedipuskomplex. 1911. マクベスの分析についての其後の骨折は、「イマゴ」誌上の私の論文「精神分析研究による若干の性格型式」及びイェケルスの「シェークスピアのマクベス」に示されてゐる。Einige Charaktertypen aus der psychoanalytischen Arbeit. 1916: L. Jekels, Shakespeares Macbeth. 1918)

大事な近親者の死に關する類型夢の記述を終る前に、私は夢理論一般にとつての是等の夢の意義を、なほ少しばかり、明らかにしなければならない。排斥された願望によつて形づくられてゐる夢思想が凡ゆる檢閲の手を脫し、そして變更されずに夢の中へ入り込んで來るのは、眞に異常な場合のみである。然るにこの類型夢は、かかる異常的な場合が實現されるのを、吾々に見せてくれる。かかる機運を作るのには、何か特別な事情があるに相違ない。私が見出すところでは、この種の夢を作るに當つての好都合は、次のやうな二點に存する。第一に、身邊から遠いと思はれる願望は一つもない場合である。吾々は考へる、そんなことを願ふなんて、「夢にだつて思ひ浮

ぶことぢやあるまい。」それであるからこそ、夢検閲はこの不氣味なものに對しては用心をしてゐない。恰度ソロンの立法は父殺しに對する何等の刑を立てなかつた、と同じやうなものだ。第二に、その排斥されたそして思ひもかけなかつた願望に對して、日中體驗の或る殘物が、その大事な人物についての心づかひといふ形をかりて接合することである。これはこの類型夢に於いて、特別に、屢々起る。そしてその心づかひが夢の中へ入り込むのは、同じ內容の願望を利用しなければならないのではあるが、併しその願望は表面上は日中に惹き起された心づかひの假面を附けてゐてよい。ところでこれ等凡ての手續きが割合簡單に行く。日中にやり出したものを夜の夢の中でただ繼續するだけだ、などと考へるならば、大事な人の死に關する夢は、夢說明とは全く關聯のないものとなり、そして容易に片づけることのできる謎が、要もないのに、頑張ることになる。

この死の夢と恐怖夢との關係を辿つてみるのも、敎ゆるところが多い。大事な人の死の夢では排斥された願望が一つの道を見つけて戾つて來る。その道を通れば檢閲と――檢閲のために蒙らされる歪みとを――脫がれることができるのである。この際に決して缺けることのない隨伴的現象は、その夢の中で苦痛の感覺が感ぜられる事である。恐怖夢が成立するのも同じやうに、檢閲

が全部か又は部分的に征服されてしまふ場合にのみであり、他方に於いて又、若し恐怖が身體的源泉から來た現在的な感じとして既に與へられてをるならば、検閲の征服はそのために一層容易となる。してみると、検閲がどういふ傾向を以てその職務を行ふものであるかは、手にとるやうに明らかとなる。卽ちそれは、恐怖又は其他の不快な情念の形のものの展開を防禦するために、行はれるのである。

私は前に小兒精神の利己主義について述べた。今またそれをここに持ち出して續けるのは、夢も亦この特質を保持してをる、といふ一つの關聯を推想して貰ひたい考へからである。夢は全部必ず利己的である。凡ゆる夢にわが愛する自我が現れる。變裝はしてをるけれども、夢の中で實現される願望は、定まりきつてこの自我の願望である。よしんば誰か他人に對する關心が一つの夢を喚び起すことがあるとしても、それは單に欺瞞的の外觀にすぎない。私はこの主張と矛盾する二三の實例を分析にかけてみよう。

（一）まだ四歳に満たぬ男の子が語つた。彼は大きな一切の燒き肉が載つけてある一枚の飾りをつけた大きな皿を見た。するとその肉が急に全部――切りもしないで――喰べられてしまつた。それを喰べた人は彼に見えなかつた。（夢に大きなもの、澤山すぎるもの、過度のもの、誇張せるものが

出るのも、小兒時代の特質であるかもしれない。小兒は大きくなりたい、何でも大人と同じぐらゐに貰ひたいといふ願ひよりももつと熱心な願ひを知らない。小兒を滿足させるのはむづかしい。小兒は十分といふことを知らない。自分の氣に適つたもの、又は自分においしかつたものの繰返へしを求めて、飽くことがない。小兒が程度を守る、分に安んじる、諦める、などといふことを學ぶのは、やつと敎育の訓練によつてである。人も知るやうに、神經症患者も亦節度なき事と極端へ傾く。)

この小兒が夢に見た贅澤な肉のご馳走を喰べたのは、どこの人間であらうかしらん？　その夢の日の體驗が、その點について、明らかにしてくれるに相違ない。この子供は二三日前からお醫者の指圖で牛乳療養を受けてゐた。ところがその夢の日の夕方に彼はお行儀がよくなかつた。それでその罰としてお夕食を取りあげられた。彼はそれよりも前に一度かういふ絕食治療をやり通したことがあり、その時には大變勇敢に振舞つてみせた。で、彼は何も貰へないんだといふことを心得ては居つたが、併しお腹が空いてをるのを一言でもほのめかすことは敢てする氣にならなかつた。この小兒には、敎育が利き目を現し始めてるのである。それが旣に夢に現れてをる。その夢には夢の歪みの開始が示されて居る。かく豐かな食事、而かも燒肉のご馳走に、その願望を向けてをる人物が、彼自身である事は、少しも疑ひがない。けれどもこの食事が自分には禁ぜら

れてをることを彼は知つてをる故に、彼は空腹な小兒が夢の中でするやうに(私の娘のアンナの苺の夢參照、前出第二二三頁)、自分自らが食事につくやうなことはしないのである。その人物は本名を匿くしたままでをる。

(二)私が或る時見た夢。私はどこかの本屋の陳列棚に、私がいつも買ふのを常としてをる叢書(藝術家評傳集、世界歷史叢書、著名美術都市等)の一册が、好事家裝幀をして出てをるのを見た。その新しい叢書は、著名雄辯家(又は演說)といふ名稱で、それの第一册にはドクトル・レッヘルの名が付いてゐた。

これを分析してみるに、議會の議事進行妨害一派の引伸ばし演說家たるドクトル・レッヘルの名聲が、私の夢の中で私を煩はすとは、どうもありさうにもないことに思はれた。實狀はかうだ。私は二三日前に精神治療のため新しい患者達を收容した、そして今や十時間乃至十一時間も、每日話をすべく餘儀なくされてしまつてゐた。卽ち私自身がさういふ引伸ばし演說家であるのだ。

(三)私が見たもう一つの夢。私達の大學の私と知り合ひの或る先生が言つた。僕の息子がね、あの近眼な奴が、と。それから短かい應答から成り立つた或る對話があつた。更にその後には、第三の夢部分が續いたが、それには私と私の息子達が現れる。ところが、この夢の潛在內容にと

つては、父とか、息子とか、教授とかは、私と私の長男の代りとなつてをる影武者にすぎない。この夢のことはその別の特色のためになほ後に論述するであらう。

(四)優しい心づかひの背後にかくれてをる實際に卑しい利己的感情の一例を、次の夢が與へる。私の友人オットオは風采が悪い。顔は赤ちやけて、眼が飛び出てる。

オットオは私の家のかかりつけの醫者だ。彼の親切に對して私はどうにも酬いる見込みがない。彼は數年來私の子供達の健康を監視してくれ、彼等が病氣になると、見事に治療してくれる。その上何かの口實がありさへすれば、凡ゆる機會に子供等に贈物をしてくれるのだ。この夢の日に彼は訪ねて來た。その時私の妻は、彼が疲れてぐつたりした樣子をしてをるのに、氣がついた。その夜に夢があつて、その夢が彼にバーゼドウ氏病の特徴の若干を與へたのである。夢判斷の際私の方法から自由に離れる人だつたら、この夢を以て、私はこの友人の健康を氣づかつてをる、そしてその氣づかひが夢の中で實現したのだと、解釋し去るであらう。さういふ解釋の結果は、夢は一箇の願望實現であるといふ主張に對して矛盾であるのみでなく、更に夢はただ利己心の動きによつて作られるといふ、もう一つの主張に對しても牴觸するであらう。併しさういふ解釋をする人には、何故に私がオットオの樣子にバーゼドウ氏病の懸念を抱いたのか、を説明して貰ひ

たいものだ。オットオの外見には、かかる病氣の診斷を下すべき、實に微かな謂はれもないのである。で、さういふ解釋に反對して、私の分析は六箇年前に起つた或る出來事から次のやうな材料を提供する。吾々は小さな一團をなして、その中にはR教授も居た、吾々の避暑地から二三時間の距離はなれたN森で、深い暗闇の中を走らしてをつた。少しばかり酒氣嫌だつた馭者が吾々を馬車もろとも崖から轉覆さしたのだ。みんな怪我もなくて助かつたのは、せめての幸せだつたが、一番近くの料亭で一夜を過さねばならないことになつた。そこでは吾々の不慮の災難の知らせが、吾々に對する大きな同情を喚び起した。一人の紳士が出て來て、何なりと用を申し出てくれと言つた。彼はバーゼドウ氏病の明白な特徴をその體に現してゐた――とは言ふが、顏面皮膚の赤ちやけてゐるのと、眼が飛び出てゐるのとだけは全く夢と同じであるが、甲狀腺腫は一つもなかつた――。彼はあなた方のために何かしてあげることはありませんか、と訊いた。R教授はいつもの彼一流の風で答へた。寢衣を貸してくださりさへすれやいいんですがね。するとこの高貴な紳士は、それはお氣の毒です、私にはできません、と言つてそこを去つた。

分析を續けてゐると私に思ひ浮んだのは、バーゼドウは醫者の名であるばかりでなく、ある有名な教育學者の名でもあることであつた。(覺醒時の今ではこの知識は大丈夫ではないやうに感じ

てをる。)ところが、オットォは私が自分の身に何事かが降つて湧くやうなことがあつた場合には、私の子供達の身體上の教育、殊に春機發動期（それから寢衣が出てゐる）に於いて、その監督をしてくれるやうに、頼んでをいた人なのである。然るに私が夢の中で、その友人オットォにかの高貴な紳士、L男爵の病氣徵候を附加して見るとすると、それで私は明らかにかう言はうとするものである。卽ち、私の身に何等かが降つて湧くとしても、子供達のために彼によつてして貰ふことは、恰度あの時にL男爵といふ補助者が親切な申出でをしてくれたのに拘らず、何事もして貰ふことがなかつたと同じに、ないであらう、と。これでこの夢の利己的な混合物はよく發見されたと思ふ。（アーネスト・ジョーンスが亞米利加人の集會の席上で學術上の講演をなし、夢の利己主義について述べたところ、一人の學識ある婦人がこの非學術的な普遍化に對して抗議を申込め、講演者は墺多利人の夢についてだけ批判を下すのならばよい、亞米利加人の夢については何の發言權を持たぬ者だ。わたし一箇人について言へば、わたしの夢は凡べて嚴格に博愛的であると確信してをります、と言つた。——併しこの人種をご自慢の婦人に對する辯解としては、夢は全く利己的であるといふ命題を誤解してはいけませんよ、と申上げたい。大體意識以前の思考の中に現れるものの一切が、夢の中へ（內容竝びに潛在的夢思想の中へ）移動して入り得るのであるから、博愛心の動きにでもその可能性は勿論ある。同じやうにして、或る人に對する優

しい又は戀情的な心の動きが、無意識界にあつて、そして夢の中に現れることもできるであらう。上掲の命題に含められてる正味は從つて、夢の無意識的昂奮のなかには非常に屢々利己的傾向が見出される、そしてその傾向は覺醒生活では征服されてると思はれてるものである、といふ事實に制限されるわけである。)

然るにこの夢のどこに願望實現が潛んでをるか？　オットオに對する復讐などにあるのではない。彼は私のいくつかの夢の中では虐待されるのが、どうせその運命なのである。願望實現は寧ろ次の關係に存してをる。夢の中で私はオットオをL男爵として現してをると同時に、私自身を他の人物、卽ちR教授と同一にしてをる。と言ふのは、恰度あの出來事の時に、RがL男爵から要求したと同じやうに、私はオットオから何かを要求してをる。そしてここに重要點があるのだ。私はこれ以外の點ではR教授と自分とを比較することなどを敢てすることは實際にないのであるが、彼は私と同じやうに學校以外の道を獨立に進んで來て、そして漸く後年に至つて、ずつと昔から當然價してゐた教授の稱號を得てをる。すなはちこれでみると、私もまたいつか教授になりたいのである！　のみならず、その「後年に至つて」といふのさへ、一箇の願望實現である。何となれば、その言葉の示すところは、私は自分で私の男の子達の春期發動期時代をずつと一緒に暮してくるだけ、十分長くこの世に生きて來てをるのであるから。

(III) 試驗の夢

卒業試驗を受けて高等學校課程を終了した者は誰でも、自分が落第した、原級をもう一度やらねばならん等の恐怖夢に襲はれる。その夢の執拗なのを誰でもこぼして居る。學位を持つてる人には、この類型夢は別の形に變つて現れ、お前は卒業口述試驗には合格してをらんのだぞ、などと非難をする。そして彼が眠りながらもそれに對して、いや俺はもう數年前からちやんと開業をしてをるんだとか、大學の無給講師になつてるんだとか、又は役所の課長になつてるんだとか、抗議を申込むけれども駄目だ。それ等は、吾々が小兒時代にやつた不行儀に對して受けた罰の消し去るべからざる記憶なのである。そしてその記憶が吾々の修學時代の二つの接合點、嚴格な驗の行はれる「怒りの日」(dies irae, dies illa) に於いて、吾々の衷心にあつて復活されてるたのである。神經症患者の「試驗恐怖」も、これと同じく小兒の時代の恐怖と結びついて、强大になる。學生であることを止めてしまつた後では、吾々の所罰を司る者は、もはや最初に於いての兩親や傅育者でもなく、又後に於いての學校教師でもない。人生の假藉するところなき因果の連鎖が、これから先の吾々の教育を引け受けてをる。即ち今や、吾々は何事かをきちんとしなかつ

た、整然と仕上げなかつた故に、その結果が覿面に吾々を罰するであらうと期待するやうなことのある度に、責任の壓迫を感ずることのある度に、吾々は高等學校卒業試驗か又は大學卒業口頭試驗かの夢を見るのである——あの試驗の時に誰か、自分は確かな者だと言つて氣おくれせずに居つた者があつたらうか？——

（試驗夢の更に進んだ研究を私は或る同僚の指摘に負うてゐる。私の同僚はこの方面に通じてをる人だが、或る時何か學術上の談話をして居つた際に、彼の知る限りでは卒業試驗の夢はその試驗に合格した人にだけ現れて、それに失敗した者には決して現れて居ない、といふ事を指摘したのであつた。してみると益々確められるやうに、何か或る責任ある成績と或る恥さらしの可能性を次の日から期待してをるやうな場合に現れる恐怖的な試驗夢は、過去に屬する或る機會であつて、その際に大きな恐怖が不當なものだつたとわかり、結果によつてその不安が打ち破られたことがあつた、さういふ一機會を過去のうちから探し出してをるのであるかもしれない。これは、覺醒時の吟味が夢內容を誤解することがあるのに對する、大變に著しい一實例であらうと思ふ。夢に對する憤慨と解せられる抗辯、だが俺はちやんとドクトルになつてるんだぜ云々は、實際はその夢が施してくれる慰安であるかもしれない。そしてその意味は、何も明日のことなんか恐れ

なくといい、考へ出してご覽、お前は卒業試驗に對して、どんな恐怖を抱いたことだつたらう、而かもあの時には、何ともなかつたぢやないか。今ではお前はちやんとドクトルだ、云々といふのであるかもしれない。併し吾々が夢に附け加へる恐怖は、その日中體驗の殘物から發生してはゐる。

私は自分に對し又他人に對してこの解釋の實驗をやつてみた。その實驗は十分なほどの數ではないけれども、ようく一致した。例へば、私は法醫學の口頭試問受驗者として落第した。私は植物學や動物學や又は化學だつたら夢の中でも十分屢々試驗をされた。これ等の學科の時は私は當然なわけのある恐怖を抱いて、試驗を受けに行つたのだ。だが武運强いのか、それとも試驗官のお情けかによつて罰は免がれて來てゐたのであつた。然るに、法醫學といふ題目が私の夢に現れて、私を困らしたことは決してなかつたのである。高等學校試驗の夢では、私は定まりきつて歷史の試驗を受けた。歷史は實際の試驗では見事に合格したのであつたが、併し實は私の親切な敎授が私から敎授に返へした問題紙に、私は三問のうちの第二を指の爪で棒を引いて消して、先生はこの問題を主張なすつてはいけませんといふ警告としたのを、見逃がしてくれなかつたお蔭であつた。私の患者のうちに、高等學校卒業試驗を受けずに退學し、そして後にその追試驗に合格

した。その後併し士官試驗には落第して士官にはならずにをるのが居る。彼が私に語つたところでは、彼は前の試驗の方はよく屢々夢に見るが、後の試驗の方は決して見ないとのことである。

私は前に類型夢の大多數にとつて特質的なものであるとして、面倒な點を擧げて置いたが、試驗夢もやはり判斷にこの面倒を與へる。夢みる當人が吾々の使用に提供してくれる聯想方面の材料が、判斷にとつて十分足りることはただ稀れにしかない。この種の夢をもつとよく理解するのには、もつと多數の實例を集めてみる必要がある。最近に私はかの、お前はちやんともうドクトルだ云々の文句は、單に慰藉を藏してをるばかりでなく、更に或る非難をも暗示してるものだ、といふ確かな印象を得た。その非難の文句はかうであるかもしれない、お前は今ではもう年を取つてをる、人生に於てもうそれだけ過して來てをる、だのに、まだやつぱりそんな馬鹿なこと、子供じみたことをやつてをる、と。かく自己批判と慰藉とを混合する方が、試驗夢の潜在內容には適はしいかもしれない。さういふことにすると、その「馬鹿なこと」や「小供じみたこと」のための非難が、最近に分析したいくつかの實例に於いて、叱責された性的行爲の反復に關係してをつたとしても、それはもはや著しいことではない。

（「高等學校卒業試驗の夢」の判斷の最初の主唱者はシテーケルであるが、彼はこの夢は定まりき

つて性的試練と性的成熟に關係してをるといふ意見を代表してをる。私の經驗は屢〻これを實證することができた。)

第六章　夢の仕事

夢問題を解決せんとする從來の試みは總べて、記憶の中に與へられてをる顯在的夢內容へ直接に關係をつけて、その內容から夢の判斷を得ようと骨を折つたか、或は、とても判斷が得られなければ、その夢についての批判を、夢內容の指摘によつて、作りあげようと骨を折るか、したのであつた。ただ吾々一派だけは、そんなのとは異つた事情を相手に取るのである。吾々にとつては、夢內容と吾々の觀察の結果との間に、或る新しい精神的材料が介在することになつてゐる。卽ち、それは吾々の方法を以て得た潛在的夢內容であり、又は夢思想とも呼ぶ。顯在的夢內容からでなく、この潛在內容からして、吾々は夢の解釋を展開させたのであるから、吾々には新しく一つの任務が生じてくる。これは以前には存在しなかつたものだ。潛在的夢思想に對する顯在的夢內容の關係を調査し、いかなる經過によつて、潛在思想が顯在內容となつたかを、跡づけるべき任務である。

夢思想と夢內容は、恰度同一の內容を、二つの異つた言語を用ひてなした、二樣の描寫のやう

なものである。又は、もつと適切に言へば、夢內容は夢思想をば他の表現法へ移したものであつて、それの記號や仕組み方を學び知らうとするには、原作と飜譯とを比較してみなければならないものであるやうに思はれる。夢思想の方は、吾々がそれを聞き知れば、譯なく吾々には會得のいくものである。夢內容は謂はば一種の象形文字で作られてをり、それの記號は一々夢思想の言語へ飜譯される。若しこれ等の記號をば、その記號としての關係に從つて、讀むことをせずに、その影像としての價値に從つて讀まうとでもしたならば明らかに迷路へ踏み入ることであらう。例へば、こんな判じ繪があるとする。一軒の家、その屋根の上にボートが一つ見える。ばらばらな文字。それから走つてる人物一つ、人物の頭がなくて、略符號（アポストローフ）がついてる、等々。これを見た私は、思はずも、かかる組み合はせとその部分部分を以て馬鹿げたものと宣言する、批評をやりだすかもしれない。ボートがどこかの家の屋根に乘つかつてることなど、あるものか、頭のない人物が走れるわけはない。それにこの人物は家よりも大きい。そしてこれ全體が、どこかの風景を現すつもりだとしたなら、そんなばらばらな文字などが、この場合、適當したものぢやない。だつて、自然界そのものには、そんな文字など出て來はしないぢやないか、と。この判じ繪を正しく判斷するに至るのは、勿論次の如くにして、始めてできることである。卽ち、私はその全體

とそれの細部に對して何等左樣な註文を出さずに、凡ゆる象形の代りに、その象形に基いて何等かの因緣をもつて現され得る、或る語なり、又は或る綴りなりを置いてみることに、骨を折るのである。かやうにして結合される文句は、もはや無意味ではない。却つて、實に美しく且つ意味深い詩句であることを示し得る。ところで、夢とはかやうな判じ繪なのだ。然るに夢判斷の方面に於ける吾々の先輩は、その判じ繪をば、繪圖的構成として判斷する、さういふ過失を犯して來たのであつた。さういふ物としてみるから、夢は彼等には馬鹿らしく且つ無價値なのである。

第一節　壓縮の仕事

夢內容と夢思想とを比較する際に、研究者にとつて明瞭となる第一のものは、そこに或る大がかりな壓縮の仕事がなされて居つた、といふ事實である。夢思想の廣がりと內容充實に較べたなら、夢は狹小で、貧弱で、簡潔である。夢の內容だけを書き誌すとすれば半頁を充たすものが、その夢思想を包含する分析となると、六倍、八倍、十二倍もの紙面を必要とする。この比例は、いろんな夢によつて、異つてはをるが、私が檢査し得た限りに於いては、かかる比例の存する意味には、決して變りがない。行はれつつあるその壓縮の程度を、相當以下に、評價するのは、普

通一般であるが、それは明るみへ持ち出だされた夢思想を以て完全な材料だと、考へるからのことであつて、實はもつと判斷の仕事を進めるならば、その夢の背後に隱蔽された、新しい、いくつもの思想が暴露され得るのである。吾々は前に次の事を引證せねばならなかつた。卽ち、本當を言ふと、或る夢を完全に判斷し得たとは、決して確信が持てるものではない、といふ事を。その解釋は滿足であり、缺け目のないものだ、と思はれる時でさへも、同じ夢によつて、猶もつと別な意味が、明らかにされることは、必ずあり得る。それであるから、壓縮の關係量は――嚴密に解すると――定めがたいものである。夢內容と夢思想との間に存するこの不均衡を引き合ひにするならば、夢形成の際に精神的材料の甚大な壓縮が行はれるといふ推定をなすべきだとする主張に對しては、或る抗議を持ち出して、そして認めて貰ふことができるかもしれない。この抗議は、第一印象にとつては、十分誘惑的にも思はれる。それはかうだ。吾々は一晩中大變澤山の夢を見たのだが、その後で大部分を忘れてしまつた、といふ感じをまことに屢々抱く。してみると吾々が目を覺ました時に思ひ出す夢は夢の仕事全體のうちの單に一殘物にすぎないのでないか。そしてこの全體的夢の仕事は、若し吾々にして、それを完全に記憶することができるのであつたならば、包含する範圍に於いて、夢思想に對し十分匹敵するものであるのではないか、と。この

抗議の一部は確かに當つてをる。夢は、それを目が覺めるとすぐに思ひ出さうと努めるならば、一番忠實に再現される、夢の記憶は夕方に向へば向ふほど益々缺け目のあるものとなる、といふ觀察は、誤りではない。併し他方に於いて、次の事も認識される。再現することができるよりも遙かにより多く夢を見たのだ、といふ感じは、非常に屢々、或る幻想に基いてをるのである。この幻想の成立については、後に說明を與へるつもりである。その上に、夢の仕事に存する壓縮の假說は、夢の忘却なる可能性によつては、動かされてゐない。と言ふのは、それは、夢のうちで保存された箇々の部分に屬する表象群によつて、實證されるからだ。夢の或る大きな部分が記憶にとつて事實失はれてしまつたならば、そのために、吾々が夢思想の或る新しい系列へ達すべき道は、閉塞されたままでをることにもなるであらう。その失はれた夢部分が、同じやうに、保存された部分の分析によつて知られる夢思想にのみ關係するものだ、といふ期待も亦、少しの根據のないものである。（夢に於ける壓縮についての指摘は、多數の著述に見出される。デュ・プレルはその著第八五頁に於いて、表象系列の壓縮過程が行はれた事實は絕對に確實である、と述べて居る。）

夢內容の箇々一つ一つの要素に對して、分析は實に澤山の思ひ付を持ち出してみせる。この多すぎるほど澤山の思ひ付を見せられては、讀者のうちには、次のやうな重大な疑ひを起す人も、

澤山とあることであらう。卽ち、分析の際に、追補的に、思ひ浮ぶやうなものを全部、夢思想のなかに數へる、と言ふのは、それを全部、夢思想だと認定することは、してよいものであらうか？それ等の思想全部が、果して既に睡眠狀態の間に働いてゐたものであり、そして夢形成に力を添へたものであつたらうか？　それよりも寧ろ、夢形成に對してあづかり關しなかつた、新しい思想結合が、その後の分析の間に生じてゐるのではないか？　私はこの疑ひに對しては、ただ條件付きで贊成することができる。箇々的な思想結合が分析の間に始めて生じる、といふのは、勿論正しい。併し吾々がいかなる場合にも確信し得るところでは、かやうな新しい結合が行はれるのは、既に夢思想の中に於いて別の方法で結合してしまつて居つたやうな、さういふ思想の間にだけ、限られてをるのである。謂はば、この新しい結合は、他のそして一層深いところにある結合方法の存立によつて、可能ならしめられた傍系聯絡、短絡であるのだ。分析の際に發見される多すぎるほどの思想群については、それ等が既に夢形成の際にも働いてをつた事を、承認せねばならない。何となれば、夢形成に對しては聯絡外にあると思はれる、さういふ思想でも、その一つの連鎖を十分たぐつてみるならば、その時には、突然にも、或る思想に行きあたり、その思想は、夢內容に代表されてゐて、その夢の判斷にとつて缺くべからべるものであり、而かもそれは

かの思想の連鎖をたぐるに非ざれば、見出しがたいからである。これについては、例へばかの植物學の著述の夢を參考してみなさい。私はあの夢の分析を、完全には報告して置かなかつたけれども、あれは、或る驚嘆すべき壓縮作用の結果生じた夢と、思はれるものである。

ところで、その次の問題は、夢作用に先だつ睡眠の間に於ける精神の狀態を、どう考へてみたらいいか、である。總ての夢思想は、相竝んで存するものか、それとも彼等は、次々にと走つてをるものか、或は又、相異した中樞からして、色々な思想推移が同時的に行はれ、そして、それが後に合流するものか？私の考へるところでは、夢形成に際しての精神的狀態について、何か確然たる考へを作つて置く必要は、未だ吾々にはない。ただ、吾々は次の事を忘れないで置かう。問題の中心は無意識的思考である事。及びこの經過は、吾々が故意的な、意識を隨伴した思索の際に、吾々の心理に知覺するやうな經過とは、異つたものであり得る事を、忘れないで置かう。

併し、夢形成が或る壓縮作用に基いてる事實は、確乎として搖り動かすべくもない。さて、この壓縮がいかにして成立するか？

發見される夢思想のうちで、ただ極めて少數のみが、その表象要素の一つによつて、夢の中で代表されてをる。この事を考量するならば、當然かう推論してもよいであらう。即ち、夢は夢思

想の忠實な飜譯でもなく、一點一點と正しいその投影圖でもない、却つて、それの非常に不完全な、そして缺け目のある再現であるのを以てみると、かの壓縮は省略の方法で行はれる。この見解は、間もなく吾々が氣づくであらう如く、甚だ不滿足なものである。それでも吾々は、先づ今のところは、この見解に立脚して、そして自から問うてみる。夢思想のうちのただ僅少な要素のみが、夢内容の中へ這入るのだとすれば、その選擇を定めるのは、いかなる條件であるか？

これについての解釋を得るため、その問題となる條件をば無論果して居るに相違ない夢内容要素に、吾々の注意を向けてみよう。この調査にとつては、或る特別に强い壓縮がその形成に貢獻をなしてをる夢だつたらば、最も好都合な材料であらう。そこで私が選び出すのは、

（一）第一八六頁に報告した植物學の著書の夢である。

夢内容　私は植物の或る（それが何であるかは不確定のままにさせられてをる）一種について一書を著した。その本が私の前に置いてある。私はその頁をめくつてると、恰度挿入してある一枚の彩色繪圖のところを開けた。本には、その植物の乾腊標本が一つ綴ぢ込んである。

この夢の最も目に立つ要素は、植物學の著書である。これはその夢の日の印象から發してをる。或る本屋のショーヰンドウで私は實際に、「シクラーメン」種族についての或る著書を見たのであ

つた。夢内容の中には、さういふ種族の名は、擧げられてゐない。そこにはただ、著書と植物に對するその關係が、殘存したにすぎない。「植物學の著書」は直ちにそれが、嘗て私が書いたことのある、コカインに關する研究と關係することを示してくれる。コカインからして、思想の聯絡は、一方は、祝典記念出版書、及び大學實驗室に於ける、或るいくつかの出來事へとつながり、他方は、私の友人で、コカインの利用發見について關與するところあつた、眼科醫ドクトル・ケエニヒシタインへとつながつて行く。このドクトル・Kといふ人へ更につながるのは、私が彼を相手に、前日の夕方行つた、そして中途で人に妨げられた會話についての記憶と、醫師としての同業者間で診療をする時の報謝についての、いろいろな考へとであつた。ところでその會話が、この夢の本來の實在的な刺戟である。シクラーメンに關する著書も、同じやうに、或る實在性のものではあるが、併し無關心的性質のものだ。私の見るところでは、夢の中の「植物學の著書」は、日中の二つの體驗の間の或る中間的共通物たることがわかる。そしてそれは、無關心的な印象から、形を變へないままで、採用されたが、旺んな聯想結合によつて、精神的に有意義な體驗と結び合はされたのである。

然るに、「植物學の著書」といふ、組み立ててある表象ばかりでなく、その表象の要素の各自、

「植物の」及び「著書」に分割すると、それも亦、さまざまな聯絡のお蔭で、夢思想の紛糾の中へ、益々深く入りこんで行く。「植物の」表象要素には、ゲルトネル（Gärtner 語としての意味は植木師）教授、彼の花麗りの妻、フロラ（花の義）といふ名の私の婦人患者、それから良人が贈物にするのを忘れた花の話を、私がしたことのある、あの婦人、それ等についての記憶が這入つてをる。更に復た、ゲルトネルから大學實驗室、及びクエニヒシタインとの對話へ及ぶし、この對話の中には、今擧げた二人の婦人患者も出てくる。花の逸話を持つてるかの婦人からは、思想の一つの道が分岐して、私の妻の寵愛の花に及ぶ。この私の妻の寵愛の花への道の、もつと別な出發點は、日中にちらと見た、かの著述の表題に存するものである。その外に、「植物の」は、高等學校時代の或る挿話と大學時代の或る試驗を思ひ出さしめ、ケエニヒシタインとの會話に持ち出された一つの新しい題目、私の好事癖といふ題目は、私が笑談にさう名づけた私の好きな花、朝鮮薊を媒介として、かの婦人患者が貰ひ得なかつた、忘れられた花から發する思想の連鎖へと結びつく。「朝鮮薊」の背後には、一方には伊太利についての記憶、他方には或る小兒時代の場面についての記憶が、匿れ潜んでをる。その後者に於いて私は、その後密接となつてをる書籍に對する私の關係の、皮切りをしたのであつた。かうしてみると、「植物の」といふ表象は、一箇の眞

實な接合點をなしてゐて、その點に於いて、この夢のために多數の思想運行が會合したのであり、そしてかの會話に於いて、これ等の思想が、正當にも聯絡づけられたのである事は、私の斷言し得るところである。その有樣は、さながらかの織工の見事な手練に見るやうな、一種の思想製作所の活動である。

「一足踏めば、千の絲が動く。
梭があつちへ、こつちへ飛ぶ。
絲は目にも留まらず、するすると、一
一打ちすれば、千の結びが出來る。」

夢の中の「著書」は復た、二つの題目に觸れてをる。私の研究の偏つてる事と、私の好事癖の贅澤な事とに。

この第一例の吟味からして受ける印象は、「植物の」と「著書」とが、夢內容に採用されたのは、次の理由からである、といふことであらう。卽ち、この二つは、大部分の夢思想に對して最も潤澤なる接觸を持つ事を立證し得る、從つて、夢思想の甚だ多くが、其處で會同する接合點を現すものであるがため、この二つは、夢判斷に關して意味多きものであるがため、なのである。吾々

は、この說明の根柢となる事實を、もつと別にも言ひ現すことができ、かう言つてもよい。夢內容の要素は、どれであつても、夢思想の中にあつて超限定的に、といふのは、幾通りにも代表されてをることを示してをる、と。

この夢の他の成分を、それが夢思想の中へ出現する事について、吟味してみるならば、吾々はなほもつと、知るところあるであらう。私が開けてみたかの彩色繪圖は、(第一八九頁の分析を參照せよ)、私の硏究仕事に對してなした同僚達の批評、といふ新しい題目と、私の好事癖、といふ既に夢の中で代表されてをる題目と、その外には、私が彩色繪圖の附いてをる一册の書物を千切り裂いた、かの小兒時代の記憶とへ、關係してをる。植物標本見本は乾腊標本集についての高等學校時代體驗に觸れてゐて、この記憶を特別に目立たしめる。かくして私は、夢內容と夢思想との間の關係はいかなる性質のものであるか、を悟るのである。卽ち、夢の要素が夢思想によつて幾通りにも限定されてをるばかりでない、夢の中ではまた、箇々の夢思想が數多の要素によつて代表されてもゐる。聯想の道は、夢の一要素からして、數多の夢思想へ案內してくれるし、一つの夢思想からして、數多の夢要素へ伴れて行つてくれる。さうしてみると、夢形成の行はれるのは、箇々の夢思想又はその一群が、夢內容のために或る大要を與へてやり、そして例へば、或る

住民團體から代議員が選ばれると同じやうなぐあひに、最も手近かな夢思想が代表として、或る最も手近かな大要を提供する、さういふやうにして行はれるのではない。さうではなくて寧ろ、夢思想の全部分が或る一種の推敲を受ける、この推敲の後に、例へば記名候補者制度による選擧にも似たやり方で、要素のうちの一番立派な後援者の最も多いものが、夢內容へ入り込むために候補に立つ、といふやうにして、行はれるのである。いかなる夢を同じやうに分析してみても、私は恒に、次のやうな同一の原則が實證されるのを發見してをる。卽ち、夢要素は夢思想の全部分から作られてをる事、及びその要素のどれでもが皆、夢思想との關係に於いては、幾通りにも限定されて現れてをる事。この原則は、いかなる夢にあつても、實證される。

夢內容と夢思想とのこの關係を、もう一つの新しい實例によつて證據立ててみるのも、確かに餘計なことではない。この實例は、兩者相互の關係が、特別技巧的に、絡み合つてをる點で、頭角を現すものだ。それは、屋內恐怖症に罹つたため私が診療してやつた、或る患者の見た夢である。私は次に揭げたやうな標頭をつけたが、この除外例的に奇警なる夢の仕事を、何故私がそんな名で呼んだか、その動機は間もなく明らかになるであらう。

(二)「美しい或る夢。」

「彼は大勢と一緒になつて、X通りへ車を走らした。その通りには、ささやかな料理店がある(この點は正しくない)。そこの中で芝居をやつてゐた。彼は或る時は見物人で、或る時は役者になつてをる。最後に、さあ、着物を着て、みんなまた、町へ出るんだ、といふことになつた。一座の一部は平土間のところへ行けと言はれた。他の一部は二階へあがつた。すると、喧嘩が起きた。上の人達は、下の人達がまだ片づかないので降りて行かれない、と言つて、憤り出した。彼の兄弟は上に居たし、彼は下に居つた。そして彼は、こんなに混雜しちやと言つて、兄弟のことを憤慨した。(この部分は不明瞭である)。その外、既にそこへ着いた時に、誰が上に、誰が下に居るかは、定められ、分けられてゐたのであつた。やがて彼は、そのX通りが町の方へ向つてなしてをる丘を、獨りで、越えて居つた。彼には歩くのが非常に難儀で、骨が折れて、そこから動けないほどであつた。一人の中年の男が彼と道伴れになつて、伊太利の王を惡口した。丘のはづれへ來ると、その時は前よりもずつと樂に歩けた。

丘をのぼる難儀があんまり明白なので、彼は目を覺ましたのちになほ暫くの間はこれが夢か、現(うつゝ)か、疑つたくらゐであつた。

顯在內容から言つたならば、この夢を責める人は、殆どあるまい。私はこの夢の判斷を、正規

とは反對に、夢みた本人が最も明白だと言つた部分から、やり出してみようと思ふ。

夢に現れ、そして、多分夢の中で感ぜられたらしい難儀、即ち呼吸困難（ディスプノエ）の下に於ける骨の折れる丘のぼりは、この患者が數年以前に、實際に、現した症候のうちの一つであり、そして、その當時には、他の現象とも關聯して、(多分はヒステリー症的に誤想された)結核病と關係あるものと、考へられたのであつた。吾々は、夢に特有なこの歩行障害の感じとは、かの露出夢によつて旣に馴染みであり、この夢にも復た、この歩行障害が、何か他のものの描寫の目的のために、いかなる時にでも、ちやんと用意された材料として利用される事實を、見出すわけである。丘を歩くのが、初めにはいかに困難であつたか、そして丘のはづれになると、いかに樂になつたか、を物語るこの夢内容の部分が、その話を聞いてゐる時に、私にアルフォンス・ドォデエの「サッフォー」のあの有名な、美事な、發端のところを、思ひ浮ばしたのであつた。この作品では、若い男が、愛人を抱きかかへて、階段をのぼつて行く。始めの間は、鳥の羽のやうに輕い。併しのぼつて行くに從つて、愛人の體は、彼の兩腕の上で、益々重くなつてくる。この情景は、賤しい素性と疑はしい過去を持つた娘などを相手に、眞劍な愛情を浪費したりしないやうにと、青年を戒しめんがため、ドォデエが描寫した戀愛關係の經過にとつては、模範的なものだ。私の患者が少し前ま

で、劇場の或る婦人と戀愛關係を結んでゐたけれども、それとはその後切れてしまつた事を、私は承知してゐた。それを承知してはゐたものの、私の判斷の思ひ付が肯定されるとは、期待してゐなかつた。その上、サッフォーの場合とは、順序が逆になつてゐた。夢では、登るのが初めには難儀で、後で樂になる。小說の方では、最初に樂だと思はれた事が、おしまひには、重い厄介物だとわかるのは、それはただ、象徵のために用ひられたにすぎない。私が驚いたことには、この患者が、その判斷は、彼が前の晩に劇場で觀た芝居の內容と、甚だよく一致してる、と言つたのである。その芝居は「ヰーンの場末」といふ題名で、或る娘の閱歷を取扱つてゐた。娘は最初には行儀よい者ではあつたが、やがて花柳界に身を入れて、身分の高い人達と關係が出來た。そのために「高いところへ來た。」併し遂には、益々「下へ降りて行つた。」この芝居がまた、私の患者に數年前上演された或る芝居を思ひ出さした。それは「段から段へ」といふ題名のものであつて、その廣告には、多數の段々が附いてる一つの階段が、見うけられたのであつた。

さて、もつと判斷を進めよう。X通りには、彼と最後の、因緣の多い關係を結んでゐた女優が住んで居つた。この通りには料理屋は一つもない。然るに、彼がその夏の一部を、この女優のために、ヰーン市で暮したとき、その近所の或る小さな旅館に投宿した。（譯者曰く、ここに absteigen

といふ語が使つてある。この語は投宿するの外に、降りる、くだるの意がある。）その旅館を去る時に、彼は馭者に向つて言つた。せめて毒蟲にとつつかれなかつたのが幸せさ！と。（これは併し、彼の恐怖症の一つでもある。）すると馭者が言ふには、こんなところへ泊れるもんかねえ！だつて、これや旅館ぢやないですぜ、實はほんの料理宿なんでさ。」

その料理宿なる語に彼の記憶で結びついたのは、或る詩句であつた。

「いみじくも優しき宿に、
われ近頃客となりき。」

ウーラントの詩の中の宿は、併し一本の林檎の樹陰である。ところで、第二の詩句が思想の連鎖を續ける。

ファウスト（若き魔女と踊りつつ）
嘗つてわれ、美しき夢を見たりき。
林檎の樹一つ見え、
二つの林檎輝かしく實れり。
われこれに釣られ、よぢ登りぬ。」

「お身達はいとも林檎を好むものかな。
　そはパラダイスの昔よりなり。
　わが庭にもかかる林檎實れるは、
　うれしきことと思ふなり。」

林檎の樹と林檎が何を意味してゐるものか、それについては少しの疑ひもあり得ない。美しい乳房にふくらむ胸が、魅力漂ふなかに、高く立つて居つた。その魅力によつて、かの女優は私の患者を吸ひ付けてゐた。

分析を綜合してみた後に吾々は、夢は小兒時代の或る印象へと溯るものである事を、十分な理由を以て認定したのであつた。若しもその認定が正しかつたとすれば、この場合の夢は、今間もなく三十歳にならうとするこの男の、乳母に關係するものに相違なかつた。小兒にとつては、乳母の懷ろは、事實、料亭である。乳母並びにサッフォーは、少し前に緣を切つた愛人への暗示として、現れてくる。

夢内容に患者の(年上の)兄弟も出てくる。而かもこの兄は上いに居り、彼自身は下いに居る。これ

が復た、實際の事情の逆である。なぜならば、私の知るところでは、兄はその社會上の地位を失つてしまつたが、私の患者は地位を維持してをる。彼はこの夢內容を物語る際に兄は上に居る、自分自身は地べたに居る（parterre）、と言ふことを避けたのであつた。なぜと言ふに、そんなことを言つたら、それは明白すぎるぐらゐに、明白な言ひ分だらうからなのだ。なぜと言ふに、吾々の國では、人が財產と地位を失つてしまふと、その人は「パルテル」だと言ふのであるが、それは「下へ降りた」（零落した、heruntergekommen）といふ語を用ひるのと同じに、誇張して言ふのである。ところで、夢の中のこの箇所に、逆に現されてゐるものがあるのは、意味あることに相違ない。この逆の現れ方は、夢思想と夢內容との間の、或る別の關係にもまた、あてはまるに相違ない。この逆をいかに解すべきか、それについてはちやんと指示するものがある。この夢を見た男が登るに際しても復た、サッフォーとは逆の振舞をなしてをる、この夢の終りの方に、それが明らかに與へられてをる。さうしてみると、いかなる逆が意味されたものかは、容易にわかつてくる。卽ち、サッフォーでは、男は自分と性的の關係にある女を抱きかかへてをる。從つて夢思想での中心となるのは、それとは逆に、男を抱きかかへてる女である。そしてかかる場合は、ただ小兒時代に於いてのみ、起り得るものであるから、この女は、乳呑兒を重さうに抱いてをる乳母と關係するこ

とになる。さういふわけで、この夢の結末は、サッフォーと乳母を同一の暗示で現し出すのを、巧みにもやり遂げてをるのである。

ドオデエの小説がサッフォーなる標題を選んでつけて居るのは、レスボス（譯者曰、古代希臘戀愛女詩人サッフォーの生地なりと言はるる島の名）の或る風俗と無關係ではないと同じに、この夢で人物が上と下で何かやつてをる部分は、性的內容の空想を示すものであり、その空想は、この夢をみた患者の心を占め、且つ抑壓された慾情として、彼の神經病に對し關係外に立つものではない。夢判斷そのものは、この夢の中にかく描き出されるものが空想であつて、事實的事件の記憶ではない、といふ事を教へてはくれない。夢判斷が提供するのは、ただ或る思想內容に止まり、その思想內容を確める仕事は當事者に任せるものだ。夢では――啻に夢に限らず、夢よりももつと重要な精神的構成物の生成に際しても、同じことであるのだが――事實的出來事と空想された出來事とは、さしあたり同一價値のものとして現れる。大勢と一緒に、といふのは、既に吾々が知つて居るとほり、祕密を示すものである。兄弟は、「空想を以て溯る作用」によつて小兒時代場面に逆轉された、その以後の凡ゆる戀仇の代表者にほかならない。伊太利王の惡口を言つたかの紳士の挿話は、或る最近的な、そしてそれ自身としては無關心的な體驗を媒介として、やはり復た、

下級階級の人物が上流社會へ押し入らうとする考へに關係してをる。それは恰も、ドォデエが靑年に與へてをる警告に對し、それと類似の、乳呑兒にあてはまる、一つの訓戒を添へようとでも、するかのやうである。(この夢を見た男の乳母の境遇なるものが、空想的なものであることは、その乳母が、この場合には母親であつたといふ、具體的に、確かめられた事情によつて、實證される。その外に、第三五三頁に擧げた逸話の中の若い男、自分の乳母の境遇をもつとよく利用してやらなかつたのが殘念だ、と口惜しがつた若い男の逸話を、思ひ浮べて貰ひたい。これが恐らくは、この夢の源泉であつたかもしれない。)

夢形成の壓縮についての硏究に役立つ第三の實例を、用意して置くため、私はここに或る夢の一部分的分析を報告しよう。この夢を敎へてくれたのは、精神分析診療中の或る中年の婦人であつた。患者はひどい恐怖症に苦しんでゐた。その恐怖狀態に準じて、彼女の夢も性的思想材料を實に澤山に含んでゐたが、彼女はそれと知つた最初にはひどく驚きもし、また氣味惡くも思つたのであつた。私はこの夢の判斷を、終りまで、やり通すわけにはゆかない。從つて夢材料は、目に見えて明らかな聯絡は持たない數多の群に、分裂するやうに思はれるであらう。

(三)「こがね蟲の夢。」

夢の內容。 彼女は一つの箱に二匹のこがね蟲を入れて置いたことを思ひ出す。あれは放してや

らなければならない。でないと、窒息してしまふ。彼女は箱を開ける。蟲はすつかり弱つてゐた。そのうちの一匹は、開けてある窓から飛んで行つた。併しもう一匹は、彼女が窓を閉める時に、窓の扉でつぶされてしまつた。彼女は窓を閉めるやうに、誰かから頼まれたのである（嫌悪の現れ）。

分析。 彼女の夫は旅行中であつた。十四歳になる娘が彼女の傍の寢床に眠つてる。夕方に娘が一匹蛾が水呑みコップへ落ちてる、と注意してくれたのに、彼女はそれを取り出すのを怠つた。そして朝になつて、その哀れな小さな動物を可哀相だと思つた。彼女が夕方讀んだ本に、子供達が一匹の猫を煮え立つ湯の中へ投げ込む話があつて、その動物のびくびく痙攣する有樣が描かれてゐた。この二つが、それ自身としては無關心的な夢の原因であつた。動物に對する殘忍の題目は、その後も、彼女の心を占めてゐた。數年前、彼女が娘等と或る地方で夏を過して居つた時、娘は動物に對してひどく殘忍であつた。娘は蝶類の蒐集を企てて蝶を殺すのだから砒素をくれ、と彼女に賴んだ。或る時は、一匹の蛾が體に針を突き通されたまま、なほ暫くの間、部屋の中を飛び廻つてゐたこともあつた。又或る時は、蛹をかけさせるため飼つて置かれた幼蟲が餓死してゐるのを、發見されたこともあつた。この娘には、もつと年弱な頃に、こがね蟲や蝶の翅を引き

むしるくせがあつた。今日そんなむごたらしい仕業を見たら、娘は怖れて後ずさることだらう。娘は今ではそれほど善良な氣立てになつてをるのだ。

この對照が彼女を考へさせた。この對照は、もつと別な對照、ジョージ・エリオットが描寫したアダム・ベーデの、性格にあるやうな、外觀と思慮との對照を思ひ出さした。美しいが併し虚榮な、全く馬鹿な一人の少女、それと並んで一人の醜い、併し高貴な少女。馬鹿な少女を誘惑する貴族、自ら高貴な感情を持ち又高貴な振舞をする勞働者。人の外觀から心を見てとることはむづかしいものだ。彼女自身が肉感的な願望に惱まされてることを、誰が彼女から見てとれるものか？

娘が蝶類蒐集の計畫を立てたと同じ年に、その地方はこがね蟲のひどい被害に苦しんだ。子供達は、こがね蟲を滅茶苦茶に追ひ廻しては、それをむごたらしくつぶし殺した。彼女はその頃、こがね蟲の翅をむしり取つて、その身を喰べてゐる、或る人間を見たこともあつた。彼女自身はこがね蟲とは關係のある五月に生れ、又五月に結婚してるのである。（譯者曰、こがね蟲 Maikäfer は、字義通り譯すれば五月の甲蟲である。）結婚後三日目に、彼女は實家の兩親へ手紙を出し、自分がいかに幸福であるかを書いてやつた。けれども彼女は決して幸福ではなかつたのである。

夢の前の晩に、彼女は古手紙を搔き探り、眞面目なのや、滑稽なのや、いろんな手紙を家族の前に讀んで聞かした。その中には、彼女が少女であつた頃、ちやほやと言ひ寄つた或るピアノ敎師の非常に可笑しい手紙もあつたし、彼女を慕うてゐた或る貴族の手紙もあつた。(これがこの夢の元來の刺戟である。)

彼女の娘達の一人が、モーパッサンの惡德な本を手に入れた事を、彼女は自らに責めてゐた。(若い少女にとつては、かういふ本を讀むのは、毒である。彼女自身若い頃には、禁ぜられた本を讀んで、いろんなことを覺えこんだ。)娘がくれと言つた砒素は、彼女をして、「ナバブ」の中のド・モラ公に青春の力をとり返へさしてくれた、かの砒素の丸藥を思ひ起さしめた。

「放してやらねばならん」といふのについては、彼女に「魔法の笛」の中の一節が思ひ浮んだ。

「お前に愛を强ひることはできぬ、

さりながら、お前を放してはやらぬ。」

「こがね蟲」については、更にクライストの戲曲「ケートヘン」の句が思ひついた。

「お身はわたしにこがね蟲のやうに惚れてをる。」

(なほそれから先の思想進行が、同じ詩人の戲曲「ペンテジレア」にも、通じてをる。卽ち、愛する男に對す

る殘忍である。)

その間へ、「タンホイゼル」の中の句、「お身は邪しまなる情に燃えたる故、云々——。」

彼女は、不在中の良人についての憂慮の中に暮してゐた。旅行中に彼の身に何事かが持ちあがりはしないかといふ恐怖が、日中の夥しい空想に現れて來た。少し前に、分析診療中、彼女は自分の無意識的思想のなかに、良人の「老人らしさ」についての或る不平を發見したのであつた。この夢が蔽匿してをる願望思想は、次の事實を語つたならば、恐らく一番よく推量されるかもしれない。卽ち、彼女はこの夢の數日前に、仕事の最中に突然浮んだ命令の思想によつて、びつくりさせられた。それは自分の良人に向けられたものであつた。「首を縊つてしまへ。」その二三時間前に彼女は何かで、縊死の際には旺んな勃起がある、といふ事を讀んでゐたのであつた。この勃起に對する願望が、精神内にあつて排斥されて潛んで居た處から、かかる驚愕を惹起するやうな變裝の下に、再現したのである。「首を縊つてしまへ」といふのは、「どんな犧牲を拂つても、勃起ができるやうにせよ」といふのと、正に同じことだ。「ナバブ」の中のドクトル・イェンキンスの砒素丸藥はこの手段の一つだ。更にこの患者には、最も强い性慾刺戟劑である芫菁(Kanthariden)は甲蟲類をつぶして作る。(所謂、西班牙芫菁)、それも亦知られてゐたのである。この夢內容の

主要成分は、この意味を目當てとしてゐるものである。

窓を開ける閉ぢる、これは彼女と良人との間の絶えざる意見相異の一つであつた。彼女自身は窓を開け空氣を入れて眠るのを好み、良人はその反對である。けんなりと弱つてゐる、これは、この頃、彼女が不平に思はねばならぬ良人の主要徴候である。

以上報告した三つの夢全部に於いて、夢要素の一つが夢思想の中に復活する部分を、傍點を附けて、目立たしめて置いたが、それは夢要素の多面的な關係に注目して貰ひたいからである。併しこれ等の夢のどれに對しても、分析が最後までやり通されてはゐないのであるから、夢內容の超限定性を證據立てるのには、詳細な分析を報告して置いた一つの夢を、立ち入つて考へてみる方が、恐らくやり甲斐のあることであらう。そのために私は、イルマの注射の夢を選ぶことにする。この實例であつたら、夢形成に際して壓縮の仕事は一箇以上の手段を使用してをる事が、骨折もなく認知されるであらう。

その夢內容の主要人物は私の患者イルムであつて、彼女は實生活に於いて認められてをる彼女の面影をそのままで、夢の中でも眺められてをる、從つて先づ夢の中の彼女は、彼女自身であるわけだ。然るに、私が彼女を窓際で診察する時の姿勢は、彼女とは別の或る婦人についての記憶

から、採用されてゐる。その婦人は、夢思想が示すところでは、私がイルマとその人を取り換へて、私の患者になつて貰ひたいと思つてる人である。イルマがディフテリー症の癥痂を見せる範圍内では、この癥痂を見れば私は、私の長女についての心配を思ひ出させられるのであるから、イルマはこの私の娘を現すものとなり、この娘の背後には同名といふ關係をもつて聯絡を取り、中毒のために亡くなつた或る患者の身柄が匿れ潜んでをる。更に夢が先へ進むうちに、イルマの人柄の意義は變つて行く(併し夢の中の彼女の影像そのものは變ることがない)。彼女は轉じて、吾々が小兒施療所の一般診療に於いて取扱つてる子供達の一人となり、それの診察に於いて私の友人達が、各自の精神的素質の相異を現してみせる。この推移は、明らかに私の小さい娘の表象によつて、媒介されたものである。口を開く際の反抗によつては、この同じイルマが、嘗て私が診察した別の婦人を諷示すると共に、更に同じ聯絡に於いて私自身の妻をも諷示する。その上、彼女の咽喉の中に發見した病的な異狀のなかには、なほもつと、他の人々の一系列に對する諷示が、綜合されてをる。

イルマなる一人の人物を追及して行くうちにかやうに出會する、これ等の人物全部が、夢の中で、現身を以て現れて來るのではない。彼等は夢の人物イルマの背後に身を匿して居る。イルマ

はそれ故、勿論矛盾に富んだ特性をもつて、一箇の綜合的影像に作りあげられる。イルマは壓縮の仕事の際に犧牲となつて捨てられた、これ等他の人々の代表者となり、夢みた本人の私は、これ等の人々について一點一點思ひ出す事柄をば、イルマの身に總て起らしめてゐるのである。

それとは復た別な方法で、二人又は數多の人物の現實的な特性を、一つの夢影像となるやうに聯合して、この夢壓縮に相當する一箇の綜合的人物を作ることもできる。私の夢の中のドクトル・Mは、さういつた質のものだ。彼はドクトル・Mなる名前を持ち、それらしくものを言ひ、振舞ひをしてをる。併し彼の體の特色と彼の惱みとは、もつと別な人物、即ち私の長兄のそれである。蒼白く見えること、この特性一つだけは、實際に、彼等二人の間に共通であるから、二重に限定されてをるのであつた。私の叔父の夢に出るドクトル・Rも、それと類似の混合人物だ。けれどもこの場合では、夢影像はもつと別な方法で作りあげられてゐた。一方に特有である特性を、他方のそれと結びつけることはしてゐない。そしてそのために、各自の記憶影像から、或る種の特性いくつかを、削りとることはしてゐない。寧ろ私は、ガルトンがその發明の家族寫眞を作製する方法を、採つたのである。ガルトンの家族寫眞では、二つの肖像を重ね合はせて撮影すると、共通の特性は一層度合を强めて現れてくるが、一致しない特性の方は、互ひに消し合つて、出來

た寫眞の像では、それが不明瞭となつてをる。叔父の夢に於いては卽ち、兩方の人物に屬してをる、從つてそのために融合してしまつた、面貌の强調された特性として、ブロンドの髯が際立つてをる。この髯はその上に、老人の半白となることに對する引きかかりを通じて、私の父と私に對する諷示をも、含んでるのである。

綜合及び混合人物を作ることは、夢壓縮の仕事の主要材料の一つである。後にこの事を、他の聯關から、論じてみる機會が生ずるであらう。

注射の夢の「赤痢」なる思ひ付も亦、同じやうに、幾通りにも限定されてをる。一方ではディフテリーとの言ひ違ひを生じ易い同音性により、他方では私が東洋の旅へ出してやつた、そしてそのヒステリー症が誤診されたあの患者への行きかかりによつて。

同じ夢に「プロピレン」(Propylen) のことが出て來るのも、壓縮の興味ある一例たることが實證される。夢思想の中には、「プロピレン」ではなく、「アミレン」(Amylen) が存在してをつた。この場合の夢形成では、簡單な轉移が行はれたのだ、と考へ得るかもしれない。それはいかにも左樣ではある。けれどもこの轉移が壓縮の目的に役立つてるのであるといふ事は、この夢の分析をなほ次のやうに補ひ足してみれば、わかる。私の注意が、「プロピレン」なる語に暫く引き留

められるならば、それと「プロピレエン」(Propyläen) なる語との同音性が思ひ出される。ところでプロピレエンなる建物はアゼンス市にあるばかりではなく、ミュンヘン市にもある。そして私はこの夢の一年前に、その頃重病に罹つてゐた友人を、この市に見舞つたことがあつた。夢の中でプロピレンのすぐ次に出て來るトリメティラミンの事から考へると、この友人も夢思想に入つてる事は、明白となるのである。

この夢でも、又他の夢の場合でも、分析をしてみると、實に價値を異にした聯想が、まるで同價値であるかのやうに、思想の結合に利用されてをる。それは著しい事情なのであるが、今は私はそれを論ぜず、飛びこすことにして、夢思想に含まれてるアミレンが夢內容の中でプロピレンによつて代理される、その經過を、謂はば彫塑的に、思ひ浮べてみたい氣持に從つて行かう。

一方には、私を理解しない、私を不當だとする、そして私にアミレンの匂ひのするリキュール酒を贈つてくれた、友人オットオについての表象群がある。他方には、私を理解してくれ、私を當然だとしてくれもするであらうし、澤山の價値に充ちた報告、性的經過の化學に關しても報告を寄せてくれた、伯林に住んでる友人ヰルヘルムについての表象群があつて、前者と對照關係をなしてをる。

そのオットオ群のうち、特別に私の注意を喚び起すべきものは、最近的な、この夢を生ぜしめた動機によつて、決定されてをる。アミレンは、夢內容にとつて前以て限定された、特殊なさういふ要素の一つである。ヰルヘルムについての豐富な表象群は、正にオットオに對する對照によつてこそ生氣づけられ、その群に存する要素のうち、オットオ群にあつて既に喚び起されてをる要素と似通つたものが、特に拔き出される。この夢全部に於いて、私は私の不快を惹き起す一人の人物から離れて、私が思ふ通りにこの人物と對抗せさることのできる、別の人物へと手賴り、特性の一つ每に、この不快な敵に向つて、私の味方を呼び出してくる。それで例へば、オットオ群に於けるアミレンは、他の群に於いてやはり化學の範圍からの記憶を喚び覺ますこととなる。卽ち、トリメティラミンが數多の方面から支持されて、夢內容へと這入つてくる。アミレンとても、形を變ぜずに、夢內容に這入つてくることはできるのであらうけれども、それはヰルヘルム群の影響に負けてしまふのである。なぜならば、この名前が包んでをる記憶の全範圍からして、アミレンに對して二重の限定を生ぜしめ得る一要素が探し出されるからである。聯想にとつては「プロピレン」がアミレンとは相近い。「ヰルヘルム」の部類からして、プロピレンに對して、プロピレエンのあるミュンヘン市が近づいてくる。表象の兩群は、このプロピレン・プロピレエンに於

いて、相會同する。一種の妥協によつてのやうに、この中間的要素がやがて夢內容の中へ這入つてくる。すると、その內容に於いて、或る中間的共通物が作り出され、それが幾通りもの限定を許容するのである。かく考へると、その幾通りもの限定は、夢內容への進入を容易ならしめるものであるに相違ない事が、手にとるやうに明白となる。この中間物形成の目的で、注意力は本來意味されてゐたものから、聯想上、手近かな或るものへと轉移されることが生じてるのは、疑ひもないところである。

注射の夢の研究のお蔭で、吾々は既に夢形成に於ける壓縮過程について、若干の要領を得ることができた。夢思想のなかに幾通りにも現れてくる要素の選擇、新しい單位の形成（綜合人物、混合形成物）、及び中間的共通物の作成、これ等が壓縮仕事の箇々的部分であるのを、吾々は知ることができた。この壓縮が何の役に立つものか、及び何によつてこれが要求されるものか、その事は、夢形成に於ける精神的過程を纏めて考へる時に、問題としてみることにしよう。今は、夢壓縮現象を、夢思想と夢內容の間に存する一つの注目に價する關係なりと、確定することだけで足れりとして置く。

夢の壓縮仕事が一番明瞭となるのは、この仕事が言語と名前をその對象に選んで居つた時にで

ある。言語が夢に入つて取扱はれるのは、事物と大凡同じくらゐ屢々であり、そしてその時には事物表象と同一な組み合はせを受ける。さういふ夢の產物は、滑稽な及び奇妙な言語創作となつて生じてくる。

(一)或る時、私のところへ、同僚の一人が自分で書いた一論文を送つてくれた。論文は近代の或る生理學上の發見を、私の批判するところでは、あまり買ひ被ぶりすぎ、殊に誇大的な言葉で論じたものであつた。その次の夜に、私は一つの文章の夢を見た。それは明らかにこの論文に關係してをる。「そいつはほんとに norekdal な文體だ。」この形成語の分解は、最初は私にとつても、いろいろと難儀であつたが、「素的な、非常な」といふ最高級形容を、もじつて模倣したのである事は、疑ひのないところであつた。併しそいつが、どこから出て來たものか、を言ふことは容易ではなかつた。終に、この怪物は二つの名前に分裂した。イプセンの有名な二つの芝居に出る Nora と Ekdal である。今私がその論文を夢の中でかやうに批評したと同一の論者が、その前にイプセンに關する一文を書いて新聞に出したのを、私は讀んで居つたのであつた。

(二)私の婦人患者の一人が、或る短い夢を語つてくれた。それは或る馬鹿げた言語結合に終るものであつた。彼女は夫と一緒にどこかの農民のお祭りに行つてをる。そして彼女はかう言つた。

「これは今にみんなが Maistollmütz になつて、おしまひかもしれませんよ。」その際夢の中には、玉蜀黍のプッディンク、一種のポレンタかもしれん、といふぼんやりした考へがあつた。分析をしてみると、この語は、Mais（玉蜀黍）――toll（亂痴氣な）――mannstoll（男狂ひの）――Olmütz と分解され、これ等の要素は全部、彼女の親族の者達とした食卓での、或る會話の殘物である事が、識別された。Mais なる語の背後には、恰度開催されてゐた記念博覽會に對する諷示の外に、Meissen（地名、マイセン産の一羽の鳥を現した瀨戸の置物）、Miss（彼女の親族のうちの英吉利の令孃は Olmütz――地名――へ向つて出發してしまつてゐた）、mies（笑談に用ひられるユダヤ人の俗語で、厭やな、不快な、の意味）等が匿れてをり、そしていろいろな考への結び合はさつた長い一つの連鎖が、この一塊の語からして出てくるのであつた。

（三）或る若い男のところへ、知り合の人が、夕方晩く呼鈴を押して、訪問の名刺を渡して行つた。その夜に、この若い男は次のやうな夢を見た。「事務員が夕方晩く室内電信機を修繕するためにやつて來た。彼が行つてしまつた後に、それは依然として連續的には鳴らず、叩いても、ただほつりほつりと音を立てるばかりであつた。下男がその事務員を迎へに行つて復た伴れて來た。すると、その事務員はかう言つた。でも、いつもは tutelrein なお方達だつて、こんな事を取扱

ふことを知らないなんて、をかしなことですね。」

この夢の無關心的な動機は、唯だ夢の要素のうちの一つを、なしてゐるにすぎないことは、誰にもわかる。そんな動機が大體意義を持つに至つたのは、それがこの夢を見た男の、昔の或る體驗へつらなつてるためである。その體驗も、それ自身としては無關心的なものであるが、この男の空想の力によつて、代表的意義を與へられた。父の許に住んで居たまだ子供の時に、或る時彼は寢ぼけてコップの水を床へひつくりかへした。そのために、室內電信機の錻條がすつかり濡れてしまひ、それの連續的に鳴る音が父の睡眠を妨げたのであつた。それでその連續的に鳴る音といふ考へは、濡れることに相應するから、「ぽつりぽつり音を立てる」は雫の落つる事の描寫に應用されることになる。ところで、tutelrein といふ語は、三つの方向へ分解される。そしてそれと共に、夢思想の中に代表されてゐる材料のうちの三つを、目標にしてをる。卽ち、Tutel は後見の意味を持つ。その外、Tutel（恐らくは Tuttel）は、婦人の胸の野卑な呼び名でもある。そして rein（淸潔な）といふ成分は、室內電信機 Zimmertelegraph の冒頭部分の二つの綴りを受け繼いで探ると、Zimmerrein（室內淸潔の）といふ語が形成される。それは、床板を濡らすといふ事と甚だ關係するところがあり、その上に、この夢を見た男の家族の中に含まれてをる名前の或る一

つと、音を似通はしてゐるものでもあるのだ。

(綴りをこれと似たやうに、分解したり、組み合はせたりするのは――これこそ本當の綴りの化學だ――覺醒時に於いても、樣々な諧謔の役に立つてゐる。「一番安く銀を儲けるにはどうするか？ 白楊(ポプラ) (Silberpappeln) の植ゑてある竝木道へ行き給へ。そして沈默を命ずるんだ。そしたら饒舌が止んで、後には銀だけが殘るぢやないか。」譯者曰、Silberpappeln 白楊―Pappeln 饒舌＝Silber 銀。この著述を一番初めに讀んだ批評家が、私に向つて、「夢みる人が時々あんまり頓智がありすぎるやうに見える、」といふ抗議をなした。これから後の讀者や批評家も、多分はこの抗議を繰返へすことであらう。それは、夢みる當人にだけ關係する限りは、本當の事だ。若しもそれを夢の判斷者たる私にも及ぼさうとするならば、それは一つの誹謗を含むものである。覺醒時に於いては私は、「頓智がある」といふ評語に對して、殆ど要求權を持たない。私の夢が頓智あるものと見えるなら、それは私の人柄に據るのではなく、夢が作られる時に存する特色的心理學的條件に關するものであり、頓智と喜劇味の理論と密接な聯絡に立つものである。夢にはその思想の表現への一直線で一番近い道が閉塞されてゐるから、夢は頓智あるものとなる。夢は止むを得ずしてさうなるのだ。讀者は私の患者達の夢が私の夢と同じ程度に、又それよりもつと高い程度に於いて、頓智的の(實は頓智を裝ふ)印象を與へる事を、確信することができるであらう」――とにかく、かの非難が動機となつて、私は頓智の技巧を夢の仕事と比較して

みることになり、その試みが一九〇五年に「頓智とその無意識に對する關係」Der Witz und seine Beziehung zum Unbewussten. と題した著書に發表されてをる。)

(四)私が見た或るかなり長い、混亂した夢は、外見上は船の旅を中心點としてをるものであつたが、その夢の中で、次の寄港地は Hearsing と言ひ、その次のは Fliess と言ふのである、といふことが出來た。第二の方は、B市に住んでをる私の友人の名前で、私は屢々この友人を宛にして旅行をしたことがある。併し Hearsing は、キーン市の郊外地方の地名であつて、ing で終つてゐるもの、Hietzing, Liesing, Mödling ——Medelitz それを拉典語に分解すると、mene deliciae となり、それは「私の喜悦」、卽ち私の姓となる。meine (私の) Freud (喜悅)——等と、英語の hearsay (風說)とから組み合はされてをる。そしてこの後者の方は、誹謗を示し、且つその日中にあつた無關心的な夢刺戟原因と關係を結んでゐる。その刺戟といふのは、Fliegende Blätter 誌上に出た惡口屋の一寸法師 Sagter Hatergesagt (彼奴言つたよ彼奴が言つたんだよ)についての或る詩であつた。Fliess の名に語尾 ing を關係させると、Vliessingen となる。これは、私の兄弟が英吉利から吾々のところへ訪問に來る時には、船旅で通過する實際の寄港地であるのだ。ところがこの Vliessingen の英吉利名は Flushing であつて、それは英語としては赤面を意味し、そ

して私が診療した「赤面恐怖症」の患者達のことを思はしめ、またこの神經病に關するベテレフの或る最近の發表をも、想起せしむる。この發表は私に憤りの心持ちを起す動機を與へたのであつた。

(五)別の時、私は二つの區別された部分から出來てをる夢を、見たことがある。その一部分は、Autodidasker といふ、歷然と記憶された語であつた。他の一部分は、數日前に浮んだ、短い、無邪氣な空想とぴつたり一致するもので、その空想の內容は次のやうであつた。今度會つたら、N教授にかう言はなければならない、「最近あなたに向つてその病狀についてご相談した患者は、全然、あなたがご推察なさつた通り、實際或る神經病を患つてをるだけです」と。新造語の Autodidasker は、何か凝縮された意味を含むか、又は代表してをる筈だ、といふ要求を滿足せしめなければならない上に、その意味がまた、N教授に上述のやうな承認を與へようとする私の、覺醒時に發して、この夢に繰返へされた目論見と、十分な聯絡あるべき筈のものである。

ところで Autodidasker はわけなく、Autor(著述家)、Autodidakt(獨學者)それから Lasker(政治家の名)に分解される。最後の Lasker といふのに對しては、Lasalle といふ名が聯絡される。前の二つの語は、この夢の——今回は意義ある——動機へ溯らしめる。私は妻のところへ、

或る有名な著述家の數册の書物を持つて來てやつた。この著述家は私の兄弟と友人であり、私と同じ土地の出身である事も、私は聞き知つてをつた（J. J. David である）。或る晩、妻は私を相手に、このダキトの短篇小說の一つに描かれた、或る倫落の才人の、心を打つ悲しい話から受けた、深い印象を語つた。そして私と妻の間の會話はその後、私達の子供等に認められる才能の徵候へと、移つて行つた。恰度讀んだばかりの話にすつかり影響されてゐた妻は、家の子供等に關係する或る心配を口に出して言つた。私はそんな危險ならば敎育によつて取りのぞくことができる、と言つて彼女を慰めてやつた。その夜に、私の考へはなほもつと先へ進められ、妻の心配をなるほどと受け容れたばかりでなく、それに凡ゆる外のことをも織りまぜたりした。かの小說の作家自身が私の兄弟に向つて結婚に關して述べたことのあつた或る意見は、私の考へに對し、一つの別れ路を敎へた。そしてその別れ路は、夢の中の描寫へも通じ得るものであつた。その別れ路を辿ると、ブレスラウ市へ行くのであつて、卽ち、私達と大變親しかつた某婦人は結婚して、その地へ行つてゐた。私の夢思想の核心を形づくつてをるのは、婦人のために身を滅す、といふ心配であつたのだが、この心配に對する實例を、私は、ブレスラウ市の Lasker と Lasalle の事件に見出してゐた。そして、その二つの實例は、同時に、災厄を齎すこの影響の二つの方法をば、

私に描かしめたのである。（ラスケルは累進的麻痺症で死んだ。卽ち、婦人から受けた傳染――黴毒――の結果死んだ。ラサッルが某婦人のため決闘をやつて死んだ事は、周知である。）これ等の思想を總括してみれば、「婦人を選め」といふことになる。それが前述のやうなとは、別の意味に於いて、アレクザンデルといふ名の、まだ結婚前の私の弟のことを、私に考へさせもする。私達は弟の名を縮めてアレクスと言つてをるが、そのアレクスなる音は、ラスケルの音を轉倒したもののやうにも響く事に、氣がつく。すると復た、この關係點もあづかり關係して、私の思想に對しそれが、ブレスラウ市を通過する迂廻の道を敎へたものに相違ない事にも、氣がつくのである。

私がこの夢でやつてをる名前や、綴りについての戯れは、併し更にそれ以上の意味を含んでをる。それは私の弟のため、幸福な家庭生活があれかしといふ、願望を代表して居り、而かも次のやうな方法を以てして居る。藝術家を主人公としたゾラの長篇小說「制作」（L' oeuvre）の內容は、私の夢思想に近いものに相違なかつた。その小說の中で、人も知るやうに、作者は、自身と自身の家庭生活の幸福とを、挿話的に描寫してをるのであるが、そこの部分に現れる作者は、Sandoz といふ名になつてる。この名前の變更に際して、彼は多分次のやうな方法を取つたものらしい。Zola は、（子供等が好んでやるやうに）、引つくりかへすと、Aloz となる。併しかく轉

倒しただけでは、まだ餘りにむきだしすぎると思はれた。それだから、その Al といふ綴りを、これは復た、 Alexander の名の始めの綴りともなつてをるが、そのアレクザンデルの第三綴り Sand によつて代用し、かくして sandoz が出來上がつた。Autodidasker も亦、それと類似したぐあひで、成立したのである。

N教授に向つて、二人で診察したかの患者は或る神經病に罹つてるだけです、と語つてやるといふ私の空想は、次のやうにして夢の中へ這入つて來た。私の研究年期の終了少し前に、私は或る患者をあてがはれたが、私はこの患者をどう診斷したらよいのか、途方にくれた。それは重い器官疾患であつた。恐らく脊髓の或る變化と認定すべきであつたのだが、併し證據がなかつた。或る神經病だと、私は診斷をしたかつた。さう診斷を下せば、凡ゆる面倒はすつかり無くなつてしまふのであつた。けれども患者自身の性的生活に關する記憶の口述がなければ、私は神經病を承認すべきものではない、といふ考へであつたのに、この患者はその記憶口述を猛烈に否認したのであつた。それで診斷を下すことはできなかつた。私は困却して、人間として私が（私以外の人々もさうだが）一番尊敬してをり、その人の權威の前にならば一番進んで頭を下げる醫師、卽ちN教授を、助けに呼んだ。彼は私の疑惑を聞いてくれた。そしてそれを道理だと言つてくれた

後で、「その患者の觀察をもつと續けてやり給へ。神經病かもしれんぜ」と、意見を述べたのである。教授は併し神經症の病源に關しては、私と意見を同じうしてゐない人である事を、私は承知してゐたから、私は反駁をさし控へはしたが、不信の考へは匿さなかつた。二三日後に私はその患者に向つて、君のやうな病氣では、私はなんとも手出しができない事を知らせ、別の人のところへ行つて頼むやうに勸めた。すると、私がその案外なのに實に驚かされたことには、彼は私に謝罪するのである、自分はあなたを欺いてゐた、自分はほんとに恥かしかつたのだ、と言つて。そして今度は、私が期待してゐたし、且つ神經病の認定のため必要としてをつた、性的病源の恰度その部分を、私に打ち明けてくれた。私にとつては、それは一種ほつとした氣持ちであつた。と同時に、一種の慚愧でもあつた。私が相談をかけたN教授は、患者の記憶口述を參照するといふやうなことにも迷はされずに、私よりも一層正しく見てをつたのだ。私はそれを自分で認めねばならなかつた。それで再會する折があつたら、その事を言はう、あなたの方が正しいので、私は間違つてゐたのだ、さう言はうと考へこんでゐたのである。

正にそれを、私は夢の中で實行した。併し私が間違つてゐたなどと告白するのであつたら、それは一體、どういふ願望實現と言つたらいいのか？　ところが、それこそは私の願望なのだ。私

は、あんな懸念を抱いてをるのが間違ひであつてほしい、と思つてゐたのだ。乃至は、私の妻がその懸念を抱いたので、それを私は、夢思想の中で、自分の懸念にしてしまつたのだが、その妻の懸念なんか間違つたものである、それを私は欲してゐたのである。道理であるか、それとも不道理であるか、それがこの夢の中で關係してをる題目は、夢思想にとつて實際に關心的である事柄から、相距ること遠くにあるものではないのであつた。卽ち、婦人のため、と言つても實はその性的生活のために、器官的にか、それとも機能的にか、害を蒙る事、累進的痲痺症(ラスケルの場合)か、それとも神經症か(ラサッルの身の破滅の樣子は、前者と較べるとそれよりは緊密ではないが、この徵候と關聯する)、さういふ、やはり、これか、それともあれか、といふ題目が、この夢の關心事であつた。

N教授が、確實な仕組みの、(そして周到な判斷をしてみると全然透明的である)、この夢の中で、一つの役割を演じてをるのは、啻にこの類似性のためと、私の方が間違ひであつてほしい、といふ願望のためばかりではない——また、ブレスラウ市と、其處で結婚してをる私達の友人である婦人の家庭とに對して、教授もやはり關係を有してをるがためばかりではない——その上に更に、教授と私との立合診察と聯絡のある、次のやうな小事件のためでもあるのだ。彼がかの推

測を述べて醫師としての任務を果した後に、彼の興味は個人的の事柄に向けられた。「今お子さんは幾人お持ちかね？」――「六人です。」――敬意と愼重の或る表情が浮んだ。――「娘さんか、息子さんか？」――「三人づつです。これが私の誇りでもありますし、また私の富でもあるんです。」――「ね、ご用心しなさいよ。女の子は、それや、うまく行く。だが、男の子は後で、教育の點から、面倒をかけるもんですよ。」――私は口を挿んだ、彼等も、今までのところでは、ほんとにおとなしくしてをります、と。私の男の子達の未來に對するこの第二の診斷が、私には、あの患者はただ神經病に罹つてるだけだ、と言つたその診斷と同じやうに氣に喰はなかつたのである。以上二つの印象は、その近接のため、體驗のため、一つに結び合はされてしまつた。そしてその神經病の話を私が夢の中へ採用するのは、私はその話を使つて、教育についての話の代りとなすのである。この教育の話の方が、その後に述べられた私の妻の心配と、いかにも密接に觸れるものであるから、夢思想にとつては、かの神經病の話などよりかも、なほ一層關聯を持つてることがわかる。かくして、私がそんな懸念を抱いてをるのは間違ひであつてほしい、といふ私の願望の描出の背後に匿れながら、Nが男の子の教育の面倒に關して言つてくれた事は、本當であるかもしれん、といふ私の恐怖までが、夢内容の中へ這入れたのである。あれか、これか、の相對的

な二つの部分の描出にとつて、同一の空想が變更されないままで、役を勤めたわけた。

（六）マルツィノウスキーに據る一例。「今朝早く、私は夢と覺醒の中間にあつて、甚だ面白い言語壓縮の一つを經驗した。殆ど記憶しがたい夢斷片が澤山に經過する間に、謂はば私は或る一語のため、呆然と立ち竦んだのである。その語は私の眼前に半分書いてあるやうにも見えたし、半分印刷してあるやうにも見えた。それは erzefilisch といふ語で、私の意識的記憶の中に、他の部分とは全然聯絡するところなく孤立して、殘つてる一つの文章の一部となつてをる。その文章はかうだ。そいつは性的感覺に對して erzefilisch に作用するものだ。私はすぐ、それは本來からすれば、erzieherisch（教育的に）と言はねばならんのだ、とはわかつたが、併し erzilisch と言つた方が、もつと正しいのではないかと、二三度迷つた。その時、Syphilis（黴毒）といふ語が思ひ浮んだ。そしてまだ半分睡眠の狀態で分析を始めながら、どうしてこんな語が私の夢の中へ入りこんで來たものか、自分は私的にも、また職業上からも、かかる病氣とは何等の接觸點を持つてはゐないんだのに、と考へを散々絞つてみたのであつた。やがて、i に代つた e を説明すると同時に、昨日の夕方、家の女家庭教師（Erzieherin）のため賣淫制度の問題を論ずる機會を與へられたのだつた、といふ事をも説明するものとして、erzihlerisch なる語が思ひ浮んだ。私はその女家

庭教師にその時、その問題に關していろんなことを語つた後で、彼女の全然常規的には發達し切つてゐない感覺生活に對して、教育的に（erzieherisch）作用を與へてやるため、實際ヘッセの「賣淫について」の著書を與へたのであつた。ここまでくると、忽ちに、私には明瞭となる。かのSyphilis なる語は、その語義通りに解すべきではなく、寧ろ、勿論性的生活と關係してではあるが、毒の代用となつてゐたのである。してみると、その文章は、飜譯をしてみれば、次のやうな全然論理的な意味のものであつた。私の話（Erzählung）によつて私は、私の家の女家庭教師（Erzieherin）の感覺生活に對して、教育的に（erzieherisch）作用を與へてやらうとは欲したのだが、それが同時に有毒な（vergiftend）作用をもするかもしれん、といふ懸念を抱いてをる。Erzefilisch＝erzäh—erzieh—erzifilisch.）

（以上のやうな夢に於ける言語結合は、精神錯亂症（パラノイア）に於いて見られる有名なるものや、更に又、ヒステリー症及び强迫表象に於いても缺けることのないものと、甚だ似通つてをる。實際、子供は或る時代に於いて、言語を實物と同じやうに取扱つて、新しい言葉や技巧的な文章構造をも工風するものであるが、子供のかかる言語習癖は、夢竝びに精神神經症にとつて、この問題の範圍では、共通の源泉をなしてをる。（夢に於ける馬鹿げた言語構成の分析は、夢の仕事のうちの壓縮

作業を指示するのには、特別に適當してをる。私はここには、少數の實例をしか、選び出さなかつた。けれども選び用ひたのが少數だからと言うて、かかる材料は稀れにしか、又はただ例外的にしか認められぬものだ、などといふ推定をしないで貰ひたい。それどころか、それは寧ろ甚だ頻繁とあるのだ。けれども、夢判斷が精神分析的取扱に依屬してをる結果、極めて少數の實例が注目せられ、報告せられるのであり、そしてその報告された分析も大抵は、神經病理學の知識ある人にだけ、理解されるにすぎないといふ事になる。ドクトル・フォン・カルピンスカが一九一四年度「國際精神分析學雜誌」第二巻に發表した、馬鹿げた構成語 Svingnum elvi を含む夢の如きは、その一例である。更に次のやうな場合の夢も、ここに指摘して置く價がある。卽ち、その夢では、それ自身としては意義のない語が現れる。併しこの語は、その本來の意味からは緣遠いものとなつてはをるが、實は、さまざまな他の意味を包括したものであつて、そして表面はそれ等の意味に對して、「意味なき」語の如くに關係してをる。ファウ・タウスクが一九一三年度「國際精神分析學雜誌」第一巻に、「小兒性慾の心理學に關して」と題した研究の中に報告してをる、十歲になる一男童の「Kategorie」についての夢は、それである。この夢では、Kategorie は婦人の生殖器を意味し、kategorisieren は小便をすると同意味であつた。）

或る夢の中に說明として、判然と思想から區別されるやうな、さういふ說話が出て來ることがあつたら、その場合には、夢中の說話は夢材料の中で記憶されてをる說話から由來してをる、といふ事は除外例無き規則として通用する。その說話の文句は、そこなはれずに保存されてをるか、又は微かにその言ひ現し方をずらしてをるかである。夢中の說話が、記憶にある說話の種々なるものから綴り合はされてることも、屢々ある。その際文句は舊の通りであるが、意味は曖昧にか、又は別のに變更されてをる。夢中の說話は記憶にある說話が行はれた時の或る出來事に對する、單なる諷示の役に立つてることも、稀れではない。（上述の規則に對する唯一の除外例を、私は近頃發見した。それは、强迫表象のため惱んではをるが、その他の機能は障害されてをらず、智的には非常に發達してをる、或る若い男についてであつた。彼の夢に出て來た說話は、聞いたり又は自分で語つたりした說話からは由來せず、彼の覺醒時に、ただ變更されただけで、意識に上ぼつた强迫思想の歪みなき文句に、相應するものであつた。）

第二節　轉移の仕事

夢の壓縮についての實例を集めて居つた間に、それとは別の、恐らくはそれに劣らず意義ある

一關係が、早くも吾々の注目を惹かざるを得なかつた。前に吾々は、夢內容にあつてはその本質的成分として頭角を現してゐる要素が、夢思想の中では決してそれと同じやうな役割を演じてゐるものではないことを、指摘することができた。これに對する相對的考へとして、この文意の逆を言ふこともできる。夢思想にあつては、明らかにその本質的內容であるものが、夢そのものの中には、少しも代表者を出さないでもよい。夢そのものは、夢思想とは、謂はゞ別な中心を取つてゐる。夢の內容は、夢思想とは異つた要素を中心點として、その周圍に列べられてゐる。例へば、かの植物學の著述についての夢では、夢內容の中心點は、明らかに、「植物の」といふ要素である。然るにその夢思想の中心をなすものは先づ、醫師同志の間にしてやる世話が義務を感じさせる事から生じる、錯雜した葛籐であるが、更に押しつめると、私は私の好事癖に對して餘りに大きすぎる犧牲を拂ふのが常だ、といふ非難であつた。そして「植物の」といふ要素などは、若しそれが或る對照性によつて緩漫に結びついてゐなかつたならば、夢思想の中核に於いては、大體何等の地位を得るものではなかつたのである。なぜなら、植物學は未だ嘗て、私の好む研究の間に坐席を占めたことはないのであるからだ。私の患者のサッフォーの夢に於いては、登るのと下りるのと、上に居るのと下に居るのと、それが中心とされてゐた。併し夢の中心問題は、身分の低

い人達に對して性的關係を結ぶことの危險であつた。それ故に、夢思想のうち、ただ一つの要素だけが、併しそれは不適當な擴がりをなしながら、夢内容の中へ入り込んだやうにも思はれた。それと似た調子で、性慾の殘忍性に對する關係を題目としたこがね蟲の夢でも、夢内容の中になるほど殘忍性の主要點は、やはり現れてはをるが、併し、それは異つた聯絡をつけ、且つ性的方面の事は持ち出さずにであつた。卽ち、聯絡からは引き離され、そしてそのために、或る無關係的のものに作り替へられてゐたのであつた。更に復た、叔父の夢では、その中心點を形づくるブロンド色の髯は、吾々が、その夢の思想を核心なりと認識した立身の願望に對して、何等の意味の關係をも持たずに、現れてをる。以上の如き夢が、轉移されたものといふ印象を與へるのは、誠に道理である。ところで次には、これ等の實例とは正反對に、イルマの注射の夢は、その夢の形式に際して、箇々の要素は、それが夢思想の中で占めると同じ地位を、維持することが十分できたのを、示してをる。夢思想と夢内容の間の關係は、その意味するところに於いて、全く不定である。これを新しく知ると、吾々は先づ奇異の感を抱かせられる。さて、吾々が尋常人の生活の或る精神的經過を觀察して、或る一つの表象が數多の他の表象のうちから拔き出され、そして意識に對して特別な潑溂性を有し得てをる事を見出したりすると、その時吾々はいつも、この結

果を以て、その勝利的な表象には、何か或る特別に高尙な精神的價値性(關心の或る程度)が歸屬するのである、といふ事に對する證據と見做すのである。ところで、夢思想の中では、箇々の要素の左樣な價値性が夢形成にとつて保存されてゐない、乃至は顧みられてゐない事を、吾々は知る。夢思想のうち、どれどれが最高價値的の要素であるか、それについては何の疑ひもありはしない。吾々の判斷が直接にそれを吾々に敎へるのだから。然るに、これ等の本質的な、そして深い關心をもつて强調された要素が、いざ夢形成の際には、恰もそれ等が劣等價値のものであるかのやうに取扱はれ、そしてそれ等の代りに、夢の中へは、夢思想としてならば確かに劣等價値であつたやうな、他の要素が出現する。この事實はさしあたり、夢の選擇作用にとつては、箇々の表象の精神的强度は(或る表象の精神的强度、價値性、關心强調は、感覺的强度、その表象されたものの强度などから、勿論區別して置くべきである)、大體顧みられることはないものだ、却つてその表象の多かれ少なかれ多方面的な限定のみが顧みられてをる、といつた印象を與へる。夢思想の中で重要であるものは夢へ這入つて來ないで、夢思想の中で幾通りにも含められてゐるやうなものが這入つて來るのだ、と考へてもいいかもしれない。併しこの假說では、夢形成問題の理解は大して促進させられない。何故かと言うと、多面的な限定と、自己自身の價値性と、この二つの主要點

が、夢の選擇に對して同じ意味では影響を與へることができない、變つた意味で影響してる、といふやうな事を、人はただ藪から棒には、信ずることができないからである。夢思想の中で最も重要である表象は、それが中心點であるやうに、それからして箇々の夢思想が光り出すのであるから、やはり夢思想の中でも、一番頻繁と、繰返へし現れるものであらう。にも拘らず、夢は、これ等の強く力點を入れられた、そして多面的に支柱を有してをる要素をば拒絶して、そしてただ多面的に支柱を有してをるといふ第二の特性しか持たないやうな、他の要素をば、內容の中へ採用することをなし得るのである。

この難問を解決するのには、夢內容の超限定を吟味する際に受けた、前述のとは別な印象を利用することであらう。あの吟味を讀まれた讀者のうちには、夢內容の超限定は自明的な發見なのだから、何等有意義な發見は期待されぬ、と獨りで批判された人も、恐らく澤山あるかもしれない。だつて、分析の際には夢要素から出發し、それに結びつく凡ゆる思ひ付きを記錄するのでないか。してみると、かくして得られた思想材料の中には、正にさういふ要素が、特別に頻繁と繰返へし見出される事は、何等不思議ではない、と批判される人が澤山あるかもしれない。私は、この抗議を承認することはできないやうだ。だが、私自身も、それと似たやうにも聞える或る一

事を、言つてみるであらう。卽ち、分析によつて明らかにされる思想の中には、夢の核心に對しては遠くに立つて居り、何か或る目的のために、わざと技巧的に挿みこめられたもののやうに見える多くの要素が見出される。それ等の要素の目的は容易に發見される。それ等の要素こそは、夢內容と夢思想との間の或る聯絡を、時としては無理やりにそしてこぢつけた聯絡を、作つてゐるのである。而かも若しこれ等の要素が分析の結果から捨て去られてでもしまつたならば、夢內容の成分にとつては、啻に超限定ばかりでなく、夢思想による或る十分な限定なるもの一般が、缺け落ちることとなるであらう。かくて吾々は次のやうな結論に達する。卽ち、夢の選擇に決定を與へる多面的な限定は、恐らくは必ずしも夢形成の第一次的要點ではなくて、時として吾々にはまだ知られてゐない或る精神力の第二次的顯現である、と。併しながらこの限定は、何と言つても、夢の中へ箇々の要素が出現することにとつては、有意義のものであるには相違ない。何故ならば、この限定は、それが夢材料からして援助を受けて生ずる場合でも、或る程度の努力を拂つて作られるのである事を、吾々は觀察し得るからである。

かくて次に吾々の考へに浮ぶのは、夢の仕事に於いて或る精神力が顯現する、そしてその精神力は一面に於いては、精神的に高い價値を有する要素からその强度を剝奪し、他面に於いては、

超限定の道を通つて、劣等價値的要素を變じて新しい價値性のものを作り、それが夢內容の中へ入つて來るのだ、といふ事である。果して左樣行くものであるならば、夢形成に際しては、箇々的要素の精神的強度の移動と轉移が行はれたわけだ。そしてその結果として、夢內容の包含するものと、夢思想の包含するものとの間に、相異が現れる。かく吾々が想定する經過が、正に夢の仕事の本質的部分である。それは夢の轉移作用と名づけてよいものだ。夢の轉移と夢の壓縮、これは、吾々が夢の構成を主としてそれの力に歸せしめてよい、二人の職工長である。

私の考へるところでは、夢の轉移の事實に發現される精神的力を認識するのは、吾々としては樂なことである。この轉移の結果が、夢內容はもはや夢思想の核心と同じには見えない事、夢はただ無意識界に於ける願望の歪みを再現するにすぎない事である。ところで吾々には、夢の歪みは既に知られてをる。一方の精神的取調所が他方に對して思想生活の中で行ふところの、かの檢閱へ、吾々はこの夢の歪みの作用を溯らしめた。夢の轉移は、この歪みを成し遂げるための主要手段の一つである。Is fecit, cui profuit.（その利益を收める人が、それをしたのだ。）夢の轉移は、潛在精神的防止たるかの檢閱の影響によつて成立するものである、と吾々は認定してよい。

（夢の歪みを檢閱に歸せしめるのが私の夢の解釋の核心であるから、私はここに、リン

コイスの「或る現實主義者の空想」Lynkeus, Phantasien eines Realisten. Wien. 2. Aufl. 1900. から「夢みるのと覺めてゐるのと」なる物語の最後の部分を、挿入して置く。この部分に私は私の學説のうちのこの點の主要特質が、同じく述べられてゐるのを見出したのだ。「決して馬鹿げたことを夢に見ないといふ、著しい特性を持つた或る男について。」――「覺めてる時と同じやうな夢を見るといふ君の立派な特性は、君の德、君の善、君の正義心、君の眞實を愛する心に基いてることだ。君に關する一切の事が合理的であるのは、君の天性の道德的な明瞭のためだ。」相手は答へた。「だが、ようく考へてみると、總べての人間が私と同じやうに出來てるんだ、決していかなる人でも、馬鹿げたことを夢に見ることなんか、ありはしない、と僕はほぼ信ずるんだがね。人が後でそれを語つて聞かせることができるほど、はつきりと記憶してる夢なら、從つて何等熱に浮かされた夢でないんなら、必ず意味を持つてる。斷じてそれに相違ない！なぜなら、お互ひに矛盾してるやうなことだつたら、いくら寄せても、或る一つの全にはなれないんだからねえ。時間と空間が、時々ごちやごちやに、搖りまぜられることなどがあつたつて、それや、夢の本當の內容から何物をも奪ひはしない。と言ふのは、その二つは夢の本質的な內容にとつちや、確かに意味のないものだつたんだ。吾々は覺めてる時にだつて、時時さういふことをやるぢやないか。お伽噺を考へてみ給へ。澤山の大膽な、そして面白い空想の產物を考へてみ給へ。あれ等を聞いて、こいつあ、馬鹿げたことだ！だつて、そんなことはあり得ないからね！などと言ふのは、わからず屋だけさ。」すると友人は言つた。「それやれ、君が今僕の夢についてやつてみせたやうに、

夢をいつでも正しく判斷することができればのことだよ!」「これは確かに容易な仕事ぢやない。だが、いくらかの注意力があつたら、その夢を見た本人に。必ずできることに相違ないんだ。――それが大抵の場合成功しないのは、何故だ? 君たちの夢には、何か隱蔽されたものがあるやうだれ。特殊でそして一層高い質の何か純潔でないもの、君たちの本質の中にあるんだが、さて考へ出すべくもない或る種の祕密性が、あるやうだ。だから、君たちには、夢が時々意味のないもの、否、馬鹿げたものでさへあるやうに思はれる。だけれど、最も深い奧底へ入れば、決してそんなものぢやないよ。さうとも、そんなわけはあり得ないんだ。なぜといふなら、目を覺ましてゐるのも、また、夢を見てゐるのも、それや、いつも同一の人間なんだからなあ。」)

轉移、壓縮、及び超限定の主要作用が如何なる方法で、夢形成の際に互ひに入れ亂れ合ふものか、そのうちのどれが首領的因子となり、どれが從屬的因子となるものか、それはこれから後の調査のため保留して置きたい。今當分のところ吾々は、夢の中へ這入つてくる諸要素が履行しなければならない第二條件として、それ等の要素は抵抗の檢閲をくぐり拔けてをる、一事を示すことができるのである。これから先、吾々は、夢の轉移作用をば、夢判斷に於ける疑ひなき事實として、考慮に入れようと思ふ。

夢判斷　上

定價金壹圓八拾錢

昭和五年六月十五日印刷
昭和五年六月十八日發行

譯著者　新關良三

發行者　北原鐵雄
東京市神田區今川小路二ノ一

印刷者　山本源太郎
東京市牛込區東五軒町四〇

發行所
東京市神田區
今川小路二ノ一
アルス
電話九段　一二一七五番
　　　　　二二一七六番
振替東京二四八八八番

アルスの音樂書

著者	書名	定價・送料
ランドルミー著 服部龍太郎譯	西洋音樂全史	品切
テトラッツィニ著 小松平五郎譯	聲樂三十講	定價壹圓八拾錢 送料八錢
アウアー著 馬場二郎譯	アウアー ヴァイオリンの奏法	品切
ブロウワア著 服部龍太郎譯	ピアノの彈き方	品切
服部龍太郎著	レコードの選み方と聽き方	品切
服部龍太郎著	百大音樂家の生涯と藝術	品切
小松耕輔著	世界音樂遍路	定價貳圓八拾錢 送料十二錢
小松耕輔著	童謠作曲法	品切
小松耕輔著	現代佛蘭西音樂	定價貳圓五拾錢 送料十錢
小松耕輔著	西洋音樂の知識	定價貳圓五拾錢 送料十二錢
小松耕輔著	西洋音樂の聽き方	品切
前田三男著	名曲夜話	定價貳圓 送料八錢

Freud · Die Traum-deutung

Erster Halbband

夢判斷
上卷

FREUD

フロイド
精神分析大系
VOL. II

フロイド
精神分析大系

夢判断 上

夢判断 上

新関良三 訳

フロイド精神分析大系

第一卷 **ヒステリー**
ヒステリー研究・ヒステリーの病理
醫學博士 安田德太郎

第二卷 **夢判斷**（上）
學習院教授 東大講師 新關良三

第三卷 **夢判斷**（下）
學習院教授 東大講師 新關良三

第四卷 **日常生活の異常心理**
東北帝大教授 醫學博士 丸井清泰

第五卷 **戀愛生活の心理**
リビド說・文化的性道德と近代生活・戀愛生活の心理
醫學士 經濟學士 木村廉吉

第六卷 **快感原則の彼岸**
集團心理・快感原則の彼岸
廣島文理大教授 文學博士 久保良英

第七卷 **精神分析入門**（上）
醫學博士 安田德太郎

第八卷 **精神分析入門**（下）
醫學博士 安田德太郎

第九卷 **洒落の精神分析**
醫學博士 正木不如丘

第十卷 **藝術の分析**
レオナルド・妄想と夢・作爲と眞實・ミケランゼロ
慶大教授 茅野蕭々

第十一卷 **トーテムとタブウ**
トーテムとタブウ・精神分析運動史
大倉高商講師 關榮吉

第十二卷 **幻想の未來**
幻想の未來・素人分析・自傳
帝大助教授 木村謹治

今後の文藝、美術、哲學、凡そ人間生活を基礎とする萬般の諸問題は精神分析に依つてのみ解譯される。心の不思議、性の祕密を知らんとする人は讀め！

譯者は悉く學界の最高權威！ 現代に於て求め得べき最適者のみであります。フロイド精神分析大系は始祖フロイドの全集により其の全學說を譯出したものです。

豫約に非ず選擇隨意

フロイド精神分析大系

最近の學界を惡魔の如く攪亂し神の如く驚倒歸依せしめたる

大膽奇拔の新學說「精神分析」とは何ぞや

こは……人間行爲の錯誤、夢の諸現象を分析闡明する微妙なる心理研究の結晶である。

こは……人間の現實生活を左右する驚くべき恐るべき潛在意識の摘抉である。

こは……神と惡魔とを同時に忌憚なく暴[illegible]人間內奧の眞を示す新しき哲學である。

こは……勃起恐怖、中絕性交、潛在的[illegible]愛、近親相姦等精神と性慾の聯關交錯を立證せる新しき實驗科學である。

こは……恐怖、假面、催眠狀態、死の象徵、詩的描寫、處女錯綜、夢の怪奇性、罪惡意識等精神作用の神祕を解明せる新心理學である。

こは……狂氣、ヒステリー、一切の精神病の原因を分析し、適切なる療法を明示せる最新の醫學である。

豫約に非ず選擇隨意

フロイド精神分析大系

最近の學界を惡魔の如く攪亂し神の如く驚倒歸依せしめたる

大膽奇拔の新學說「精神分析」とは何ぞや

こは……人間行爲の錯誤、夢の諸現象を分析闡明する微妙なる心理研究の結晶である。

こは……人間の現實生活を左右する驚くべき恐るべき潜在意識の摘抉である。

こは……神と惡魔とを同時に忌憚なく暴[illegible]人間內奥の眞を示す新しき哲學である。

こは……勃起恐怖、中絕性交、潜在的[illegible]愛、近親相姦等精神と性慾の聯關交錯を立證せる新しき實驗科學である。

こは……恐怖、假面、催眠狀態、死の象徵、詩的描寫、處女錯綜、夢の怪奇性、罪惡意識等精神作用の神祕を解明せる新心理學である。

こは……狂氣、ヒステリー、一切の精神病の原因を分析し、適切なる療法を明示せる最新の醫學である。

豫約に非ず選擇隨意

夢判斷 上

フロイド精神分析大系

ARS

夢判斷 上

新關良三 訳

フロイド精神分析大系

今後の文藝、美術、哲學、凡そ人間生活を基礎とする萬般の諸問題は精神分析に依つてのみ解譯される。心の不思議、性の祕密を知らんとする人は讀め！

卷	書名	內容・譯者
第一卷	ヒステリー	ヒステリー研究・ヒステリーの病理 醫學博士 安田德太郎
第二卷	夢判斷（上）	學習院教授 東大講師 新關良三
第三卷	夢判斷（下）	學習院教授 東大講師 新關良三
第四卷	日常生活の異常心理	東北帝大教授 醫學博士 丸井清泰
第五卷	戀愛生活の心理	リビド說・文化的性道德と近代生活・戀愛生活の心理 醫學士 經濟學士 木村廉吉
第六卷	快感原則の彼岸	集團心理・快感原則の彼岸 廣島文理大教授 文學博士 久保良英
第七卷	精神分析入門（上）	醫學博士 安田德太郎
第八卷	精神分析入門（下）	醫學博士 安田德太郎
第九卷	洒落の精神分析	醫學博士 正木不如丘
第十卷	藝術の分析	レオナルド・妄想と夢・作爲と眞實・ミケランゼロ 慶大教授 茅野蕭々
第十一卷	トーテムとタブウ	トーテムとタブウ・精神分析運動史 大倉高商講師 關榮吉
第十二卷	幻想の未來	幻想の未來・素人分析・自傳 帝大助教授 木村謹治

譯者は悉く學界の最高權威！現代に於て求め得べき最適者のみであります。

フロイド精神分析大系は始祖フロイドの全集により其の全學說を譯出したものです。

豫約に非ず選擇隨意